婦人公論

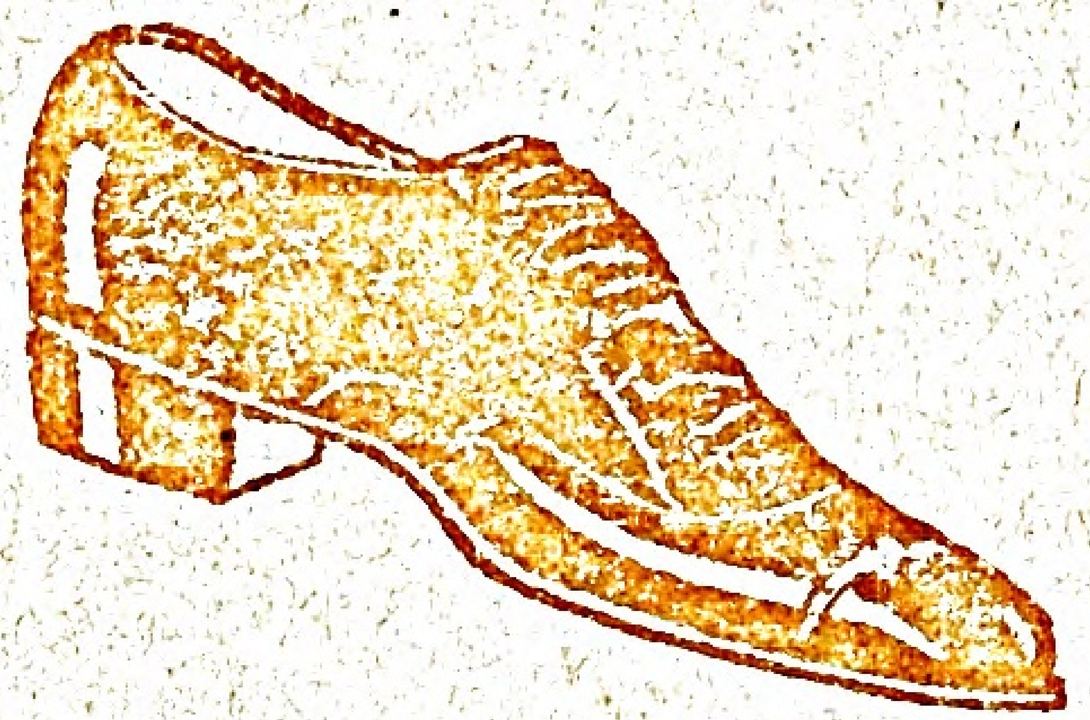
九月號

第七年 第十號

九月一日より

靴の特價提供

最新の型と比類なき廉價と



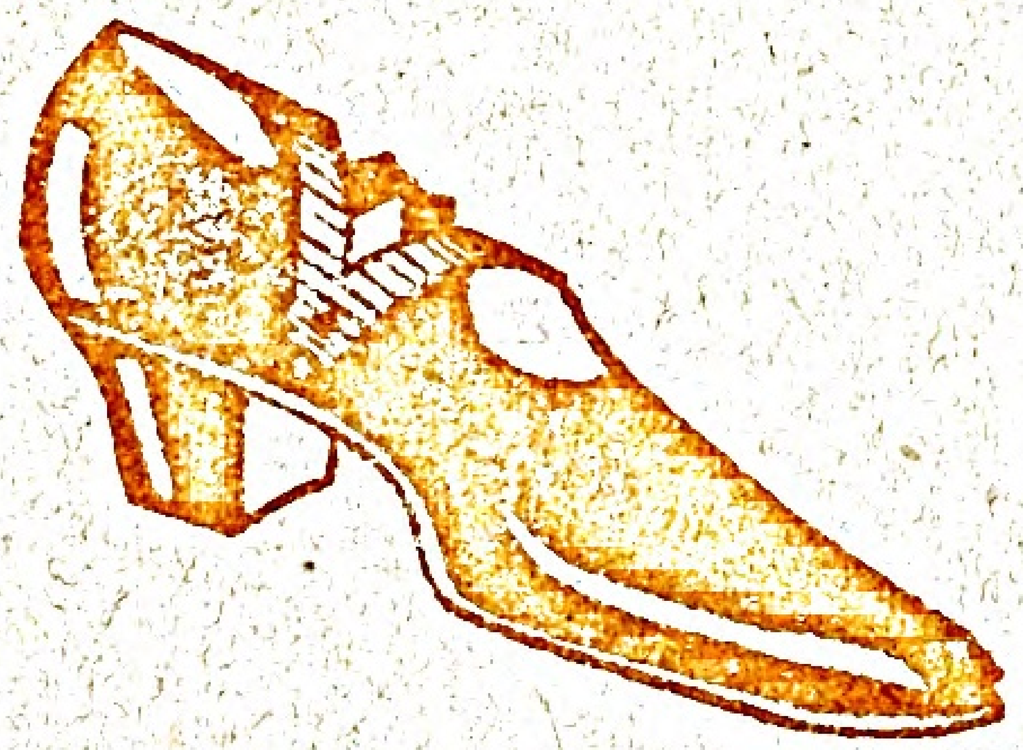
紳士用

茶ロータース製　短靴十圓五十錢

舶來脚革、象皮底　編上十二圓

紳士向には落付あるオリエント型

若紳士向には瀟洒たるヴエストン型を薦む



女學生用

黒ボックス製　短靴六圓五十錢

二ッ綾六圓五十錢

ゴム踵付　編上七圓五十錢

輕快なるヴエネチヤ型を薦む



男學生用

黒ボックス製　短靴六圓八十錢

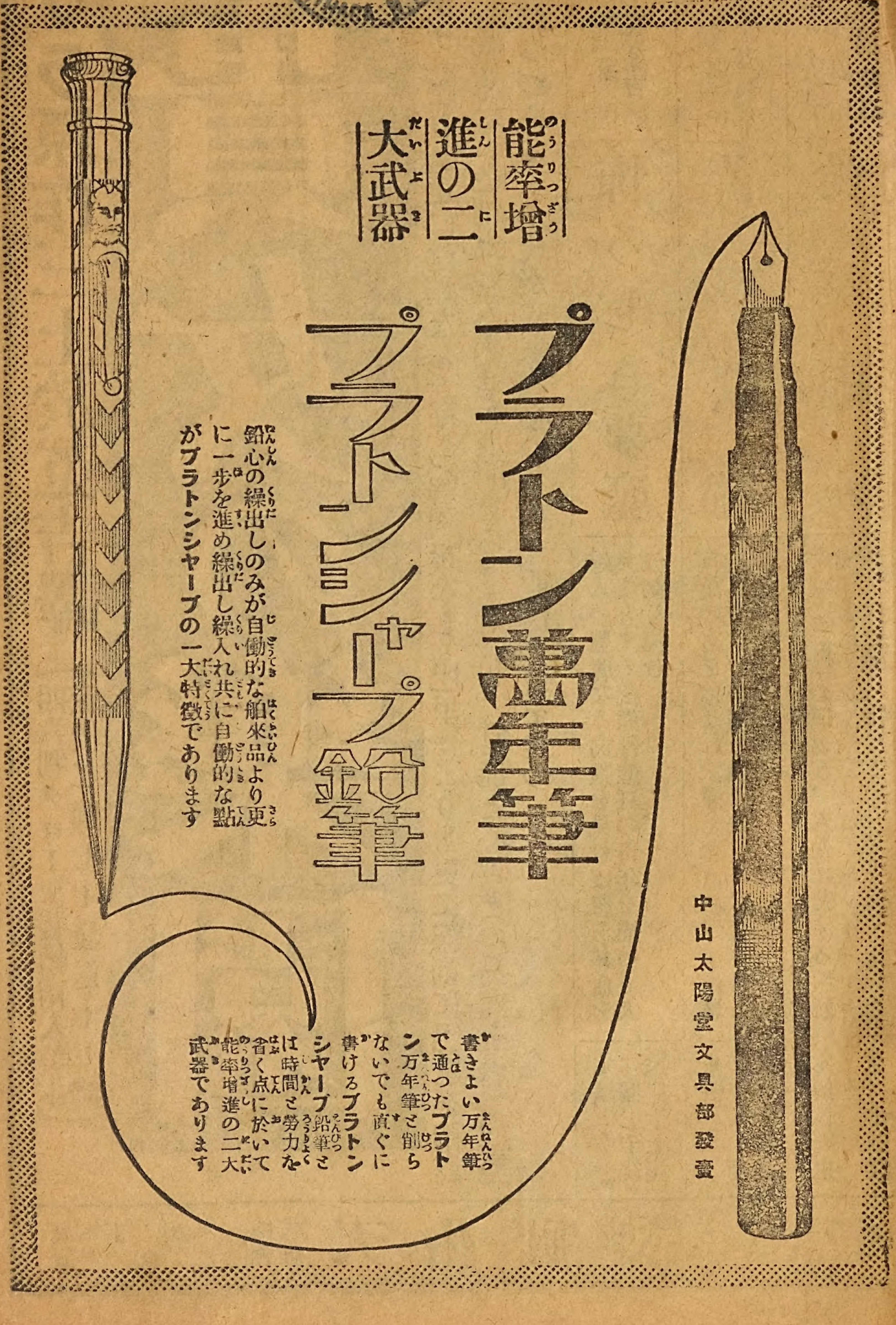
二等脚革・米國象皮底　編上七圓五十錢

型は斬新にして堅牢第一

東京上野

松坂屋いとう呉服店

（振替東京五八〇〇番）


能率增進の二大武器
プラトン萬年筆
プラトンシャープ鉛筆
鉛心の繰出しのみが自働的な舶來品より更に一歩を進め繰出し繰入れ共に自働的な點がプラトンシャープの一大特徴であります
書きよい万年筆で通つたプラトン万年筆さ削らないでも直ぐに書けるプラトンシャープ鉛筆さは時間さ勞力を省く点に於いて能率增進の二大武器であります
中山太陽堂文具部發賣

◇井上庄三氏新譯◇（一條忠衛著）●男女の性より觀たる社會問題 壹圓八拾錢 送料十二錢

新刊 性と自我

若き婦人の爲に

若い婦人の種々な疑問解決し難い煩悶を懐き乍打明けて相談する人適當な指導を與へてくれる人を得ない爲めに遂に其本性を誤つて如何はしい道に迷ひ込み不道徳に生きて行く事は少からず原書は實にかゝる過を未然に防ぐ爲めに生れし書で米國婦人社會で大歡迎を受けし書である我國の人々も啓發さるゝ事と思ひます。

四六判最上製 美本全壹冊 金貳圓 送料十二錢

新マルサス協會 國際聯盟委員 瀧本二郎氏著

産兒制限論と最新避妊方法批判

本書は著者が産兒制限論に附て世界各國の現狀を述べ所信を說き且つ渴望さるゝ事久しき避妊法の實際方法を詳說して社會問題研究者並に醫學者の參考資料として提供せんとするものである今の所では世界唯一の快著である。英米獨佛和其他各國の産兒制限論避妊法批判は盡く本書に詳述せり。

四六判最上製 美本全壹冊 正價 貳圓八拾錢 送料十八錢

◇岡登貞治氏新著

新刊 新選圖案集

單位の巻

◇（全部石版彩色畫）●圖案の數千三百八拾）

萬人翹望すれ共未だ實現し得ざりし短を補ふものは本書なり圖案家は製作の伴侶たらしむべく工業家は資料の源泉たらしむべく婦人方には手藝製作のに就て創作の基調たるを得べし。各人必讀の書なり

四六判最上製 美本全壹冊 正價 貳圓八拾錢 送料十八錢

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座 東京八七八番

九月一日より

靴の特價提供

最新の型と比類なき廉價と



紳士用

茶ロータース製 舶來胛革、象皮底
短靴十圓五十錢
編上十二圓

紳士向には落付あるオリエント型
若紳士向には瀟洒たるヴエストン型を薦む



女學生用

黑ボックス製 ゴム踵付
短靴六圓五十錢
二ッ綾六圓五十錢
編上七圓五十錢

輕快なるヴエネチヤ型を薦む



男學生用

黑ボックス製 二等胛革・米國象皮底
短靴六圓八十錢
編上七圓五十錢

型は斬新にして堅牢第一

東京上野

松坂屋いとう呉服店

(振替東京五八〇〇番)



婦人公論第七年九月號目次

婦人公論第七年九月號目次



乳白液と果梁液の二種あり
ゼピー紳士液
（男子専用化粧液）
ゼピー
生地から白くなる固煉の
過酸化白粉
過酸化水素水を以て作つた洋式の固煉白粉である崩れぬ本式のお化粧が出來る樣になつたのは東西化粧品界の驚きである
ゼピー白粉本舗
ムアーヘツトジヤデン社
統一化粧料
ゼピー液状白粉
ゼピー固煉白粉
ゼピー過酸化白粉
ゼピークリーム
ゼピーケシの精
ゼピーマニキュア
ゼピーヘヤトニック
ゼピー紳士液
ゼピー淑女液
ZEPPY
ゼピー
過酸化水素白粉


クラブ白粉
顔のアレぬカテイ石鹸
現代の文化生活に相應はしい高雅なお化粧には皆な此の優秀なクラブ白粉をお用ひになります
化粧順序
カテイ石鹸
クラブ洗粉
クラブゼリー
クラブ白粉
牡丹刷毛
水はけ
ぬれタオル
クラブ頬紅
クラブ粉白粉
美人


乳白液と果梨液の二種あり
ゼピー紳士液
（男子専用化粧液）
セピー白粉本舗
ムアーヘツトジヤデン社
生地から白くなる固煉の
ゼピー海綿式過酸化白粉
過酸化水素水を以て作つた洋式の固煉白粉である崩れぬ本質のお化粧が出來る樣になつたのは東西化粧品界の驚きである
統一化粧料
ゼピー洗粉
ゼピーシタレ
ゼピー液状白粉
ゼピー粉煉白粉
ゼピー固煉白粉
ゼピー過酸化白粉
ゼピークリーム
ゼピーケシの精
ゼピーマニキユア
ゼピーヘヤトニク
ゼピーポミン
ゼピー紳士液
ゼピー淑女液
ゼピー鬢髪油
ZEPY
ゼピー
過酸化水素白粉



伊太利婦人（世界風俗の九）

有島生馬

ポンピアン化粧料

——三越・白木・松坂屋其他有名なる吳服・雜貨・化粧品店にて販賣す——

デー（晝の）クリーム



脂肪質の方に最も適はいクリームにして白粉下に使用して唯單に淡い化粧料としても、理想的にして到底舊來のクリームの比にあらず殊に白粉下に用ゐて何人も其眞價を肯定するならん。

ホワイト・ブルーム（携帶白粉）

外出時の携帶白粉として特に米國ポンピアン會社が日本婦人の肌と、要求に投ずるやう精製せし最新化學應用の製品にして其容器の輕便にして體裁のよく鏡とパツフの具へ附けさへあり、舊來の紙白粉の如き一時的にして而も不完全なるものに非ず、外出用の携帶白粉としては遺憾なき理想的の白粉なり



マツサージ、クリーム

文化生活に欠くべからざる、家庭美顏御用クリームにして摩擦に依る物理的效果と、極度に應用されたる化學的効果とは相俟つて血行の旺盛を齎らし皮膚の健康を增進せしめ生地より肌を白美ならしむる最新高級化粧料なり。

家庭美顏御用

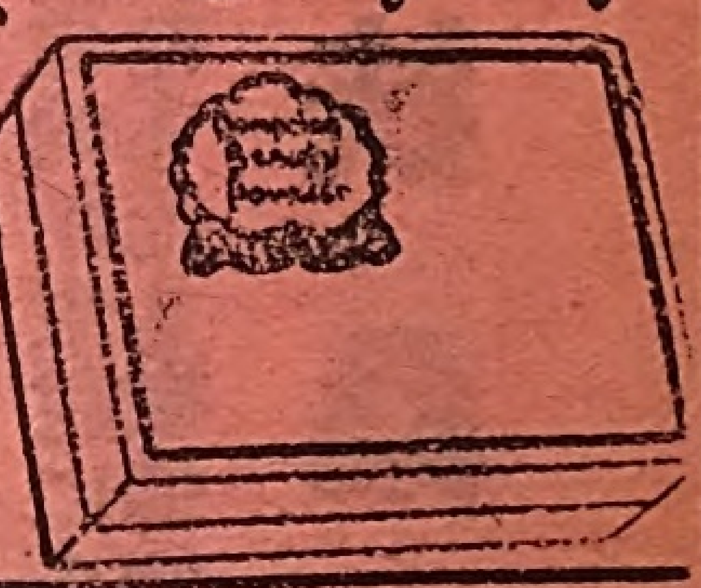


タルク、パウダー

芳香と品質の精選を誇るポンピアン、タルク、パウダーは早化粧料として白粉の代用になり、小兒の汗疹、爛れを防ぐのみならず、湯上り男子の髯剃後に用ひて、其心地よき効果は未だ他品に其追隨を許さず。



ビユーテーパウダー（粉白粉）



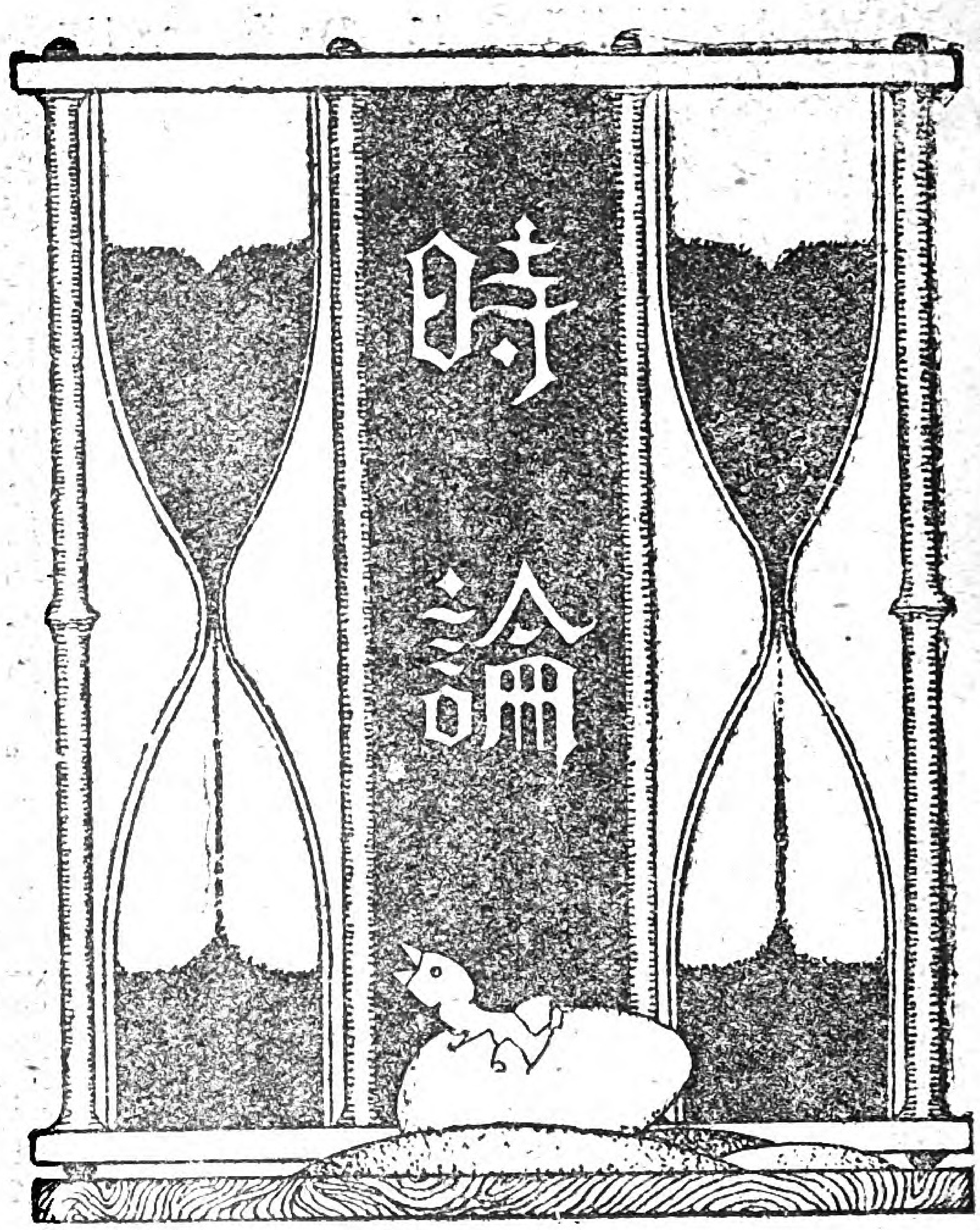
芳香の馥郁として、高尙に、素顏の樣に美しく、永く化粧の美を保ち連結の使用によりて好く雀斑の見苦しさを去るは、數多使用者の驚威する所にして從來の粉白粉を遙に超越したる高級無二の化粧料なり。尙新製品として水白粉あり芳香、色合（白、淡紅、肌）共に其令名を贊せらる。

ポンピアン、化粧料は米國クリーブランド市ポンピアン會社の製品にして、特に日本婦人の肌と、嗜好に投ずるやう精製せし化粧料にして

マツサージ、クリーム
デー、クリーム
ナイト、クリーム
ブルーム（頰紅）
ホワイト、ブルーム（携帶白粉）
ビユーテー、パウダー（粉白粉）
ビユーテー、リクヰド（水白粉）
フラグランス、タルカム
ヘヤー、マツサージ（フケ取香水）

の九種あり、何れも絕大なる好評を以て賣行を增加しつゝあり。

米國ポンピアン會社東洋總代理店　東京　佐々木商店　銀座



生活に立脚して政治を慮れ

中野正剛

一

思想は習慣の先驅である。習慣は法律制度の先驅である。思想一變して後習慣が一變し、然る後に法律制度も變更する。國民の思想が旣に一變した以上、軈て新たなる習慣を作り、法律制度をも馴致するに至るは當然の數である。大戰以後一般民衆の思想が大に動き、生活の樣式に對する理想が畫かれ、更に法律制度の根元に溯つて一般民衆が多大なる注意を拂ふに至つたのは顯著なる事實である。そこで男子のみならず女子までも政治經濟外交立法行政に對して多大の注意を拂ふに至つた事は面白い現象である。軈て日本の政治も新しき思想に新しき形式を以て運用せらるゝに至るは疑ふ可からざることであらう。さりながら、世界の進運を眼前に見せつけらるるものにとつては、この日本の政治的進歩なるものが如何にも遲々として待ち遠しい感がする。

自分は大戰中に歐羅巴に遊び、暫く西班牙に滯在したときがある。丁度その頃米國のウイルソンが講和十四ケ條の原則を捻り出すべく正義人道論の前振れをやつてゐた際である。西班牙の田舍にもこの風が吹いて來て、ジヤスティス、ヒューマニティ、シヴィリゼイションの議論が大流行を來たし田舍新聞も三文雜誌もウイルソン張りの議論で持ち切りといふ狀態であ

つた。同じ頃の日本にウイルソニアンが簇出したのと較べて見ると好個の對象である。その西班牙にはサンヂカリズムが流行つて、バロセロナなどでは幾多の騒動を惹き起し、それから過激主義、それから虚無主義と順次に流行したが、大戰以後不景氣の秋風が吹き渡ると共に思想界の花も一時に凋落し、今では舊態依然たる保守頑迷の西班牙となつたさうである。畢竟するに西班牙に流行した思想及び言論の花はたゞそれ丈けに止つて西班牙人の人格を陶冶せず、政治經濟組織を變更せしめ得なかつたのだ。これと同樣の現象が日本に現れたら大變である、自分は先日横濱の商業學校で一場の講演をした。その序に四十年勤續の老校長と懇談する機會を得た。自分は老校長に對して、十年二十年三十年前の學生と今日の學生との比較を問ふた。老校長の曰く、別に非常な相違もありません。然し人間の賢くなつたことは確です。その代りに、古い連中の方が、艱難して家を興した初代の主人公のやうな感があり、此頃の連中が、親の身代で上等の學校に通ふ二代目三代目の若旦那の趣きがある。困難に打ち當つて猛進する意氣込みは、近頃甚だしく減退したやうだ。不思議な事には日清戰爭の後、戰には勝つて遼東半島を取りあげられる、所謂三國干渉の憂目を見たその當時は日本人の氣象が一般に驚くほど引きしまつた。その頃學校に居た人達が何れも相當の人物になつてゐるやうだ、と。自分は更に老校長に問ふた。然し最近の青年が思想に目覺めたことは著しい事實ではないか。これが青年の人格の上に如何なる變化を及ぼすであらうか、と。老校長はこれに對して事もなげに答へて退けた。曰く、何、新思想ですか、三四十年も勤めて居ますと、何度も何度もさういふ流行に出逢ひました。伊藤公や井上侯が所謂歐化政策をとつた際の騒ぎといつたら今日どころではなかつたのです。あんなことは一時の流行物でもう直ぐに變つて來ます、と。自分はこの校長ほど冷淡に日本人の思想的傾向を見ないが、この言にも半面の眞理があることは疑はれない。

二

世界の大戰中に我日本には思想革命が行はれた。文壇の春には百花爛漫たる狀態を呈した。然るに不幸にしてこの思想の變化は非常なる經濟的順境なる際に來たのである。そこで何となく金持ちの二代目三代目の坊つちやんが遊戲的氣分で思想を弄んでゐる趣きがある。勿論貴族的文藝に反抗してプロレタリアの文藝も起つた。然し、これ等を取扱ふ人々

は多く體驗を經ない貴族的生活の人々であつた。國民が困難に面してひどく敲きあげられ、これに屈せずして腹の底から向上心が起ると青春の熱鐵を世路の鐵鎚で打つやうに、其處に新しき思想を具體化せる新しい人格が出來る。これに反して安逸生活に伴ふ思想的變動は、動もすれば上辷りし易い。往々にして文化の生産者とならずして享樂者たるに止る虞れがある。

或る名家の親爺が少壯より困難と戰ひ、刻苦勉勵して學識を養ひ、千辛萬苦を嘗めてその地位を作りあげた。その息子は親爺の血を享けてゐるから頭は惡くない。然し親の身代があるから浮世の艱難にはもまれてゐない。そこで彼は大學も卒業せぬ前から新しい婦人を娶り、郊外に西洋館を設けて文化生活を營むといつてゐる。彼等の所謂文化生活とは、ランプよりは電燈を用ゐ、火鉢よりは瓦斯ストーヴを用ゐ、蒲團よりは寢臺に依り、人力車に乘るよりは自動車を驅るといふ風に、文明の利器を利用して生活を享樂する事らしい。然し彼等の所謂文化生活は文化を創造し、生産し、建設する事ではなく、單に他のもの丶建設したる文化の餘德を消費し、享樂するばかりである。社會に文化の創造者生産者がなくして、消費者享樂者ばかりが多くなると、その社會は萎微するより他に道がなくなる。これ等の文化生活者は電燈を發明すべく幾多の人が知識を絞り、幾多の職工が勞働してゐる事を考へず、唯これを利用する事を文明人の事と思つてゐる。凡ゆる文明の利器を發明製造するにはそこに幾多の困難辛苦勞役が刻み込まれてゐる事を思はない。文化生活の創造者生産者は、古い言葉で言へば、螢の光り窓の雪により苦勞し勉強し鍛錬した人々である。これ等の人々は文化生活の恩惠を蒙らずして寢臺にも寢ず、花電燈にも照らされず、所謂文化生活者から言はすれば隨分プリミティヴな生活をしてゐる人かも知れない。

日本の思想も單に外國で出來た思想を取扱つてその間に遊戯してゐるのであつては前述の文化生活者と類を同じうする。この思想を身につけ骨に沁みこませるには世路の艱難に面して自らを訓練しなければならぬ。非常なる向上心を非常なる困難と相摩擦せしめ、そこに思想の焰を上げなければならぬ。

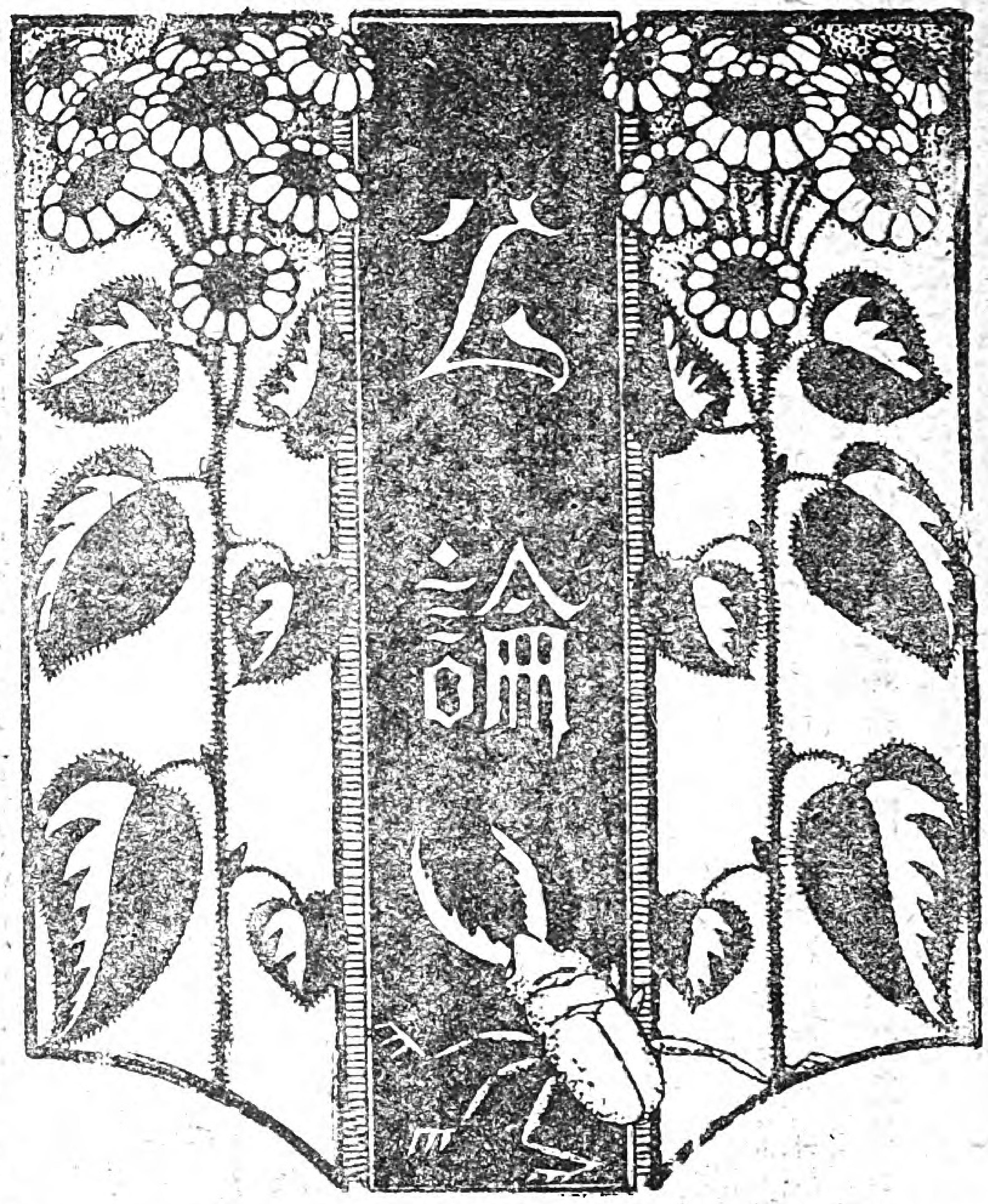
思想は習慣の先驅となり、習慣は法律制度の先驅となる事が原則でありとすれば、大いに動搖せる日本の思想界が大いに生活を變化せしめ、大いに政治を變更せしめる事は疑ひを容れないが、その思想が淺薄であり、流行であるに止れば、

政治上の變更も淺薄であり流行であるに止るであらう。

三

世の中が好景氣で一般民衆が上つ調子である際に、所謂思想家は政治を嘲笑する傾向があつた。曰く、俺達の呼吸する空氣は、政治屋達の呼吸する空氣とは違ふ。我々は政治から左右せられない。政治以上に超然たるものである、と。一人がこんな事を言ふと、半熟の連中が賢さうにこれに和する。一見甚だ痛快なる議論のやうであるが、現實とは相容れないそんたことを言ひながら、十六億の歳計は彼等の所謂無智なる政治屋に勝手に徵發せられ、勝手に使はれてゐるではないか。政治の厄介にならぬといひながらその文化生活に用ゐる必需品一切に、租税を課せられてゐるではないか、砂糖一匙嘗めても、鹽一抓み使つても、電車に乘つても、茶店に憩うても、皆直接善政か惡政かの影響を受けてゐるではないか戰時中の誤れる經濟政策は戰後に於ける輸出の不振を招致し、輸出の不振は產業の萎微を招き、そこに失業者を出し、そこに就職難を招き、全國民は眼前に迫り來る生活の不安に脅されてゐる。思想的に自覺し來つた我國民はこの不安に面して如何なる働きをなすか。思想は思想丈けの遊戯にして金持ちの坊つちやんが一寸口語詩を捻つた程度の事に終り、困難の前に屈從して西班牙の如く舊態に復るべきであるか、或は養れたる思想をこの生活不安の鐵鎚で敲き上げ、こゝに人格を陶治し、こゝに生活苦を免るべき政治經濟社會組織の根元及びその運用に開眼し、新しき思想、新しき人格の上に新しき制度文物を建設すべきか、大いに考慮を要する次第である。

日本人は西班牙人の如き無爲なる國民ではない。然しながら思想の一新を說きながら、猶政界の混濁を坐視し、普通選擧すら實現しないやうでは餘りに意氣地ない次第ではないか。日常生活と政治とは密接なゝ關係とを有する。一般國民は、生活に立脚して政治を慮らなければならぬ事を自分は痛感するのである。



優生學上より見たる女子高等教育問題

大鳥居古城

緒言

今日優生學（Eugenics）が如何なる學術的地位を占めつゝあるかは説明が複雜に亙るから姑く論じない。唯其目的とする所が「優良なる種族の進化的存續」にあることを知れば足りる。人類は總て自己の生活を完うすると同時に各其種族の存續を計らねばならぬ。又成るべく不良なる素質の種族を減じて、優良なる人物の輩出を企てねばならぬ。其處に優生學の使命は存する。單に各人が其個人生活の滿足のみを求め生の社會的意義を沒却する時は人類の進化は停頓し、幾多の矛盾、爭鬪、及び罪惡を生じ、遂に一大墮落世界を現出する外はない。

米國『遺傳雜誌』主幹ポール・ポペノー及びピツツフルグ大學教授ロスウエル・ヒル・ジヨンソン二氏の共著に係る『應用優生學』（"Applied Eugenics"）は優生學の著述としても極めて興味に富み多くの眞理を包含せる近時の好著であるが、就中現在米國に於ける教育界の趨勢を優生學的見地より精細に批判せる點は最も有益であつて、我邦教育問題の解決上にも大に參考とする必要がある。殊に現代米國高等教育の傾向が歳と共に優生學的目的と背反しつゝある事實を擧げ、今や本來土着の米人（先住米人）は將に人種的自殺を遂げんとしつゝありと絶叫して特に女子高等教育に關する施設の根本的改變を主張せるは、最も注目すべき事柄と思はれる。

我邦婦人が高等教育を要望する聲は近來頓に顯著となつて來た。而も一般男子に對する高等教育機關が大擴張せられたに拘はらず、

女子に對しては政府に於て未だ殆ど何等の計畫も試みてゐない。玆に於て乎、一部識者間に旺んに其必要が鼓吹せらるゝのみに止らず、現に本年四月下旬に開かせられた全國女子教育家大會では女子の爲めに先づ既設の男子高等教育機關を開放して共學制を實施すべきことを決議し、之を政府に致す事とした。實際今日の如き知識發達の時代に於て女子を單に一般國民教育に過ぎざる現在の高等女學校程度の修養を以て滿足せしめんとするのは、男子と知力上の均衡を失するのみでなく完全に女性的能力を發揮せしむる所以でない。然しながら、男性の修養機關を開放して女子を男子同様に教育することの是非に就ては無論大に考慮せねばならぬ。偶々前記の如くポペノー及びジョンソン二氏の著述に依て米國女子高等教育の人生上及び社會上に於ける缺陷が曝露せられたに就ては、其等の事實を參考して最も適當なる教育的施設を講じ、以て一面現代婦人の要求に應じ他面に於て永遠の人類的幸福を計るは、此場合賢明なる一策とせねばならぬ。一時の風潮に同じ單に現在の外國の例に模して輕卒に問題の解決を遂げんとするは國家百年の悔を遺す惧れあるのみでなく、人類の將來の爲めに眞摯なる論者の與する能はざる所である。

一 優生學的教育

吾人は今叙述の順序として優生學上に於ける教育の意義を明かにするを第一に必要とする。或論者は現代婦人の知識慾の旺盛なる事實を擧げ、その滿足を與へんが爲めに女子高等教育の施設の必要を唱へてゐる。之に從へば教育は單に知育に過ぎない。又或論者は婦人の知識的職業を希望する者増加し社會も亦之を歡迎してゐるから、之に應じて女子にも高等なる職業教育を施すを可とすると説いてゐる。之に從へば女子高等教育は婦人の高等職業者養成を目的とすることとなる。若し教育が一種の營利的事業であるならば、婦人の知識慾滿足の爲めの學校は今日の活動寫眞館の如くに公私の間に熾んに設立されたであらう。又若し永遠に社會が高等職業婦人を必然要求すること男子に對すると異らないとせば、女子大學及び女子高等專門學校は國家としても社會としても容易に設立に着手したであらう。然るに事實上教育は單に一部人士の或種の慾望を充たす爲めのものでない。又社會の高等職業婦人の需要も理論上確乎たる基礎を有するものであるや否やは疑はしい。從つて今日尚女子高等教育に關しては責任ある當局者は勿論、多少思慮ある教育家は大に考究を要する問題としてゐる。

教育は一般的に解釋すれば社會が其組織の維持發達の爲めにそを構成せる未成熟分子に對して施す相互的作用である。之を國家に就て言はゞ、本來國家の施す教育は該國家組織を維持發達せしむる爲めに未成熟と認むる國民に對して行はるべきであつて、普通には國民教育に其範圍を限るべきである。然しながら社會進化の過程にあつては分業組織完成せず從つて國家機能の活用上種々の職業教育的施設をも國家が之を經營せねばならぬ時代があつた。現在の教育界は尚此狀態にある。而してこは獨り職業分化に就てのみならず、男女間の分業關係に於ても同樣の教育的事情に支配されてゐるのである。

兎にも角にも教育は個人の慾望の滿足不滿足を目的とする事業でない。又經濟的乃至一般社會の利害の打算に基く需要供給の關係の調節を主題とするものでもない。國家又は社會が教育的施設を計畫するに當つては、被教育者を單なる個人として認めずして該國家又は社會の成員として取扱ふのである。而も其直接の目的は被教育者各自の滿足不滿足よりも國家又は社會それ自身の永久的利害に存してゐるから、今日の婦人の知識慾の旺盛とか知識的職業の希望者の多數とかいふ理由を以て直ちに國家又は社會に向つて之に應ずべき教育的施設を要望するのは當を得たものでない。國家又は社會が此等の要求に應ずべき施設を企つるには、其等の理由が更に該國家又は社會の維持發達上必要化されねばならぬ。即ち女性成員の知識的向上、又は婦人高等職業者の養成が國家、又は社會の維持發達に必要なることが確實に認容せられ、之に對する施設の急務を當事者又は代表的識者に深く感知せられねばならぬ。

單に國家又は社會が其女性成員の知識的向上を計るといふことのみに就て考ふれば、そは固より結構なることゝ評せられる。然しそは同時に何等か考慮すべき影響を女性自身及び一般社會に及ぼすとはなからうか。而して若し其影響が單に量的變動でなくして質的變化を生ずることありとすれば、豫めそが利害得失を十分討究する所がなくてはならぬ。即ち知識の選擇及び攝收の方法其宜しきを得ざる時には、却て他の心的能力の調和的發達を妨げ女性の特質を損ずることがあるかも知れぬ。女權主義思想者(フエミニスト)は知能に於て女性が男性より更に劣る所なきことを主張し、從つてそが男性同樣に一切の學術的研究に從事すべきを適當と說いてゐる。吾人は一般女性が一般男性と知能に於て相等しきや否やを疑

ふ者であるが、假りに相等しいとしても女性が知力的勞務に專心する結果其女性的特質を減損することありとせばそは甚だ望ましからぬことゝ謂はねばならぬ。玆に優生學的見地から教育に容喙すべき必要がある。

優生學の目的は「優良なる種族の進化的存續」にある。然しながら其問題は常に個人間の關係に止まり一種族全體に就て論究するは單に概念的に過ぎない。即ち優良なる素質の血統を個人的關係に基きて繁殖せしめ、依て以て人類の進化を完うせんとするが優生學の正當なる事業とする。而して優生學の理論的根據は、人類の特質は總て先天的遺傳に依て賦與せられ環境の力は單に其發現の機會を與ふるに過ぎないといふにあつて、此意味に於ては教育は極めて限定的なる作用である。如何に發現の機會を與へても「無」より「有」を生じない。然しながら、心的能力は必ずしも分界的に存するものでなく又固定したものでない。一方面に旺んに發現の機會を與ふれば自然全部の能力は偏倚して其間の調和は失はれる。女性の知能を極度に發現せしむれば他の心理的機能は萎縮して女性獨特の優秀なる性能の發現力が乏しくなる虞がある。而も其最も重大なる問題は、優生學の目的たる「優良なる種族の進化的存續」に就て女性の負へる職能に對する影響如何である。

優生學的教育とは、優良なる素質の個人のあらゆる性能に十分なる發現の機會を與ふると同時に、其生殖的機能をして最善の效果を擧げしむるやう適當に指導するの謂ひに外ならない。若し或種の性能に過度の發現の機會を與へた結果其生殖的機能を減殺し又は不活潑のものたらしむる如きことがあれば、そは優生學的教育の趣旨に反するのである。之と反對に不良なる素質の個人に對しては其性能の發現の機會を與ふる上に適當なる注意を加へ、成るべく不良性能の抑制を計り且つ其生殖的機能に合理的制限を試みる必要が存するとせられる。

女子高等教育問題に於ける被教育者たるべき婦人の多數は平均女性よりも優秀なる素質を有せる者と推定することが出來る。即ち彼等は概ね高等女學校を卒業し、更に精神的にも物質的にも向上の途に出づべき資格を具備してゐる者と認めねばならぬ。而して斯る經歷と資格とを有する者は、一般女性中に於て比較的優秀者であると稱して不當でない。此等女性優秀者が優生學的教育を受くると否とは國家又は社會——延いて全人類——の將來に影響する所實に至大なものがなくてはならぬ。萬一知能の發現の機會を與ふる上に施設宜しきを得ずして爲めに女性の負へる生殖的職能を弛廢せしむる如

きことがあれば、それこそ由々しき大事である。此理由に依て女子高等教育問題は優生學的に特に重要なる問題として取扱はれねばならぬ。

更に又婦人に高等職業を修得せしむる爲めに女子高等教育を必要とする議論は、單にそが知識的向上を目的とするよりも複雜であつて、全體的には解決が一層困難であらう。然しながら優生學的見地より解釋すれば、其教育的意義は兩者間に別に相異る點を發見しない。卽ち彼等高等職業を修得せんとする婦人が平均女性よりも優秀なる素質を有する者であるか否や。又其修得の結果優生學的に女性獨特の能力をして益々發現の機會を多からしむるや否や。此等二點に對する答解の如何に依てそが意義は決せられるのである。

過去には教育の力が能く劣等なる素質の人物を優良ならしめ得る如く過信した時代もあつた。今日でも尙斯る迷想に囚れてゐる者必ずしも尠しとしない。然し遺傳の硏究の發達したる今日に於て、少くも優生學の何たるかを知る者は到底此等假空の論說に耳を傾くることは出來ぬ。而して若し高等職業を望む婦人が平均女性よりも素質が劣惡であるとしたならば、又修業の結果優生學上彼等に要求する女性獨特の能力の發現の機會を減縮せしむるものとしたならば、國家又は社會は何を苦しんで物好きにも多額の費用を投じて斯る劣等女性を養成し若くは又益々必要なる彼等の性的能力を喪失し滅却せしめようぞ。卽ち女子高等職業教育は其被教育者たるべき者が概して優良なる素質の婦人たる前提の下に、該教育の結果が果して彼等の優生學上負はねばならぬ生殖的機能を旺盛ならしむべきや將た萎縮せしむべきやに依て或は成立せしむべく或は成立せしめてはならぬ。優秀婦人の系統の剿絕を多からしむる虞ある教育的施設を計る如きは、優生學的に無意義であるのみでなく、國家又は社會の一般政策からも素より問題とすべきことでない。

二　優生學の要求する性の問題

男にもあれ女にもあれ、人生に處して社會的制約に服せぬ譯にはゆかぬ。卽ち一切の人類は人として自然に對して社會上に盡さねばならぬ任務がある。然るに社會的制約は往々にして人爲的意義が跋扈して其根原たる自然的意義を壓倒し掩

蔽し、延いて全生活關係を混亂狀態に導くことがある。例へば社會的秩序は自然の必要から定められるのであるが、そを制定するには人爲に俟つが故に、屢々不合理不正當の非難を聞くのみでなく事實上或少數の權力者の濫用に之を委した場合もある。今日文明國に於ける法律制度の如きも果して自然的意義に準據してゐるや否や疑はしい、思想上及び實際上に社會的闘爭や反逆の絕えぬのは、少くも其不完全の點の少からぬを語つてゐるものと謂はねばなるまい。

今概括的に人類共通の社會的制約を擧ぐれば、其一は「一般生活上に於ける各人の社會的及び個人的協力」であつて他の一は「各人の特殊的性的協力」である。前者は社會發達の狀況に依り其協力方法極めて複雜であるが、若し人類にして此制約に服從しなかつたならば殆ど一日も存在を完うすることが出來ない。權力と金力とは時として人をして專橫なる動作に出でしめ、爲めに此制約の意義が疑はれ社會組織の不公平が叫ばるゝこともある。然しそれには過去に於ける力の蓄積といふことを考慮せねばならぬ。假りに過去の餘力を全然無いものとすれば、人類は絕えず適當なる生活上の協力を營みそれに依て始めて各自の生存を維持し得るのである。又後者は或男性と或女性との生殖目的上に於ける協力であつて、一般文明國では一夫一婦制行はれ其協力方法多くは一般生活上に於けるものと關聯してはゐるが、自然的關係は全く本能に基いた極めて單純なものである。此協力は前者の如く之を營まねば殆ど一日も存在を完うすることが出來ないといふものではない。意識上に於ては頗る自由が與へられてゐる。然し本能的衝動が意識的に性慾となり戀愛となつて其自由を妨ぐるのみでなく、時としては意馬心猿の狂ふに任せねばならぬこともあり、或は又心意全體が戀の奴隸となつて盲目的に服從せしめらるゝこともある。而も尙一般には自由の範圍が狹くはない。此協力は斯く自由の餘地が多いから自然は一面には本能的作用として拘束的態度を採ると同時に他面にはそを上述の如く一般生活上に於けるものと關聯せしめ、兩者の關係に依り益々必須の意義あるものたらしめた。蓋し個人としての自由如何に拘はらず此協力は人類の種族的存續に最も重大な關係があるからである。若し各人が其自由意志に依て此制約を無視することが容易に行はれたならば、人類の將來は漸次種族の絕滅を來すかも知れぬ。自然は敢て人類と限らず一切の生物に對して進化の大法に從ひそが存續を計つてゐる。適者は生存すると同時に其適者たることそのことは既に進化の道程を辿りつゝあるのである。人類は最高の意識的生物と

して此等の生活原理を理解し常に自然に順應せんことに努むべきであり、又歴史は實際にそれが努めつゝあつたことを傳へてゐる。

若し何故に吾人は種の進化的存續を計らねばならぬかと問はゞ、それは自然に準據して生活する爲めであると答ふる外はない。人性は意識的にも無意識的にも自然に準據して生活する傾向を有し、從つて種の進化的存續を計るべき問題は必要不必要の議論を超越して當然人類各自の責任でもあり又生れながらに其要求する所でもある。而して是れ亦吾人の性的協力が特に免るべからざる社會的制約の一として認容せらるゝ所以なのである。萬一吾人にして之に反對の性向を有し性的協力が社會的制約の一たることを認容しないものがあらば、それは先天的にか後天的にか又生理的にか心理的にか、更に何等か普通の性格を缺いて居る者と謂はねばならぬ。性的協力の社會的制約たるを認容すると否とは自由意志の問題でなくして人類が普通に發育せる肉體と性情とを有するや否やに據るのである。

今文明國の例に從ひ一夫一婦を男女の性的協力の原則的方法と定め男女の數は之を相等しきものとして論ぜんに、各の男子及び各の女子は互に一定の異性と協力して種の存續の爲めに必ず或一定數以上の兒童を生産せねばならぬ。而して其標準生兒數は大體に於て平均四兒とする。蓋し男女が悉く性的に協力し而して協力せる男女が悉く完全なる兒童を生産するものとせば兩親と同數即ち二兒にて足る如く考へられるが、事實生産された兒童は決して總てが健全に發育するものでない。又同時に總ての男女が例外なく性的協力を遂げ得ると限つてゐない。即ち生兒が兎も角も成熟して更に異性と協力を營み得るは百人中多くも八十人を越えない。又先天的若くは後天的に於ける心理的乃至生理的缺陷及び已むを得ざる社會的事情の下に性的協力を營み得ない者が生存者百人中十人乃至十五人はある。加之、一定の男女が結婚といふ形式に依て性的協力の社會的制約を履んでも、一人も子女を生産し得ない者が通常其一割を占めてゐる。斯くの如く幼時又は中途死亡者の補充並に缺陷的協力不能者及び生産不能者に代る剩餘的生産を見込まねばならぬ。之は吾人が好むと好まざるとの問題でなくして單に人類の種の漸滅を防ぐ爲めに必要なる打算である。而して此打算の結果は實際生産可能の一定男女間の標準生兒數を平均四人とすることを至當と認めねばならぬ。其具體的說明に適切な一例がある。

二百人を一團とした或地方の先住米人(土着米人種)の實例に據れば、其内婦人は九十七人であつたが、二十歳未滿で十九人(二〇%弱)死亡したから生存せる成熟女性は七十八人に止まつた。然るに其内十二人(一五%強)は種々の事情で結婚するに至らず結局性的協力の途に進んだ者は六十六人を算するに過ぎなかつた。而して更に其内十三人(二〇%弱)は生涯子女を生産しなかつた。斯くして實際生産可能の婦人は僅に五十三人に減じ、該一團の先住種族の運命は全く此等婦人の兒童生産力に懸つてゐた。而して今此等五十三人に依て最初の種族人員數を維持せんが爲めには少くも各生産有能婦人は一人當り平均三人七分の兒童を生産せねばならなかつた。假りに其責任數を結婚可能であつた六十六人に割當てゝも、尚且つ妻一人に付平均三人は生産せねばならぬ。而も何等人爲的原因なくして(若くは人爲的能力の最善を盡して)子女を有するを得ざる者の生産責任を強要することは出來ぬから、歸する所平均三人七分を以て生産有能婦人の責任生産數とする外はなかつたのである。然るに該責任數は單に生兒の數の上のみからの打算であつたので、其内容即ち質の問題を考慮する時は優生學的に多少の淘汰餘剩を有せねばならぬ。從つて此例證の種族は生産可能の一定男女が前掲の標準生兒數たる平均四人の生産を必要としたのである。

結婚したる男女間の兒童生産可能力の有無並に其程度は豫測することが出來ない。即ち或長き一定期間(生涯の重要部分)を經過して始めて正確に決定せらるるに過ぎない。されば其兒童生産責任は孰れも皆之を負擔し得べき可能性を具有する者と解せねばならぬ。唯豫め全體に對して幾割かの無能力者を想定し、之が爲めに他の豐富なる有能者の餘剩的生産を要求する外はない。斯くして一般的に種の存續に要する總ての一定男女間の標準生兒數を平均四人と主張するを必要とする。即ち普通に發育したる者は、男女共に互に一定の形式に據る性的協力に依て其間に普通に發育すべき兒童を少くも四人を生産し、最善を盡して之を養育せねばならぬ。此義務——社會的制約——は社會的又は種族的に必須的關係を有し決して個人的自由を之に加ふるを許さないのみでなく更に優生學的にはそれ以上の或者を要求するのである。

優生學が性の問題に關して要求する主要事項は(第一)一般的に前に擧げたる生兒の淘汰餘剩範圍の相當に大なることである。若し生兒實數が辛うじて標準數に達するに止まらば、其原數を減ぜざらしめんが爲めに素質の優劣に拘はらず彼等を

悉く結婚に導かねばならぬ。此場合には何等淘汰的手段が行はれないから、劣等なる素質の種族も優良なる素質の種族と同樣に其子孫の繁殖を擅にすることゝなる。勿論如何に兒童の生產數が多くして十分淘汰を施す餘地はあつても、其方法が適切でなければ淘汰の効がないのみでなく却て反對の結果を生ずることもある。此等淘汰の手段に就ては今玆に敍述の暇を有せぬが、兎に角優生學的に劣等種族の淘汰は必要で、其必要を充たす基礎として或程度の餘剩的生產が要求せられねばならない。

(第二)には優生學は成るべく優秀なる素質の個々の男女の結婚率及び兒童生產數の增大を要求する。優秀男女が多數でなければ性的淘汰の目的を達することは困難であるが、優秀なる男女は亦優秀なる父母から生れるから、優秀の素質を有する男女が父母となる機會の多いといふことは優生學上極めて重要な條件と謂はねばならぬ。此反對に劣等なる素質の男女の結婚率及び兒童生產率の成るべく僅少ならんことを要求せらるゝのは勿論である。又結婚の年齡が兒童生產數に影響するのは普通の事實で、此點に於て優生學は晩婚を忌避する。更に一般に結婚の時期を或程度以上に遲からしむる時は心理的にも社會的にも結婚に關する條件を複雜ならしめ、自然其成立を妨げしむる虞がある。

以上の如き性に對する優生學的問題は今日の文明國に於て果して容れられつゝあるであらうか。優秀者は男女共に旺んに性的協力を營み、以て其優秀なる系統の子孫の繁殖を行ひつゝあるであらうか。劣等種族には產兒制限及び隔離法其他必要なる手段に依て淘汰作用が實現されてゐるであらうか。今當面の問題と關聯して米合衆國に於ける女子高等教育が此點に及ぼせる實況を少しく考察しよう。

三　米國女子高等教育の優生學的影響

既に述べたる如く女子高等教育の被教育者たる者は一般女性中比較的優秀なる素質の者と認められるが、米國に於ける其等の學生や卒業生は今日まで優秀素質者として優生學的に社會に貢獻する所があつたか何うかといふに、悲しい哉事實は之を裏切つてゐる。其入學の目的や卒業後の希望は措いて問はず、兎にも角にも米國女子高等教育は優生學的には社會

に惡影響を與へ、純粹なる土着米人の如きは殆と人種的自殺狀態にさへ陷つてゐると稱せられる。即ち全米國の大學始め各種專門學校の女子卒業生の平均結婚率及び兒童生產數は一般女性の平均よりも遙に低く、又單に結婚率に就て言はゞ其等學校の男子卒業生の平均に於けるよりも頗る低位にある。一九〇一年までに於ける全米女子大學卒業生の四十歲以前の結婚者は總數の四十五%であつて、全國女子の四十歲以前の結婚者が其九十%であると比較すれば全く半數にしか達しない。アミー・ヒューズ氏の調査に據れば米國女子高等教育最古の歷史を有するマウント・ホリヨーク大學の女子卒業生の結婚率は左の通りで、其漸減的傾向は極めて明白である。

卒業年次	既婚者百分率	未婚者百分率
一八四二—一八四九年	八五・四	一四・六
一八五〇—一八五九年	七五・五	二四・五
一八六〇—一八六九年	六〇・九	三九・一
一八七〇—一八七九年	五九・四	四〇・六
一八八〇—一八八九年	五七・六	四二・四
一八九〇—一八九二年	五〇・〇	五〇・〇

更に他の諸大學の女子卒業生の結婚率を檢するに左の如く大同小異で、カンザス州立農業大學卒業生の結婚率の特に高いのはそが實業大學たる性質と對比して一顧すべき興味ある問題である。

グライン・マウル大學

一八八八——一九〇〇年女子卒業生三百七十六人中、一九一三年一月一日までに結婚したる者百六十五人、即ち四三・九%に當る。

ヴァサール女子大學

一八六七——一八九二年女子卒業生九百五十九人中、前同上の期日までに結婚したる者五百〇九人、即ち五三・〇%である。

カンザス州立農業大學

一八八五——一九〇五年女子卒業生(以下數不詳)結婚率六六・七%

オハイオ州立大學

同上女子卒業生結婚率五四・〇%

ウイスコンシン大學

一八七〇——一九〇五年女子卒業生結婚率は五一・八%で、而も其最後の五箇年の卒業生の狀況は左の通りである。

一九〇一年卒業生結婚率	三三・九
一九〇二年同	五二・九
一九〇三年同	四五・一
一九〇四年同	三二・三
一九〇五年同	三七・四

イリノイス大學

一八八一——一九〇五年女子卒業生結婚率五四・〇%

以上の如く米國大學の女子卒業生の一般結婚率は甚だ低く全米婦人のそれと比較すれば前揭の如く略ぼ半數にしか過ぎないが、更に之を前に擧げたる土着米人の例と比較するも亦大體同樣の觀がある。即ち彼は生存せる成熟女性七十八人中結婚した者が六十六人で八四・六%強であるが、而も其基礎數たる七十八人中には生理的又は心理的缺陷者を除外してゐない。女子大學卒業生にありては、偶々絕對不治の或先天的又は後天的缺陷者ありとするもそは極めて異常の例外で、無論一般女性に比して其率甚だ僅少であらねばならぬ。蓋し斯くの如き缺陷者は高等教育を受くることも困難であるからである。

次に結婚に伴ふ兒童生產數を見るに、女子大學卒業生の一般婦人に比して其稀少なること驚くに堪へたものがある。今

マウント・ホリョーク大學女子卒業生の既婚者及び卒業生總員各一人當り產兒數を年次を逐うて擧ぐれば左の通りである。

卒業年次	既婚者一人當り(人)	卒業生總員一人當り(人)
一八四二——一八四七(?)年	二・七七	二・三七
一八五〇——一八五九年	三・三八(?)	二・五五
一八六〇——一八六九年	二・六四	一・六〇
一八七〇——一八七九年	二・七五	一・六三
一八八〇——一八八九年	二・五四	一・四六
一八九〇——一八九二年	一・九一	〇・九五

之に據れば既婚者一人當り產兒數平均二人七分弱で前に示したる標準生兒數四人に及ばざること一人參分であるが、而も其產兒數の漸進的に減少せることを注意せねばならぬ。卽ち一八九〇——一八九二年卒業生既婚者一人當りは一八八〇——一八八九年卒業生同上に比して六分參厘(二四・八%强)を減じ、又其等の年次の卒業生總員一人當りに於ける比較は五分一厘(三五・〇%弱)を減じてゐる。此傾向が其後歲と共にいよ〱顯著となりつゝあることは推測に難くなく、現に他の大學の一層新しき女子卒業生に就て調査された所と對比すれば事實は好く吻合するのである。卽ち一九一三年調に據るに、ブライン・モール大學一八八八——一九〇〇年女子卒業生三百七十六人の產兒は僅に百三十八人に過ぎず、其既婚者一人當り〇・八四、卒業生總員一人當り〇・三七といふ貧弱なる數字を示してゐる。又一九一二年秋調に於けるウェルスリー大學一九〇一——一九〇四年女子卒業生四十四人の產兒數も既婚者一人當り〇・八七、卒業生總員一人當り同じく〇・三七といふ少數である。更に同上卒業生中より選ばれたるデューラン及びウェルスリー奬學資金受領者三十五人に就て檢すれば其產兒數既婚者一人當り〇・五七、受領者總員一人當り〇・二〇に止まつてゐる。此等の稀薄なる產兒數を見る時は、彼等女子の大學卒業生は啻に性的協力上に於て社會的制約を履まざる者多數たるのみでなく、實際產兒能力も一般婦人に比して非常に低率と謂はねばならぬ。卽ち既に同じく妻として異性と協力しながら平均一人の兒童すら生產し得ざる狀態では、彼等の生殖機能そのものに就て大に疑はざるを得ない。勿論女子の大學卒業生は比較的晩婚である。或人の調査に據れば

米國の大學卒業生と他の諸學校の卒業生との結婚年齡には左の如き差がある。

結婚年齡	大學卒業の結婚者百分率	其他の學校卒業の結婚者百分率
二十三歳以下	八・六	三〇・一
二十三――三十二歳	八三・二	六四・九
三十三歳以上	八・〇(?)	五・〇

又エム・アール・スミス女史の統計に從へば、女子大學卒業生の平均結婚年齡は二十六歳餘で其姉妹や親戚等のそれは二十四歳餘であるから平均僅に二歳の晩婚に過ぎない。素よりこは一般の例とするに足らぬかも知れぬが、然し孰れにもせよ、此等の事實を以て彼等の産兒數の稀少なる主要理由とすることは出來ない。三年乃至五年の結婚の遲延が産兒を標準數の四分の一內外に減縮せしむべき筈はないからである。

以上米國に於ける女子高等教育の優生學的影響を專ら大學卒業生に就て考察したのは、そが代表的事實を示すものであり且つ一般女子高等教育の理想は大學程度の施設にあるからである。然るに其事實は優生學上明かに甚しき不幸を國家及び人類に齎してゐる。彼等は假りに個人として如何に優秀なる能力を發揮することあるも、其性的協力の責任を回避する者の多數なると生殖能率の稀薄なるとは優生學的見地より見て莫大なる社會の損失である。彼等の性的無責任及び無能力の結果は一方に優秀種族の繁榮を減殺し、他方に於て劣等種族の增殖を默視せねばならぬ。而して斯くの如き結果を招來せしめるのは畢竟現在の女子高等教育制度が根本に於て甚しき缺陷を有するが爲めと解する外はない。即ちそは該教育を受けたる女子をして性的に無責任無能力ならしむる如き組織と方法とに依て成立つてゐる故でなからうか。男子の大學卒業生も近來幾分かづゝ性的に無責任ならんとする傾向はあるが、女子の如く甚しくはない。今尙少しく其等の比較研究を試み、併せて米國女子高等教育卒業者の性的無責任に陷り易き事情及び無能力化すべしと思惟せらるゝ二三の疑點を闡明しようと考へる。

四　米國女子高等教育制度の根本的缺陷と其改善策

米國の大學は總て女子の入學を許してゐるが、其修學の方法としては男女共學と男女分離組織とがある。男女分離組織とても單に共同で聽講したり研究したりしないだけのことで、教授課目や研究事項は殆ど總て同一である。若し他に性的條件に於て相異ることなくば、斯くの如く同一修養の徑路を辿つた結果は男女に依てさまで大差あるべき筈はない。即ち同樣の課程の修學を經たる大學卒業生は、男女共に共社會的制約に服する上に於て略ぼ同樣の責任感と實行力とを有して居らねばならぬ。然るに事實は之に反して種々の點に少からぬ差異を發見するが、殊に性的協力問題に關しては一層著しいものがある。今ジョン・シー・フィリップ氏調に據れば、一八五一――一八九〇年に於けるハーヴァード大學の男子卒業生の結婚者百分率は七四・〇でエール大學のそれは七八・〇といふことである。之を前に掲げたる諸大學の女子卒業生のそれに比すれば、そが遙に高率を保つてゐることは明白である。而も特に注意を要するは一般男子大學卒業生の結婚率は女子大學卒業生の如く年次を逐うて甚しく低減しないことで、そは一層新なる統計に就て見られる。即ちスタンフォード大學の一八九二――一九〇〇年の男女卒業生に關する一九一〇年の比較調査は左の如き數字を示してゐる。

(自一八九二年　至一九〇〇年)	卒業生數	一九一〇年までの結婚者數	其百分率
男卒業生	六七〇人	四九〇人	七三・二
女卒業生	三三〇人	一六〇人	四八・五

又シラキュース大學卒業生の最近五十年間に於ける男女比較結婚率に據るも、左の如き差異がある。

卒業年次	女子卒業生結婚百分率	男子卒業生結婚百分率
一八五二――一八六一年	八七・〇	八一・〇(?)
一八六二――一八七一年	八七・〇	七・〇
一八七二――一八八一年	八一・〇	九〇・〇
一八八二――一八九一年	五五・〇	八四・〇
一八九二――一九〇一年	四八・〇	七三・〇

以上の事實を基礎として考察すれば、今日の米國高等教育制度は、修業の結果女子をして結婚を困難ならしむる事情に

導き若くは結婚を忌避せしめ或は又性的協力者としての重大なる責任を無視せしむるに至る何者かを包含せることを認めざるを得ない。今女子高等教育卒業者の結婚率の低き理由を教育上より討査すれば、略ぼ左の諸點に歸せられる。

(一)誤れる教育法の爲めに男性及び結婚に對する正當なる理解を有せざること

性的協力は人たる者の營まねばならぬ當然の義務――社會的制約――であるから、其協力すべき男性並に其協力の手段たる結婚に就て親密なる情操を養はしむる必要がある。然るに今日の教育法は動もすれば反男性的思想を鼓吹し、若くは結婚を以て生活を束縛する一種の不自然的行爲の如く誤解せしめ、單獨生活を完全なる自由生活の如く誇らしむる傾向がある。

(二)智的興味又は職業的興味に沒頭し、一層廣く且つ必須なる生活意義を顧みざること

專門的知識の追求に專らとなり又は職業の趣味が湧起するに從ひ、日常生活や普通の社會關係が或は平凡に思はれ或は煩瑣に感ぜられ、人生の根本義を全然無視するやうになる。是れ將た主として理智教育偏重の弊である。

(三)專門的若くは職業的教育に泥み、性的協力に伴ふ妻としての生活に適切なる修養を缺くこと

此結果は一面に於ては家庭に對して無趣味となり他面に於ては妻としての生活任務の無能力を生じ、自然異性より喜ばれず自己も家庭の人たるを好まなくなる。

(四)性的關係上女性に缺くべからざる魅力は思想が益々理智的に固るにつれて消滅せんとし、且つ修學年限長き爲めに最も魅力に富む時期を逸すること

女性が性的魅力を失はゞ之と協力せんと欲する異性はないであらう。從つて斯る婦人は結婚が困難である。

(五)自己よりも高等の修養ある男性を配偶に求めんとするも得難きこと

婦人が配偶を求むる場合多くは自己よりも更に高等教育ある男子を望むが、女子高等教育卒業者と對比して一層修養の高い男性は少いから容易に希望を達しられない。

(六)高等教育の經驗は一般生活標準の向上觀念を喚起し、爲めに配偶者の經濟的地位にも多大の要求を有すること

單に精神的に自己よりも勝れる男性を欲するのみでなく、其教育的地位に伴ふ生活標準を維持する爲めに物質的にも相常豐富なる資力の持主を配偶に望むのであるが、此等の希望に適合した男性は更に少數である。

然らば此等の理由が何故男子高等教育卒業者の結婚率に著しく影響しないかといふに、男性にありては女性と本質的に一大差異がある。即ち男性は女性よりも性的本能が旺盛であるから性的協力心も強く、異性や結婚に對する理解の機會も多い。又女性の如く感傷的に知的興味や職業的興味に沒頭することがない。女性は理智作用が高まるほど情操は冷却し易いから教育の程度進むに從つて結婚率を減ずるが男性には更に斯くの如き事實を發見しない。有名なる優生學者ダベンポート博士のハーヴァート大學級友三百二十八人中一九〇九年の殘存者は二百八十七人で、内三分の一は未婚者であつた。而も該殘存者中人名辭書に其名を傳へられた二十六人の内未婚者は僅に二名で、其後更に一名に減じた。之に依ても男性は專門的知識の追求や職業的興味の爲めに其他の人生の意義を沒却する者の少いことが認められる。

次に女性が男子と性的に協力するには生殖關係と同時に更に生活關係上特定の任務に當らねばならぬ。主婦としての一家の經營はそれである。既に述べたる如く各の女性は男性との協力に依て平均四人の兒童を生産すべきであるが、四人の子女を分娩鞠養することは實に多大の勞苦で、或時期の間は殆ど全力を母の任務に捧げねばならぬ。況んや之に加ふるに主婦としての任務を以てするのである。然るに女子高等教育にありては何等此等任務に就て學ぶ所なく、却て家庭的趣味はいよ〳〵喪失し家事社交には益々迂遠となる狀態で、其結果結婚するよりも寧ろ生涯職業婦人として單獨生活を送らんと決心する者多くなり、男性も亦斯る婦人を妻として要求しなくなる。米國などにありても今日一般青年が妻を選擇する第一條件は家庭的任務に堪へ家事的嗜好を有することにある。女子高等教育卒業者が性的協力上男性の要求する條件に缺如たることは其結婚を困難ならしむる最大理由と稱せねばならぬ。

性的關係上女性に魅力の必要なるは少しく結婚心理を解する者の夙に理解する所であらう。美人は多く魅力に富むが故に異性戀慕の的となつて結婚の機會も早い。曾てギルモア女史がペンシルバニア州女子師範學校卒業同級生を公平なる鑑識を經て容貌に等級を附し置き其結婚率を調査したのに、最高級の者は七割結婚し普通級の者は五割結婚したに過きなか

つた。斯くの如く重要なる――或意味に於て女性の生命とも謳はるゝ――魅力を空しく減殺し凋衰せしむることが特にそが結婚率減少の一理由となるは當然の次第と謂はねばならぬ。又女性は配偶を求むる場合、一般に肉體的には自己より長大で精神的には自己より學力の優秀なるを欲するが、肉體的には兎に角、精神的には最高學府たる大學卒業生として更にそれ以上の優秀なる學力ある者は容易に求め得らるゝものでない。男子は之と反對に自己よりも以下の學力の配偶を欲するから容易に希望が達せられる。但し茲に所謂學力とは知力の義ではなく寧ろ單に學術的素養の意と解すべきである。更に女性が結婚生活上配偶者の經濟的地位の安定を要求するは至當のことゝ思はれるが、高等教育を受けたが爲めに特に高い地位――多大の欲求を滿足せしめ得べき地位――に在ることを望むは、其配偶者を得る上に一層の困難を加ふるものと謂はねばならぬ。男性としては、妻が高等教育卒業者たる故を以て特にそが多大の欲望を充たさしむべき經濟的負擔に甘んぜんと欲する者でない。

之を要するに、現在制度に依て養成された米國女子大學卒業生及び其他の高等教育卒業者は、殊更に結婚を忌避し若くは結婚を困難とする性格の所有者となり或は又其等の環境の彷徨者となり易い十分の理由を有してゐる。斯くの如き實狀は、例令優生學者たらずとも、優秀なる子孫の繁榮を計るといふ常識的目的より、將來の社會を思ふ者の默視し得る所であらうか。之をしも教育的施設の缺陷として根本的に改善の策を講ぜずに居られようか。結婚に依て生れ結婚生活に依て養育された人類が結婚を忌み若くは結婚難に惱むには、其處に大なる不自然がなければならぬ。

茲に於てか女子高等教育問題は、獨り米國のみならず、又我日本のみに止まらず、世界的に考察すべき極めて重大問題たることが認められる。米國にても一部識者は夙に其弊を憂ひて之が制度改善の急を說いてゐるのみでなく、大學に依りては現に男女學生の教課目を區別してゐるものもある。然し此重大問題は姑息な二三の部分的改善に依て解決せられるものでない。要するに現在高等教育制度は一般に男性の爲めには甚しい弊害はないが、女性の爲めには其特性を害し自然の性情を傷け、實際上に於ては益々其結婚率を減じて性的無責任者を漸増し、更に產兒能力を萎縮せしめ、遂に優秀なる種族を自滅の運命に導かんとするものたること最早爭ふの餘地がないから、之が改善を期せんとせば勢ひ先づ今日の男性本

位の教育思想から蟬脱し、男性を基礎として築かれた一切の教育制度を放棄し、女性の爲めに根本から全然新なる純女性的の教育組織や諸種の教育法が編まれねばなるまい。眞に女子教育を思ふ者は此點から其考察を進めねばならぬと考へる。

優生學上殊に女子高等教育卒業者の產兒數の稀薄なることに就ては、更に愼重に討究を加へねばならぬ。米國にては彼等中に多少意識的產兒制限を行ふ者もあるが、そは一小部分に止まつてゐる。恐らく之が元因は左の諸點に歸せねばならぬであらう。

(一)長き學生生活中、不知不識生殖機能を萎縮せしむるまでに過度の運動を行ひたること
女性の生殖器管の成熟期に精力を他の方面の發達に消費すれば自然前者の發育を不十分ならしめる虞がある。而して男子と殆ど同樣の教育方法の下に女子を訓練する結果は、外觀のみ偉大となつて却て內部の器管に缺陷を生じ、其多くが生殖上の無能力者となるのはさもあるべきことである。

(二)知的生活及び職業的生活は多く女性の健康の保護に不注意ならしめ生殖器管に障害を起さしめ易きこと
處女時代及び年少婦人時代に外部より受くる生理的刺激が生殖器管に特に著しい影響を與ふることは事實である。從つて外勤や時間的勞務に服せる若き婦人は其時代に既に生殖上の無能力者たる運命を授けられる者が少くない。

(三)晩婚は生殖可能年限の比例率よりも產兒數が少いこと
五兒七兒乃至それ以上を生產する生殖能力の豐富なる婦人を除き、普通二兒三兒を生產して已む者は概ね三十歲以前に於てゞある。假りに三十歲にて結婚する者ありとせば、生殖可能年限は尙十數年を餘すとしても其割合に兒童を生產し得るものでない。

以上の外尙列擧すべき理由があるかも知れぬが、兎に角大體に於て今日の女子高等教育制度並に其被教育者及び卒業者が彼等自身其女性たることを沒却し更に將來肝要なる母性に就て殆ど全然無頓着であることが、其產兒數の稀薄な主要な原因と認めねばならぬ。斯くの如きは素より誤れる思想で、眞の有意義な女子高等教育は飽くまで女性それ自身を本位と

した女性それ自身の爲めのものであらねばならぬと同時に、最初より將來の母性的資格を尊重し、生理上及び心理上之が發達と保護とに最も深き注意を施すを要する。新に起るべきものは勿論、現在制度の改善に就ても女子高等教育の方針は此二樣の意義を脱却することは出來ないであらう。

五　我邦に起さるべき女子高等教育

既に述べたる如く今日我邦に於ける女子高等教育の施設の要求は頗る熱烈であるが、最も權威あるべき筈の全國女子教育家大會が既設男子學校に女子を收容して共同修學せしむべきことを決議した理由は果して那邊にあるか、甚だ怪訝に堪へない。聞く所に據れば「女性が高等教育を望むのは時代の要求であつて、此要求に應ずるが爲めには徐々に男子學校を開放するを便とする。而して高等教育程度にありては、共學から起る性的不正關係は敢て憂ふべきほどのことはない。」といふのが其決議を生んだ要旨であるとのことである。如何にも女性が高等教育を望むのは時代の要求で輕卒に之を拒むことは出來ない。然し其要求する所謂高等教育は男子に於けると同一のものであるや否やを考へねばならぬ。由來高等教育と稱すべきものは悉く先づ男性を被教育者として設けられたのであつて、他に現前の事實が無いから女性の要求も自然そを標的と見做す傾向があつた。然しながら人あつての教育で教育あつての人でない。高等教育といふ一定のものがあつてそれを男性又は女性に課すべきものでなく、男性又は女性それ〴〵に其時代に依て適應した教育的施設を加ふべきである。今若し女性に既設男子學校を開放して男性と同樣の教育を受けしむるを可とすと定めんには、現在高等教育制度が男性に適應せる如く女性にも適應せることを豫め承認せねばならぬ。而して現在高等教育制度が男性にも女性にも等しく適應すと斷ずるが爲めには、其前提として男性も女性も全く同一資格を有し其將來に期する所も亦同一狀態にあることを認容せねばならぬ。蓋し異る資格を有し異る將來の期待を有する被教育者に同樣の教育制度が等しく適應すべき筈はないからである。

然しながら此前提は果して事實上に承認し證明せらるるであらうか。本論の初めに述べたる如くフエミニストは女性が

精神的能力特に知力に於て男性に劣る所の無いことを主張するが、それは果して女性の平均と男性の平均との正確なる比較であらうか。男子中にも愚者があり婦人中にも賢者があるのは勿論で、或少數の個人と個人との比較は何等議論の根據とならぬ。況んや茲に所謂資格とは一部の心理作用に就てゞなく、全體としての心的及び身的構造並に能力に關してゞある。從來研究せられたる所に據れば、性別關係は人の發育に伴うて複雜となり且つ發達する。即ち嬰兒時代は勿論滿五六歳に達するまでの中性時代には男女の差異顯著でないが、それより童男童女に分れ、十三四歳乃至十五六歳には生殖器の發達と共に急激に性格を一變し、男女共に明白に其特質を心身の作用上に示すやうになる。更にそれより生殖器の成熟に伴ひ男女の特質は年を逐うて完成するのであつて、性的特徴は一般に末廣がりに發揮せられ、兩性の差異が互に引力的作用を喚起して種々なる情緒的關係をも構成するに至るのである。斯くの如き性の自然的發達に成れる男女心身の差異を否認せんとする者あらば、そは餘りに自己欺瞞の甚しいものと謂はねばならぬ。勿論教育を以て單に知識の傳達又は職業の傳授と解する淺薄なる思想家には斯る全體問題は耳に入らずして、唯或女性の能力が男性と伍して一定の知的若くば職業的教育を受くるに耐ふれば足るとするかも知れぬ。然し斯くの如き思想は根本的に教育の本質を沒却したもので、到底相共に論議することは出來ない。眞摯な教育家的立脚地から觀察すれば、高等教育の被教育者たるべき男女の心身全體の上には著しき自然的差異があつて、兩者を同一資格者として取扱ふことを不適當と考ふるは當然であらう。但し茲に同一を否定するは其間に上下高低の別があることを指示するのでなく、單に事實上の差異を説くに過ぎない。從つて女性には、今日男性の爲めに比較的適當な教育制度が行はるゝ如く、更に女性の爲めに成るべく適當な教育的施設を要求すべきである。自然が與へた資格の同不同を問はずして機械的に男性の仲間へ女性を投入し、徒に知慾の奴隷たらしめ又は過渡的社會に於ける職業生活の犧牲たらしめんとするのは、彼等女性は勿論教育界の爲めにも國家乃至人類社會の爲めにも無謀な計畫で人生に悲むべき結果を齎すものと謂はねばならぬ。又今日女子をして男子と同一の高等教育を受けしめんとするには、入學に際して中學卒業生と高等女學校卒業生とは修學の課目や程度に少からぬ懸隔がある。之を學歴上同資格者として共通の學力競爭場裡に立たしめんとすることも、頗る亂暴の沙汰ではなからうか。中學生は大部分高等教育に進むべきもの

として教授訓練せられつゝあるが、高等女學校にては更に高級の學校に進まんとする者は其一小部分で多數は卒業後家庭の人となるのであつて、教育の方針も之に適するやうに制定せられ實施せられてゐる。教育家中には此方針に慊らずして、高等女學校の組織を中學校同樣に改めんと主張する者もある。然し性的協力が家庭に於てせらるゝ限り女性が家庭の經營任務を放擲せられないとは明白であらう。又母性が人類生活上極めて大切で其尊重すべきことを知らば、女性は豫め之が爲めに修養する所がなければならぬ。今日高等女學校卒業生は尙比較的少數で、彼等は女性中にては寧ろ知識階級に屬し社會上中堅的地位を占めつゝあるから、彼等の養成方法は女性として代表的に近き者たらしむるを要する。若し彼等を驅つて少數の高等教育志望者の犧牲的同伴者たらしむる如きことあらば、それこそ益々由々しき大問題で、女子教育は玆に絕滅を告ぐるに至るであらう。

更に又高等教育卒業後に期待する所のものが男女同一であらうか。男子は生涯專念其志す事業の遂行に努力し、又は望みたる職務に孜々として從事するを以て、自己を成就する所以ともし、國家社會に奉仕する所以ともする、勿論一般的に社會生活上共同の義務を負擔し同時に適當なる配偶を選定してそれと性的協力を營むことは、普通の問題として實行されてゐる。然しながら婦人は斯くの如くあり得られようか、又あり得ることを望むべきであらうか。蓋し同じく性的協力と稱するも男子の直接擔任すべき部分は極めて少く婦人の負擔する所のものは實に甚しく重大であるから、若し女性が男性の如く專念其志望事業や職務に從はんとせば性的協力は困難となり、又性的協力を完うせんとせば其志望事業や職務に專念從事するとは殆ど不可能となる。是れ前述の如く米國に於ける高等教育卒業婦人の結婚率低き最大理由で我邦一部の女性間にも見る所の事實である。斯くの如く婦人は高等教育卒業後男子よりも複雜なる社會生活關係を帶ばねばならぬのであるが、それにも拘はらず、女性をして男子と同一課程を履ましめ同一學校卒業者の名の下に活動せしめんとするのは何たる女性冷遇女性虐待であらうか。年少氣鋭の時代は女子も甘んじて知慾の奴隸となり高等教育卒業者といふ虛名を贏ち居たることを一種の誇りと感ずるであらう。而も冷靜に自己の女性たることを自覺し其生活の完成を志す時、如何に煩悶の十字街路に立たねばならぬか。此場合自暴自棄に陷らざる者は幸である。

以上に依て吾人は全國女子教育家大會の決議たる男女高等教育共學問題は、現在高等教育制度が女性にも男性同樣に適應せることを詮議したる結果ではなくして、恰も飢えたる者の食を選ばざる如く、知慾に眼くらみ職業熱に心浮かされたる、若き婦人の渴を醫すべき突差の方法として定めたものであることが推測せられる。而して其共學を便とし且つそれより生ずべく危まるゝ性的不正關係の杞憂を說く根據は、主として歐米諸國の現狀を參考したものであらう。否寧ろ高等教育は我邦にても米國等の如く男女を同一學校に收容すれば可ならんといふ單純な模倣思想以上に出でないのであらう。

然しながら、前に敍述したる如く、米國にありては既に多年の經驗の結果、男女を同一制度の下に教育することが優秀なる種族を自滅の運命に導かんとする寒心すべき狀態にあることを發見して、識者は之が改善策に腐心してゐる。今日殆ど新に女子教育制度を設定せんとする我邦に於て、何を苦んで斯る重大なる缺陷を有する制度を模倣する必要があらうか。

吾人は優生學的教育の立脚地から女子高等教育は必ず左記の意義を具備した施設に成らねばならぬと考へる。

(一)專門的知識を授くるを主要目的とせず、一層健全なる心身諸機能の調和的發達を遂げしむべき有用なる學藝を教授し、努めて人生の意義を理解せしむることを期すること

(二)多方面的興味を養ひ、情操を練り、女性の美所を發揮し、主婦並に母性に必要なる素養を修めしむること

(三)男性的職業を避け、女性としての完成せる能力者たらしむべき方針に出づること

(四)修學年限は參年以內とし、入學には現制高等女學校卒業と完全に聯絡せしめ、決して知的競爭を要せしめざること

然し現在の熱心なる女子高等教育論者は、以上の如き意義に成つた制度では無論滿足せぬであらう。吾人の立脚地は人の教育にある。多くの論者の本旨は知識又は技藝の傳授若くは修得にある。此爭點は更に一層根本的なる教育論として詳說せねばならぬ。今は專ら優生學的に主張を述べるに止まるのである。

節約の社會化

慶應義塾大學教授　高橋誠一郎

（一）

奢侈に關しましては、昔から、まるで異つた二つの學說が存在して居りました。一方は奢侈といふものは假令法律や命令の力で禁止せられなければならない罪惡であるとまでは見做さないまでも、少くとも經濟學の名に於きましては痛擊を加へなければならないものであると認めるのであります。現在存在して居る財貨や、利用する事の出來る生產の力には一定の制限が存して居るのでありますから、少數の富裕者をして、その奢侈を擅にし、必要以上の欲望を滿足せしむるが爲めに多數民衆の必要缺くべからざる消費を危うからしむべきものではないと論ずるのであります。之れに對しまして、他の學說は一切の經濟的進步は悉く皆奢侈的欲望の形態をとつて表れるものでありまするが故に、奢侈は經濟的發達にとりまして必要なるものであると見做して居るばかりでなく、奢侈的消費はまた貧民に對して勞働の機會を與ふるものであると說くのであります。

一千七百十四年に出版せられました奇書に『蜜蜂物語』と申すのがあります。その著者は、ベルナアール・ヅ・マンドヴィールであります。この書は經濟學說發達の上に貢獻するところの甚だ多かつたものであります。この偶話の中に描き出されました蜜蜂は、彼等が不德を行ひ、奢侈に耽つて居りました間は、彼等の小國家の繁榮を來たして居つたのでありまするが、その不德と奢侈とが德と質素との生活に道を讓りまするや、彼等は直ちにその幸運の全部を失ひまして、滿足と敦厚とに加護せられながら空木の中に飛び込んでしまふのであります。マンドヴィールの意見に從ひますると、節約は個人の家計をして富裕ならしむるものではありまするが、しかも國家を窮乏せしむるものであるといふのであります。彼は奢侈に定義して申しまする

のに、人をして一個の生物として生存せしめまするのに直接必要ならざる總てのものは奢侈であると説きまするが、これを事實に徴してみまするのに、赤裸々で暮らしてゐる野蠻人に於きましてすら、かくの如き嚴格なる意義に於ける必要品のみを以て生活を立てゝ居るものは、恐らくこの世に存することがないでありませう。マンドヴィール自身も、明かにかくの如き定義が嚴格に過ぐるものであるといふ事を認めて居るのでありまするけれども、而も若し之れよりも一歩讓つて、稍寛やかな定義をとらうといたしましたならば、遂に何處まで讓歩してよいか分らなくなつてしまふであらうと、かう彼は考へたのであります。吾人にして若し人間として生存いたしまするのに絶對に必要でない一切のものを贅澤品と稱する事がないやうになりましたならば、奢侈品なるものは全然存在しないといふ事になるのでありませう。即ち若し人間の欲望にして無數であるといたしましたならば、その滿足の用に供すべきものも亦、無限であると言はなければなりません。然して前述せるが如き最も嚴格なる意義以上に出でたる人間生活上の必要品中に計上せらるべきものは、人々の地位に依つて自ら相違することを免れないものであります。奢侈は之れに耽つた各個人の富に對すると等しく、國家全般の富に對しましても亦破壞的なものであつて、國民的節約は恰も一身一家の節約が各個家族の資産を增大すると同じく、軈てまた一國を富裕ならしむるものであると一般に認められてゐるものでありまするが、マンドヴィールは賢明なる施政を以ていたしますれば、全人民は自己の生産せるものを以て購入し得る限り、多量の外國産奢侈品の中に浸りながら、聊かも之れによりまして貧困となることのないものである。而して軍備に對して適當なる注意を拂ひ、兵士をして十分なる支拂ひを受け長くその訓練に於て遺憾なきを得ましたならば、富裕なる國民は想像し得べき凡ての安慰と充實との中に生存する事を得べく、而してその幾多の部分に於て人智の案出し得る極限の華麗と優雅とを示すと同時に、その隣邦に依つて尊敬畏怖せられ得るものであると主張してゐるのであります。

然しながら概して申しますると、當時のマーカンテリストは奢侈も贅澤も自國製品を消費してゐる間は國家にとりまして有利なものであると考へて居りました。これによりまして技巧を奬勵し、人民に職を與へ、我が金銀財寶を國內に保持する事を得るのであります。國民中の或る者が奢侈放逸なる生活によりまして零落したといたしましたならば、

之れに準じて他のものは出世し、且つ又貨幣は一層移動的となり、人民に對しまして大なる刺戟と滿足とを與ふるに到るべきものであると、から考へて居りました。然しながら奢侈にして外國品に向ひましたならば、問題は全然別個のものとなるのであります。卽ち無用の贅澤品より成る外國品の消費によつて生じた貿易は、軈て國內の生產を等閑に附せしめ、輸入をして著しく輸出に超過せしめ、從つてその結果として生じたる不足を支拂ひまするが爲めに、我が正貨は當然國外に流出して、年々歲々我が貧困の度を增加して行くべきものであると考へるのであります。卽ち彼れ等は專ら國家的見地から奢侈を觀察いたしたのであります。

一體奢侈といふ言葉は頗る意味が不明でありまして、その意味の取り樣によりましては、之れに對する是非兩樣の議論が出來る譯であります。玆に於きましたか十八世紀に現れました英國の偉大なる哲學者は、奢侈を以て槪ね諸感覺の滿足上の大なる精練を意味するものであるとなし、而して、その一定の程度は時代、國土、若しくは個人の狀態に從ひまして、或は無害となり或は非難すべきものとなるのであると言つて居ります。而して、德と不德との間の限界は、他の倫理的事項に於けると等しく決して正確に決定することの出來ないものでありまして、卽ち食料飮料若しくは衣服の快美に耽溺いたしまするときは、單に此等のものが寬大若しくは慈悲の如き一定の德を毀損してまでも追求せられまするときには不德となり、またこれが爲めにあるものが資產を蕩盡し自己を窮乏赤貧の境界に陷らしむるのとき、それは痴愚の擧となるのであるといふ折衷的の學說を生ずるに至つたのであります。

（二）

私どもの考によりますると、一切の官能的滿足は必ずしも不善ではないのでありまするが、物質的進步は知識的並に藝術的教養の物質的條件を供給するが故にのみ尊いものであります。更に高き教養に對する機會を與ふることのない物質的進步は無價値であります。物質的富は單に機會を與ふるに過ぎないものであります。吾人がこれ等の機會を賢明に利用することを學ぶが爲めには高き理想の支配下に立たなければなりません。然るに其の尊い機會を俗惡庸劣なる一部少數者の手にのみ與ふることは最も有害であります。私は現在の社會に於て奢侈に對する機會がブルジユワジーのみに多く與へられることを恐れる。蓋し彼れ等の

趣味は下劣であつて、彼れ等の愛好する藝術は低級なるが故である。

此頃資本家の連中が寄り集りまして、『節約デー』といふことを主唱いたして居りまするのは、これを彼等自身躬行いたしまする範圍に於ては、誠に結構な事と言はなければなりません。一體サンヂカリストなどの主張によりますると、資本階級といふものは、飽くまで資本主義的であり、彼等がその全力を擧げて生産の方面に盡瘁し、彼等が勝れて利己的であり、而して何等慈悲慈愛の父性的衝動に動かされない事が必要なのであります。サンヂカリズムの哲學者、ヂヨルヂ・ソレルが理想のブルジユアに近いものは、北米の富豪であります。若し産業上の諸力が究極勞働の組織によつて支配せらるべきものであるならば、資本主義をして豫めその完全なる發達を遂げしむる事が必要であり、將來の革命が成功の最大限を獲得す可きものであるならば、資本主義はその活力の最も旺盛なるときに於て轉覆せしめなければならぬものであると説くのでありますが、かくの如き説の當否は暫らく措き、一體彼等資本家階級が、學問とか藝術とか數奇風流とか云ふやうな方面に浮身を窶すといふ事は、既に彼等がその分を忘れたものであると言はなければなりません。彼等は自己が勞働の搾取に依つて得たところのものを、いよいよ生産の用に供し、その收受せる所得の大部分は、更にその以上の配分を取得するが爲めに、再び投資せられて生産の增加を見るに至らなければなりません。此等の餘剩を以て新たなる礦山は發掘せられ、新たなる土地は開墾せられ、新たなる工業には新たなる機械が据えつけらるるのであります。本來から申しますると、資本家はかくの如き餘剩を不生産的の消費に投入して生産機關の運轉を抑制せんとする欲求も能力も共に之れを有するとのないものであります。彼等が生涯の日一日は悉く皆節約デーでなければならないのであります。享和二年に山東京傳の出しました『早業七人前』といふ戲作に、「金は天下の涌きものだ。七十五日生き延びさつせえ」と申しました言葉に對しまして、惠比須が、「さてまた次の奢りには、鮎化して鰹となり、鰹化して糞となり……悔んでかへらぬ大晦日、かけとりの提灯は焦熱地獄の火の玉と見え……これ貧福の早變り、油斷大敵おほこわや。……これ皆奢りの仕業で御座るよ」と言つてゐる。資本階級は自己の階級内の競爭に刺戟されて只管その富を蓄積して行くものであります。寛政二年に現はれた樗下石上と名乘る人の『二福對榮花春袋』といふ俗書に、

「富貴なるたとへに金が金を呼ぶといふが、口も手もないものが招いたり呼んだりしよう譯もなし、それもこれもたゞ金錢を大事にして、殖せ〳〵といふ教なり」とあり、同じ年に出ました橘保留の『子産金七夜祝』にある通り「オカネはそなたの妻なれども、めつたに無駄に使ふてはなりませぬ。さりながら、もの事に身持ちになりて遊ばせておいてはお産が重い、なんでもカネは働かせなければ子は產まぬ」——即ち彼等の階級は飽までも利に利を產まして行く事をのみ務めなければならないものであります。

（三）

然しながら今日の貧困なる多數勞働者階級に對して漫然節約を說くといふことは必ずしも良策ではないと考へられるのであります。寧ろ彼等の階級に對しましては、たゞ徒らに節約を說き貯蓄を奬勵するよりも、彼等が辛うじて餘し得たる餘剩を如何なる方面に使用すべきかを敎へる事が緊要である、言ひ換へると彼等をして如何にして如何なる方面に奢侈的消費を行ふ可きかを敎へる事が必要なのであります。

昔、サー・ウィリアム・ペテイといふ偉大なる經濟論者がありまして、愛蘭人の貧困なる所以を論じ、同國の發達を見ざる所以は、決して天惠の薄きが爲めに非ずしてその人民の必要とする處が少ないが故に交易を營まんとするの用意がないといふところから來てゐるものであると觀て居ります。彼等は煙草を除きましては毫も外國品を要求する所がないのである、交易の存しない所には勞働に對する刺戟もないのである、愛蘭の最大なる不幸はその人民の營みつゝある日常生活の單純なるにあるのであるとなし、彼等をして更に多くを消費せしめ、而して又更に多くを獲得せしめんといたしましたならば、彼等の間に奢侈の風潮を生ぜしめなければならない、これ軈て愛蘭九十五萬の民が、光彩、機巧、及び勤勉を增加して、國家の大富裕をいたすべき誘因であると主張して居ります。

一千八百六十三年二月十一日、ライプチツヒ中央勞働委員會の需めに應じまして、フエルヂナンド・ラサールが同じ年の三月十一日に公にいたました『公開答狀』中に於きまして、彼の所謂『勞銀の鐵則』なるものを詳細に論じて居ります。彼はこの硬直冷酷なる法則によりまして、需要供給の支配するところにあつては、勞働者の平均賃銀は常に一國民の生活の標準に從つて、勞働者の生命を維持し、その

家族を永續せしむるに必要なる生活費以上に多く出づることのないものであると主張するのであります。現代の經濟組織の下にありましては、勞働力は凡ゆる他の貨物と等しい法則によつて市場に賣買せらるゝものに外ならないのであります。而して凡ゆる貨物の價格は、自由競爭の作用する場合に於きましては、生産費によつて決定せられまする。是れ即ち經濟學者が名づけて、自然價格或は正常價格と稱するものでありまするが、肉體的勞働もまたこの法則の適用を免れないのであります。肉體的勞働の價格即ち勞銀は、勞働者が彼等の健康を保存するが爲めに消費しなければならぬ食料及びその他の必要貨物の價値、並に勞働不能となつた勞働者を新たなるものと取り替へるが爲めに必要なる償却準備の追加金から成立する所謂勞働の生産費によつて決定せらるゝものであると主張するのが、即ち所謂勞銀の「生計最少限説」なるものであります。勞働賃銀の増加は、勞働者の多産を誘起し、勞働者の多産は彼等の間の競爭を激甚ならしめて遂には勞銀の減少を來すのであります。かくの如くにして彼等は堪えず辷り落ちる大石を山上におし上ぐるの命令を下界で受けたコリンスの王シシップスと等しき運命の下に立つものでありますっ若し勞働者の生活必要品なるものが彼等の生活の程度によつて一定するところなく、又勞働者は一般に其の一度到達し得た生活程度の必要品を得るに足る丈けの價格を以て自己の勞働力に對する價値評定の最低限度と見做し、確くこれを維持せんとする事實がないならば、換言いたしまするならば、習慣は第二の天性となり、生活の標準を低下いたしまする事が困難でないといたしましたならば、此の如き冷酷鐵の如き經濟上の法則が事實に適合したものとなるかも知れません。私共は、今日の賃銀勞働制度の下に在つては勞働者階級に向つて最良なる意味に於ての奢侈を行ひ、彼等の生活の標準を高め、而してその次第に高められつゝある生活の標準を維持するに足るだけの勞働賃銀を企業者階級から要求すべきものであるといふことを説きたいと思ひます。

（四）

節約デーの提唱によりまして、根本的に生活難を救濟し、物貨調節を行はんとする如きは甚だ手緩いものであると言はなければなりません。成る程、ハートリー・ウイザースがその『貧困と浪費』に於て述べて居りまするが如く、今日の生産には方向を誤つたところのものが甚だ多いのであり

ます。奢侈的生活を送つて居りまする安逸遊惰なる富者階級の浪費の爲めに生産せられるものが甚だ多いのであります。それが爲めに眞の生活維持に供用せらるべきもの丶生産が著しく侵害せられて居ります。でありますから、若し今日の奢侈及び浪費を制限いたしましたならば、これまでこの方面に投入せられて來た生産の力は生活の有用資料の生産に投入せられまして、その結果は貧民階級の貧困を大いに緩和することになるのであります。然しながら、かくの如きは畢竟するに多數の力に依らなければならないものであります。少數の人間のみが行つたところで何んにもならないことで、矢張り社會の多數が自己の地位を自覺してこの目的の爲めに進んで行かなければならないのであります。これには矢張り堅い組合の力が必要であると言はなければなりません。

一體樂天的自由主義の經濟學說に從ひますると、自由競爭の制度の下にあつては、總ての生産者は、最低の價格を以て最大なる價値を提供するによつてその顧客、即ち消費者に對して必然彼の最善をいたすべきであるといふのであります。ギュヨーの如き人になりますると、更に進みまして生産者はその生涯を擧げて他人の爲めに役立たちまするが爲めに、その出來得る限りの力を盡して居るものでありまするが故に、完全なる他愛を實行してゐるものであると說いて居ります。消費者は泰然として王者の座に居して、生産者をして彼等の爲めに奉仕せしめる事が出來るのであります。然しながら事實は此の如き樂天的結論を否定するのであります。成る程生産者は原則としては顧客を滿足せしめる事によつて更に大なる注文を得、更に大なる利潤をあぐる事が出來るのでありまするから、斯くの如く行ひまする事を以て彼等にとつて最大なる利益と見るのであります。然しながらかくの如きは結局彼等にとつて第二の目的に過ぎないのでありまして、その第一主要の目的は、他人に對する勤務や奉仕に非ずして自己に對する利得にあるのであります。それでありまするから、若し彼等がその價格を引上ぐることにより、または生産物の品質を疎惡ならしむることによりまして、その利益を增加する場合には、毫もこれを行ふことを躊躇しないのであります。從つて消費者はその利益を自由放任主義の慈悲に委せて置いて、若しくは無爲なる王者の地位に鼾聲高く眠りながら自己の滿足を得ることは出來ないのであります。彼等は鋭意その利益を擁護しなければならぬのであります。而してこの目的を貫徹いたしま

するが爲めには、彼等は矢張り生産者流の方法に依頼しなければならぬのであります。即ち組合の組織であります。恰も企業者が自己を脅す自由競爭を杜絶するの目的を以て、カーテル・シンジケート・トラストなどを形成するが如く、またマルクスの共産黨宣言に敎へられた社會民主黨が「凡ゆる國の凡ゆる勞働者よ、團結せよ！」と叫ぶが如く、矢張り消費者も自己の主權を主張せんが爲めには、結合せなければならぬのであります。

抑々消費者の組合は二つに分けて觀る事が出來るのであります。即ちその一つは消費者にその權利、その利益、並にその權利を行使しその利益を獲得すべき手段を示すを目的とするものであり、他は消費者に對しまして、その義務並にこれを履行すべき方法を敎へるものであります。消費者が果して王者であり、主權者であるならば、王者には必然その義務が伴はなければなりません。ところが今日に於きましては、單に放逸なる奢侈、野卑尾籠なる快樂に資するが爲めに多數の無益にして餘冗なる職業を生じて居るのであります。消費者はその費用の性質を變化せしめて之れに投入せられた資本と勞力とを正しき用途に入らしむる事が出來るのであります。即ち禁酒禁煙の如き、菜食の如きを目的とする會合が之れであります。これは消費の物件に關した事でありまするが、その他に物その物は決して惡くはないが、それを製造する方法が惡い、例へば、砂糖の消費は惡くはないが、奴隷制度の行はれてゐる米國のある州で生産せられた砂糖はこれを消費しないといふ組合が一世紀前に英國に起つたが如きはこれであります。また一千九百〇八年にヂュネーヴで大會を開きました購買者の社會聯盟の如きものがありまして、これらの聯盟は勞働者に對し一定の休暇を與へ、その他の點に於て必要なる條件を充した工場を記載せる白表を作製し、又はその證明として商品に添附すべき貼紙を頒布する等のことを行ふのであります。

これは消費者に對しましてその義務並にこれを履行すべき方法を敎へるものでありまするが、彼等をしてその權利を行使し利益を獲得するの手段を得せしむることを目的といたしまする組合は、いろ〳〵ありまするが、殊にその中でも有力なるものは消費組合であります。ソリダリズムを主張する經濟學者に言はせますると、消費組合は、平和的に然も根本的に現時の經濟組織を變更すべきものであります。即ち生産の資料と共に、經濟上の至上權を生産者より奪つて消費者の手に移すものと見做されてゐるのであります。

猶組合運動の作戰計畫に從ひますると、世界を征服する第一着歩は、協同組合の精神を喚起し、所謂協同組合的信仰を强固ならしむるにあるのであります。第二には協同組合を糾合して大規模に於て購入を行ひ、次いで配當の支配を停止して大資本の運轉を可能ならしめ、以て凡ゆる必要物品の直接生産にこれを利用し、而して、更に進んでは穀物、酒、油並に消費の根本を形成する凡ゆる貨物の直接生産を行ひまするが爲めに、土地並に耕圃を取得するにあるのであります。即ち組合運動の第一期は、商業的企業を征服するを目的とするものであり、第二期は生産的企業の征服であります。これに依りまして初めて消費者主權の理想は到達せらるべきであると考へられて居ます。而して此處に至りまして物質的生活資料獲得に於ける人類共同の目的は完成を遂げるものであります。物質財及び勤務給付の提供者たる人類とその使用者たり享樂者たる人類とは、同一體となるものであります。

斯くて吾人は共同組合の理想に導かれました時、初めて勞働者階級に對しても節約を説くの必要に逢着いたします。共同組合の創設を見るまでは、勞働者は自己の運命と未來とに對して何等の支配を有して居らなかつた。從來の勞働組合は勞働賃銀に對する一部の支配を勞働者に對して與へました。而も其の仕事の利潤に對する支配を彼れ等に與へまするものは、ひとり共同組合のみであります。是れによりまして今日の賃銀勞働制度は亡ぶるのであります。然しながら資産なく信用なく、其日々々の勞銀に生くる勞働者は如何にして組合を創設す可き資金を得ることが出來るのでありませう。金貸も銀行も恐らくこの方面に貸付を肯ずることはないでありませう。慈善家の寄附も、國家の補助も望み得ない（ラサールは「國家信用を以てする生産組合」を提唱して居りまするが）。彼れ等は自己の力によつてのみ自ら救はれる。彼れ等の慘ましい節約の力によつて、組合の資金を産み出すこと以外に方法はない。斯くて自己の努力と克己との力に由つて彼れ等、無一物なる者は資本を創生するの術を發見するのであります。洵にかのロッチデール・パイオニアの歴史は無が有を産んだ奇蹟であります。組合主義の理想下に於てのみ、ひとり勞働階級に對する節約の勸告は意義あるものである。「節約デー」の提唱によつて、郵便貯金や月掛貯金を行はしめんとするは、彼等を誘惑して資本主義的精神に隨せしめんとするものであります。吾人は茲に「節約の社會化」を唱道しなければなりません。

現代の要求する女性

千葉龜雄

人生暗黒面の價値

司法の制度があり、また監獄と警察の組織を必要とさせて居るこの社會である。誰一人も、この世の中を、神ばかりの集まりだと誇り得る權利を持たぬのである。それに拘はらず、多くの人が每朝の新聞を開いて見て、社會が暗黒だけに滿ちて居ると憤慨する人の多いのは何故であるか。新聞記者を暗黒世相の創作家と斷定して了ふのは何故であるか。何人もが　暗黒をきらつて、光明をあこがれる心理はよくわかる。が、たとへその理想がどうであつても、現實にあつて、そんなに廣くひろげられた暗黒面が、社會の表裏に行き亘つて居る事實をどうしやう。その暗黒面をなくすることは、決してその暗黒から逃げ隠れることからは成り立たない。かへつてその現實をじつと凝視して、どうして此の暗黒面が起つて來たかを深く考へ、その高い理想と憧れを以て、この禍の根を絶滅することを工夫することの外に一つの方法もないのである。かくして新聞記者としての、約廿年に亘る私の人生の從軍は、私をして、いはゆる人生の光明面よりも、より多くいはゆる暗黒面に多大の人生の價値を感ぜしめる。と云つて、何も私が、光明面を否定して、暗黒面丈を享樂するサタン性を多分に持つといふ譯ではない。現代の樣な階級精神で物を見たり、もしくは未だ未だ傳說時代の偶像崇拜の精神が多分に殘つて居る今日の時代では、その人生の價値批判には隨分怪しい評價がまぢつて居る。ことにその光明面と考へる道德的評價には、容易に合點されないまがひ物が多分に入つて居る。だからそれをうつかり第一義道德として推奬すると、とんでもない、禍を社會に與へることが多い。たとへば奴隷のおとなしい屈從

は、ある時代の光明ある道德であつた。女性の無條件の男性への屈從は、まだ我國では光輝ある因襲道德になつて居る。本當の省察を持つたものから、どうしてかう云ふ光明面が、檢閱證なしに通過され得るであらうか。

人間性の發露

それに比べれば、暗黑面はずつと純な人間性の發露である。表現である。トラファルガアでナポオレオンの海軍を破つたネルソンは、すべてが近づきがたい天才のやうに考へられて居た。たゞ一つ彼には或る執着の强い戀愛事件があつた。そこでネルソンの傳記を書いた有名なサウジイが、「この戀愛があるためにこそ、ネルソンも、我々と同じやうな弱點を持つといふ共通感をもつて、ますますネルソンを我等に親しませる」と歡喜して居る。芥川龍之介氏は、故森林太郎博士が、「西廂記」と「琵琶記」をとりちがへて話をしたことを擧げ、博士ですら、時々こんな間違ひをするかと、却つて面白く思つたと回想記に書いて居る。さればとて、それは、すぐれた人々の、缺點をわざわざあばき立てて喜ぶ心理では決してない。或る點では自分達と全く桁がちがふと思ふすぐれた人々にすら、かうした人間性があることを發見した人間らしい喜びの心理である。

もとよりさういふ心理が、暗黑面につき落されたところの實際人生を眺めた心理と、同じものだと云ふことは出來ない。前のに感ずるものは、ほんとにイノセントな、輕い安心であり、後のに感ずるものは、人間性の弱點が、さうした境涯にその當事者を陷れたことを自然と認めながらに、それに感ずる深い不安と痛みとでなければならぬ。そしてこゝに持つ唯だ一つの歡びは、人間は悟性を持つた唯一の生物である故に、その傷ましい體驗によつて、凡ての人生に、再びその痛みをさせない省察を與へる事が出來るといふことである。だから、その當事者にはそれが悲慘であつても、その犧牲によつて廣い人生に與へる警策にせめてもの慰藉を求め得るといふことである。

けれども更に深く省察したならば、かうしたいたましい犧牲の實物教訓をもつてでなければ、社會と人間を目覺ます効果を與へないといふとは、あまりに悲慘な論理である。本當に目ざめた社會とは、また人生とは出來るだけ犧牲の額と量を少くし、或ひは皆無にして、なほ犧牲が與へた効果と同量の刺激を社會に感ぜしめることでなければならない。一九一四年以後の世界大戰が、たとへばどんな効果を

世界に與へたとして見ても、なほ九、九八〇、〇〇〇人の戰死者と、四五、二五〇、〇〇〇、〇〇〇圓の戰費を賠償し得る何ものかを提供するかは疑問である。

犧牲の日本女性

それなら社會の暗黑面を出來るだけ稀薄にして、最後にその暗黑の影にすらも止めさせぬためには、現代の人間がどうするのが一番必要なことであるか。その暗黑面が取拂はれた刹那は、やがてすべての人類が、犧牲の値を拂はずに棲める時代である。この場合に必要なことは、矢張り第一に社會各階級の自省であり、そしてそれから起る、不正なものに對する十字軍の鬪ひであり、第二に犧牲者になる當事者の自覺そのものの外にはない。

私がかういふことを痛感するものは、長い間の人生從軍の收穫の一つである。それは日本は犧牲をすべてのものに飽かずに要求する最も特殊な道德を持つ國である。それでありながら一向にその犧牲の價値を考へず、またその痛ましい犧牲によつて、何等の體驗をも得ることを知らない國である。ことにこの犧牲の道德は、女性に對して最も苛重な科稅を課して居る、處が不思議なとに當事者であるその女性がまた、その苛重な犧牲の意義を一向に永遠に解しない、いつまでもだまつてその無意義な屈從を敢てして居る。それは歐米の言葉の奉仕ではない。奉仕は奉仕するもの、奉仕されるものに取つて相對性の道德的意義をもつ。が、日本の女性の犧牲は、單に日本特殊の傳說である人身御供に過ぎない。何一つの賠償のない奴隷の屈從に過ぎない。しかし、その、捧げるもの、捧げられるものの無自覺は、自業自得の悲慘を求めるものとしてまた諦められもしやう。それが爲に社會の暗黑相が、いつまでたつて一分も取除けられず、淨められもしない、却つてその深刻を强めて行くことは限りない悲慘事でなければならぬ。

日本女性と奴隷道德

犧牲になるものが、自分の犧牲が、猶ほ客觀的に何等かの效果を齎らすものであることを信じて、せめてもの諦めをそれに寄するならばまだよいとする。たゞ無自覺に、動かすことの出來ない宿命のやうに、その犧牲を敢て享ける人人に至つては、氣の毒とも、無知とも云ひやうがない。かへつてそれをもつて、立派な道德だと信仰するに至つては殆んど評すべき言葉を知らぬ。しかし古代から現代に亘つ

て、最多數の女性の道德心理を充たすものは正しくこの奴隷道德でなければならない。

日本女性の奴隷道德が、今日もなほ昔とあまり姿をかへずに守られて居る事實は、何等かの理由によつて、理知の啓發が鈍らされて居るためである。そして一部は、日本の國家的教育なるものが、その硬化をたすけ、停滯を助長して居る。女性の理知が覺め切らない限りは、自己の地位を正確に主張する觀念の生れやうがない。

三浦環夫人の生活

たとへば三浦環夫人の再渡航に關する、夫人及び夫人一家のそれに對した態度は、確かに現代社會の家庭觀と夫婦觀の內輪を露したものでなければならぬ。第一は環夫人その人の戀愛觀が、其半生を通じていかにあやふやで、遊戯的で、自分の人生と親密な交渉を持たないものであるかである。それは自分の實人生に對して、眞面目な考慮を持たない事である。たとへば夫人がもし愛を夫に感ぜぬならば、この上、夫婦の名を、虛僞によつて繫ぐ罪惡を敢てせずに、なぜ潔く戀愛のまことによつて去就をきめないのであらうか。又た三浦氏とその親や親戚が、女性を何でもかでも、家庭の名の下に、家婦としての責任の下にとぢこめねばならぬは何故か、それは環夫人が世界的名手であらうが、名手でなからうかに關係しない。もし生きる凡ての人間に、人間として取扱はれる權利があるならば、そして人間が、自覺した自己の本領を成長させることが、社會にとつて一番有効な途であるならば、環夫人が家庭から解放されて、世界に放浪することは何等の異議もある筈がない。こんな當然な話が當然とならず、直ぐ社會上の懸案となるやうな可能性のあるところに、日本の時代錯誤の悲劇がある。

ひとり環夫人ばかりではない。濱田榮子夫人であれ、柳原燁子夫人であれ、原阿佐緒夫人であれ、日本のかう云ふやうな現代思想であればこそあんな一代を湧き立たゝした問題にこそなれ、元來がどれもみな決してそれほど複雜した不可解の疑問ではないのである。要はたゞすべてを人間的なるものまでに還元することで解決される筈である。然るに古いものは、そして古いものを固執する人々は、歷史へ還れと云ふ。自然に還れ叫ぶ。歷史を固執するが故に、因襲と傳統を必死の生存條件にする。自然を固執することは、自然に克つことの出來なかつた古代の無知を理想とするものである。それによつて、現代が現代であることと、人間の

理知感情尊重時代であることの一切を抹殺して居るものである。もしそうした無知を心から拭つて、前の某々女性の取つた人生を見たならば、彼等が十重廿重に包圍された無智の傳統の爲に、どれほど無殘な、——そして或はしなくともよかつた無量の努力をしなければならなかつたか、そしてどれほど過大な犠牲をそれが爲に拂はねばならなかつたかが同情されるのであらう。

生の價値の否定

けれども我國民性が、そうした悲慘な犠牲を平氣で當然と見すごすのは、もとより犠牲になるものの力に幾分の責任があることをまぬかれない。それは日本の女性が、兎角正しい自分の人生を知らうと努めない。或は氣まぐれに努めてもそれをどこまでも牽固に護らうとしない。そしてむざむざに傳統と社會に屈從して了ふためである。ところが無條件な奴隷の屈從に馴れた暴君ほど、世の中に強い慘忍性をもつものはない。單に女性だけに止まらない。男性に對しても、同樣に何等かの犠牲を要求して止まなかつた日本人の歴史は、常に犠牲者の死を見るに至つて至上の滿足を感じた。これは封建時代の武士が、その持つ人生を何とも思はずに容易に君主の爲に自滅し得た心理を傳へて居るものであらうが、何にせよ生よりも死を尊ぶ日本人の歴史觀念は、印度の涅槃の思想とともに、現代に於いては、決して賞讃されぬ風習と思想でなければならぬ。人生のすべての責任、すべての道德はたゞ生によつての外に盡すべき途が一つもない。だから唯一に尊ぶべきものは生にあつて決して死ではない。然るに日本の在來の倫理では、いかにす死べきかだけを教へても、いかに生くべきかの教訓にあまりに頁を惜んだ。現代に於て、若い兩性の理性を缺いた自殺の多いことは、いかに此の死の禮讃のきゝ目の、あらたかであることを示し、日本に於ける生の價値の、いかにみじ目なものであるかを語るものでなければならぬ。日常道德を說くよりも、非常道德を尊重する思想の餘波である。

小野さつき孃の死

宮城縣白河において、小學教師小野さつき孃が、其受持生徒の溺死をすくふ爲めに、力が及ばずに溺死した。それは責任感としても、人道の上からも、非難することの出來ないヒロイツクな行動に相違ない。私は決してそれについて

兎角云はうとする興味を持つものではない。たゞ世間の議論が、小野孃の行動を推奬する餘りに、死ぬことの外に、責任感と人道精神の盡しやうのないやうに叫ぶのが私には氣になるのである。私は孃の死を以てかう解釋したい。世間には幾多の除外例があれ、責任感の多少は誰でも有つて居る。その現代社會の旺盛な責任感の現はれを、小野孃がたまたまこゝで最もヒロイツクに示したものであると。ところが世論はそれと反對に解釋する、曰く世間は殆んど責任感を忘れて居る。それを小野孃だけが持ち合せて居たのだと。かう云ふ觀方は果して正しいものであらうか。すればこの結論は、死なないものは責任感を持たないものだと云ふとに歸着する。竹田出雲か誰かが、「先代萩」の政岡をして、「死するを忠義といふことは、いつの世よりの習はしぞ」と、諷さしたのはあの封建時代にあつて、すでに其非人間的な道德の苦しさと缺點を指摘したものであらう。しかも其の傳統が依然として今日に傳へられて居る。私はこれからの女敎師達に、水に溺れた生徒を身を献げて救ふことも勿論立派な責任感として正しいことであるが、それよりは、水に溺れるやうな危險な地位にあらせぬ方がなほ大切であると云ふ事を、小野孃の心事であるとして告げて置きたい。小野孃を墓碑として後世の龜鑑とするよりも、あの責任感の強い小野孃をして、その強い責任感を、自然に生る生命を以て、小さい國民に盡して貰つた方が、より以上の効果を獲なかつたと誰が云はれやう。くり返して云ふ、私は小野孃の行動は、一點の非難のないものだと信ずる。たゞ孃の尊い心事を擧げるよりも、その死に對してのみ力點を置く世論に、重大な差誤があることを思ふのである。

西洋の日本道德觀

私のかうした一寸とした反感は、私をして或る新聞にその意味の小議論のペンを執らした。それを或る外字新聞が紹介して大略かう云ふ批評を加へた。「すべての責任は、唯だ死によつての外償はれないと云ふのが日本の今日までの不文法である。動かせない道德律であつた。然るに東京の重なる或る一新聞紙が小野孃その他の或る事件を批判して、かう云ふ意見を發表したのは確かにレマアカブルな事である云々」

歐米ならば私のやうな考へは、平凡以下の採り上げる價値さへないものであらう。然るに在來日本道德の標準に對して、それがレマアカブルの批判だと見られるのは、日本

道德に對する歐洲人の觀照の動き方を連想して、なるほどとうなづかれるものがあるのである。

何故なら、歐米人がかう云ふ場合に考へる中心がどこにあるかとなら、それは日本人が死を以て責任を盡す價値を云ふのではない。それは歐米にだつて日本以上の責任死が珍らしくない。又た隨分多い。唯だ廣義に見て日本人が、凡ての場合に死の價値を生よりも重んずる。そこに人生の價値に對する批判の違ひがある、と云ふ事。それからこれは小野嬢と全く離れて、日本に於ける一般婦人の地位が、恐ろしくみじめで、無自覺で、奴隷道德に屈從して居る、殆と人生の價値を持たない、こんな風に考へるのが、彼等の書いた物によく見る思想である。

たとへば、日本の婦人を一番廣く世界に傳へたものがフランスのピエル・ロチであり、一番よく日本を愛したものがラフカデオ・ハアンであると云はれる。けれどもそのロチは、同じ東洋であり乍ら、日本の事實を書いたものが有名な外妾生活を捉へた「お菊さん」であるのに、ずつと開けないアジア・トルコでは、トルコの若い婦人達の自覺の惱みを捉へた「幻滅」を出して居る。日本のお菊さんは屈從の生活であり、トルコの「幻滅」は解放の悶えである。レオン・ゲラアドが「お菊さん」を評して、「世界中を廻つてあるくピエル・ロチの、お菊さんに對する批評を聞いたならば、お菊さんはその愛國心からハラキリをしても好い位なものだ。それはロチの爲ではなく、島國日本の名譽の爲にだ」と云つた。一體ロチはあまり日本に敬意を持たなかつたばかりか、特に日本の女性については、可なり忌憚のない記述と描叙を見せて女性の半死の生活を指摘して居る。ハアンもまたあれほど日本舊女性の美點をほめて居ながら、家族制度から來る日本の見合結婚などを極端に罵倒して居た。要するに日本の女性は奴隷道德に平氣に屈從して居ると云ふのである。人間としての、生活を持たないと云ふのである。そして凡ての日本人は、世界中で最も理解し難い、親しめない國民であり、殊に婦人の生活が一番わからないと言ふのである。

これも可なりの日本通であると云はれるプライス・コリエルの「東洋に於ける西洋」は、いろいろな偏見があるに拘はらず、澤山の暗示を含む觀察がある。その中に「日本の生活は日本人にとつては單調でないかも知らぬが、歐米人にとつては單調でたまらない。日本の女性はすなほな家婦である。自分の爲には何一つも費やさない。自由も贅澤も何

も知らない。夫の社交的の歡樂や馳走には何一つあづからない、そう云ふ場合にはいつもゲイシャ・ガアルスが來るのだ」とか何とか書いて居る。

女性と参政權問題

實際わが國が、奉仕の名の下に、女性の犧牲を平氣で要求して居たとは長過ぎるほど長い期間に亘つた。けれども彼等はその長い間の犧牲の爲に、果してどう云ふ人類的歡喜を得たと云ふのか。そう云ふ事を考へて來て、先程かの治警五條第二項かが、漸くの願ひで許された時、彼等少數者の異常の歡びを見ると、ほんとに涙ぐましいいぢらしさに堪へなかつた。溺れる者は藁でも摑む、あれ位の程度の解放に、あれほどの歡喜を感ずることは、いかに彼等が長い間、不合理な社會的、政治的の壓迫に忍んで居たかゞわかる。もう現代のやうな時勢では、議會政治にすらも何ほどの信任が置けよう、その意味で自由平等を男子の手から取戻すための、政權獲得のための女權運動すら、私はあまり多くの興味を持たぬものであるが、それでも何年か前、米國の雜誌「インデペンデント」が「女子参政權運動の正義と希求」を叫んだ四箇題目を忘れることか出來ない。それは、「女性の爲に、男性の爲めに、家族のために、國家の爲に」といふのである。「女性は男性と違つた性質の心を持つて居る。男性は少くとも論理に於いて、そして度々實行に於いて理性の生物であるが、女性は直覺の生物である。男性は結論に向つて進み、女性はそれを飛躍する。女性の直覺が如何に時によつて、男性の理性を飛越し、しかも確實な結論を摑むかを見るのは驚くに値ひする。それは何にせよ、凡ての有用な事業を、一人でするよりも、兩性が一つになつて營む効利の多い事は云ふまでもない。が、最後の、最大のあらゆる理由は、單に男子だけに選擧權を與へる部分的参政は、デモクラシイの反拒である。デモクラシイとは民衆の執權である、國民の半分が参政權から除外されて居る場合、それが何のデモクラシイであるか、性によつて政治的平等を區別するところにデモクラシイは無い云々」

こんな當然極まつた權利さへも、日本ではまだ拒まれて居るのである。女子参政權の一歩前の普選さへも沮まれて居るのである。一體が許すも許さぬも、國民を除いてどこに國家と云ふものがあらう。さらば國家が國民の是とする要求を拒む權能はどこにもない。けれども我が日本の女性は、政治の權力を獲る前に、先づ獲なければならない準備

が澤山ある。それは不合理な家族制度からの解放であり、誤まつた國家的精神から、世界愛へ向つての解放であり、因襲と下卑た好奇心と、空虚な社會的偏見からの解放でなければならぬ。そしてそのすべてを擧げて、その目的を達成させるものは、唯一彼等が自己に目ざめて、無意味な屈從と犠牲の虚榮生活をすて、勇敢に合理性の命令に屈從することである。合理性は我現代女性を救ふアルハであり、またオメガである。そしてその本能と知識の一切は深刻な合理性に統一されて、殘されるものは、合理性以外のあらゆる不合理に對する反抗であり、叛逆であり、爭鬪であるべきである。

足を創る政治

先づ考ふべきことは、人間が今日まで進歩したことは、最も多く人間の叛逆精神によつたと云ふ事である。もし人間が自然に創造されたとて、創造されたまゝの自然に屈從して居たならば、精々進歩しても、どこかの洞窟の酋長ぐらゐに過ぎないであう、然るに人間は絶えず疑ひ、そうして知り、其の創造者たる自然に反逆し、そしてその自然を立派に征伏した。神は人間を創つたと云ふ。けれども神を創つたのは寧ろ人間ではないか。かうして嘗て創造されたものは、今や自らが創造主となつた。彼等はかくてあらゆる世界の爲に創られたものを採り上げて、悉く自分の目的の爲に利用することとなつた。かくて人間は世界の王である。萬衆の大陽である。レイ・ランケスタア教授が「人間の王國」を著はした。その第一章の「むほん好きな自然の子」とは、何といふ人を惹き付ける題名であらう。合理性とは何か。人間が世界の材料を採り上げてこれを利用する場合に、その價値を正しく省察し、判斷する誤まらぬ知識の機能に外ではない。けれども合理性の機能は決してこゝに止まらない。何故なら、合理性は、如何なるものが人間の生活に、多大な能率を持つかを知るに止まらず、人生はそれが進歩するが爲に、絶えずその生產を變へなければならぬ事を忘れてはならぬ。そしてその流轉して行く時代時代の人生に、一番能率の高い生產を與へねばならぬ約束がある。もし合理性が時代と反射せずに、少しでも停滯して居たならば、その間だけ社會の進歩機關はすべて停止する。だから、それが爲には時代の歩みと共に、行爲を統治する所の法律も變る、新らしい環境と、新らしい必要へひき合せる爲には、勿論道德もまた變らねばならぬ。本當の生き甲斐ある人生

とは　かうした社會血管の流通を、絶えず清淨にして行く事にならなければならぬ。これが自然の成功を、一歩一歩より高く、より重要にして行く本當の人生の營みである。ところが人間と云ふものは、兎角現在の地位に停つて安心したがる。それだけ保守的で進歩を危ぶみ勝ちなものである。時代がずつと先に進んで居るに拘はらず、自分の若い頃の思想なり、制度なりをもつて、平氣でその新時代にあてはめやうとする危險がある。かう云ふ人々は、靴は人間の足の大きさによつて作るべきものであることを知らない、たゞ或る型を先に一定して置いて、足の方が大きければ足の方を削らうとする流儀である。日本の政治家には、いろいろな關係から、足を削る方の哲學の所有者がその大部分を占めて居る。人生を幸福にする目的とせずに、規範の中に人生を盛る機關だと見る。教育も、軍制も、政治も凡て劃一を主として、箇人といふものを視野に置かない。民衆すらもこの窮屈な埒を出るとは容易でない。ましてや男性の附屬として眺められて居る女性が、生存の權利を充分に認めて居られないのは當然な話である。けれども凡てのものの力の中で、壓迫されたものの跳ね返る反動力ほど強烈なものはない。本當に人間心理を尊重するものは、始めから用心してから云ふ危險を冒さない。

日本人の模倣心理

もう一度コリエルの「東洋に於ける西洋」を引くことをゆるして貰ふ。「彼等日本人は彼等の宗教を、孔子の道徳を、藝術を、或はアルハベットさへも、要するに彼等の持つ一切をインド、支那、朝鮮から採つた。彼等は彼等を採用したが、さてそれを改良することをしない。彼等は其國固有の瀬戸物を、繪畫を、彫刻を、文學を、倫理を、宗教を持たない、持つたものは唯だ前の國々から模倣したものに過ぎない。彼等の過去は東洋の模寫であり、彼等の現在は西洋の模寫である。彼等は我等の水車、機械、武器、器具を模倣した。模倣する外に能のない國民は、到底他國民の背後に止まる外はないのである云々」

隨分思ひ切つた御挨拶であるが、幾分の理窟はあるのだから苦情も云へない。近い頃ドイツの或る哲學者が日本の模倣心理を評して、日本人の模倣は、ものの原理をつかまずに、形骸だけを眞似するに過ぎない。これが淺薄になる譯だと云つて居たが、こゝにも道理はある。我國の政府は、外來思想といふものを目の敵にして征伐をして居る。しか

し一方で、留學生を歐洲に送り出す數の多さは、少くとも五大國の一つとして、日本のやうな國がどこにあるだらうか。現に今年などは文部省では、留學生の數でレコオドを作ると自慢して居るといふ。から云ふ多數の人々が學んで來るものは、外來思想でなくて何んであらう。それはそれとして、軍人の强いことを外にして、すべての學術の蘊奧は、すべて歐洲に仰がねばならぬ日本は、果して五大國の一つとして誇るべきものであらうか。敎授が博士になる場合には、大抵渡歐することになつて居る。さらば日本の博士の知識の原素をつくるものは歐洲の知識でなければならぬ。男性がそうとすれば、最近若い女性達が、經濟の許すかぎり、爭つて渡米し、渡歐することは止むを得ぬであらう。けれども其渡歐から歸朝した女性達が、單に或る科學や、或る國語を學び得た肩書きだけを誇りとするだけでは物足りない。私は我國の女性が考ふべきことは、もつと深い主觀的なところに在りはしないかと思ふ。その學術や知識の探究も、それを別なあるものの基調とすることに於いて存在の理由が始めてあるのではないかと思ふ。そしてそれは自己と自分の同性の、本當の創造の生活の途をきり開くことにあるかと思ふ。

反逆する意志

私はその視點から、現代の日本女性に最も必要なものは、反逆する意志と、獨立する心靈そのものであると思ふ。反逆する意志とは何か。明かな叡知と合理性の上から、人類としての日本女性の生長を妨げる一切の非合理を反撥し、それに對して勇敢な挑戰を敢てする決意である。獨立する心靈とは何か。すべての物質の上から、心靈の上から、過去から來たものの一切をはねのけて、自己の創造の爲に自由な生活の營みをすることである。それは皆な、最も虐たげられた日本の女性、その爲に最も遲くまで人間らしい生活を奪はれて居た日本の女性同胞の爲に、解放の運動であり、廣く世界女性と握手すべき大規模な啓蒙運動の着手でもある。日本の女性はかうした獨創的運動を試みることによつて、始めて本當の奉仕であり、意味ある犧牲であることが出來る。

イギリスの二女性

イギリスの社會發達史を考へるものは、英國婦人啓蒙運動の第一期を飾つた、そして殆んど同時に現はれた二人の

女性の存在を忘れることが出來ないであらう。もし一人を反逆の意志の代表者といはゞ、他の一人を理知的革命の主唱とも云はう。其一人はカロリン・ノルトン夫人であり、他の一人はハリエット・マルチノオ孃である。ノルトン夫人は有名な文士セリダンの娘で、その美貌と才能を以てヴヰクトリア朝の早い頃に有名であつた三人姉妹のその一人である。ノルトン夫人は詩人としても、作家としても有名であつたが、最も有名になつたのは、夫のノルトンとの離婚事件からである。一八三六年に夫人は不和になつて夫の家を去つたが、夫のノルトンは夫人の盛名と財産を利用する積りで容易に離縁を許さない。とうとう二十七年後の一八五三年に、事件が裁判所へ持出されることになつた。時に夫が五十二で夫人は四十七歳、果は「ロンドン・タイムス」へ、夫妻が互に投書をしてその曲直を爭ふこととなつた。夫が妻を反逆者と呼べば、妻は夫を暴君だと罵る。それは人間證券として、七十年後の今日まで猶は重要な記錄を持つものであるが、殊に夫人の堂々なる抗辯が最も世間の注意を惹いた。彼女は自分は作家である資格を以て、公衆と後世の爲に辯解する責任があると云ふ。單に彼女自身と、その子供の爲に戰ふのではない。一般世間の妻たり、母たるものを代表しての公爭であると叫ぶ。夫人の友達は、女らしくない裁判沙汰や、世間的の論戰は女性として止したが好いと勸めた、が夫人は斷じて聞入れなかつた。そして遂に、一八五七年に、婚姻法改正の動機を作つて、立派な勝利をとげた。殊に彼女が舊夫と戰つたのは、情的關係でなく、重に經濟上の權利を爭つたので、この勝訴によつて、これから以後の妻は、夫の死後その遺産を繼ぐ權利あること、又た離婚した妻が、自分の收入を夫に奪はれずに自活する權利を獲た。これが女性の權利が強くならうとする當時にあつて、莫大な問題を惹き起したことは怪しむに足りない。

もう一人のマルチノオ孃の方は、彼の女の驚くべく多方面な知識と、神學、化學、哲學、經濟、政治、植民一切に亘る著作の出版によつて、十九世紀の英國公衆教育に偉大な記錄を作つたことにある。しかも彼女は病弱で不自由な聾者でありながら、男性が學び得る一切の學術を學びつくして、あらゆる方面の事業に手を出した。小供と職工と工女の教師となり、殊にその時代の婦人界の知識の進步に著るしい刺激を與へた。

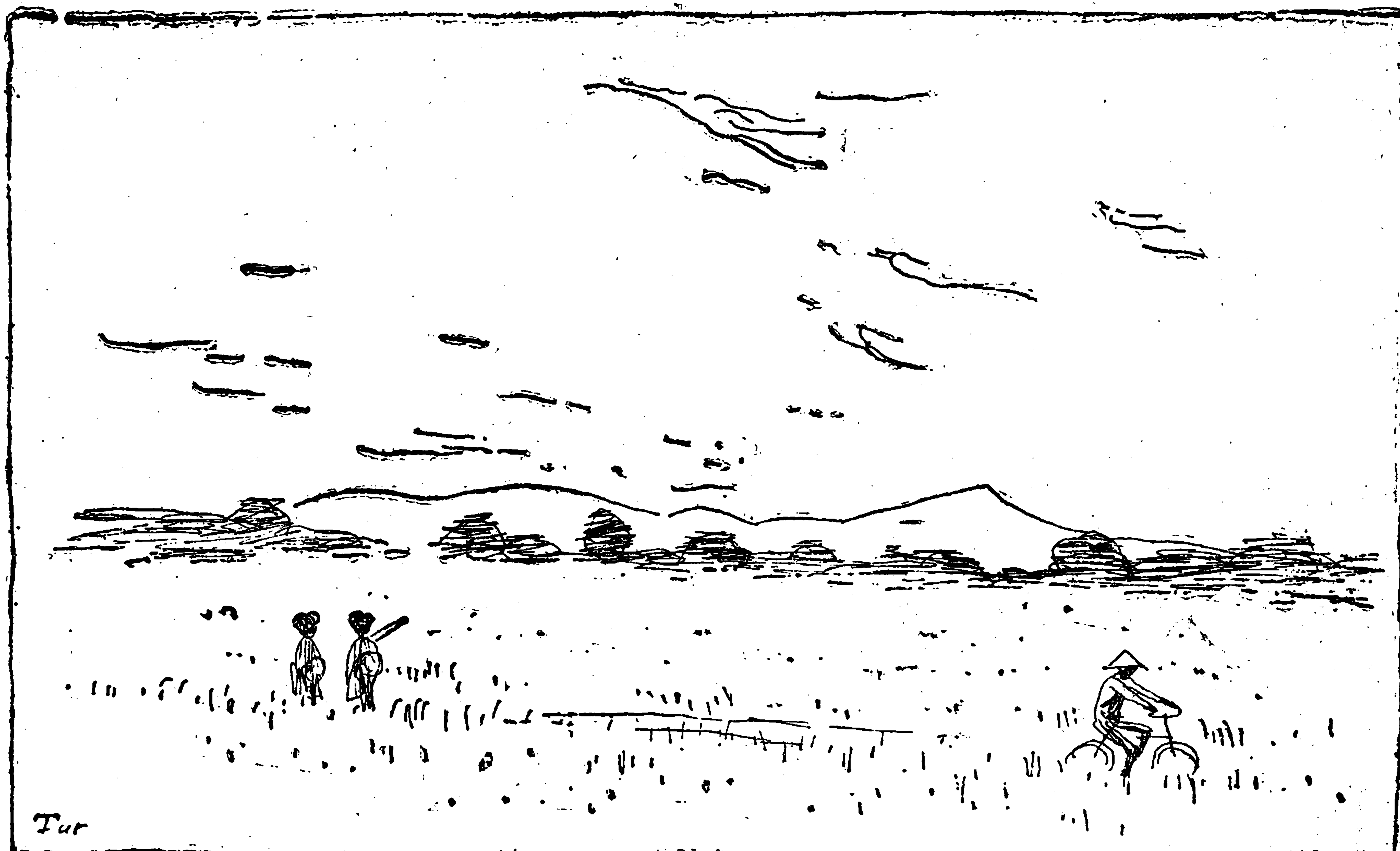
現代に必要な女性

けれども現代の我日本では、或は必ずしもハリエット・マルチノオを必要としないかも知れない。たゞノルトン夫人のやうな、女性の地位と權威を正しく理解する女性が、そして正義の戰鬪にうまない女性が、その同性の爲に立つて時代と社會の合理的存在の爲に奮鬪することが何よりの必要である。

日本の近代にも、そうした新らしい女性の創造の爲に、傳統の反逆を叫んで起つた若い女性達が、いくらか無いではなかつた。が、何分妥協性を含んだ日本の空氣は、不思議にそうした人々の意氣を、早い頃に、すり減らして了ふ化學的作用を持つて居るかに見える。また日本の國家教育が、どちらかと云へば、多分に因襲的惰氣を含んで居るために、あまり有効な合理性を育てる温床とはなり得ない。けれども純眞に覺めた合理性は、かへつてそうした温床の中からこそ、反撥的に醗酵し得るものでないことを誰が斷言し得やう。ロシヤの虚無黨は、無産階級から生れずに却つてブルジョアの巣である貴族階級から生れたのであつた。

次に日本の女性團隊運動の將來については各種の觀やうがある。けれども現代は英雄崇拜の夢が破れた。統率者の人格によつて、團隊の消長がどうなると云ふやうな、愛國婦人會のやうなものは恐らく最期の殘影であらう。社會、階級、經濟、男性、政治、そうしたものの目的壓迫が激しければ激しいほど、同志の女性によつて糾合された、種々な團結がますます強固に、數多く作り出されるであらう。そしてもし合理性の目ざめによつての結合がそう手つとり早く望み得られぬならば、せめてはそうした非常手段によつての結合すらも、猶ほ望むべき最期の一つであらう。

それにしても、私は現代有閑階級の女性達の、その奉仕する種々な偶像の、いかに無内容なものであり、またいかに容易にうつり氣に無數の偶像の前に禮讃するかの無節操と柔順とに驚かざるを得ない、また彼等の創造生活の最も手近かにある筈の、衣食住の生活のその一つすらも、まだ時勢に適應したわづかの創造でもが出來て居ないことを思ふて、彼等の人類に對する純眞な執意の、いかに稀薄であるかを感得せざるを得ない。



夕　　石井鶴三

戀愛と自由

——戀愛論の續稿——

厨川白村

人間といふ者は賢いやうでまた愚なものだ。天地開闢以來林檎が地に落ちると云ふ事は誰しも見て居りながら、ニュウトンが出るまでは萬有引力といふ事にも氣づかず、況んや相對性原理といふ事も知らなかつた。地球が動いてゐると云つたばかりで酷い目に遇はされた時代さへあつたのだ。しかし、まあ夫れはよしとして、古來幾千年の間、東西ともに、婦人といふ者が人格ある人間であると云ふ此わかり切つた事實に氣附かなかつたのは、更に一層驚くべき事であらう。すべての近代思想の淵源のやうに見なされてゐるルツソオですら、さうは見て居なかつたのだから驚いた者だ。ウォルストンクラフト女史の『女權擁護論』から數へて見ても、まだ僅に百年あまりの事に過ぎない。

婦人は奴隷ではなくて自由の人格だ。この解放論が一般に認められると、その當然の歸結として戀愛の自由といふ事が考へられる。誰しも云ふ通り、戀愛は自由である。自由を奪はれたる精神的奴隷に戀愛はあり得ない。相手を選擇するの自由が戀愛の第一要件であるからだ。他の強制によつて、或は何等かの必要に迫られて、したくもない戀をする人間はないのだから、戀愛と強制とは根本的に一致し得ない思想だ。自由のない所に戀愛は無い。さうも云はれる。

即ち私が前項に述べた一夫一婦論から言ふと、自由、人格、戀愛、貞操、さう云ふ者の間には、引き離す事の出來ない關係が儼として存在する。生活革新の理想としての戀愛が、男女間の性的道徳の根本となり基礎となるのも亦是あるが爲だ。

西洋人の云ふ自由戀愛と云ふ言葉は、「馬から落馬」といふのと同じ愚な言葉である。自由がなければ戀愛は無いのだか

ら馬からでなければ落馬はしないのと同じだ。唯この自由戀愛と云ふ言葉を、普通の慣用法に從つて、放縱不羈の戀愛關係と解するならば、私が前節の所論に述べた通り、それは實は自由性交と云ふ事になるのだ。精神的な人格的な戀愛に絕對の自由を與へるならば、結局は一人格たる男子と一人格たる婦人との一對が出來るので、最後は一夫一婦の原則に落ち着く外は無いのである。戀愛その者の本質が然らしめるのだ。だから自由戀愛と云ふ言葉は、何も道學先生が戰慄したり新聞記者が目を白黑したりする程の恐ろしい言葉でも何でもなく、實は極めて愚な詰らない言葉に過ぎないのである。

奴隸婦人が其久しく失はれた自由を奪還するとき、得る所の最も貴き者は、戀愛の自由であらねばならぬ。

事新しく言ふ迄もなく、自制のない自由と云ふ者は有得ない。自由は放埒でもなく我儘でもないからだ。だから若し戀愛の自由の美名を借りて放埒の亂行を敢てする者あらば、夫れは社會奉仕の美名を借りて私腹を肥す詐欺泥棒と同一の者である。私は玆に至つて戀愛と自制との關係に就て、簡單に述べる必要を感じた。

さきに私は『近代の戀愛觀』の文中に、眞の戀愛は人生の最も貴き理想なるが故に、「難行苦行だ」とも云ひ、また「修道の高士にも劣るまじき淨い純な心を持つた者でなければ本當の戀は出來ない」と云ふ事を書いて置いた。即ち、至高の藝術には必ず奔放の生命力に加へられたる制壓がある。眞の自由には必ず節制があらねばならぬ。人生に於ける最大の創造藝術であると共に、また人格の自由を根本とせる戀愛には、强い節制や制御が、必須條件となると云ふ意味を云つて置いたのだ。この節制と制御とが無いときに、戀愛は遂に破滅するか、然らずんば荒淫となり邪淫となり亂淫となつて、人格的生活はその根柢からして破壞し去られるであらう。戀愛を性的道德の基礎として見るとき、この自制といふ事が何よりも先づ重要な問題となる。

最近に英米でこの性的問題に就て最も廣く讀まれ世の視聽をそばだててゐる書物は、ストープス女史の『結婚戀愛』と、及び、之に對する世の非難と質問に答ふべく、女史が再び筆を執つて著した『賢明なる親の道』とである。二冊とも何が書いてあるかと云へば、要するに、男女（即ち夫婦間）の戀愛を完成し永續し改新して行く爲の產兒制限の必要と方法を論じたのである。肉的にも靈的にも此自制節慾を加へなければ戀愛は破壞せられると云ふ事を、其制限の實行方法をまで

詳細に論じたのである。世の先覺者は既に斯く戀愛の爲には産兒制限の必要をまでも力說してゐるのだ。ストープス女史は科學者でありながら、嚢に櫻井錠二博士と合著の日本の能樂に關する書を著はし、詩や劇の方面の創作も多い人だ。右の二卷の書も既に日本に早くから輸入せられ、最近また第三卷目の續稿『輝ける母性』が舶載せられた。

私は産兒制限の問題に就て、いま可否を云ふのではない。唯一對の男女間に於ける自制なき節慾なき生活が、動もすれば産兒過多となり、徒らに質的ならざる量的の、數のみ誇る「子だから」思想となつて、夫れが遂には夫婦間の戀愛を冷却せしめ、戀愛の永續性を阻止する一原因たり得る事だけを指摘したいと思ふ。

動物的な性慾が淨化せられ純化せられて人格的戀愛となるのは、何によつてであるか。靈肉二元の生活の不調和に惱む人間が、性的本能（即ち性慾）と性的理想（即ち戀愛）との間に合一點を見出し、兩者の矛盾衝突なきを得しむるのは、何によつてであるか。そこに即ち節慾自制の必要を生ずる。節慾とは、かの昔の宗教生活に於けるが如く、極度に肉を虐げる事が靈を向上せしむる所以なりと考へた禁慾主義ではない、これを食慾の場合に譬ふれば、節慾は保健の爲に必要な節食に比すべきである。決して絕對の斷食ではない。斷食は禁慾であつて、生命を保つ道でもなく保健の道でもない。またかの荒淫亂行に至つては、まさに之を過食の害に比すべきであらう。

人間の飽くなき慾望に向つて抑壓が加へられるとき、そこに淨化作用が行はれるのだと、フロイド一派の學徒は云ふ。いかにも人生は自己の生命力の放恣な無制限な發現であつてはならない。それは生活の破壊に終るからだ。その生命力に加へられたる抑壓作用あるが故に、慾望は淨化せられ純化せられて、藝術となり宗教となり智識となりまた人間愛ともなるのである。だから人間生活の偉大さと崇高さは、この抑壓作用の結果だと云つても過言ではないのだ。唯この抑壓が自己以外の人や物や法則や因習によつて加へられる場合に、夫れは壓制となり彈制となる。故に抑壓を加ふる者は、また自己の生命力それ自らであらねばならない。即ち自分が自分に加ふる抑壓あつて、そこに、はじめて眞の自由があり、戀愛がある。これを宗教の場合に譬ふれば、小我を克服しなければ大我には到られない、三昧法悅の心境には達せられないのだ。戀愛と宗教との心境の相似に就ては嘗て私は、『近代の戀愛觀』に於ても之に言及して置いた。

わたくしは人生觀上に於て、すべての禁慾主義を非なりとする。何となれば、人間の本性を征服しようとする時、卽ち禁慾生活によつて、肉體の純潔だけは保たれ、童貞の淨さをも持つであらう。しかも、絶えず肉の誘惑に煩はされ、本然の慾求に惱まされてゐる限り、どうして精神の純潔を望む事が出來よう。そして其結果は人格の萎縮となり破壞とならざるを得ないではないか。宗敎家のノオスコオトですら、『禁慾生活は人類進化の或る道程に於ては、確に價値ある者であつた。然しながらその精神上の効果に至つては、戀愛に及ばざる事遠きものであつた』（『基督敎と性的問題』八七頁）と云つてゐる。

然らば如何にしてか、至上の道德、至上の理想としての戀愛を完成すべき。それは童貞でもなく、禁慾でもなく、また固より自由性交を意味する「自由戀愛」でもない。肉體の淸淨無垢といふ事ではなくて、性的行爲に關する精神の無垢と云ふ事である。換言すれば性的關係に就て靈肉の合致調和であらねばならぬ。女作家メイ・シンクレイアの言葉を借りて言へば、戀愛は、靈が肉を救ひ、肉が靈を救ふ爲の施設である。それが眞の戀愛であつて、それ以外のものは戀愛ではない。そしてかくの如き戀愛を以て、私は性的道德の理想の極致なりとするのである。

梅雨ごろから腸を患ひて、七八月の炎暑を大學病院の一室に呻吟してゐる今の身では、とても筆を執る元氣も何も出ない。さきに私の『戀愛觀』に對して、惡意を以て反對した某々暴愚輩に對して、私が最も手きびしく痛擊を加へてやりたいと思つたのはこの「戀愛と自由」との問題に關してであるが、今わたくしの病體が夫れを許さないのは何よりの遺憾である。

市松模樣の流行を何と觀る

(一) 市松模樣の讚美と非難と

柳澤健

○

市松模樣をそれ自體として見ればなかなかいい模樣だと言つて差支へなからうと思ひます。尠くとも私一個の趣味から言へば、氣に入つた模樣です。

一體に日本の着物の模樣には、遠見の效果を閑却したものが頗る多いやうに思はれます。これは、恐らく從來の日本の社會生活の生んだ現象の一つとも言つてもよいもので、即ち、婦人の生活が全然狹隘な『家屋』のなかに局限せられてゐて、廣々した『街路』のうへまでそれが延びるのを許されなかつた過去數百年の長い歴史の生むだ結果に他ならないと思はれるのであります。詳しく言ふならば、狹い家屋のなかで、半疊か一疊の疊しか隔てないで親しくこれを眺めるときは、日本の着物の模樣はその保つてゐる美の殆んど全部を現はすと言つてもいいが、五間なり十間なり隔つた上で眺めることの多い街路の上に於ては、その模樣は徒らに晦澁混雜の感じを惹き起すに過ぎないといふことは、即ち、從來日本の婦人が家屋中心、座敷中心の生活を徹底的に送つて來たことの最も雄辯なる擧證となる譯なのです。言はゞ床の間の懸物、盆栽、生花若しくは屛風、唐紙等を考案し選擇すると全然同じ精神・趣味から婦人の着物の模樣も考案され選擇されたものと言へるわけです。(現に、裾模樣なぞはそのまゝに懸物であり生花であり屛風の繪ではありませんか!)

かうした家屋中心、座敷中心の模様が社會生活の變移と何等の交渉もなく連綿として今以て大道を横行して憚からぬのが現狀です。然るにこの市松模様は、前記したやうな日本の一般の着物の衣裳のなかでは、珍らしくも『街路』のうへでその保つてゐる美をば現はし得る模様の一つです。座敷中心の模様のみ多い着物のなかでは、異端をもつて目してもいいほどに遠見の美を持つたものです。私自身が自己一箇の趣味としてもかうした簡素ながらに艶やかな感じ――派出でありながらに粋であると言つた感じ――を持つ模様を好むわけですが、このほかに、この市松模様を特に舉げたいといふ理由は、實にこの爲めに他なりません。

○

然しながら私はこれだけの理由をもつて市松模様の『流行』を喜ばしいとする者ではありません。むしろその流行の意味無きことを宣明したいとさへ思ふ者なのです。それは、市松模様が『流行』するにしては未だ餘りに我國の婦人の生活が家屋を、座敷を離れてゐない、といふ考から來てゐるわけです。もつと明確にもつと露骨に言ふのを許されるならば、現在の大部分の日本婦人の顏（それはおそろしく家屋中心、座敷中心にできてゐるものであることを考へて下さい）といふものが、この派出で明るい『街路』のうへの模様と、ピッタリ合つてゐない、といふ考から來てゐるわけなのです。從つて、ある婦人の間にはこれがうまく調和しやうがこれを以て一般の婦人にまで推し擴めてその『流行』を來させるといふことは、頗る意味のないことであると思はれるのです。否、單に意味のないことであるといふ許でなく、一歩進んで醜いことであるとまで言ひたいのです。

私はこゝで詳しく日本婦人の顏のことを言はうとは思ひません。然し、從來日本婦人の生活があらゆる汎圍に於て（即ち、髮かざり、着物の模様、立居ふるまひ等の外部の制約から所謂婦德と稱ばれてゐる倫理觀念にいたるまで）ことく〴〵家屋（抽象的に言へば家庭）を中心とした事實から、容易に推定能きるやうに、その容貌の靜態、動態もまた均しく家屋中心に形作られてゐたことは當然過ぎるほど當然であると言ふことができやうと思ひます。彼女の容貌に現はれる表情は、決して外國人が言ふが如く、人形のやうに『無表情』ではありません。かなりに微細な表情の動きがそこにあるわけです。然しながら、それをよく讀むためには、（彼女の着物の模様の美を味ふのと同じく）やはり半疊か一疊ほどの疊の距離しか隔つて居らぬ場所に於てでなければなりません。街上に於ける觀察だけでは（や

はりまたその着物の模樣と同じく）一向にその微細な表情が判らず、たゞたゞ人形のやうな固い『無表情』をそこに見るだけに止ります。すくなくもこれは、十人の日本婦人のうちの八人か九人については間違ひなく言へることなのです。

かうした街路に適はしくない容貌とその表情とを持つてゐる日本婦人が、着物の模樣だけは、『街路』に適はしいものを平然として用ゐやうとするのが、輓近の市松摸樣の『流行』であるとするならば、これを無意味なりとし醜きものなりとして非難することはこれ當然過ぎるほど當然なことではないでせうか、『局部がどんなに美しくともそれで傑作とはならない、何よりも先づ調和！何よりも先づ統一！』——かうした言葉を吐いてゐるフローベールの見解はこゝにも當てはめることが能きるわけではないでせうか？

○

私は『流行』の名に囚はれて、そこにつゝまれてゐる一切の新現象をことごとく非難し去らうとする世上一部の頑固な人たちの意見を悦ぶものでもありませんし、また反對に『流行』を目して抵抗し難き大勢なるか、または常に清新の力に充ちたる新傾向なるかの如くに解して、ことごとくそれに同ぜんとする新らし好きの人々の意見をも悦ぶものではありません。要するに私は、その內容の如何を吟味し檢討することによつてはじめて或は非難し或は同意せんとする者に他なりません。『流行』の名は一つでも、その內容は實に無數の種類、無數の段階を持つてゐるのですから、これ等を常に等しき態度で迎へるといふことは、畢竟その人の無批判、無感覺、無神經、を遺憾なく現はすに他ならないことと思はれるのであります。

『流行』の內容の持つ無數の種類、無數の段階を一々說き行かうとすることは無論限りある紙面では許されないことですが、その夥しい種類、段階は大體に於て二つに分けて考へて見ることが能きやうかと思ひます。

その二つといふのは、氣紛れの『流行』と、氣紛れでない『流行』とです。

氣紛れの『流行』といふのは、何等の前提となるべき（社會的の）事實もなく潛伏せるある（社會的の）力の働もなくて、——言はゞ全く前後の連鎖なく孤立して不意に起つて來る『流行』のことです。これに反して他方の『流行』は、何等かの系脈を當時の社會生活の底にちやんと結びつけて置くものです、卽ちその『流行』の原動力が當時の時弊とか時代相とかと密接な關係を持つてゐるものなのです。

この後者の『流行』こそは、所謂抵抗し難き大勢とも言ふことが能きるし、また、清新の力に充ちた新傾向新運動

とも言へるわけです。社會的政治的の革命といふやうな大變革もまた實にこの種の『流行』をもつて目し得べきものであらうと思ひます。然し、單にかうした歴史的な大變革の上にとゞまらず、單純な着物の柄や色合や形やの上にもこの種の『流行』は明かに認め得るのは言ふ迄もありません。例へば、私が一昨年から昨年にかけて巴里にゐました當時にそこの婦人の着物の『流行』は何から何まで黑づくめと言つてもよいほどでしたが、これなぞは、あの慘膽たる大戰のあとの悲みに充ちた巴里の婦人のなべての心地を最も強く語つてゐる現象のやうに感じられたわけです。また例へば、最近日本に於ける子供服の『流行』なども、一面社會一般が子供に對して充分反省的なる愛を持ち來つたことを明かにすると同時に、また他面に於て日本が過般の大戰を前後として歐米各國の社會生活の影響を一層濃厚に受けるに到つたことの證據ともなるわけです、何れにしても、そこには明白に時代の要求とも稱すべきものが現はれてゐると思ひます。

所が、この市松模樣の『流行』は？　私は、これには、到底右の例なぞに於て見られる如き時代の要求とも稱すべきある種の力を感じることが能きません。そこには、現代の生活を意味し暗示するものが些かもありません。私の言ふ氣紛れの『流行』といふのは、實にこの種の流行を指してゐるわけなのです。結局市松模樣の『流行』は、かの安來節の『流行』と何等の差異のないものと、私は見て居ります。

氣紛れの『流行』のために、徒らに自分の精力を費やしたり資財を費やしたりすることは、その人の痴愚を示す許りではなく、かゝる『流行』を來させてゐる社會それ自體の恥辱ともなることを私たちは絶えず考へて行きたいと思ひます。そして、かゝる浪費を節約することによつて他日の眞實な『流行』のための準備を慮つて行きたいと思ふのであります。

——八・一〇——

(二) 流行は反時代趣味

織田一磨

流行といふものを普及させると軍隊のやうになる、個人といふものは認められずにあらゆるものが一つのものに統

一される、市松模樣の流行を徹底させると都市は一人の衣服裝身具だけみれば全般を見たも同じことになる。其處には個性といふものが無い、自由といふものはない、そんなものの存在は認めないのが流行の本質だからである、衣服も市松、帶も市松、傘も市松、髮に挿すピン迄市松、下駄の鼻緒も市松、甚だしいのになると人間だか市松模樣だかわからないものが歩いてゐる、この有樣を充分に徹底させたら東京市何百萬の人間も男女二人で代表すれば他はこれと同じものだと言へば解ることになる、一人の兵士をみれば日本の軍人の服飾全般を見ることになるのと同じことだ、個人の好みとか調和とかいふものは更に認められないのだ、要は統一的精神にあつて專制的表現とみて可成だ、警官とか鐵道の使用人とか電車の運轉手のようになる、服裝のために中身の特殊性は消えて無くなる、服飾が歩行したりするとなると人間といふものは土製の人形と何等違ふ點はない、流行は元來その性質上裝飾的の意味は始めから無いものだ。調和とかいふ美點もないのだ、何故ならばそれを猫も杓子も身に着けるからだ、さうして普及された結果は特長も缺點もなくなつて刺戟性もなくなる。面白くもなくつまらなくもなく平凡に終つて了ふ、それが流行の性質だ、藤色が流行する、頭の先から尾の端まで藤色になると世界は藤色に包まれて、つまり藤色といふものが無くなるのと同じことになる。一方に黄色があると藤色も在る事が明瞭になるが黄色がないと藤色もなくなる。相對的にならないと一切が無いといふ事になる、市松ばかりになるとつまり市松の面白い所は失はれて、市松は無いも同じ事になつて來る。

私はこうした意味で流行を認めるといふのならば肯くことが出來る。でも流行は人を平凡にするもので、個性を沒して從はねばならないものだ。そのかはり軍隊をみるように統一された所に美が出るかも知れない、徹底しなければそれも表れないが、充分に流行に支配されると一種の美觀が出來る。頭の先から足の先迄萬人一樣な色と線とになればそれは面白い、揚羽の蝶は何疋居ても同じ色と同じ模樣と形をしてゐる。それ等が一樣に運動でもすれば美觀だらうと思ふ、團體運動でなければならない、一列になつて廻れ右をでもやつて行進したならば市松の模樣が曠原に活躍するに違ひあるまい。それは一種の壯觀に違ひない、でもそれは人間でもデクの坊でもいゝので教養も何もいらない、こんな統一的觀念に現代人は支配されてはならぬ筈だと私は思つてゐる、服飾は、各人の肉體を土臺にして考察され可きもので斯くてこそ始めて服飾の裝飾的意味も藝術的價値も光り出すのである。

現今の流行は呉服店の術中に沒入するので、何等個人の權威は認めてゐない、只賣れるとそれで呉服店の目的は達

せられるのだ、然し多くの人々の中には自分といふものをまる切知らぬのん氣な人も澤山居る、こうしたお目出度い人々は水草を追つて移る群と同じに、流行から流行と他人の支配下に喜んで參じる人々だ。個性の無い死んだ人間と同じものだ、自分の世界を全くもたないのだから始末がいい、それと同じに他人を無暗に模倣する人も同じものだ、やはり人の前に立つて創造の路に進み得ない弱蟲なのだ、世間には弱蟲が澤山居る、自己の權威も何も捨て去つて平然と白日のもとを散歩してゐる、あれでも生活してゐるつもりだから笑はずに居られない。

昔元祿の時代に市松といふ町人が自分の頭髮を剃つて黑い所と白い所と四角な模様をこしらへた、これが今日の市松模様の創始であるとかいふ說もある、その邊の史實はあんまりよく知らはいが、もし市松なる町人が創作した模様だとすれば、この人は立派な圖案家とみることが出來る、簡單で印象の明かな市松は非常に近代的な感じのする圖案であると言へよう、でも市松以外の人、殊に今日の人が流行だからと言つて一様にこの圖案を使ふのは明かに模倣でなくて何であらうか、婦人は男性よりも感覺がデリゲートである可き筈なのに、流行に對しては自己の風姿なんぞは一向問題とせずに、世間に盲目的に迎合してゐる、多くの内には市松の着物を着ただけに頗る平たくなつてみられたり、まるでお話にならぬ可笑しい風になつて得意でゐる人も電車なんぞで見受ける、頭髮も七分三分にしたり、耳かくしに結んだり髮だけ歐風化して衣服は一向新しくもない元祿時代を着て得意になつてゐるのは考へると變なものである。

洋服の流行も如何なものか型も駄目なのが多いが、顏が問題にならないのが多い、婦人の洋服は顏と姿と步行する有様とがよく一致しなければ美觀はなくむしろ、安物でも和服の方が見た感じがいゝ、洋服婦人に斷髮の人が多いがこれも感心するのは尠ない、室にゐる時は洋裝で奈良漬を喰べてもいゝが、戶外に出たら立派なスタイルになつてもらひたい、一體現在の生活位變な不調和な二重生活時代は他にあるまい、親達は和服で前掛姿、子供は洋服着といふのが珍らしくもなく、さらに逢ふ、私はこうした悲しい親子をみるたびに自分だけは便宜といふことに安心を求めずに調和した生活がしたいと常から希つてゐる、そのくせまだ實現し得られずに惱んでゐる。

ダンスの流行でもやはり同じことだ、男女が性の欣びからしてダンスを踊るとならばそれは同情してもいゝとして、單に交際とか遊びとかいふのならば、立派に服裝からダンスらしくしなければいけない、婦人の和服姿でダンスをやる位下等な感じのものはない、藝者が踊るヤツチヨロマカセと同じような低級味より感じられない、こんな流行も決

して悪いとは言はない、やるならばやるような用意が肝要だといふだけだ、ダンスそのものはあんまり藝術味の深くないものだから、せめて服裝からでも調和した美を得たいものだと思つてゐる、文化生活には赤屋根の洋館と、ゼラニユームの花をならべたベランダと、小供にマ、さんマ、さんと母親を呼ばせたければいけないとならば私なんぞは先づ第一資格がない人間だ、文化生活なるものが私には充分のみ込めないが、外觀を主とするものか、内容を主とするのか、浮薄でなければいけないのか、金持でなければ出來ないのか、全體どんな外觀と内容があればいゝのかそれがよく知られてゐない、亭主は妻君に凹まされて、家庭外に出て不滿を晴らすのか、妻君は洋服の講習だ料理の實習だ、レコードコンサートだ、交際ダンスだと外出してゐるのが文化生活の要點なのかしら、私もよくは解されない、やはり流行と同じもので、元祿時代に逆轉してゆくものかも知れない位に思つてゐる。

近來個性を尊重するような傾向がよく叫ばれてゐる。個性とは、各個人の思想なり感覺なり、他の個性から受けた反映でなしに各自が發光素を備へた發光體であることを尊ぶのである、この個性尊重の叫びが近代の産物ならば、流行を追ふ生活は明かに反時代思想と言はなければならない、私はよく知らないが自分のやりつゝある藝術の方面からみれば、他人の眞似をすれば存在の意義を失つて了ふ、これが近代藝術の特色で作家の個性を尊重して來た賜物だ、創作に從ふものは皆一樣に自己を唯一の寶庫としてゐる、自己の思想なり感覺は藝術作品の母である、實生活も國法を破らぬ範圍で各自の個性を表現して然る可きだと思ふ、生活の藝術化がそれこそ實現されて來るのであるから、世間で市松が流行しようと何が流行しようと自分に適合しないものは振り返つてみない位の自信力を養成してもらひたい、服裝なんぞも自分の好みに依つてなる可く安價な、美術的價値の高い、自分に第一良く調和するものを用ひるようにしたい、自己の確立だ、それが言ふ迄もなく何よりも大切なことで、それが確實ならば流行なんぞといふ自由を無視した、個性を侮辱した現象に盲動するようなことはなくなる、軍人とか何とか特殊の生活の人達は個性の存在を認められてゐないのだから與へられた統一された世界に個人でなしに生息してゐればいゝのだ、私は流行に反對する者だ、出來るだけ自分といふものを表現したいのだ、それが立派でないけれども他に仕方ないから自分の個性の下らない點を示したい、私は貧乏人だから貧乏人はそれ相當のもので自分を表現したいと思つてゐる。

自分といふものを表現しようとする態度は可愛らしくないものだ、何處となしに生意氣なものだ、だから人に可愛

がられたい人は自己を見られないように隱すことを忘れないように、さういふ人は流行の影にかくれて他の人と同じように、保護色に染まつて暮らす方がいゝのだ、現にさうした生活も澤山ある、でもあんまり新しい形式ではない、今の時代はコニクラシイように私が〳〵と新聞や雜誌の上で叫ぶ時代だ、私もその仲間の一人だ、從つて今日迄もだれからも愛されずに暮して來た、これも自業自得の致す所だと思ふ。

(三)肉體を暗示する衣服

菅原教造

□

我邦の婦人服の觀察點も、いろ〳〵あるだらうけれども、中でも「衣服と肉體との關係」と云ふことは、この時代の見方として、かなり大切なものと見做れてゐるやうである。しかも、服飾を裝うた押容をした或る理想的な形に、即ち、衣服と肉體とか融合相即した或る完全な型に、どうして仕上げたらよいかと云ふ問題よりも、どう云ふ種類の衣服、そのどう云ふ着方が、最も完全に肉體の美を表現し得るかと云ふことが、現代に於ては、却て大切な新しい見方となりつゝある。

言ひ直せば、「肉體を包み隱すもの」として衣服を見るよりも、「肉體を暗示するもの」として衣服を考へる方が力を得つゝあると云ふことになる。そして、これが更に一歩を進めると「衣服を離れた肉體そのもの」の問題にぶつかつて來る――即ち顏や髮形や衣服よりも、全體としての肉體が美の中心點を形造るやうになつて來る――筈である。

□

現在の日本人服のかう云ふ見方を、ざつと西洋風俗史に照應して見ると、第一の肉體を包み隱すと云ふ見方は中世の服裝に當り、第二の肉體を暗示すると云ふ見方は、ロコヽ式（ルイ朝）に當り、第三の肉體そのものと云ふ見方は、希臘及び其の近代的復興の時代の趣味に當ると云ふことが出來よう。

第一と第三の場合は、共に兩極端を代表するものである

から、觀察も易しいけれども、第二の場合は、兩樣を兼ねて、しかも各々が他を陰で暗示的に働かせる場合が多いから、眼の付け處が一寸むづかしい。それ丈け又興味が深いとも言ひ得る。

□

第一の「肉體を包み隱す場合」の例としては、一般に、貴族服・僧服・マントなどが、最もよくこれに當てはまる。我邦の例としては、能樂の衣裳が最好の代表者である。現代の衣服としては、婦人の禮服（就中襠褂）。訪問服—殊に冬着の場合—などが、略これに當ると云つてよからうか。

一定の藝術的又は社會的の既成の「衣服型」と云ふものが出來上つてゐて、それを身體を當てはめて、其の衣服型の要求に適合する樣に肉體が整理され例へば、垂れ乳・鳩胸・凹胸・出尻などが着物の加減で隱される。いろ〳〵な衣服型が、代る〳〵肉體を包んで、肉體をあらゆるさう云ふ衣服型に適應させて行く代りに、「肉體の有する個型」と云ふものが、良い處も惡い處も、少なからず殺されて了ふ。だから、徹頭徹尾、着物あつての人であつて、決して人あつての着物ではない。人を活かして行くと云ふことよりも、寧ろ着物を活かして行く方に力が入る。一言すれば着物が人を造るのである。人類の化粧法や理容術の發達は、主としてこの見地から見て行かなければならぬものであらう。例へば、結髪のいろ〳〵な美しい形なども、肉體に屬するものとしてゞはなく、衣服型に屬してそれに適應して發達したものである。

□

第三の「衣服を離れた肉體」と云ふ觀察は、衣服と切つても切れない深い關係のある問題であるから、少し精しく述べて見よう。

これは、(甲)一面て於て、どう云ふ動機から人類は衣服を着るやうになつかと云ふ衣服の起源の學說（これは、禮讓說・呪術說・裝飾說保護說の四がある）にも關係があるし—(乙)他の一面に於ては、既に着衣してからの人類が、どう云ふ場合に衣服を用ゐないで生活したかと云ふ人間の社會生活史上の興味ある問題をも形作つてゐる。

(甲)は人種學土俗學等から成る社會的人類學の方の見方で、一々野蠻人の風俗を引用するので、繁雜な割に餘り興味の多くない問題であるから略しておく。

(乙)は風俗史上の問題で、この場合には殊に裸體風俗史と云ふ問題になり、從つて「衣服を離れた肉體」と云ふ觀察に大切な關係を有するから、そのほんの大筋を說くことにしよう。

□

風俗史の上で裸體が認められる場合、即ち裸體の社會的意義の史的觀察は、大凡次の六に分れる。

（一）或る時代の民習として裸體生活が行はれる。例へばシーザーの「ゴール征討記」にあるゴール人の男女の公共の沐浴や、希臘のオリンピヤ祭に於ける裸體競技や、殊にスパルタに於ける裸體生活などは這例である。スパルタでは儀式の行列に裸體の青年男女を歩かせ、或る祭の時には裸體の女子を歌はせ踊らせた、このやうな裸體生活の訓練には三の目的があつた。第一は青年男女の羞恥感情を鈍らすこと、第二は男女淘汰より來る子孫の改善と云ふこと、第三は結婚を刺戟すること（獨身生活は國法によつて禁ぜられてゐたから）等であつた。

□

（二）刑罰として殊に姦通罪に裸體刑が施された。これは禁慾生活の原理から裸體を忌んだ中世の風俗から見て殊に意義を有するものである。この刑罰は、彼等の罪が無恥の行であることを象徴すると共に、罪人の羞恥感情を毀損する目的の爲めに用ゐられた。

（三）宗教上の信仰から裸體生活が行はれた。人類の始祖アダム・エヴが樂園に於て裸體生活をしてゐたと云ふ理由から、二世紀頃歐洲に行はれたアダム宗の裸體生活、十三四世紀頃の鞭韃宗の裸體生活などは、その代表的のものである。この餘習は、つい前世紀までも、ボヘミヤや露西亞の內地に殘存して、これを撲滅するために、各國の官憲は非常に苦心したものである。

其他、絕體歸依の象徴として、白衣を着たり、又は裸體と成つて神前に祈ることは、宗教上の一の儀式として、珍らしいことではない。

□

（四）藝術的の見方から、裸體が讃美され又は裸體踊が演ぜられる。

裸體讃美の上代の文學としては、亞剌比亞の「ホライレー」、猶太の舊約聖書中の「ソロモンの雅歌」（この歌を完全に了解する爲めには、モルトンの「近代讀者の聖書」によつて讀まなければならぬ）があり、中世のものとしては獨逸の「ニーベルンゲン歌」があり、近代の文藝復興期のものとしては伊太利のヴラや、フィレンツオラや、ベンボーなどの論文が代表的のものである。殊に上代のものには、素朴な自然的な肉感がよく現はれてゐる。

これに對して、中世の禁慾主義を裏切る粗野な不眞面目

な催しとしては、所謂「櫻桃拾ひ、胡桃拾ひ、栗拾ひ」の遊びがある。記錄に殘つてゐる有名なものは、一五〇〇年十月の最後の日曜日に、羅馬法皇アレキサンダー六世の催したものである。其他、獨逸皇帝カール五世が、アントワープ市へ巡幸して來た時に、市は皇帝の行列に數人の裸體の女を加へて好評を博したことなどは、最も名高い語り草として傳へられてゐる。

次には裸體踊である。裸體踊も、極端な上代埃及のものは除いて、藝術的なものとしては、ディオニソス祭（バッカス祭）から來た古代希臘のアッチカ喜劇のコルダクスのが有名である。

古代の基督教時代のものとしては、マコ傳にあるサロメの踊は、近代の英佛獨の文豪、ワイルド（サロメ）、フローベール（ヘロディアス）、ズーデルマン（ヨハネス）によつて取扱はれてゐる。

又古代羅馬のフローラ祭の裸體踊は、中世の基督教國に繼承されて、復活祭、降誕祭に演ぜられたものを、五五四年にフランク王シルデベルトが禁じ、更に八〇〇年にカール大帝が禁じてゐる。

そして、から云ふ禁令にも拘らず、古代希臘羅馬のディオニソス神の密儀やデメテル神のエレウシス密儀の裸體踊は、基督教的に變形して、十四世紀の末から十五世紀の初にかけて、密儀踊・神託踊（例へば、聖ジュネヴィヴの密儀、受胎、世界の創造、エヴの妊娠等）として殘つてゐた。そして、十五世紀後半に至つて、裸體踊は初めて還俗して、バレーと成つて現はれた。中でもルイ十四世の時惡魔踊は最も有名なものである。

□

（五）裸體畫のモデルとしての裸體が藝術的に認められる。モデルの歴史も、やはり希臘に始まつてゐる。プラクシテレスは、クンドス島民の爲めに、美妓フリーネをモデルとしてヴィナス神像を彫んだ。この彫刻の寫しは、クニドス島の貨幣に浮彫にされてゐるし、實物の寫しは今日ワティカンに在つて、「クニドスのヴィナス」と云はれてゐるのである。

文藝復興期の畫家は、マリヤ又は希臘女神などを畫くのに、多くは其の情人をモデルとして用ゐた。フィリッポ・リピは尼僧ルクレツィア・ブティをモデルとし、サンドロ・ボッチチェリはシモネツタをモデルとし、アルドレア・デル・サルトーはルクレツィア・フェーデをモデルとし、ティチアンはヴィオランテをモデルとし、ラファエルはフォルナリナをモデルとした。

たゞに畫家の情人がモデルに成つたのみならず、當時の有名な夫人や、高貴の令孃は、悦んでモデルとして畫架の

前に立つた。例へば、フランシス一世の寵姫ディアヌ・ド・ポアティエーは、クレーエーの爲めに、裸體半身像のモデルとなり、ウルビノーのエレオノラ侯爵夫人は、ティチアンの爲めに、全裸體のモデルとなり、羅馬法皇の娘ユリア・ファルネーゼは、ヴァティカン宮殿の墓石に、其の全裸體像を彫ませた。

其後の時代の例として、ルーベンス、レンブラン、フォイエルバッハ、其他十九世紀や現代の彫刻家や畫家のモデルの問題もあるけれども、煩はしいから略しておく。

それから、モデルに關する文學上の記錄として最も有名なのは、ゲーテの「瑞西紀行の」第一信である。

□

（八）現代に於ける裸體文化運動の實行である。この運動は十數年前伯林に行はれた。又そう云ふ主張はルンゲヴィッテルと云ふ人のいろ〳〵な小册子にも記されてある。

この運動は大體に於て三の方向に分れる。第一は藝術的方向で、オルガ・デスモントの裸體舞踊を以つて代表される。眞の身體藝術は衣服を要しないと云ふ主張である。第二のものは衞生上の根據の上に立つ。裸體を以つて日光浴・空氣浴を實行するものである。第三は衣服を不自然であるとし、脫服は決して性道德を損ふものでないと云ふ意見から、家庭生活や社會生活をも、裸體で通さうと云ふのである。

□

扨て、「着物を離れた裸體そのもの」の話が少し長くなり過ぎた。しかし、それには理由がある。

風俗上の裸體の問題は、古くから我邦では格別珍らしくもないことである。しかし、近代社會の表面に立つて濶步してゐる藝術上の裸體問題としては、もう少し一般に了解が行渡つてもよい筈だと思ふ。殊に肉體美の問題が、國民の體質や保健や優生學的の問題と關係する處の深い點から見て、社會がもつと〳〵裸體の問題に留意してほしいと思ふ。

カーライルの言葉をもぢつて云へば、「加藤總理大臣が裸體で衆議院で施政方針に關する演說をすることも出來まいし、又加藤憲政會總裁が裸體で貴族院で外交質問に關する演說をすることも出來まい」と云ふことになる。

しかしミケランジェロや、ドナテロや、ポラユオローは、裸體のダヴィデ王を彫んだし、ロダンは裸體の洗禮者ヨハネを彫んだし、ピカールは裸體のヴォルテールを彫んだ。そして、そう云ふ裸體全身像の作品は、軍服を着た加藤首相よりも、紋服を着た加藤總裁よりも、もつと人としての生命があり、もつと公人としての權威があるやうである。「着物は

人を造る」と云ふ古い諺を信じてゐる人々は、こゝでもう一歩進んで何事をかを考へて見なければなるまい。元來、裸體問題及び裸體藝術問題の土臺には、原始精神と藝術的精神と變態精神との三つが、面白くからんでゐてそれから或る解決が導かれて來る筈であるが、そう云ふ議論は今は略しておく。

□

最後に第二の問題として「肉體を暗示する衣服」に移らう。この場合は、衣服は「こゝに肉體がある」と云ふ合圖をする役目を務める。衣服は肉體を包み隠すものでなくして、肉體の存在を——肉體の光榮を示唆するものである。從つて、着る人も見る人と共に、心理的には、衣服を拂つて繋ぎ合せた肉體を、又は衣服を透して出來る丈け完全に畫き出した肉體を對象とする。卽ち、この第二の見方は、第三の見方を土臺にして、初めて成立する。そして、勿論、この衣服を着る人は、完全な肉體の所有者でなければならないことは、改めて云ふまでもない。着物の型に從つて肉體が整理されて行くのでなくして、着物を透して肉體が浮み出して行くのであるから。

この衣服は、大體に於て、三種に分れる。

(一)は近代趣味のもので、裸體を思はせるやうに、肉體の形通りになるものである。例へば海水着、踊りや輕業などの藝衣がこれである。

(二)は寧ろ古典趣味のもので、ゆるく肉體を包んで、肉體の形を隠見させるものである。例へば、希臘・羅馬の彫刻にある古典服には、この點から見て、非常に傑作が多い。次に、肉體がもつと完全に浮み出したものとして、我邦の中形姿が最好の代表者である。

(三)は所謂デカダン趣味(例へばルイ朝のロコヽ趣味・我邦の浮世繪趣味)のもので、思ひ切つて肉體の一部を露はしたものである。これには、西洋の夜會服としてのローブ・デコルテや少ししか肉體を蔽はない藝術的舞踊の衣裳などが、最も好い例になる。

□

容色の問題も、化粧の問題も、理容の問題も、衣服の流行の問題も、それ〴〵その時代なりその階級なりから見て、相應な社會心理的の權威があつて、行はれることだらうから、たとへ耳隠しが流行らうが市松が流行らうが私共はそれを目あてにして議論をして見やうとは思はない。

たゞ、人間の肉體と云ふもつと〳〵權威のある根本的な存在を度外視してまでもと云ふ傾向に對しては、どうしても贊成が出來かねる。(一一・八・九)

(四) 趣味に對して浮氣な婦人

山本鼎

先頃、或大呉服店の支配人に、「おたくのやうなデパートメントストアーの競爭は、つまり意匠部の競爭ですか」とたづねましたところ「いや、まだ其處まで參りません。三越にしろ白木にしろ單純に營業部の競爭です、――つまる處なるべく安く仕入れて澤山に賣捌かうといふ一方なんですな」といふ答へでした。都會の御婦人も田舍の女衆も、なほさやうな營業方針によつて提供せらるゝ、まづ出たらめな品物を身に着けて得々として居らつしやるのではないですか。

日本の吾々男子にとつて寳であるところの婦人の裝身が、大丸、三越、白木、大丸、高島屋、松坂屋、此五軒の左右する處であるとすれば、五軒に一日も早く、意匠部の競爭にまで營業方針を高めてもらひ度いものですな。

×

洋服の流行は目ざましいわけですが、妻君もおばあさんも洋服を着るやうになるかどうか、なるべく其處まで發展してもらひ度く無いものです。しかし子供の洋服姿はなか〳〵いゝ、時々リュクサンブール公園で見かけさうな都雅なつくりを見受けます、私の教へて居る生徒(自由學園の本科生)は、一生洋服で暮すんだと云つて居ます、彼女らは振袖や帶や下駄なんてものに一向趣味を有つて居ません、其かわり洋裝に就てはなか〳〵批評的で、顏の色と服の色との釣合、髮毛の結び方と帽子との釣合、リボンの色やバンドの巾など迄それ〴〵考へてあるんです。彼女らの中には自身に帽子や服を意匠して手づから造つて用ひて居る者などもあります、私は髮を短くきつたのを好みませんが、彼女らは殆ど一齊におかつぱさんになつちまつたのです。彼女等はおかつぱさんで一生通すのだといつて居ます。テニスをしたり鞠を蹴つたり、驅けくらをしたりして居る彼女らにとつて洋服おかつぱさんは無論適切です、併し專ら疊の上で暮す主婦の時代になつたら日本服が便利でもあるし調和した姿です、そして其服裝は當然おかつぱさんをきらひます。

――だが、吾が生徒らは、勿論洋裝で洋室に起臥し、おそらく赤ん坊を英語で育てるつもりで居るのです。

×

振袖でおかつぱさんの大きな娘を見る事がありますが、いやなもんです。何となく娼女の觀があります。いつも洋妾といふ名詞を聯想します。

×

十八九からの婦人に對しては私はどうしても和裝論者です。髮の結ひ方はざんぎり髮をのぞいては、たいてい調和すると思ひます、七三や、耳かくしなどはどつとしませんが、洋風に結ばれた日本婦人の濃い髮のマツスは特に帶との釣合に優美な趣きを作ります。總じて洋風の結び髮には羽織は合はないやうに思ひます、羽織がぴつたり合ふのは丸髷でせう。ゑび茶袴に靴、そして所謂ハイカラ髮の女學生の風俗は、惡くない風俗だと思ひます。袴は日本のものですが白足袋日和下駄よりも、たしかに靴に調和します。袴はスカートの親類ですからね。

×

夏羽織に限らず、私は女の羽織を着ない姿が好きです、白地よりもたいていは黒出の着物が似合ふと思ひ、ショールをしたり、オペラバツクを提げたりするおしやれを田舍臭いものに感じます。先日贈り物に、女草履を三越に買ひにゆきましたが、繰りかへし調べても氣に入つた草履がありませんでした。籐表にゴムやラシヤ板の腹合せは、ぶいきに感じ、昔のやうな疊をかさねたのを求めましたが無いのです。下駄にも良いのがありません、とかく鼻緒の柄も駄目でした、其時序に女持の洋傘を買ひましたが、擇ぶのに骨が折れました。柄にも、張りにも出たらめな模樣がついて居ていやになりました、レースをかぶせたのや刺繡をしたのなどぶいき揃ひでした。

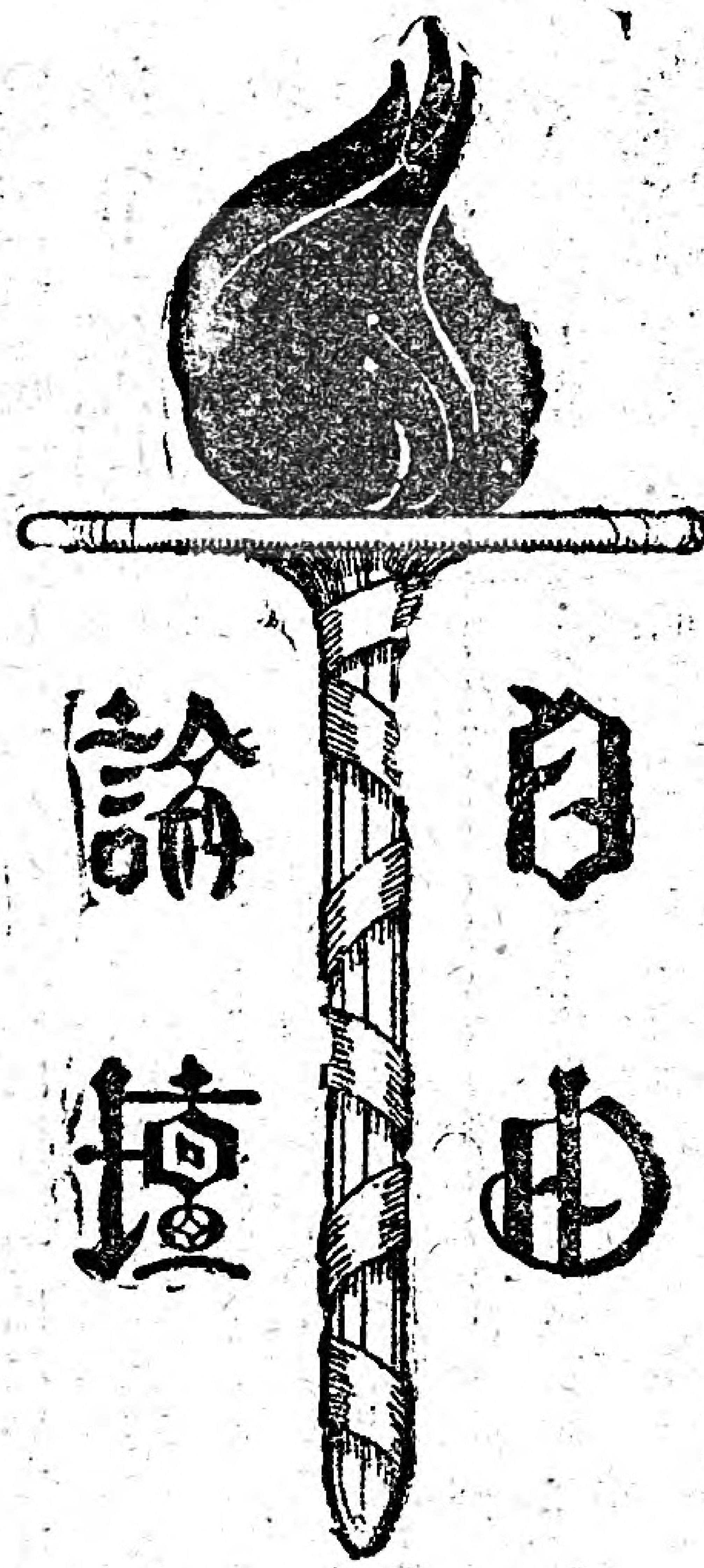
×

今、着物に市松が流行ださうですね。あまり品のいゝものとは思へないが着る人によつては惡くないと思ひます。縞もの、絣、それ〴〵似合ひの人がありますが、小生は草花の扮本からぢかに出來上つたやうな、友禪式の柄はいやです、舞妓のつくりは小生の最もきらひなものです、或グロテスクを面白がつて繪のモデルには賴まうも知れぬが、見て佳いと思ひません。

まつたく、現在、裝身具製造業者の心得は、たいてい非藝術的で、無味な營利本位から雜多な趣味を提供し、仲買人たる前記五軒の商店も又無味な營利本位で、折角與へられた興味深い使命——日本の娘や妻君を、獨特な趣味で飾らうといふすばらしい任務をぞんざいにして居るのですが、日本の吾が時代の風俗——といふと大事だがよし着物の柄なりと特色ある物を創造しやうといふ活きた願ひを多くの婦人に有つてもらひ度いものです。

裝は、例へば文章のやうなものと思ひます、一とつの文

章は、目的に對する適切な形式と、其形式を渾成するために調を整へられねばなりません、候文ではじめて。中頃韻文に變り。次に口語體になつたりしてはよし其各句が如何に美麗でも文章としては落第でせう。それと同じわけに、婦人方のおしやれも、渾一の調がなければいけない筈です。「姿」の印象には、髪の形も、顏の色も、着物の柄も、帶の柄や結びかたも、履物の型、半襟、帶留――すべて緊要な相關をなして居るんですから互ひに相生かす事を工夫せねばなりますまい。私の感ずる現今の多くの婦人方のおしやれの趣味には、繪もなく詩もないやうな氣がします。無趣味に和裝し、平氣に洋裝する。而も大得意に、すべて流行に伴はねば氣がひけるやうに思ふ脆弱い心理から行はれるのです。『趣味』に對しに婦人方は意外に浮氣ではないですか。（十一年八月）



一 自由論壇は我國婦人の言論の自由の爲めに開放します。
一 自由論壇は何人の寄書をも歡迎します。それが婦人のでさへあれば、但し採否は一に擔任記者の自由に在るものとします。
一 自由論壇への寄書は簡單明瞭を必要條件とします。

女教師の觀た小野訓導の殉職事件

私は、村落のさゝやかな一小學校に勤務いたしてゐるものでございます。左樣な私に、先頃、宮城縣宮町の小學校訓導小野さつき女史のお示しになつた勇敢な御行爲は、大きなショックを以て迫つたのでございました。いえ、獨り、私のみでなく、日本全國の敎職にある人々には勿論、その他の各種の社會の人達の間にも、感激と讚美の種を蒔いた事でございました。ともすると近頃、敎育界の不信、敎師の墮落を指摘される時、あゝした出來事は、敎育界未だ腐敗せずとの實狀を最も雄辯に語るものかと存じまして、私共、末輩のものまで何かしら、肩そびやかして、この無上の天職に殉じたいやうな心持にならずにはゐられないのでございました。古今、多くの聖者達のお示しになつた犧牲の德の如何に尊く、如何に美しいものであるか。そして、夫が如何に人心に響くものであるかをも今更の樣に感じ入つたのでございました。

果してこの反響は社會の各方面に起つてまゐりました。眞摯な某市の視學は逸早く現地へかけつけて實狀を調査して歸られました。そしてその地の學校、家庭、社會の關係者達の美しい人情の讚美を口を極めて述べられました。この尊い生きた事實をひつさげて全國を行脚し、敎師の自覺を促し、社會敎育の一端に資せむとまでの意氣込みでございました。夫等の御計畫は、「この出來事の大きな意味を默つておつと考へたい。」とおつしやつたお言葉に多少矛盾するとは言へ、甚だ結構なお考へだと推服するものでございます。この出來事は或ひは敎育監督者から校長への訓示となり、校長から職員への通達となり、敎師から子供への自家自讚の熱辯となつた事でもございませう。しかし、何それのみには止りません。活動寫眞會社は、早速、之

をフイルムにおさめて常設館に上映し、低級演劇者は、劇に脚色して誇張澤山に舞臺の上に演出いたしてゐるのであります。某々婦人雜誌は懸賞でさつき女史の勇敢な行爲を後の世まで語り傳へむ爲の唱歌を募集し、誌上には、徒らに讃美に偏した記事を滿載してゐます。やがて琵琶歌も稱へられ、講談にも仕組まれ、あらゆる娛樂機關が新しい趣向の下に、都下の物好き連中を吸收するために花々しい興行の競爭を示し始めることでありませう。小野女史の血涙のはふりおつる樣な御行爲は、かうして、敎訓てふ美名の下に、營利の道具にまでなり上らむ？　とさへいたして居ります。私は筆の趣く所、つい、皮肉な言ひまはしをしたかも知れません、しかし、事實は事實です。帝都は知らず、わが大阪では、實狀かくの通りなのです。此處まで來ては、少し進み過ぎたものではありますまいか。一時的に血を湧かし、一時的に感激の涙をしぼるのは、日本人の情ない通有性とは言ひながら、今少し冷靜な頭を以て、この事件を泌み泌み味ひたいものではありませんか。夫が、營利の方便とまでなるのを見ては本當にさびしさを感じさせます。あさまし過ぎます。かつて、讀本敎材の「一太郎やあい。」が、いやな宣傳をされた爲に折角の純なものが、多少汚れた例に鑑みて、今日の小野女史のより以上の宣傳は、氣の小さい私共を、はらはらさせずにはおかないのです。神聖を汚します。犧牲を冒瀆します。そう私は言ひたくなるのです。何故かう日本の人達は、直ぐに空騷ぎを始めるのでせうか。精神的の出來事を唯物的の方向に轉換させることをいつの間にこんなに巧に學んだのでせうか。

左樣な點のみでなく、尙、私のいやでも申出ておきたい事がございます。夫は、小野女史の行爲そのものに關することです。あの溷濁の中に三人の子供がおちいつた時、小野女史でない他の敎師がゐたら、その敎師はどうしたでせうか。又、敎師でない他の社會の人が見たならどうしたでせうか。そうゆふ問題に就いてでございます。私は、あの樣な事情の下に、あの樣な出來事が起つたとしましたら、たとへ、何人でありませうとも、死を忘れて水中に飛び入るであらうと私は信ずるものです。いやしくも人間らしい人間の一人であつたら、そうせずにはゐられない衝動に支配されるものだと信じます。その申出は、玉川でありましたか、矢張り子供を救けるために溺死なすつた松本訓導や、近くは、朝鮮大邱の中學校での出來事が、證明してゐます。又靜岡縣の子供が子供を救つた勇しい行爲は私の申出にこの上ない裏書きをしてくれるものだと思ひます。尙この他私共の知らない實例が世の中には數多くあるのではありますまいか。

夫に、何故、さつき女史の場合丈、あの樣に特にもてはやされるのでせうか。その理由は那邊にあるのでせうか。溺死なさつたといふ事實からでもなければ、敎師といふ事實からでもありません。何故なら、共等の理由は他の場合にも具備された條件だからです。又その地方の人達の美しい心持の觸れ合ひを無類とするのであるかも知れませぬが、たまたまあの樣な事件のために夫等の人達の眞情が、世の中に發表されたまでであつて、現に、他の地方にもより以上美しい心持のたたへられてゐる地方があるかも知れません。

そうした最後に殘された唯一つの理由は、この事件の主人公が、女性であつたからだといふ事です。夫が、この事件をよりローマンテイックなものに作り上げ、より脚色に變化の妙を

見せられるに至つたのではございますまいか。しかし、玆にも、私は一つの寂しさを見出します。夫は、女性であるからとて、社會の人達の評價が高く、男性であるからどうといふ風なそんな見方のなされる事は堪へられないのでございます。又、若し、その犠牲者が子供である場合は、より一層重視されなければならぬのに、餘り大したことのないのはどうゆふものでせうか。私は、私の醜さを曝露する様なものかも知れませぬが、女性てふものにまつはる一種のチャーミングな雰圍氣に世の人達が醉ふてゐるのではないかとさへ考へます。

一體、犠牲といふものには二つあると私は思つてゐます。一つは衝動的本能的のもので、忘我的狀態の下に遂行されるものと、今一つは意思的努力的にあらゆる誘惑や執着を斷ち切り、振り放つて敢然として血路をたどるものとです。後者の最も偉大なものとしては、私はキリストを持したいのですが――。この二つはもとより、何れが價値が大で何れが價値が小である等とは申されないものでありまして、何れも尊い人間性のあらはれなのです。が、より多く行はるる場合は、前者の猪突的突發的なものではないかと私は思ふのです。小野女史や松本訓導の場合は此に屬すると思ひます。

そう申したからとて、私は、前者の犠牲は容易なものであり、價値のないものであると言ふのでは決してありませぬ。又、小野女史の餘りな持てはやされ方に嫉妬を感じてこの筆を執つてゐるものでもありませぬ。ただ、私はこの事件を深く靜かに考へる事によつて、私自身の胸底深くに埋れてゐた子供の爲に一命をすてむとまで覺悟しました過去の思出を呼びさましたからの事です。

小野女史の行爲、松本訓導の行爲、何れも勇敢な行爲です。愛のあふるゝ行爲です。人後におちず、私はこの人達の行爲を讚美するものです。ただ私の懸念する所は、盲目的一時的な讚美者の輩にする事なのです。深い省察と明らかな諒解を持たない人達の徒らなセンチメンタリズムは唾棄すべきものだと思ふ私だからでございます。

そして最後に今一つ私の考へを申したいのは、子供に對する愛の問題についてです。たとへば世の人達は、子供の爲に命までも投げ出された女史のことであるから、必ず、平素にあつても子供を愛されてゐたに相違ない。と言ふ風な結論を下すことです。又、この場合はそうであつたかも知れませぬ。いえ、教育の本質の示す所に從ひますれば、愛は、凡ての教育のもとだからです。しかし、夫は、理論なのです。でなければ、教育界の偉人の傳記なのです。私共、同じく教育に携つてゐるとは申しますものの、この社會で、この制度で、この様な凡人が仕事をする時には、自ら夫等の尊い人達の心持とは、餘程まで違つたものがある筈なのです。何故つて、私は本當の愛といふものは教師と子供との全我的な抱擁の場合にのみ作用し始めるものだとのみ信じてゐます。ペスタロッチがそうです。フレーベルがそうです。夫に今日の教育は單なる知識の傳達のみが教育の全作用とせられてゐるからです、どうして全我的な抱擁があり得ませう。又、どうして本當の愛が醸し出されるものですか。今日の教育は著しく職業化してゐます、職業化した所からは決して本當なものは生れ出はいたしませぬ。愛の代りに名なのです。感謝の代りに物質なのです。師弟の間は愛と感謝でつながれてこそと思ふに、事實は名譽心と金とでもつて支配されてゐます。そうした大勢の下で、凡夫凡人が、職に就く時、どうして本當の愛が生れるものですか。少くも私は私の本當の心

持を申出でたいのです。

容貌の美しい子供や、家庭の善良な子供や、頭のいい子等にいつとは知らず心が傾いてゐます。之ではいけないと強く自分を鞭打ちつゝも、又しても、心の偏よつて行くのをどうしませう。私のこの告白が、どうか私一人であつてくれる事を冀ふものですけれ共、不幸にして私と同じ心持を有たるゝ教師達の意外に多いのを見出すのは何といふさびしい事でせうか。偏愛はよくないものと知りつゝ、偏愛の心持にひきずらるゝのは、もともと、私に教師としての資格のない事を示すものなのでせうか。しかし、私は、教師をやめたくないのです。たとへ今日の教育に多くの不滿があるとは言へ、又、私自身、教師としての第一資格に缺ける所があるとは言へ、私は、教育といふ仕事を人生的に眺めて深い意味の存する事を信じてゐます。では、どうすればよいのか。私は、誰でもの心に存し易いこの傾向は、或ひは深い深い人間性の一つの現れではないかと思ふのです。夫をいい加減の苦悶位で斷ち切り得ないのは當然なことではないかとさへ思ふのです。では許される心の傾きでせうか。いえ、いえ、夫は矢張り許されないものなのです。ただ、どうかして、偏愛の心持を去つて教育の本質の要求する愛、教育偉人の傳記に示された愛にまで進まなくてはならないと常に常に苦しむことです。悶へる事です。苦しみ悶へ、祈り願ふ心持に於てのみ許されるものだと信じます。そして私共凡人凡夫の許される教師としての資格は、この悶へを、如何程深く味つてゐるかといふその深淺の度によつて評價されるものだと思ひます。之は私の心の奥底をくつがへしての申出です。この他に私の許される世界はないのでございます。唯一つのためのみ所なのでございます。

左様なことをくどくどしく私の申した所以は、非常な場合に非常な行爲に出づるのも、もとより晴々しい愛の犧牲行爲ではありますけれど、日々、子供達に接する私共の心持が、常にたへられない苦悶に滿され、正しい愛への憧憬になやむ——夫が、教育家としては、より以上大切な問題であると信じてゐるからです。そして、又、小野女史の平素の御心持の中にあつても、前に述べた樣な偏愛の心持がなかつたとは誰人も斷言出來ない所であるばかりでなく、たとへ、平素、偏愛の心持に悶へてゐようとも、いざとし言へば、一命をなげ出して美しい犧牲を示し得るものであるからです。偏愛も、偏愛についての煩悶も、そして、勇敢な犧牲も、凡て、人間性の現れの一つ一つにすぎませぬ。而も、何れも皆、夫が、全我的な眞劍味を帶ぶる時、人生の勇者として讃美されなくてはならないものだと信じます。

私は以上、小野さつき女史の行爲を中心として、教師の犧牲と煩悶について、私の貧しい感想を赤裸々に述べてまゐりました。筆のまはりかねる所、或ひは、女史の美しい行爲をやゝ低く評價したかの樣に感ぜらるゝ所があるかも知りませぬが、事實は、常にその正反對で、私は、女史に對しては、衷心、涙とまことを捧げてゐるものなのです。ただ、盲目的讃美者の迷夢をさましたい一存に思はず筆勢の外れた事は讀者諸姉の御くみ取り下さることゝ存じます。この意味で私は小野女史の靈に對して少しの面はゆさも感ずるものではありませぬ。

尚、この小さな感想を、世の多くの女教師達に通讀の榮を賜り、御批判下さいますことをお願ひいたします。（完）

——大正一一、八、六——

（大阪　溝口美知子）

十月一日發行

『愛の勝利號』

特價八十錢
郵税二錢半

秋季特別號豫告

秋季特別號は『愛の勝利』號と題します。愛がすべての悩みと闘つて最後の勝利を得るまでの、最も切實なる人生問題を提げて皆樣と共に本誌發展の歡びを頒たうとするのであります。

愛は自然に與へられた最も偉いなる、最も淨い又最も貴い力であります。人生に於いて殊にさうであり、婦人に於いては、昔から愛を生命とするといはれてゐる通り、尚更さうであります。自然から愛の力を取去つたならば、人生は恐らく荒涼落寞住むに堪へないものがありませう。之れを婦人から奪つたならば、すべての生は根を絕ち葉を枯らして想像するだに恐ろしい奈落の相を現ずるでありませう。人生は愛の哺育によつて成長します。愛は其偉大なる力を以てすべての不德と闘ひ、さうしてすべてを征服します。すべての悩みすべての煩ひは愛によつてのみ救はれます。悩みは現世の相であり、愛は最後の勝利者です。

吾々は「愛」を讃美しませう。さうしてすべての矛盾と葛藤とを超越して「愛の勝利」を謳歌しませう。假面を被れる「愛」を排斥し、其面皮を剝いで「愛」の眞如を仰ぎませう。尊く淨く、美しきもの、限りを盡しても尚且つ及びもつかぬ美しき「愛」の光に浴しませう。一切の汚れ、一切の累はしさを捨て、暖き「愛」の懷に抱かれませう。何年にも無い夏の暑さも去つて秋風の立ち初める頃、皆樣の優しい懷にかき抱かれるには此上なく相應はしいものであらうと信じます。



良人の收監を見送つて

=愛と戰との僞らざる妻の告白=

高田千代子

からりと晴れてゐたその朝、夫は小石川にゐる私の弟をさそつて、月島の沖にある端艇を見に行くはずで仕度くをしてゐました。端艇はさる筋から賣物に出てゐた中古物で、主人の計劃では營業用を兼ねて夏の夕のたのしみにしようと云ふのらしく、それを見に海好きの弟は引張り出されたのでした。

「一汗出して柳光亭の下につけませうね」

「駄目〱僕は端艇を見たらすぐ、丸の內の會社の方に廻るのだ、不景氣の當節柳光亭などはどう致しまして!」

「困つたな、僕は學校を休んで行くんですよ。中央亭の八十錢のランチぢや、あまり氣が利かな過ぎる。ね、兄さん何しろ學校を休むんですからな。」

「幸さんは學校を休むことをひどく恩に着せるぢやないか、尤も幸さんのやうに皆勤してゐるんぢや無理もないが」

「皆勤? 今日は非常に逆襲しますね。つまらないがまあ仕方がないや、かうなると徐に形勢の變化を待つんだね」

此春慶應理財科の本科生となつて、急に生意氣になつた弟の幸一郎を相手に、たあいもないからした無駄口を利きながら、夫は服の仕度くをしてゐますと、玄關の呼鈴がけたたましく鳴り、ついでお小間のとしゑが出て行くけはひがいたしました。弟は客來の樣子に月島行きが又しても妨げられるのが如何にも心外らしく、としちやんがうまく謝絕してくれるといゝんだがなあ、「ちえつ氣が利かないなあ」と一人でぢれて、名刺を運んで來たとしゑをいきなりにらみつけました。

名刺を見て、又からるさいなと云ひ相な夫の顏は見る／＼憂鬱と不安に曇つて行きました。そしてとしゑに、

「二階の應接へお通し、そして今恰度外出の仕度くをいたしてゐますから暫くお待ち下さいつて！」

「――誰方ですの、お客樣つて？」

子供にお乳を含ませて居た私は夫の顏色を窺ふやうにききました。

「うん、何でもない！」

階段の軋る音がおはると、夫は「幸さん一寸お待ち、すぐ濟みますからね」そう云つたまゝ夫は應接の方へ上つて行きました。待たされるのが不平で不平でたまらない幸一郎はすぐとしゑを呼んで「お客つてどんな人なの、誰なの？」と、おつかぶせるやうに聞きました。

羽織袴で相當のみなりをした客が警視廳刑事であつたことはとしゑから聽くことが出來ました。その刹那夫の身にかかつてゐる暗い影が、濃い霧のやうに私の頭をこめて、どつきり胸に響ました。そのことをうす／＼知つてゐる幸一郎もいやな顏をして私の顏をみながらおしだまつてしまひました。

三年前まで陸軍の上長官であつた夫は、ふとしたことから現役を退き實業界に入つて、二三の會社に關係してゐましたが、此春鄕里の知人のすゝめるまゝに△△會社の社長の椅子につきました。この會社の社長になることに就ては、その事業の性質があまりに投機的であるために、私は勿論のこと、私の周圍のものも、夫の性質に適しないことを理由として、極力反對したのでしたが、一旦斯うと決心したことは、たとへばその事がみす／＼後悔に値しやうと、軍人氣質の單純な剛情で押切つて了はねば止まぬ夫は、鄕里を同じうする支配人のHの手腕と言葉とを信じ切つて、社長になつたのでした。

ところがどうでせう？まだ幾月も經たないのに社金横領

事件が曝露しHを初め幹部社員七名までが、私文書僞造横領罪で拘引され、其飛沫が會社の責任を負ふ夫の身の上にかゝつて、これまで何回となく檢事局に召喚されました。嫌疑の要點は、その横領のたねとなつてゐる文書に捺されてゐる社長の印――所謂盲判を夫は捺したのでした――眞實盲判であるのか、それとも情を知つて捺されたものであるか、若し情を知つて捺されたものであるとすれば、夫はその事件の中心人物であると云ふ譯で、背任、私文書僞造詐僞横領事件と云ふ忌はしい嫌疑が夫の身の上にかゝつてゐたのです。

別に不吉な豫感を持つたわけでもありませんが、夫が二階に上つてから私は、胸がわくつくのをどうすることも出來ませんでした。落つかぬ儘に小夜子に乳をくゝませてゐますと間もなくとしゑを呼ぶ鈴が鳴りついでとしゑが茶の間に這入つて、主人が私を呼んでゐることを傳へました。私は「さう」と答へたまゝ小夜子をとしゑの手に渡して二階へ行きましたが、何とも云へぬ厭な心持が、私の胸の中に一杯になつてゐました。

主人と刑事は嚴な顏容をして對座してゐましたが、私を見ると、刑事はてれた笑ひをかすかに笑つて頭を下げました。主人はその苦しい努力を以て心を落つけようとする時の一つのくせである敷島の吸口を爪で強くつぶしながら、

「このお方は警視廳の△△刑事さんで、東京地方裁判所の△△豫審判事の令狀を持つてお出でになつたのです。私はもとより公明正大、身に一點の曇もないつもりでゐるから、證が立つことと思ふが、兎に角令狀に從つて一應裁判所の方へ行かねばならぬ。ついては後の事は宜しくお前に頼む――」

私の心は主人の言葉のはじめを聞いた時にもう、絃のやうに張り切つてゐました。今は非常の時だ、うろたへてゐてはならない、しつかりしなければならない、私たちに取つて今は非常の場合だと心のうちに叫ぶ聲を聞きました。

「左樣で御座いますか、後事は私が誓つて處理しますから、どうか御安心なすつて、一日も早くいまはしい疑ひを晴らして來て下さいまし……」

恐らく左樣に云つた時に私の異常な決心と緊張とは、私の顏の筋肉を石のやうに堅くしたかも知れません、が少くとも私は眉毛をすらも動かさなかつたに違ひない、人間は誰しも斯うした心理を持つてゐるのではないかしら。

私は直ぐに主人の室から卷紙と硯箱とを取り出して無言で主人に渡しますと、主人は眼を閉ぢて書き初めました。

置き時計が秒を刻む響すらも煩はしいほどの緊張が應接間を支配する幾分時、刑事は立上つて、

「いろ〱家事の御相談もおありでせうから、御談合なすつて宜しう御座います。その間私はお玄關を拜借してゐませう。それから御同伴の節は和服に御召替へになる方が萬事につけて御便利だと存じます。それに齒磨粉、楊枝、タオル、紙類を御忘れないやうに」

刑事は憎らしい程に沈着いてさう云ひ終ると、としゑに案內されて玄關側の應接に下がりました。

主人と私とは限られた時間の一分をも惜むもののやうに、まづ家計、當座預金のことから、主人の鄕里への對面の繕ひ方、店の方のこと、後事を依托する知人のことと、云つた風に緊張したビジネスライクを以て貴重な一時間三十分を費しました。その間に私は簞笥から羽織袴を取り揃へ、主人のいまはしい門出の仕度くを調へました。夫も無言なれば、私も無言の中に只手を働かし夫の肩からかける着物、袴、羽織へとすべつて一分、一分、時は經つて行きます。玄關の應接室から、弟と刑事との議論めいた聲が折々二階へ傳はつて來ます。

やがて主人の仕度くは出來ました、一二冊の書籍、半巾、齒磨粉、楊枝、タオルそうした必要品は小さいバスケツトの中に詰終つたところに刑事は上つて來ました。

「あ、それはバスケツトに詰てはいけません。風呂敷包にしてお持ちにならなければ……」主人と私とは風呂敷包と云ふ刑事の言葉に、小さい溜息をついて眼を見合せました。何と云ふ情無いことだとの嘆息が二人の眼に佗しく宿されてゐました。これを風呂敷包に……けれども權力の意志は絕對です。私はせめては見すぼらしくない風呂敷に、それ等のものをくるんで夫に從ひ階下に下りますと、書生と女中と弟とが當惑したやうにうなだれて並んでゐます。主人は、それ等の者に儼然として「私は是から裁判所の方へ行かねばならぬ。自分の心ではつゆやましいことがない、公明正大のつもりでゐるが、お呼出しを受ければ仕方がない、私の留守中、お前達は一層奥さんを助けて間違ひのないやうにしてくれねばならないよ。いゝか」そう云つてから、私に「では後事は宜しく賴む」と申しました。その聲は事の無念にふるへ、敷居を越す時に、ふり返つた夫の双眼からは一ぱいのため涙があふれるばかりでした。その涙を見せまいとするやうに夫は草履をつゝかけて手強く玄關の格子を閉め切つて步き出しました。そのみじめな後姿、私の眼から一時に涙が止めど

もなしに流れてくるのでした。

激動の後の昏迷に私の頭は亂麻のやうに亂れて何を考へることすらない、ただ世界が眞つ闇になつたやうな佗しさの中に熱い涙がほろほろと頰を傳ふのだけを感じました。

私のこめかみは痙攣してゐた。私の指先はぶる／＼とふるへてゐた。異常の場合のたしなみと云ふ外皮を破つて恐ろしい昂奮が次第に私の全神經を波打たせました。名譽もあり、單純である嫌ひこそあれ人格もある夫が、思ふも忌はしい囹圄の中に追ひ込まれて、殊にそれが人格の劣等なあんな詐僞師の泥棒の支配人風情に、さう思ふと私はもうたまらなかつた。そして腹一杯大きな聲で「口惜しい！」と叫びたかつた。私の胸は全く煮へかへつてゐたのでした。

灯ともし頃、私の嵐はやつと鎭まつた。嵐が鎭まると共に私のからだの上に負ひ切れない重荷がかゝつてゐることが痛いほどに感ぜられました。

私は勿論夫の潔白について毫毛と雖、疑ひを懐くものでない、夫は所謂士族の商法でついこのあいだ現役を退いて實業界に入つたばかりの生兵法のこと、會社の經營については何の解らう筈がないのみならず、あの掏摸見たいな支配人を同郷の關係から過信して、うまく／＼傀儡にされたに過ぎない、會社の營業狀態がどんなものやら、それすら夫はほんとうに知らなかつたのだ。その夫が拘引される。それが不測の禍でなくて何であらう。それを思へば、夫を信じ切つてゐる私よりも、人を信じない司法官を相手に、自分の潔白を立證しようとする夫の心の苦しさはどんなにか辛いことであらう。

ことに此事件が若し萬一滿足に解決されなければ……そんな事の萬々あるべきはずはないが……それでも若しあるとすれば恩給はもとよりふいになる。恩給のふいになる位はなんでもないとしても、士官學校に入つて二十幾年、今の長官に累進するまで勤めあげた名譽が地に墜ちねばならぬ。二十幾年の間に、夫は日露、日獨の二戰役に砲煙彈雨の間に身を置き、櫛風沐雨の裡に起臥しながら、それでも武運芽出度微傷さへも負はなかつた。夫の名譽は死生の間に賭して守られたほどの名譽であるのに、その名譽が、あの支配人にうまうまと乘せられたと云ふ偶然の不幸のために地に墜ちる危險にありとすれば、夫の半生は土足に蹂躪されるよりも以上にみぢめであつた。

夫の潔白が明かにされるだらうか、豫審判事ともある人が、今の時代にまさか人を寃に泣かすとは考へられぬが、若

し判事が、何かの先入觀念で事件を見ることがあつたとしたら？若しも夫が有罪になつたらば？ 私達母娘のものはどうなり行くことであらう。そこまで考へて行くと、私のこんがらかつた頭の中には、夫の寃罪が有罪に決定することがどうしても避け得られないやうな氣がして、幻想の中に柿色の獄衣を着た夫の網笠姿すらはつきりと浮んで來ました。起つても坐つてもゐられない苦惱にゐた私の心はのた打ちまはつてゐた。

「お姉さん、人が人を裁くことは恐ろしいことですね」

幸一郎がふいにさう聲をかけた。弟も矢張り私と同じやうなことを考へてゐたのであつた。私はほんとうに人が人を裁くことの恐ろしさを自分に火の粉が振りかゝつた時に、はじめて感じたのであつたが、弟にさう聲かけられると、私は「ほんとうにさうですね」と咽喉まで出て來た同感をぐつと呑込んで、とつさに氣を變へて、

「大丈夫ですよ、幸一郎さん。兄さんに限つて潔白なのだし裁判所にしたところでそんな無茶なことがあるべき道理はありませんわ。私共が裁判所を信ずることが出來なければ、社會に信じ得るものはなくなつてしまふことよ。だから兄さんはすぐ歸つて來ますよ。安心してゐらつしやい」

自分ながら驚くほど明快にさう答へました。弟は私からたしなめられでもしたやうに赤くなつて、

「そりやさうですとも」

弟のちぐはぐな答へが私達姉弟を更に寂しくさせました。然しほんとに夫は歸つて來るであらうか、このまゝで一月も二月も歸つて來ないものとしたら……私の心はまた閉ざされたやうに眞つ闇になりました。

夕飯の少し前に警視廳から電話がかゝつて來ました。それを聞きに出た弟は、やがてぷり〳〵して食卓に歸つて來て、

「いや何でもないのです。今夜警視廳に泊めるから差入は明日から東京監獄へするがいい、監獄の前に△△と云ふ差入辨當屋があるから、そこへ行つて相談しろつて云ふのです。先方ですか？朝の△△刑事ですが、僕まつたく驚いちやいましたよ。あんなに今朝はいやに叮嚀にたとへば此ん麼ことを云ふのです。御主人が野にお下りになつたのは何年ですか、日獨戰爭に於ける御勇名は當時隊にゐた私共の欣慕してゐましたところで、なんてね、私が差入のことを聞きますと、私の方で早速調まして一番いゝ店をすぐにお知らせ申しますつて云つておいて、今電話に出るとどうでせう。おいおい、君は先刻の學生かい、差入は△△がいゝ相だつて呼び捨てに

いけぞんざいの言葉を使ひやがつて、何て下等な奴でせう。僕あきれ返つて了つた」

弟はしやべりながら昂奮してゐました。しかし私には弟の昂奮が單純な空虚な子供〳〵した昂奮にしか見えなかつた。ほんとうに私は私の双肩にかゝつてゐる任務が如何に重いかを感じて全身が縛られてゐるやうな苦しさの中に緊張してゐました。その重い任務を果すためにはどうすればいいのだらう。胸は一杯で、箸すら取り上ぐる勇氣を持つてゐなかつた私は、二口三口、かたちばかりの夕食を濟まして、それから書齋に書生と女中を呼んで、今までより以上の協力を彼等に求めました。

私には此時のやうに書生や女中が親身にたよりに思はれたことがない。そしてその時のやうに彼等の身の上を親切に思ひやつたことはない。私と書生と女中とが一體になつて、立派に主人の留守を守つて見せるぞと心に誓ひました。

その晩遲く實家の母が駈つけてくれました。母は動搖の極玄關にべつたりと坐つて口も利けなかつた。老い先の短い母が今まで思ひも及ばなかつた不祥事にどんなに惱亂したかと思ふと、私の母にすがりついて泣きたい心持は、わけもなく遠慮されて了ひました。

その翌日から私は新しいことばかりを經驗しなければなりませんでした。早朝私は△△差入屋に出かけました。四谷大木戸で電車を下りて東京監獄に突き當るまで、兩側にずらりと並んだ澤山の差入屋のうちで一番大きい店の△△を直ぐ見つけた私は、差入屋の主人に夫が監獄に送られたかどうかを探ねて貰つて、夫が其朝警視廳から送られたことを知りました。そこでいろ〳〵差入の方法について教はり、朝と晝と二度宛一圓の辨當を差入れて貰ふことに定めました。夕食は夫の好きなものを見つくろつて料理したものを自分で差入れようと決心したのです。日に一度でも私の手料理を喰べてゐると氣付いたらば、どんなに喜んでくれることであらう。私の心づくしに夫の心が少しでも慰められるならば、私はたとへそれがどんなに辛いことであらうとも行はなければならない、私は一先づ自宅に引取つて急いで料理をいたしました。

夫の好物は鯛の西京燒と淺草海苔の鑵詰でした。それをたつぷりお重に詰た私は、書生に持たしてやることが不安に思つたので、自分で持つて行くことに定めました。

私はまたとぼ〳〵と市ケ谷の坂を下りました。何と云ふ大きな監獄でせう。高々と物凄く聳ゆる赤煉瓦の塀は、雨とほ

とり、色を失つて魔の廢墟の感じを與へます。塀の上からは一軒の役所の胸から上へ一本の太い煙突が見えて、すゝけた煙がぽこ〳〵と吐出されてゐました。私共の「東京」と軒を接しながら、その一軒さきが全世界と隔離された別世界であらうとは。私はおのゝきを以て此現實を見ずにはゐられませんでした。監獄の門の前には數本の櫻があります。櫻の枝には黑い蕊がまだ殘つてゐたことが私を驚かせました。人外の境にも櫻だけは人の世の春をそのまゝに咲こぼれる、それは自然が人類に對して示した偉大な皮肉ではあるまいか。

巨大な監獄の門は魔の牢獄の物語りのやうに嚴に冷たくとざれてゐました。此門のなかに私の夫は閉ぢこめられてゐる。動物園の獅子よりもまた淺ましく一切の自由を拘束されてゐる。彼には何の罪もない。それだのに……私はこみ上ぐる悲しみと憤りをじつと下唇で嚙みしめてのぞき窓の方へ歩きました。巨大な監獄の門の一つの目であるのぞき窓の内側に、一人の監守が短銃を下て立つてゐました。帽子の顎紐をかけてすつかり武裝してゐる監守は、私の顏を見ると横柄に「面會か、差入れか」と聞くのです。私はこのぶしつけな言葉にむか〳〵する胸をじつと押さへて差入れのためであることを答へますと、鐵の小門はぎいと氣味の惡い音を立てて開きました。そのくぐり戸を拔けますと役所の前の廣い玉川砂利の庭に出ました。その庭は櫛で梳いたやうに、箒の目が通されて、塵一つこぼれてゐず、下駄で步くのさへ憚られる位でした。その庭を拔け役所に添て裏へ廻つたところに驛の開札口にそつくりの差入口があるのです。差入口は持込みの札が要ります「夕食持込み、高田千代子、高田慶之助」と半紙半枚に認めたのを一枚書いて行くのでした。

私は詰めたお重と此持込みの札を出しますと、中に居る看守は無言で一つの箱を持つて來ました。その箱はお辨當の箱とは名ばかり、湯垢に染まつてゐる上に、ところどころ剝げちよろけて車力の辨當よりもまだ淺猿しいものでした。私はそれだけで胸が一杯になる氣がしました。けれども看守は平氣で私の持つて來たお重の蓋を開き、いきなり箸でその汚い辨當へ移し初めました。

攪き交ぜた御飯は美味くない、しかし御飯はまだ好いとして、お肴も香の物も一緒くたにその汚い剝げちよろの辨當箱に移さるゝのを見た時、私は泣きたくなりました、夫の好きな香の物はどんなに生臭くなつてしまふことであらう。折角の心づくしを、ずたずたにして了ふやうな看守の仕打を私はつく〴〵怨めしくてならなかつたのです。

夫の收監は一週間か十日位のことと初めの考へでは居りましたが夫は幾日經つても歸宅の模樣もなければ、事件はます〳〵紛糾して、接見は禁止され、あまつさへ手紙の往復すらすることの出來ない全く遮斷されて了つたのです。保釋の許可など何時になつたら下るやら皆目豫想さへ出來ませんでした。

今は氣永に沈着に夫が明るみへ出る日を待たねばならぬ身の上であることを承知してゐながら、矢張り焦れに焦れた揚句私は激しい齒痛に襲はれ、その日は顏一杯が腫れ上つて熱は四十度を越え、ともすれば、ふら〳〵と氣を失ふまでに苦しかつた。收監されて二十日目の午前十時頃でした。けたゝましい電話の鈴が聞えると間もなく書生が「裁判所から奥樣にお電話です」と傳へました。「裁判所から」の一言がぎつくりと力の落て居る私の胸に響ました。私の胸に電光の如く閃めいたものは「もしや夫が自殺でもしたのぢやないかしら?」と云ふ不吉な豫感でした。

軍人氣質の夫が自分の持つてゐる潔白をどうしても證立てることが出來ないと感じた時に、早まつた死を選ぶに違ひないと云ふ豫感は收監のその日から私の胸にこびりついて、朝な夕な私を苦しめずに置かなかつた。

「とう〳〵その時が來たのだ、夫は自殺を決行したのだ」

私の頭は極度の神經衰弱をおこして居りました。そして少しのことでもそれが凡て凶事のやうに思はれ恐ろしい程脅迫觀念が強くなつて居た故もあつたでせう。私は足がすくんで、もう動けなかつた。それでも氣を張り詰めて受話器を握つて「もし〳〵」とそこまで云つた時、私は急に目まひが來てばたりと倒れてしまひました。けれども斯うしてはゐられない、どうしてもそれを聞かなければと、心を勵まし唇を血ににじむ程嚙みしめてやつと立ち上つて電話機にしがみついた途端私の眼界はまたもくら〳〵と眞つくらになつて、私は氣を失つてゐました。

私が正氣づいたのはそれから二三十分の後で、裁判所からの電話は全然不吉な豫感を裏切り、明日午前十時豫審廷で被告と面會を許すから出頭するやうにとの事でした。

夫に會へると云ふ喜びが私をその夜一晩まんじりともさせませんでした。どんなに變り果ててゐることであらう。それにしてもどの位やつれてゐるかしら、明日會ふことを知つてゐるのかしら、さま〴〵なる聯想が私を喜ばせたり、悲しませたりしました。翌朝早く妹に來て貰ひました。私だけ

ではとても感情が動搖して短い時間に充分に聽き充分に云ふことが出來さうにもありませんでしたから、聽き役は妹に任せることにしたのでした。

私共の麻布から霞ケ關の地方裁判所まではいくらもかゝらなかつた。ために二人は歩きたくもない公園を一時間近く歩かなければならなかつた。やがての事に、十時が來て二人は地方裁判所の入口に立ち、老ひさらばうた廷丁に導かれて豫審判事の室の前に立つてゐました。そこを幾組も〳〵未決囚が通りました。浅黄の着物を着て、深々と網笠を被り手錠をはめられて行く囚人の一人一人が夫であり相な氣がして、私の胸は何度わくついたことでせう。引摺らるゝやうに重い足どりをはこんで行くみじめな姿に、私の胸は闇くとざされずにゐなかつた。鉛のやうに重い感情が胸一杯に流れてゐました。その時に歩いて來る一人の深編笠の男、たとへ其衣類が私の差入れたものでなくとも、そのものごしが夫であることを一目で私に教へました。私はいきなりとりすがりたかつた。平靜を持することは時として死を選ぶよりも辛いものです。夫は吸ひつけられるやうに心持ち足を停めましたがすぐ巡査と共に豫審廷に這入りました。待つほどもなく私達は廷内に呼び入れられ卓を挾んで夫と對座いたしました。手錠ははめられたまゝであるが、深編笠は取られてゐる。心持ち色が青くなつてゐる外に、少しのやつれも見えなかつたことが、先づどんなに私を喜ばせたでせう。私の心は安心と喜びとにふるへました。そこへ豫審判事が參りまして、

「被告の方から營業上の事について家族に是非面會したいと願ひ出たから特に許したのである。從つて事件に關しては一言も觸れることを許さぬ。被告も永いことはないだらうと思ふが、それにしても調の終るまでにまだ一二ケ月はかゝると思はなければならぬ。尤もその間になるべく早く接見禁止を解いてやるつもりである」と云ひ渡してから、「面會人は忘れないやうに筆記をして行かれたがよからう。」と云つて用箋を呉れて豫審廷を出て行きました。あとには書記が一人、せつせと自分のことをやつてゐます。夫と私の目は待つて居たやうにはつしりと合ひました。私の胸の中で熱い涙が流れて行きます。やゝあつて夫は、

「斯うした姿であなたがたに會ふことはまことに心苦しいが、それは災難だと諦めて貰ひたい。私は飽迄潔白なつもりでゐる。恐らくその潔白は貫かれるであらう……」

夫がさう申しますと、書記はじつと私たちの方を振向きました。少しでも言葉が事件に觸れたからでせう。

夫との會話は會社の方の用談だけしか出來ません。書き止めて來た手帳を見ながら夫の言葉を書きしるして、それも忙しく出たり入つたりする判事の方に氣を取られ勝ちに、そのうちに與へられた四十分を經過してしまつたため、判事は「それでは時間も過ぎたから其位で切り上げる方が宜からう」と申しましたので、私達は名殘惜しくも立ち上がらねばなりませんでした。「小夜子は達者か？」夫のこの言葉を最後に萬斛の思ひを互に胸に殘しながら私達は廊下に出ました。夫は編笠を被つて間もなく看守に送られて出て來ました。わづかな目禮が私達の間に交はされたばかりで、夫は力なく引かれて行きました。

彈かれたもののやうに夫を追はうとした私は、妹の優しい双の腕にしつかり羽交絞にされてゐました。妹の息を私は耳に感じながら我知らぬ熱い涙を妹の胸にしましてゐたのでした。そして夫の姿を心で送りながら、家に殘した小夜子のことを、あの可愛い、子供のことを思ふのでした。

主人が收監されまして以來、私の心を縛る三筋の繩がありました。その一筋は獄中の生活が長引けば長引くほど、もしやその苦しみに堪へかねて有らぬ事實を承認してしまひはせぬかと云ふ事でした。被告の妻としてその立場から見まするならば、豫審判事のやり口は封建時代の町奉行の心持が脫け切つてゐない。それは責道具こそ用ひされ、矢張り緩慢なる一種の拷問の制度です。被告者は未決に投げ込まれて以來長い間調べらるる事なく捨て置かれる。來る日も來る日も無爲と焦燥の連續であることは、どんなにか未決囚を苦しめるでせう。愛慾の府である人間が、愛慾の世界から隔離され、一切の自由を束縛されて檻に入れられた猛獸のやうに跪坐することを餘儀なくされてゐることが、堪へらるる事でせうか。私は監房を玄關の二疊にたとへませう。あの二疊に押し籠められて外出も談話も横臥も、自由と名づけられるこればかしのことでも禁ぜられてゐるとしたら、私はきつと氣違になつてしまふにちがひありません。豫審でも進行しつつあるのなら兎に角も――私共の主人はかなりに氣の短い男であるために、私はその苦痛に堪へられず、判事の放任のトリックに罹つて、心にもないことを承認して了ひはせぬかと云ふことを深くおそれました。おそらく被疑者の妻としてこれ以上の心配はございますまい。夫がたつた一日でも自己の良心を欺くならば、千日に刈つた萱を一日にして無駄にするのたとへ、私共の身を削るやうな慘憺たる苦心は水泡に歸して了

ふのですから、
次の心配は子供の事でした。私どもには所謂眼に入れても痛くない簪の玉のやうな小つちやい小夜子があります。小夜子はまだ、ママと呼び、パパと云ふ片言すらもまわらない赤兒なのですが、私等の生命にもたぐふべきだいじな〳〵小夜子なのです。この小夜子が夫の留守中に萬一のことでもあつたらば、夫はどんなに憤るでせう。歎くでせう。私は又何の面目あつて夫に見えませう。たとへば高價の全財産が火に焼け、水に流されやうとそれは小夜子の何物とも比較される値すらもない。まつたく私は小夜子の健康のために、夢の束の間と雖、心安い私を有しませんでした。

第三の心配は、事件はどうすれば秘密の裡に置くことが出來るかと云ふ事でした。主人の收監は幸に當時新聞記者にすら嗅ぎ出されずに濟みましたが、事件がそれ程秘密に進行しましたために、世間に知られなかつた收監當時は、電話や來客は主人のゐます時同様で、殊に困りましたのは、既に日を打合はせた旅行や會見などが、いくつもいくつもあつた事です。大抵の向には主人が北海道地方に相當の日子を要する旅行に出たことにいたしましたが、何ぽ「急に參らなければならなかつたものですから」と云ふ但書も、既に主人と日取を定めた約束のある方を欺き得ません。それを強辯すれば強辯するほど辻褄が愈々合はず、私はそのために幾度顔を赤くしたことでせう。何度良心に恥ぢたことでせう。しまひには玄關の呼鈴を聞くたびに心が冷たくなるやうになつてしまひました。訪客に對する止むを得ざる事實の隠し立ても私の心を縛する一筋の繩でした。

誰がどんなに隠しても社會の耳目は覆ひ切れません。主人の收監は先づ主人が關係する各方面に次第に知れ渡りました。まだ卅日も經ないうちに世の中と云ふものを泌々と味はなければなりませんでした。それは私にとつて顔を逆に撫られるやうな憤りと悲しみの記憶に充ち〳〵てゐます。

主人は會社の他に個人で或る原料の商會を經營してゐました。それは使用人任せにしても相當の成績を擧げてゐたのでしたが、主人の收監と共にその經營は段々左前になりました。私がそれを挽回しようとして出來るだけの努力を傾注してゐます時、恰度主人の親友で或る會社の重役をしてゐる方が、非常に同情され、その盡力に依つて三千圓足らずの納め物が出來ました。代金はその重役の方が自分で受取つて私の方に下げて下さる話であつたのですが、頂きに參りますとどうでせう。主人がその方に一時お立替を願つてゐた二千圓を

そつくり天引にして渡されたのです。私は計算の仕譯書を見てゐる中に、止め度もなくこぼれ落ちる涙をどうするとも出來ませんでした。三千圓の商品を拂いてやらうと云ふ先方の意志は、それに依つて二千圓の立替金を決濟させようと云ふ功利的心事の外に何物をも含んでゐなかつたのではなかつたか、あいつは左前だ、商品でもある中に取つておかなければと云ふ冷たい算盤の所有者が、否算盤そのものが夫の親友ではなかつたか、私は親友の正體に呆然自失しなければなりませんでした。殊に一言の相談もなく商品代とは全然別途の負債を天引されたことに「私を女と侮ればこそ」と云ふ、無限のにくしみと憤りとを感じないでゐられませんでした。

此人だけはと賴み切つた夫の友人のほとんどすべては、俄に路傍の人となりました。御會ひしたいと云ふこちらの希望は常に裏切られ居留守のことはりは珍らしからず、殊に金錢に關するこちらの期待は事毎に裏切られて行きます。訪客の遠ざかり行く中に、主人が永い間親身に世話して來た何人かの人すらも、通り一遍の見舞を云つた後は近づかうともしません。

店の方でも不快な事件が秘かに行はれ、帳簿面はいつもいつも損失續きにばかりなつてゐます。現にこのあいだ迄相當に儲けて來たのだから、そんな譯のあるべき筈はない、何かの不正が存すればこそと疑つて見れば、目に餘ることも屢屢發見されますので、それとな、注意を與へますと、主任を初め「何も好きこのんで損をしてゐる譯ではありません」とすぐ不體腐つて、どゝのつまり、私から慰撫と云ふべき言葉を引き出さねば納まりません。ここにも「女性への侮り」がありました。ほんとうに私は何度地團駄踏んで泣いたことでせう。私の親兄弟や、眞實の肉身を措いて廣い社會の誰もが、落目の私達を見捨て、蔭から舌を出して笑つてゐると云ふことに私はどの位口惜なみだを絞つたことか。

落目の前に彷徨ふ者の姿ほど慘めなものはありません。彼はただ一人しよんぼりとうなだれてゐます。

寂しい私、心の底まで冷たく蒼白め切つてゐる私、私の心は霜枯れの野にも似て、お隣りの高らかな笑ひ聲にさへ反感を持つ時もありました。世の中の幸福が呪はしく、怨めしくさへ感ずるのです。

ともすれば自分の存在をすら呪はしい心と、自分自身を叱る張り詰めた心とが交錯します。その中で既に收監されて一ケ月を經て未だに解決のつかぬ夫の上を暗い心で思ひつづ

けました。

漸くのことで夫の接見禁止が解除になりました。夫婦が顔を見合ふだけのことが許されたのです。その時の喜び！此の場合面會だけでも許されることは妻に取つてどんなに偉大な喜びでありませう。今まで案じてゐた夫の身體に對する不安が除かれ、家事に就ての相談が出來、その上自分の口づから夫を勵ます事が出來ます。慰めることが出來ます。あゝ收監以來五十日目であの恐ろしい東京監獄の面會所で夫に會つたその瞬間の光景は筆に盡せません。

それからの日は私にいく分の力と明るみを與へてくれました。兎に角夫の歸宅まで現在の家庭を維持できれば、と云ふ私の考へは一層私を緊張させました。斯うして又も日は苦しみの中に流れて行きました。恰度それから幾日か經た後のことです。私の前に一人の惡魔が現はれました。それは主人が接見禁止を解かれ、私が毎日市ケ谷監獄に面會に通つてゐた時の事でした。監獄の門衞には專任の看守と、時々これを代行する看守とがゐますが、世に背く牢獄の門衞と雖も冷たい乍ら血は通つてゐますために、監獄の門をくぐる度が重なるにつれてだんだん顏馴染が出來、「御苦勞さま」「御心配でせう」程度の簡單な挨拶が交換されるやうになりました。

或日のこと面會の順番を待ち乍ら庭をぶら〳〵してゐますと、恰度庭の草を數人の囚人にむしらせてゐる一人の看守が私に話しかけました。その看守は時々門衞をつとめてゐる三十二三の一寸した風采の男でしたが、彼は忍びやかに語りました。

即ち彼の看守は矢張り夫と等しく最近まで現役にゐた陸軍の將校(中尉)で夫と郷里を同じうし、郷友會などで酌み交はしたことのある仲であつたが、不圖した意見の衝突から陸軍に希望を斷ち、豫備役編入を願ひ、その後或事業に沒頭したが、それも思ふやうにゆかず、凡て事志と逆ひ、遂には糊口にすらも窮した末、流れて一介の看守として碌々としてゐると云ふ愚痴つぽい身の上話でした。

逆境にゐる私は主人の不幸に引きくらべて運命に惠まれざる此看守の境遇を氣の毒に思ひ「奧さんは？」「お子さんは？」などと聞いても見ました。看守の中尉には思ひ妻がその過去にあつたが、その逆遇に見切をつけ、進んで離緣を請求して去つたとの事でした。その日はそのまゝで別れましたが、數日を經て中尉の看守は私の宅を訪れて來ました。そして彼の地位は如何なる囚人にも接することが出來ることをくど〳〵語りました。話の間に彼は主人のために、そして私

のために如何なる便宜をも計らはうとすれば計り得ることを暗に仄めかしたのです。

夫が囚はれて居る時に、夫を看守するものの厚意ほど賴母しいものはない、そして夫に對する反感ほど恐ろしいものはない。たとひ先方がどんなに妻に無禮を働かうとも夫を愛する妻は、夫に對する愛に於てそれを免ずるでせう。

彼の訪問を受くるまで彼の境遇に同情を持つてゐた私は彼から「計らうとすれば如何なることをも計り得られる」と云ふ暗示を受けた時に裏切られました。私達が永い間の軍隊生活の精神は官規を盜むものを見逃し得るものでない。その精神こそ行爲こそ、正義を裏切る最大のもので、若しも他の場合であつたならば、私は儼乎として彼に反省を促すか、でなければ面會を拒絶したでせう。

けれどもさうするために、私の境遇はあまりに弱かつた。私にはさうすることに依つて夫が迫害を受けることが憂へられた。のみならず法規に觸れないならば傳へて貰ひたい必要は勿論あつた。しかしそれは自分の良心の裏切ることである。

私は突然訪れたこの看守のためにお茶菓子だけしか出さなかつた。彼があはよくばと考へてゐるものの中に如何に厭はしい野望を有つてたかは知らぬが、彼が若干の包金を欲して居たことも確かであつた。私はそれを如實に見抜きながら知らない振りをしてその日は歸しました。

中尉の看守は尙も懲りずに二度ほど參りましたが、私はそのやうな野望を持つてゐる男には笑顔すらも見せてはならぬと決心し、嚴肅に、然しながら主人が收監中であると云ふ弱味の悲しさに、怒らせないやうに應待してゐる中に先づ考へられたことは、しば〳〵門衞をしてゐる男が一たい未決囚に接してゐるかどうか、また彼が名刺なしで云つた名前にも不審に思つたのもあるのでそれとなく一日受付の人に尋ねて見ました。

ところが役所では私の何氣なく聞いた言葉をも決して見逃さなかつたのです。それから二三日して彼の姿は門衞に見えなくなりました。そして私は或日役所で彼に就いてお訊ねを受けた時、彼は三度に亘つて私の家を訪問した事實を遂に白狀し、翌日免職になつたと云ふことを知りました。同時に、彼は主人を知つてゐる中尉だとは眞赤な嘘で尙名前も僞名であつたことも解りました。

弱味にゐれば、地位がある程つけ込まれる。私が若し五圓でも金を包んでゐたら、たとへ夫が強請されたものであつた

としても、法律上の犯罪を形成したでせう。それを思へば私は社會の隅々に充滿してゐる惡の前に戰慄せずにゐられません。

それにしても夫の事件は日數の經過だけで一向に進行しません。二月は去り三月は來ても保釋の模樣は見えないのです。私は斯うして毎日面會に通ひつづけるばかりでした。空しい吐息をつきながら、市ケ谷のだら〳〵坂を下りて黑い魔の扉の前に立ちます。それも既う私の親しいものになりました。その門で「――番」と燒印した下足のやうな木札を貰つてそれを携へて受付に行き、面會人の住所、氏名、年齡、其會ふべき未決囚との關係を登錄して役所の右手に建てられたバラック式控所に自分の番を待つてゐるのが毎日の日課でした。面會は未決囚一人に付一日一回、二人まで許されて居るのだと申します。控室は男女共同じところですが、眞中に仕切がしてあつて、疊付のベンチの席になつてゐるいかにも殺風景そのもので、既に此處で、荒寥な監獄の雰圍氣を感じます。就中面會番號を讀みあぐるあの老看守のかすれた聲は冥府のやうな氣味の惡さ、幽凄な氣分との中に人をひき入れずに置きません。聞けばあの老看守は長い間死刑囚を絞首臺に引き上ぐる役目をつとめてゐるとか。死をみつめてあきらむる事を餘儀なくされてゐる死刑囚を鬼氣人に迫る絞首臺の上へ、平氣で引上げて行く老看守、私は物語りの鬼人を目の前に見るの心地がして、あの老看守の顏を幾十度見たことであつたらう。

待合室には五六人から二十人近くの人が待つてゐるが、半數以上は女で殊に赤兒を懷に入れたり抱いたりした女か、さもなくば花柳界に居るか、花柳界出の女が一番多數でした。纎弱い少女から生血を搾つて生活してゐる曖昧屋の女將風の女の幾人かを待合室で私は觀察しました。その一人は五十を越してゐながら邪淫そのもののやうに、酒太りに肥つてゐて、抱妓を供に何度か面會に通つて來ました。彼女は詐僞賭博で檢擧された情夫に面會に來るのであつたが、待合室で臆面もなく情夫が賭博の名人であることを自慢にしてゐました。他の一人は四十前後の娼妓上りで、横領で擧げられた男の妻であつたが、ゲラ〳〵笑つたり、男子の待合室と話を交はしたりしてゐました。彼女の頭には羞恥の觀念が、ちよつぴりともなく、どうかすると淫な性の交渉までを平氣で話材にしてゐました。斯樣な婦人待合室を階級づけ

て見ると、その大部分を最下層の階級に屬する人々であるが、その中で工場勞働者の妻女と見える幾人かは極く眞面目で終始隅の方にうつむいてゐました。

男子の待合室も大體婦人待合室と空氣を同じうし、博徒、定職のない勞働者等が主で、極たまに商人風の男、會社員肌の男、中には相當身なりの者も見出されました。待合室の空氣の中に彼等の面會せんとする未決囚の悶えと悲しみとが、あまりに閑却されてゐることが私の心持を常に暗くさせました。彼女たちの夫は、友人は眼の前に囚はれて居る。その一方には未決囚の行手を暗示するかの如く柿色の獄衣を著た囚人が鐵の鎖で珠數つなぎにつながれて勞役してゐる。人ならば、血が通つてゐるならば、彼女たちは、あんなに平氣であんなに饒舌でゐられまいものを――、

私の心はその雰圍氣の中に石ころのやうに冷たくなつてゐたが、或日、ほんの一度、美しい人情の花を待合室に見ることが出來ました。

彼女は三十にはまだ屆くまい勞働者の妻で、夫は止み難い男の意氣地の喧嘩のため傷害罪として檢擧されたのでした。三人の子と妻とを腕一つで養はなければならない勞働者のこの不測の禍は、一家をして忽ち饑餓の獄に追ひ込んだのであつた。稼人を失つた彼女は泣く兒を柱に縛して、封筒張りの内職に日夜手を休めるひまもなかつたが、子持の纖弱い女手の、その苦役の勞銀は子供に粥をすゝらせるさへ不足でした。

彼女はそれでも月に二度づゝ面會に來た。愈々夫の豫審が終結して懲役四ケ月の判決を言渡され、明日は巣鴨の監獄に服役することになつた。その日最後の面會に來た彼女は待合室の皆の話合つてゐる側で子供を抱へながら聲をあげて泣いてゐた。彼女はたつた一度でも明日から服役する夫に御飯の差入れがしたかつた。そしてそのためにあらゆる算段をし、一方には徹夜業までしたが、どうしてもその希望は叶へられなかつた。不運と不甲斐なさに慟哭した彼女の涙の中にこそ、千萬金にも換へ難い女性の、人間の眞實が宿されてゐるのでした。

待合所の人々は彼女のために若干を醵出してその差入費として贈りました。それを、はにかみと喜びとの中に納めた時の彼女の顏の美しい輝き、私は眞實な彼女に會つたことを忘れ難い喜びといたしました。

面會室に待つてゐると例の「絞首臺」を受持つ看守が人間味のない聲で「――番」と呼び上げます。その聲に應じて彼

所を拔け鍵形の廊下を渡りますと、面會所の前へ出ます。面會所の數は九つか十、連續して箱を並べたやうに立つてゐます。一つの箱、即ち其棟の一區域は四尺角位でせうか。その一區域毎に何號と號づけられてゐます。呼び出しの看守が「何番(面會人の番號)は何號(室の番號)」とどなります。その指定された室の前に行つて「這入つて宜しい」と云はれるまで土間に立つてゐるのですが、その間に若し聞かうとするならば、既に面會中の囚人との對話が手に取るやうに聞かれます。

或日の事、墮胎で擧げられた女囚に、その情夫の友人が面會に來てゐました。女囚は既に二年の刑期が確定して數日中に八王寺に護送されるのだつた相ですが、女はそれを堪へ難いものとして絹を裂くやうに泣き號びます。無反省な彼女の甲高な泣き聲は、私をして耳を覆はせました。何と云ふ無智な憫な女でせう。

或日復私は聞くに堪へないことを聞かなければなりませんでした。面會に來た女は三十五六とも見える肉感的の女で華奢な眼鏡をかけ、お召しかなんぞのりゆうとしたなりをしてゐました。囚人はその女の亭主らしいのです。女は夫がしば〳〵獄中から手紙を送ることに先づ不平を云ひ初めました。現に「今日もあなたが來いと云ふから仕方なく面會に來たのですが、私は御存じの通り一人で留守居してゐるもので、そこまで出るにも、窓も戸も締め切らねば出られない、それを知りながら呼び出すのは隨分非道いことであり、こちらにとつては迷惑なことだ。だから今後面會に呼出さないのみか、手紙も寄こさないで欲しい」と隨分つゝけんどんに男に當り初めました。

男の聲は優しかつた。強情な彼女をなだめすかしつゝ、或る一つの書類を探し出して呉れることを女に賴んで居ましたが、だん〳〵昂奮して行つて「そんな書付はありませんよ」「いやあすこにある筈だから」「ないと云つてゐるぢやありませんか」二人はたうとう喧嘩を初め、面會時間が切れた時、女は取り亂した眞赤の眼をして面會所を出ました。何と云ふ淺ましいことでせう。私は聞くまじきものを聞かされてその日一日不快で堪へられませんでした。

面會人の這入る箱には、二人以上並ぶことは出來ない、入口は扉になつてゐて囚人と對する方は、並背の人で乳の高さ位の柵になつてゐます。そこから約二尺位の土間を隔てる先方に、驛の開札口にそつくりの小さい箱が立つてゐます。其箱の、男の丈で胸のところに開き窓があります。面會の時

はその窓の板戸が開いて硝子張の中に囚人を見るやうになつて居ります。その硝子張の窓越しに二尺も隔てて面會人は囚人と話さなければなりませんので可なりの大聲でなければ先方に響きません。面會時間は普通五分間で受持看守が特別に好意を表してくれる時は廿分位まで話せることもあるが、さもない限り五分間で終るのですから、話さうとする事に相當に腹案をたてて、恰度長距離電話をかけるやうに順序よく話して了はねばなりません。面會人との間には受持看守が佇立して話の摘用を筆記してゐますから、かりそめにも事件に觸れることを許されないのは勿論ですが――。

主人は先づ何よりも一家の健康と、營業上のこと、訪客のこと、手紙のことを聞きたがりました。私はそれを如何に組織立てて報告するかに自然に馴らされながら、多くの婦人の面會人が時間を極めて有効に使用することに就て、何等訓練されやうとせず、たあいもない、ちぐはぐの交話で時間を失ひ、ほんとうに在監の人を安んぜしめ得ない事實をしばしば悲しく思ひました。

その日に限つて私は面會の時間を遲らしました。いつでも午前に參るのが午後になつたのです。面會所に行くとすぐ夫は氣づかはし氣に遲くなつた譯を尋ねました。

「小夜子がどこか惡いのぢやないか」

夫は忙しくそれを尋ねました。私にはそれほどに子供を思つてくれる夫の志が何より嬉しかつた。涙ぐましい程嬉しかつた。しかし小夜子は病氣ではありません。今朝も私の出掛けるのをお小間のとしゑの背の上からにこにこして「左樣なら」してくれた程でした。私は夫の小夜子に對する心配を忙しく說くために、

「實は昨晚新富座に誘はれましたものですから」

「新富座へ？」

「昨晚吉田さんの御夫婦と新富座に參つて少し今朝寢過ごしたものですから」

「芝居に行つたのか」

「はい」

夫の顏色は見る〱內に色をなしました。私は「しまつた」と思つたが、云ひ解く間もあせらず。

「用はない歸れ！」

憤に燃える其聲が礫のやうに私の耳朶にはつしと投げつけられると同時に夫は面會所の中に顏を見せませんでした。

その瞬間何と云ふ嫉妬に燃える眼であつたらう。憎惡に沸

き返る眼であつたらう。私は射すくめられる冷たさを感じた。しかし夫にも勝るものは夫に對する私の本能的反感であつた。侮蔑と憎惡であつた。

夫を牢獄に送つた時に妻はあるがまゝの味覺すら失つてゐる。好みのお料理にさへも舌皷を打てぬ程、味覺の神經までが痲痺してゐる。何を見ても樂まない、何一つ私を慰むものもなかつた。ほんとに花は惠まれざる薄倖をかこたしめ、月は身の不遇をかこたしむる。夫の收監されてからこのかた、たとひ夫が聞くことに興味を感ずればとて、私は物見遊山に就て語るべき何の材料も持つてゐなかつた。

すべての迫害と屈辱とに面しながら、夫の氣力を弱らせるたゞ一つの迫害すらも屈辱すらも夫に知らせまいとして、肝膽を碎く私の外の私は有り得なかつた。からだを以て夫の楯になつてゐる私であつた。

その前夜新富座に行つたのは止み難い事情があつたのでした。夫が媒酌をした或る會社の課長である法學士とその夫人が、ふとした誤解から圓滿を缺き、やがては離緣沙汰にもなるやうな有樣になつて參りましたため、私は媒酌人としての立場から及ばず乍ら此幾晩か誤解の原因を解くことに奔走し、漸く纏まつたため、昨夜はその諒解祝を兼ね兩方の一族が揃つて觀劇することになつたのに招かれましたのでした。その事を私から聞きもせずに、私が浮かれ廻つてゐるかの如く取つた夫の心持に反感を持たずにはゐられなかつたのです。

しかし私はまた反省せずにゐられませんでした。大人でも病人であれば子供のやうに駄々をこねると同じやうに、夫の心理も、堪へ難い苦惱に面して精神の平衡を失つてゐるのだから、その發言はたとひどんなに無理でも許されなければならない、寧ろそれを憐れみ、優しい心持で搔い撫でてやることこそ妻としての私の任務ではないかと。

翌日は早朝面會に參りましたが、夫は何ぞ計らん氣分が惡いと云ふ口實で面會を謝絕しました。そんなことは曾て一度も例のないことですのに。

「まだ執念く私を疑ぐつてゐる」とさう考へた時に私はもうたまらなくなつた。夫に對する反感と侮蔑とが私を征服してゐました。それは夫の病的な嫉妬である。けれども何がために嫉妬されなければならぬのか、夫は私が面會の度毎に訪客の名と私の顏色とをくらべてゐた。私の顏色を見遁すまいとするが如く、暗い疑の眼で私の顏色ばかりを見てゐた。何よりも私の心を監視しやうとするのが夫の態度であつた。

しかし今日まで妻をさへ信ずることの出來ない夫の心事を強いてその境遇のさせるわざと好意に解釋してやつてはゐた。そして文通が許されてからは、私の日記を毎日入れたのはこの無用の懊惱から解放してやりたい心持に外ならなかつたのに、私の心持は慊らなかつた。

收監以來心神兩面共に負ひ切れない重荷を負はされて、生きてゐる事さへ物倦い日がどの位あつたらう。死んで了ひたい夜が幾晩あつたか知れない。たゞ萬事は可愛い小夜子に勵まされて夫の苦痛を夫婦のとも〳〵の宿業として堪へ來つたのであつて、寸分たりとも心のひまのない生活は、嫉妬を起す餘裕のある夫の現在が却つて羨ましい位であるのに、それを勞はつてくれようとする心持でも持つとか、却つて……

その事のやうに私を悲觀させたものはありませぬ。收監このかた私は夫の眞實の親友のなかつたことを先づ覺らねばなりませんでした。忠實な一人の部下のないことを知らずにゐられませんでした。そして今人を信じ得ない夫の人格がさうした必然の根本であることをまざ〳〵と見せられた時に、私は極底に突き落されたやうな幻滅を感じたのです。收監以來其幻滅は根限り回避し來つた私は、もうどうする事も出來なかつた。

夫のこれまでの勳位官等は、夫の如何なる長所を裏書するか位は素よりとつくに知つてゐました。それは陛下の軍人として軍服を著た時にのみ權威づけられるもので、私の夫としての高田には何等價値づくるものではありません。

私は幻滅の彼方に立つて、絶望と侮蔑にどうにもなれと思つたのでした。しかし、さう思ふ事すらも許されない私でした。

監獄に於ける私達夫婦の一記錄としての芝居の話は恐らく一生私の心を淋しくさせるのでせう。

讀物の差入に就ては、私よりも讀書家である妹に一切を任せました。妹は收監と云ふ不慮の災厄を有效にするためには、今まで攻城野戰に關する書籍か、さもなければオルソドックスの經濟學の書物、と云つたものの外眼を通したことのない主人である丈けに、その專制的な古めかしい時代遲れの頭腦を改造することが一番適當で且大切なことだと信じたらしいのです。妹は私達と異つて思想的には極めて裕かな新しい世界に住んでゐました。

彼女は先づ官位や、勳等を生命的な誇とする夫の固有觀念を打ち碎くことに全力を注ぐことに出發しました。それは眞

の人間の芽を心の奥から呼び醒まさうとする偉大なる事業で、一朝一夕に遂行し得られないものであることは勿論ですが、此機會に堅い外皮のたつた一部分でも破つて置いたならばと云ふ希望をかけたのでした。

軍人を生活として、權力と階級とを一體とする專制的支配の偶像が私の主人の全部であつた。その夫が野に下り、初めて實世間に面して、事業を成さうとした當時の夫の頭が如何に堅く如何に冷たかつたかは容易く想像の出來ることに違ひない。しかし斯うした頑迷な頭の所有者には、武士的な義理堅さと、義侠的心情とがあることだけは否定出來ません。これ丈けがせめてもの夫の價値であるかも知れません。妹は先づ夫に自由の何ものであるかを敎へようとしました。ルッソーの著述にかゝるすべての著書に次いで、ベルトランド・ラッセルの著述、「自由への道」「政治の理想」「社會改造の原理」「愛國心の功過」などを差入れました。ラッセルの著述はかなりに古い頭の根柢に動搖を與へたらしいのですが、かうした大手の責道具は矢張り強い刺戟を與へ、さうもなかつたため、妹は一轉して一燈園西田天香氏の「懺悔の生活」を入れました。果して「懺悔の生活」は激動を與へました。主人は幾度かその一册を繰り返して讀んだことか、天香氏が、否一燈園が學貧學愚の道場をモットウとして、懺悔の托鉢に生を置き、不斷に罪を負ふてあやまらうとする一燈園の無我有の心境は夫の長い間の心事に對する大なる脅威であつた。夫は獄中から懺悔の生活を私にも讀むやうにすゝめ、その就中鹿ケ谷夜話の熟讀を勸めました。私は夫が引用した其句の中に一燈園の謙虚な祈りをたゝへてゐることに氣がついた時、心の底からの喜びを感じました。そして私かに西田天香氏に感謝の祈念を捧げました。一燈園主義がおぼろ氣ながらも主人に理解され來つたことを知るや、妹は乘ずるやうに倉田百三氏の「出家とその弟子」を入れました、「父の心配」「歌はぬ人」を入れました。その他親鸞に關する本を數册入れました。

主人は恐ろしい程の興味を持つて、「出家と共弟子」を讀了したらしいのです。その感想として「私は私の過去が第一幕の松若の父であるかのやうな感じがして、今更ながら恐ろしさとおろかさとを泌々と感ぜざるを得ぬ。何と云ふ永い眠であつたのか、私は面目ないやうな氣がする。大聖親鸞ですら、あのやうに煩惱に苦しみ、あのやうに罪の重さに惱んで居るのに、私は過去幾十年の生活に、心の底から一度だつて私の罪の負ひ目を知らうとさえしなかつた。何と云ふ恐ろし

い無反省であつたら」と今までに觸れたことすらない心の世界に只管な驚異と憧憬とを以て親鸞に關するあらゆる著述を與ふかぎり讀破することに決心したらしく、妹の許にその差入を賴んで參りました。その時の手紙には「私はあなたに依つて眼醒めました。どうか千代子をも私同樣に啓發してやつて下さい」とありました。

私はそれを夫の內面的革命だと信じてゐます。夫は今まで獄中にゐても商業上の所謂お金儲の計劃ばかり立てゝゐたやうですが、その後は諸種の社會事業等に就て色々計劃してゐる事が、手紙の端々に讀まれます。然し妹に依りますれば、さうした感じは社會と隔離され、名利誘惑を受けない時に於てのみ感ぜらるる一種の自慰的心境で、一度名利の嵐の吹き捲くる社會に復歸するときに、千日に温めて一日に冷すの結果を招ぐもので、內的革命が起されたとは、容易に信ぜられぬが、未知の世界に觸れしめたことだけは、そこはかなからの收穫であらうと申してゐます。

アンナ・パプローワの生涯

尾瀬敬止

一

夜が明けるまで
あちらこちらを
おん身の寢臺のそばで踊りませう
ゆめ／＼咎めて下さるな
哀れんだり、祈つたり
嘆いたりして頂かうとは

かほりの高いこの甘さが
わたしの魂、喜びの中から來たもので

どこからか、高い空のやうな所から、かういふ銀の鈴をふろやうな歌が聞えて來ます。その朗かな歌を聞きながら、白と青とで彩つた寢臺の上へ横になつてウツトリしてゐる乙女が一人をります。

乙女は、前の晩ある舞踏會へ踊りに行つて歸ると、その日の花やかな電燈の光や美しい人々の姿が目にちらついて仕樣がありません。夫れで眠るともなく醒めるともなく寢臺の上で長くなつてゐますと、今言つたやうな「夜が明けるまであちらこちらを……」といふ歌を耳にしたのです。乙女はすつかり胸の血を沸らせました。すると、又たどこからともなく輕い足取りで、眞ツ赤なシヤツ見たやうなものに、眞ツ赤な髪と眞ツ赤な靴とをはいたまぼろしが現はれます。しかしこれは天から降つて來たものでも地の中から湧いて來たものでもなくて、かの乙女の胸に挿した薔薇の花の中から浮き上がつて來たものです。夫れで、乙女はムクリと起き上がつてかと思ふと、いかにも嬉しさうな顔付をしてヒラリ／＼と

踊ります。ところで、今日ばかりはちつとも草臥れませせん。いくらさう遣つてゐても汗さへ出ません。しかし、その時、ほんたうに其の刹那、今見たばかりのまぼろしはフツと消えて無くなります。そして、眼がさめると、足許に薔薇の花が落ちてゐるので、乙女はそれを急いで拾ひ上げ熱い接吻をするといふのです。

二

これは、『薔薇の精』といふロシヤ舞踊の一つで、その可憐な乙女となつて物見高い巴里ツ兒をアツと言はせた踊り子は、只今御紹介しやうとするアンナ・パブローワで、この世界的な踊り子が近く帝劇の舞臺に現はれる筈です。パブローワがどんな評判を有つてゐるかは今更説くまでもない事だ、ロシヤ舞踊に通じてゐるエレン・テリーなどは、「ニジンスキーが來るべき世界の豫言者なら、パブローワは光明の女神である」とまで言つてゐます。前置きはそれ位にして、先づパブローワの生ひ立ちから今日までの歴史を、かの女自身の口から説明させませう――。

「私の一ばん古い思ひ出は、母といつしよに暮しましたサンクト・ペテルブルグのアノ小さな住家のことで御座います。私はひとり子でしたから、母と二人で暮らしてゐました。父は、私がてふど二つの時に亡くなりました。」

から、パブローワは自叙傳の中でいつて、舞踊といふものを始めて見た時のことから、學校へ入つた時のこと、卒業してから外國へ出て天晴れの踊り子になつたことなどを細々と書いてゐますが、それを皆んな紹介すると長くなるので次ぎに面白さうなところだけを掻いつまむ事とします。「母はたいへんな信心家でした。夫れで、十字を切ることや、部屋に掲げた銀づくりの聖像の前でお祈りをするやうに敎へてくれたのも母です。それは悲しさうな、でも神々しい顔付をなすつてらつしやるマドンナは私をお見下ろしになつて、自分のお友達になつて下さいました。私達は貧しい生計をしてをりました。全くひどい生計をしてをりました。けれども母はいろ〱と心配しては大きな宴會などへ連れて行つてくれました。八つの時のことで御座います。てふどクリスマスの日が來ましたので、母といつしよにマリンスキー劇場に參りましたが、これが、私のお芝居を見た始めです。ですから、母にどんなものを見せて下さるのですと聞きますと、『眠れる美人』のお伽話をしてくれましたので御座います。夫れからといふもの、私はこのお伽話がたいへん好きになりまし

て、幾度も〳〵母に無心を申しました。『眠れる美人』を作曲されましたのは有名なチャイコフスキーで、オーケストラの最初の音が鳴り出しました時、私は妙にカタクなつてしまひました。そして、二幕目におもしろいワルツがありました時、母はお前もあゝして踊りたくないかと尋ねました。しかし、（それよりか、あのきれえな女の方のやうに、眠つてゐる美人のやうになつて踊りたいのです）と答へました。その時、母は（可愛ゆいことをいふ伯母さん）だと言ひましたが、この事が私の生涯に礎を置くやうになつたとはつゆ考へませんでした。お芝居から戻ります途中、私はその眠れる美人のことを何度も〳〵思ひ出しました。そして、わが家へ歸りますと、（母ツかさん、どうぞ後生ですから私を踊りの稽古にやつて下さい）と申しましたら、母は私を接吻して承知しました。その晩、私は一生涯を踊り子にならうと夢に見チャイコフスキーの曲に合はせて蝶々のやうに踊つたので御座います。私はこの晩のことを思ひ出しますと、ほんたうに樂しくなります。美くして重苦しいやうなこの晩のある時間が私の運命をきめてくれたのですから。」

「翌くる朝からは、踊り子にならうといふ大きな覺悟のことより他には口に出しませんでした。（踊り子になるには、このお母さんと別れて學校へ入らなければなりませんよ）と母が申しますので、（いゝえ、おツ母さんと別れるなんかイヤですよ。だけど、踊りの大家になるのにさうしなければならぬのなら仕方がありません）と、私は答へて母を接吻しながら、（どうぞ、その踊りの學校へ入れて下さいまし）と賴みました。けれど、それを母が最初は許してくれませんので私は泣きました。その揚句校長さんのところへ連れて行つて下さることになりました。さて、いよ〳〵校長さんのところへ出掛けてみますと、驚きましたのは（十の子供は入學が出來ない）といふご挨拶を受けたことです。つまり、モウ二年經たなければいけない事になりましたので、私は、その二年間といふものを早く踊り子になりたい、早く、早くとばかり焦燥つて、夢のやうにボンヤリしたことも何度あるか知れません。」

「やがて十の誕生日が參りました。この日に舞踊學校の校長さんのところへ連れて行つてもらふことを覺えてをりましたので、私から母に申しますと、母は私の決心の固いことを悟りましたので二度目に校長さんのところへ出掛けたもので御座います。そして、校長さんから入學させてやると言はれました時、私は耳が聞えないほど嬉しくなりました、で

も、母に別れる日が來ました時にはさん〳〵泣きました。母もいつしよに泣いてくれました。こうして、私は銀づくりの聖像の守つてゐて下さる靜かで敬虔な家を出まして、新しい世界の中の目がくらむやうな生活に入つたのです。つまり藝術と舞臺の王國へ入つたので御座います。」

「帝室の舞踊學校へ入るのは修道院へ入るのと同じです。この修道院では、あらゆる拙らない冗談はきびしく止められ、只やかましい規則のもとに縛られるので御座います。私達は毎朝八時の大きな鐘が鳴るのを聞いて床を出ますと、監督の方の檢査をすつかり受けて洋服を着換へます。この監督の人達は、私達の手がきれいに洗つてあるか、爪が磨いてあるか、齒は汚れてゐないかとお調べになるのが仕事です。それが濟むとお祈りで、聖像の前では、クラスのうちの一ばん年嵩の人がお祈りの言葉を申します。朝飯は九時で、お茶とパンとを頂いてから踊りの課業に移ります。私達は、ある大きくて風通しのよい、そして大變に明るい部屋に集ります。ここには長椅子が二つか三つ、ピアノが一臺、それに背の高い姿見がたくさん置いてありまして、壁にはロシアの天皇陛下の肖像が掛かつてをります。十二時の鐘が鳴りますと一寸した食事があつて、やがて散歩に出ます。それから四時まで課業があつてお晝食になり、ホンの僅かな時間からだを寛がせただけで、音樂とか操劍術とかいふ時間がありまして、その頃にマリンスキー劇場で興行されます踊りの稽古に參ります。私達の生活は少しも變化がありません。日曜毎に、ロシヤでは殆んど宗教上のお勤めとされます蒸し風呂へ入ります。ときどきには舞踏會へ參ります。かういふ規則的な日ばかりを送つてゐます内で、一ばん大騷ぎをしますのは、陛下がお出でになる時でした。」

「私は、十六の時に舞踊學校を卒業しまして、間もなく（第一級の踊り子）といふお許しを得ました。これは、政府のお役人であるチノーウニツクといふ名と殆んど同じものでして、お公から下される物です。私もこれで漸く一人前の踊り子になりました。このチノーウニツクといふ稱號をもつてゐるのはロシヤに三人しかをりませんでした。それから後のこと、私はタグリオーニの一生についていろ〳〵な本を見ました爲めに、自分も外國の舞臺に出てみたいといふ氣を起こしました。今申しましたイタリーの有名な踊り子は、パリーやロンドンの至るところで踊つたもので御座います。ロンヤにもまだ記憶が殘つてをります筈で、ペテルブルグには、踊り子のうちで一ばん理想的なこの方の小さな足の模型が今で

も殘つてをります。」

「私が、始めて外國へ參りましたのは一九〇七年にリガへ出掛けた時です。このオペラ座ではバレーを二つ遣りましたが、その町にゐるドイツ人達は自分を贔負にして下さいましてもつと遠方の舞臺へ出てはどうかとお勸めでした。リガからベルリンへ參りました時には思ひがけない歡迎を受けまして、私にある深い意味を與へました。そして、强い勇氣をも與へたのであります。此れほどの人氣を博さうとは、私がヨーロッパで忘れられてゐます藝術を御披露しやうと國を出ました時には夢にも思ひませんでした。殊に、パウル・カッシレルさんが會長をしてをられますベルリンのゼツェツション會には厚く御禮を申さなければなりません。私はこの團體へすぐお近附になつて、私達みんなエスプラナーデといふホテルへお招きになつて宴會を開いて下さいました。ストツクホルムでは、オスカール皇帝が每晩御臨幸になりました。しかも、私を宮城へお呼びよせになる御知らせを頂きました時はほんたうに驚いてしまひました。陛下は私を大廣間へ來るやうにとの御諚でした。この大廣間は、宮城を見物に來ます旅行家のやうに、私も以前拜見したことが御座います。陛下は、私のお目にかけた踊りがたいへん面白かつたと仰言つて、それは勿體ないほどのお言葉を賜はつた上に、學藝に功勞のある者へお下しになる勳章を頂戴しました。私はこの皇帝のお褒めに預つてたいへん嬉しう御座いますが、それよりもモツト／＼私を感動させましたのは、每晩お芝居がはねたあと私の泊つてゐますホテルにまで追いて來られる大勢の方々から受けた尊敬で御座います。」

「世間では、とかく踊り子の生活が少しも內容のない浮ツ調子のものゝやうに考へてをられますが、實はこの浮ツ調子といふこととほんたうの舞踊といふこととは一致しません。最も鋭い自省力を缺いてをります踊り子は、自分の藝を決して永く保つてゆくことは出來ないと思ひます。ほんたうに踊り子は、自分を藝のために捧げなければなりますまい。けれど、自分の藝を見て下さる觀客に暫くでも每日の心配を和らげることが出來ますならば、それは踊り子の報酬といふもので御座いませう。この事を、私が一ばん最初に感じましたのはストツクホルムでした。每晩私のうしろから追いて見える方方の中にはいろ／＼な階級の人達がまぢつてをりました。中流階級の男の方女の方、それから勞働者、書記、店先の番をする娘さん、かわゆい裁縫の女工、かういふ人達が居りましたが、その皆さん達は高い聲一つせずにだんまりで、ほんと

にだんまりのまゝで私の馬車のあとを追つて來られるではありませんか、そのあとで、皆さんはホテルの前にお立ちになつて、私がバルコンの上へ出ますやうにと申されます。と、自分の頭の上は嵐のやうにウラー〳〵といふ叫び聲です。ところで、ツイ先頃まではあれほど靜かにしてゐらした方々ですから全く吃驚してしまひました。で、何遍も〳〵御挨拶してをりますと、皆さんは、最後にスエーデンの國歌をいつしよになつて合唱されます。ですから、暫らくの間私はどうしていゝやら判りませんでした。でも、お部屋の中へ駈け込みまして、お芝居で頂きました花束をみんな抱え、その薔薇や菫や紫はしどひの花を皆さんの方へ投げつけたのです。さうしても一向お歸りになる容子が見えませんので、どうしたものかと小間使に尋ねますと、(一時間なりと、奥樣のおかげで一日の苦勞を忘れましたもの)と、その小間使は答へました。私はこの返事を今が今まで忘れません。この返事をしてくれました罪のないロシヤ娘は、私の藝に一つの新しい目的を示してくれたので御座います。それからウイーンへ參りまして、私達はチャイコフスキーの評判な『白鳥の海』を踊りました。その後、パリーで興行いたします團體に加はりましたが、さすがにバレーの大家のフォーキンさんの豪奢な舞臺裝置と音樂のチャーミングには藝術の都であるパリーの人達もたいへん動かされました。けれど、それはフォーキンさんのお力に見物人が魅せられましたので、踊り手の方からは何にも殘りませんでした。このパリーで興行してをります途中で、私はイギリスに參りました。と申しますのは、ロンデスボロオー夫人がエドワード皇帝とアレクサンドラ皇后とをお招きしたある宴會で踊るためにです。ところで、兩陛下にはたいへんお氣に召ましたやうで、おもしろかつた〳〵とばかりの御言葉でした。一九一〇年にロンドンへ二度目の旅興行をいたしましてアメリカへ渡りました。そして始めてニユーヨークのメトロポリタン劇場で踊りました。アメリカの方々にはよほど御氣に入つたと見えまして、どの新聞も〳〵私の肖像を載ます一方では、自分の技倆について幾章も書いて下さいました。それから、私の生涯とか趣味とか感想とかを論じました。」

「自分の事ばかりをたいへん書き並べましたが、最後に、私は自分がよく他人さまから聞かれます御質問にお答へしたいと存じます。それは、なぜ結婚しないかといふ御質問ですが、私の考へますところでは、ほんたうの女の藝術家は生涯を藝のために捧げなければならないと思ひます。なぜかと申

しますと、私には多くの御婦人のやうな生活は出來ません。家族とか生計のために一方を束縛してしまふからで御座います。

三

この自叙傳を讀んでみますと、パブローワが藝術に對していかに眞劍であつたかゞ察せられませう。「かうやつてペンを運んでゐますと、只だもう遙かな目的に向つて絶えず進んだまでゝ御座います。これが、私の成功した秘訣でせう」と、かの女は言つてゐます。しかし、その成功をもつて自分の誇りとしてはゐません。「成功とはどんなものでせうか、それを得たからとてどういふのでせう。私は決してさういふ成功をお芝居の拍手喝采の中に認めませんでした。それよりかこの成功は自分の滿足の中にあるので御座います。」

しかし、「子供の時分に森の中をさまよふてゐますと、成功することは幸福だと信じたものですが、さう思ふ私は迷つたので御座います。幸福とは、ほんたうに蝶々のやうなものでは有りませんかしら。ちよつと人間を喜ばしては直ぐ遠方へ飛んでゆく蝶々のやうに」とも言つてゐます。しかし、無論成功したには違ひありませんので、かの女と並び稱せられるタマーラ・カルサーヰナが先頃イギリスのある官吏と結婚してとかく舞臺に出ることが少く、またカルサーヰナに比較して優るとも劣らぬ技倆を有つてゐるニジンスキーがウインナで亡くなつたと聞く今日では、ロシヤの舞踊界が殆んどパブローワによつて支配されると言つてもさう亂暴ではないと思ひます。夫れでも、「幸福とはほんたうに蝶々のやうなものでは」と言つてゐるやうに、かの女は非常に謙遜な心持を有つてゐます。同時に、「蝶々のやうに」と言つたところに、かの女がバレーに對する爽かな心持も味はれます。それは兎に角、この世界的な踊り子のパブローワが帝劇の舞臺にあらはれるのも間近になつて來ました。だから、嘸かし東京の空氣を波立たせる事と思ひますが、その前に、あるロシヤの一批評家がかの女の舞臺姿を批評した印象をこゝに書いて見ませう。

「艶めかしいまでに哀れつぽくて柔らかな曲線をもつた腕と、冴えきつて生〱とした姿とは、すべての觀客を、それが一千人であらうが一萬人であらうが、凡てのものをみんな或る霧の中へ封じてしまふ。てふど、一つのまぼろしがフツと現はれたやうに。彼女は女のなよやかな魂でおどる人で、驚くほど巧みな表情と、さはやかな顏と、透きとほつた

瞳とを持つてゐる。そして、死んでゆく白鳥そのまゝである」と。

四

以上で、パブローワの生立から心持から藝術を略ぼ紹介したつもりですが、なほ一つ附け足しておかねばなりません。それは、かの女が所謂「藝人」には珍らしいほど質素な生活を送つてゐることです。今それを説明しやうならば、かの女の帝政時代の時からいふ必要があります。

パブローワは、自叙傳の中にも出てゐるやうに、たいてい外國にばかり居りましたからロシヤの土を踏むことが少いのです。しかし、帝室舞踊團の一人といふところから、革命前は年に一度づゝ歸國することになつてゐました。それも、ニコライ皇帝からお許しが出ればどうでも善かつたのです。さういふ風ですから、いきほひ外國に住むことが多く、それも先頃まではパリーやロンドンあたりで踊ることが多かつたし、この邊からなら本國へ歸るのにも道が近くてい丶ものですから、ロンドンのハムステッド・ヒースといふところに一軒の別荘見たやうなものを買ひました。これは、もと或る畫家の持家でして、間數が十六と七町あまりの庭園があります。といふと、たいへん贅澤なといふ氣がしますが、實はそこを唯一の舞踊研究所としたいために買つたものです。それは、別荘の階上が立派な舞踊場になつてゐるだけでも判りますが、この外に美術品を陳列した部屋もあつて、そこにはいろ／＼有名な繪や彫刻などを並べ、みんなバレーを研究するための參考資料とするのです。研究といへば、極く近頃はやはり此の別荘だと思ひますが、その中へ露天の舞踊場をこしらへて見物人を芝生の上に坐らせるものも考案したといふことです。さういふ風に、パブローワはいつもバレーの研究を忘れたことがありませんので、アメリカにをりました時などは、あるホテルの中でもバレー研究者を招いて稽古をさせたことがあります。これは別に大した話でもないやうですがその研究生の中に一人の日本娘がまぢつてゐたことは興味があると思ひます。娘の名は榊原マリオンといふので、當時十四の生ひ／＼しい乙女でした。最初、この研究生を募りましたのは新聞廣告で、それが紙上に發表されると、二千人ばかりの應募者が門に押し寄せて來ました。しかし、さう／＼たくさん受付けることが出來ず、僅か十五人だけ拔いた中に今言つた榊原といふ娘がまぢつてゐたのです。ところで、この娘はまだヤツト十四位だし、非常に可愛いところがありま

したから、ことの外パプローワが愛して、「私はなんといふ珍しい花の芽生を見付けたことでせう。私の名譽と技倆とは、この娘によつてキット將來に傳へられるでせう」と、かの女を接吻しながらパプローワがかう言つたとは、その頃の日本の新聞にも出たことです。

此れだけいへば大抵判ると思ひますが、パプローワのバレーに對する熱心さを更に他の例によつて示しますと、やはりハムステツド・ヒースの別莊内に、十二種類の動物を飼つてあることです。鳩もをれば雞もをり、犬もをれば猿もをると言つた具合です。どいふと、へんに考へる人があるかも知れませんが、これらの鳥や獸物はみんなパプローワの藝を助けるものでして、殊に鵞鳥は、それ自身が踊り子のやうにきれいなものですから非常に可愛がつてゐるとかです。かと思ふと、毎日自分の體重を量つて今日は餘計喰べ過ぎた、昨日は少ししか喰べなかつたといふ風に心配ばかりしてゐるさうです。此れだけいへば、パプローワが今日あることは充分判ると思ひますが、その實際上の妙技は間もなく皆さんの目の前に示されますから、忌憚なき御批評を待つてをります。

（完）

戀愛合戰　宇野浩二著

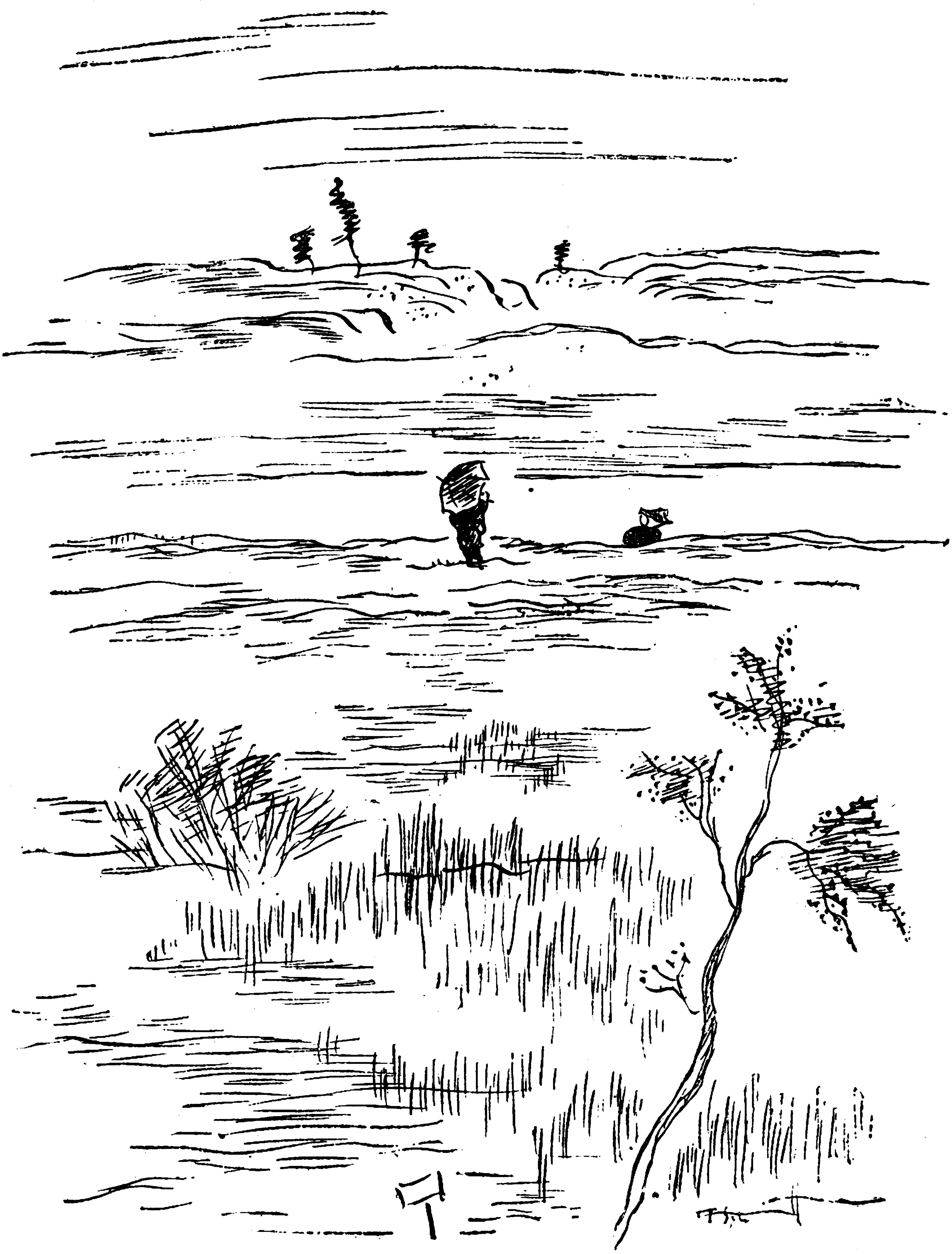
一人の新らしい女優を取り圍んで、澤山の青年文士が戀愛合戰をするといふ筋であるが、同著者の作で本誌に毎號連載され、モデル事件で問題になつてゐる『女怪』の姉妹篇といふべきものである。作中には著者自身も居れば、いま文壇劇壇等にときめいてゐる多くの藝術家が、その戀愛生活の裏面を曝露してゐる點だけでも、實に面白い長篇小說である。（定價二圓五十錢　牛込區矢來町　新潮社發行）

七年の後　近藤經一著

現代脚本叢書第八篇である。『七年の後』『最後の暴風雨』『裸の王樣』『夜の場』『清盛と常磐』等何れも新進の氣鋭を以てものされた代表的脚本が收められてある。（定價壹圓　牛込區矢來町新潮社發行）

愛慾の垢　相馬泰三著

若い一人の女性と、一小說作家とが懇になつた頃から、女が男の下宿へ訪ねて行つたなり、そのまゝ泊りこんで家へ歸らなくなるまでのいきさつを二人の間に取り交された手紙體によつて運ばれてある。燻んではゐるが、驚くべきほどの綿密な心理描寫は敬服の限りである。（定價壹圓牛込區矢來町新潮社發行）



野路　森田恒友

不良少女を飼ふ

——四度羽翼の下に圍うて失敗す——

菊地朝彦

一

凡ては、告白しなければ分らない、私は、私の周圍にまでさうした出來事が起らうとは嘗て想像し得られなかつた、私の生活を繁雜にし、事物に對して少くも或る疑ひを以て臨ましめる樣にして呉れたのは、彼女の私に殘して呉れた置土產なのである、物事を簡單に取り扱ふ性情を有して居つた私は彼女と彼女の卷き起した風波によつて少からず訓へられた、所謂『不良少女』と云ふものが私の目にはつきりと映り出したのは、彼女が私の家庭の一員に加へられてから半年を經過してからの事であつた。

私は、當時、雜誌Nの記者をして、主として編輯事務をやり、片手間に、日本に於ける學者達の業績を記錄して置き度く思つて、S社の中に「博士錄編纂部」を起し、編輯長I氏の好意により專ら其の仕事に鞅掌して居た大正六年の事である、當時、宅は本鄕の千駄木町にあつた、先づ、貧しくはあるが、私に妻、男女の二兒に老婢の五人ぐらし、六間で十五圓と云ふ家賃は少し格安な位の住宅であつた。どちらから見ても、平靜そのものと云つていゝ生活であつた。

それが、たま〳〵或る一ツの分子の混入によつて甚しく搔き亂されたのである。

大正六年の四月のはじめ、東北のF市にある妻の實家から一通の手紙が屆いた、宛名は妻宛であつたが、病身の妻は其の手紙を一と通り見終るとトントンと二階の四疊半にゐる私の書齋へ這入つて來た。

『這入つても、宜う御座いますか』

『あゝ宜いとも、何だか、Fから手紙が來た樣ぢやないか、皆樣おかはりも無いかね』

『えゝ、ちよいと困つた事を頼まれましたの、どうしませう』

手紙を取り上げて見ると、義父からの勘亭流のものものしい筆蹟、時候の挨拶から續いて、妻の次の妹の夏子が妙な事で女學校を退學したが、あと一年しか無い事であるし、元の學校へ歸校させる事もならず、一ツ、東京の學校へ懸け合つて――私が、學校の關係者と特別に親しくいろいろの便宜がある事も承知して居たので――頂けまいか、さうしてお膝許へ置いて頂き監督をして貰へると猶ほ好都合である……

『ほう、もう女學校へ行つてるのかえ、お前と散歩に行つてお壽司の殘りをハンカチに包んで途中モゴモゴ喰べて歸つたと云ふのはツイ此の間だつたんだが』

『えゝ、其りや私達だつて年を取りましたもの、どうなさるお心算？』

『さうだね、學校へ何とか懸け合つて見ようじやないか』

『では、お願ひします、直ぐに返事を出して置きませう』

妻は喜んで、手紙を卷き乍ら階下へ下りて行つた、妻が、喜ぶのには別種の理由があつたのである。

二

私達夫婦は、決して世に言ふ、ローマンスを以て成り立つたと云ふ程の夫婦ではないのであるが、私の生れが九州、妻の生れが東北それで別に親類でも無いのだから、第三者から此の夫妻の結合を見て小說的に潤色したらなにがしかのローマンスを成すものと言へるかも知れぬ、尤も、妻は私のところへ來る以前、陸軍大尉と、今は東北大學の教授になつて居るM氏と緣談がなにがしか進行して居たものを、年齢の相違から只の新聞記者である私を選んだのだから、其の點が所謂告白物の主人公位には成り得る素質がある樣だ、で、その邊は本問題と關係が無いからカットしていゝ、妻は家附の娘には相違なかつたが、母たる人が、養子をして今の妻が生れると間もなく軍人だつた養子は戰死し、そのあとへ入夫して澤山の弟妹が生れた、だから、父とは義理ある繼しい仲であつたのだ。

『何としても、義理のある仲ですもの、よくして貰へば貰ふ程變な具合で、そりや困つたわ』

私の家に來てからも、よくそんな事を話して居た、で、何かあつたら義理を立て、弟妹達を引き立てゝやらうと考へて居た、私も充分妻の意を呑み込んで居たので、今は砲兵中尉になつてるT家の長男が中央幼年學校から士官學校へ進

む前後、其の次の弟で金澤醫專に入學して今は北陸の病院に勤めてる其の次男を直接間接に世話をして來たのであつた。

『夏子が來ればいゝわ、學校から歸つたらうちの事を手傳はしてやれるし、却つて働き手が出來て樂になれるわ』

そんな事も言ひ言ひした。

で、私は、麹町のK高等女學校へ出かけて行つて、校長と相談をすると、丁度缺員があるので、特に試驗なしで入れてやらう――私は學校の前々學年の成績表を持つて行つた――と言つて呉れたので、早速其の由を電報で知らせて上京を促すと翌々日、上野着の汽車で親一人子一人が、信玄袋にずつしりと詰め込んだ手廻り、柳行李一つに蒲團、そんなものをもつてニコニコしながら改札口へ出て來たのであつた。

久しく、さとの方へは無沙汰をしたので、夏子がこれ程大きくなつて居ようとは、夢にも思はなかつた、せいはすらりとして五尺近く、銘仙矢絣の絣に同じ羽織を引つかけ、海老茶のカシミヤの袴を穿いて白足袋に駒下駄を穿き、父に似た盤の廣い顏で、髪は流行の束髪にあげて居た、義父は中學校の體操教師兼書記を勤めて居て、之れは丁度、大塚の高等師範に體操の講習會があつて、其の方へ出席する事にも成つて居た。

『今度は、本統にお世話になります、丁度講習會もありますし、夏子の入學が濟んだら一週間ばかりお邪魔をして講習會にも出て歸らうと思つて……』

若い頃には癇癪持だつたらしい義父は、今は年と共に角が折れた樣に、胡麻鹽頭を手拭で拭き乍ら山下の方へ歩いた、荷物は先に俥でうちへ運ばせ、私達三人は池の端からずつと根津の方へ折れて行つた。不忍の池のところへ來ると、夏子はふり返つて、

『おとつつあん、これが不忍の池ですか』

と云つた。

『うん、よく覺えて置きなさい、迷ひ兒になつて兄さんに世話を燒かすんじや無いぞ、はつはつ』

義父は左も愉快さうに笑つた。夏子は、チラと私に眼をやつて――直覺ではあるが、此の眼はよくないなと私は思つた、然し、ホンの淡く感じた丈けであつたから間もなく忘れたが――池の中にちらちらと日に光る水を眺めて居た。

三

久し振りに逢つた義父と妹、それに對して妻がどれ丈け

喜んだか分らない、子供達も老婢も總出で歡迎した。信玄袋の中から、途中で買つたらしい日光羊羹やら、安積豆などに義母の丹精らしい眞綿などが數々取り出された。

『まあ、澤山戴いてばかり居て』

妻はひどく喜ぶもの丶樣だつた。

歡語の内に暮れて、翌日私は夏子を連れて麴町のK女學校へ行く事になつた、で、追分から電車に乘つて須田町でのりかへ其處から新宿行に乘りかへた。間もなく吾々は五番町の停留場に下車した。

『にいさん、東京は賑やかですねえ』

夏子は私に倚り添ふ樣にして、心持、私の肩に頭を押しつける樣にさへした、其の態度にはあまり馴れ〳〵しさが強すぎるかに見えた。私は豁と放れる樣にして、早く行かうとせき立て丶上二番町から下二番町へ出て、それからK女學校へ行つた。

丁度、校長も教頭も見えてた所だつたので宜しく頼んで、なほ夏子を物かげによんで、宅へ歸つて來る爲めの地圖を書いて與へ、それから神田のS社へ廻つて歸宅した。午後三時頃で、義父も、紺詰襟の服をぬいで和服と着替へた所であつた。

『どうでした、旨く行きましたか』

『え丶、宜い鹽梅でした』

それから、茶をいれて種々と話をしたが、夏子の退學した理由について、義父が說明して吳れたのは、通學したF女學校の同級生に水島と、長崎と云ふ二人の不良女學生が居てそれが夏子と特別の仲のい丶友人だつた、所が此の二人の不行跡が不圖した事から學校當局に發覺したので、とうとう二人共退校を命ぜられてしまつた、然るに二人は酷く夏子を恨み、不良學生を使嗾して夏子を脅迫し學校を退校しなければ酷い目に逢はすとか、夏子の事を有る事無い事學校へ投書をして甚だ面白くないから思ひ切つて退學させ、東京へも出す事になつたと言ふのであつた、此の事は、今から伏線をはつておく必要も無いが——それから何も義父を犯罪人扱ひをするのでは無いが、もう少し正しく話して貰へばよかつたのであつた。然し、私の性質、何事にもあれ、先方の言ひ分を信ずる、ことに近親であれば其の言ひ分に誇張や虚僞が立つて居らうとは思ひもしなかつた、寧ろ、思ひもしなかつたと言ふ事より、さうした事を假にも疑つたりする事が罪悪であると考へる考へ方の分子が多かつたと云ふ事を適當とするであらう。

夏子は、其の日、午後六時頃歸つて來た。

『馬鹿に遲かつたね、道が分らなかつたと見えるね』

私は調戯ふ樣に言つた。

『いえ、そでがえん(左樣では有りません)歸りに、日比谷公園さ廻つたのツーや』

第一日から、東京に於る彼女には、此の大膽が試みられた、然し、私達は、相變らず、善意に解釋するのであつた。

『ぢやア、明日からの通學も心配するがものは無いね』

『そりや貴方、小學校の生徒とは違ひますわ、ねえ、夏ちやん』

妻は、却つて辯護する樣にさへ言つた。之れに報ゆる夏子の笑ひは、姉の朴直をむしろ嘲るが如き笑ひすら見えた――あとでさう思つたのでは有るが――さうして、吾々は晩餐をとつた。晩餐の話題は、電車の中の見聞で夏子は度々、

『東京の人は、綺麗ねえ』

と沁々言つて居た。

一週間の講習を終へて、義父は欣々としてF市へ歸つて行つた。

四

夏子は、毎日お辨當を包んで定まつた時間に家を出て學校へ行つた。只、日に變つて行くのは彼女の服裝と頭髮で、頭髮はいつの間にか引つゝめの束髮が、活動女優などにある樣な形に結ひかへられ、高からぬ鼻へ塗る白粉は次第に濃くなつて行つた。着物もあちこちと取りかへ引きかへ着て行くのであつた。

『夏子が、來た時から見ると、ばかに綺麗になつたぢやないか』

私は二階の書齋から下りて來て、三時のお茶に加はり乍ら妻に言つた。

『そりやア貴方、今どきの娘ですもの、變りますわ、今、うちのかあちやん――彼女は二人の子の母となつた今日も母親の事をかあちやんと呼んで居る――にあの子の事を見せたら屹度吃驚するわよ』

妻は、却つて得意さうに言ふのであつた、のみならず、F市などで愚圖々々してるより東京へ來て女學校に這入つた方が將來の爲めの幸福である事や、お嫁に行くにしてからがF市なぞより東京の方が都合がいゝ事や、早く東京へ出て來た方がよかつた事すら附け加へるのであつた。

私は、自分の仕事が忙しいので、一々夏子の事に氣をとめ

ても居られないので、朝とか、晩とかの食事にせいぜい顔を合せる位であつたから、ふだんは會話する事すら少なかつた。只、或る時、階下へ下りて行くと、袴を解いて伊達卷を〆め直さうとする彼女の懷中からパラリと落ちたものがあつた。私は急いでそれを取り上げると、彼女が學校行姿の寫眞で、道具をかゝへて、華やかな洋傘をかざして居る所、臺紙に貼りつけてある所から、寫した寫眞屋を見ると、白く『淺草公園勅使河原寫眞館』の文字が這入つて居た。

『あらあらあら、にいさん酷いわ、返して頂戴よ』

寫眞の無くなつてるのに氣がついた夏子は伊達卷のまゝ、双の振りの袖を肩に引つかつぐ樣にして、汗ばんでポツと赤くなつた顔をして取り返さうと私に迫つて來た。

『いや、返さないよ、夏ちやんは美人だね一枚貰つとかう』

『いやだわ、ねえさあん』

針仕事をして居た妻は、よしない戯談をするなと言ふが如く輕く私を睨めた、私は、すぐに寫眞を返してやつたのであつた。

だが、私の頭には、淺草と云ふ字と、勅使河原寫眞館と云ふ文字が銹りつけられる樣に殘つた。毎日、學校へ行つてる――往復にかゝる時間、さうした事を考へ合はせると、淺草などへ行ける時間は彼女に持ち合はさない筈であつた。只一度、妻に子供達、それに夏子と五人で淺草へキネマ倶樂部の活動寫眞を見に行つた事はあるが、其の時は、夏子が別になつた事もなし、又た、着物も寫眞のと違つて、袴無しの帶は姉のを借りてお太皷にしめて行つたのだつた。で、其の疑問を妻に話さうかとは思つたが、氣の弱い妻が、心配をしてはと思つて話し出さなかつた。

然るに、疑は他の方面から起つた。

『夏子さんは厭ですね、お辨當がまる殘りですよ、早く出して下さらないと臭くなつて仕舞ひます』

もう四五年もうちに居るので、老婢の瀧はすつかり私達の家族に成り切つて、いけないと思ふ事はドシドシ主人たり共抗議をする彼女だつた。

『なに、夏子のお辨當が殘るつて？』

私は問ひかへした。

『ええ、昨日のなんか、手もつけて有りませんものを』

サツと私の頭を或るものが流れた。翌朝の食事の時見て居ると、彼女はやはり當り前に食事をして居るのだつた。

『晝の御飯は一向喰べられないと見えるねえ』

私はさり氣なく言つた、之れには夏子はぎくりとした模樣

だつた。

『ええ』

濁つた返事であつた、妻は取りなすもの丶樣に言つた。

『もう、こんなに暑いんですもの、喰べられないんでせう』

五

もしやと思つた錯愕は、あまりに早く來た、六月のはじめ、私はK女學校長から親展書を受取つた。開封して見ると、大體次の樣な文句であつた。

……謹啓、第四學年村上夏子殿、五月上旬より全く御出席御座なく、御病氣中かと存じ候へ共、一應其の旨本校へ御屆け願上度、御閑暇の節、當校へ御出頭相成り候はば幸甚の至りに御座候。

愈間違ひは無かつた！寫眞から受けたショックは矢張り誤まらなかつた、私は其の夜夏子と瀧とを活動寫眞の見物にみやこ座まで出してやつて、妻を二階の書齋によんで、無言のまゝ學校から來た手紙を見せてやつた。妻は驚きのあまり、顏の色が蒼白になつた。

『ま、ま、何て夏ちやんでせう、あたし達が之れ程心配してるのに！』

實際、妹思ひの彼女が嗟嘆し憤慨するのは無理も無かつた。激情を抑ゆる事の出來ない妻の平素の氣質を知る私は、其の晩、そつと手筈をきめて、兎も角、こんな不仕鱈では成業が覺束ないから、一應歸國させようと云ふ事にきめた、實際、此の上、か丶り合ふと云ふ事は私達として厭だつた。私は其の晩の內にF市に電報を打つて義父を呼びよせる事にして、翌朝はあたり前に氣拙い朝飯を喰べた。

で、もう一つの手筈と云ふのは、妻を彼女に尾行さすと云ふ事であつた、朝飯を一と足先に喰べた妻は、一寸用足しがあるからと夏子より先に外出し途中で待たせる事にした。

十一時頃、妻は息せき切つて歸つて來た。

『やつぱり、貴方の觀察通りよ、電車にのるかと思つてたらずん〲山下の方へ歩いて行くから窃と見え隱れについて行くと、池の端へ出て辨天樣の方へ行つて橋と樓門の間を行つたり來たりしてるのよ、吃度、誰かを待ち合はしてゐたんでせう、で、あたし(夏ちやん、學校へも行かないで何してんの)ときめつけたら、あの子、眞つ蒼になつてね、何とも言へないのよ、其れからあたし、(もう何も彼も知つてゝよ、學校からちやんと通知が來てるんだから、五月のはじめつから、一體どこへいつてたの)と云ふと、下を俯向いたきり何た

も言はないの、でも連れて歸つて來る途中、淺草へいつたり上野で遊んだり、金龍館のオペラを見に行つたりしてた事を白狀しました、だから、貴方も、あまり叱言を言はないでね』

遂々、一切が分つた！寫眞の聯想が――推斷が遂に事實となつた。

で、思ひ當る事は、活動寫眞など、近間の小屋へ行つて――大抵、妻か瀧をつけてやつたのであつたが――歸つて來てから二人の報告を聞くと、彼女は驚くべき通で、辯士の一人一人の名前を知つてるのみか、樂士なども知つてるらしく女給も顏馴染の樣で、姉と二人ボックスに座ると何やらコソコソと耳打ちをしたり、眼で挨拶をしたりする者すら有ると云ふ事であつた。

夕方の汽車で、義父はバスケット一つをぶら下げたまゝ、面目なさゝうに、上野迄迎へに行つた妻と二人、玄關に上つて來た。

六

私は、多くを言はなかつた。

『此の通りの事情ですから、本人も、歸つた方が幸福と思ひます、私として目がそこ迄屆かなかつた事は、幾重にもお詫びをしなければなりません』

『いやどうも、飛んだ不仕鱈で』

義父は疊に頭を摺りつける樣にして、翌朝の列車で歸つて行つた、其のがつしりとした肩に見える衰へが、私達を悲しませた。で、學校の方は、病氣休學の屆けを正式に出しておいた。

妻が國許の母から受取つた便りによると、母は決して娘の上京を喜ばなかつたが、義父としては多くある男の兄弟の中に、自分の血を分けたたつた一人の肉身である娘は、世にも可愛いゝものであつた。退校の事情は、決して水島、長崎の二女が惡いのでなくして、彼女こそ其の中心として見られる程の人物だつた、只遊び度いと云ふ丈けでなしに、大柄な彼女には、明かに痴情關係が纏はつて居た、F市に於て復校の出來ぬ事情は、決して脅迫なぞからでは無かつた、新聞にも一度うたはれた事のある彼女であつた。

『とうさん、氣の毒だね、あんな娘をもつて、あれや、之からも苦勞の種だよ』

『本統ですわ』

妻は深く溜息を吐いた。

はげしい夏が來て、其のあとに爽凉な秋が來た、もう吾々とは一切の交渉が無くなつたと思つた夏子の學校問題が、又しても再燃した、それは妹思ひの妻が、此の頃どうしてるかを義父に聞いてやつた事の手紙からであつた。

『此の頃ね、夏子がすつかり後悔してうちの事に精出して居るんですと、どうでせう、もう一度學校へ通はして見たら』

『あはは、僕は駄目と思ふね、見込があれば呼んで見てもいいけれど』

『でも、あんな子は、一度自分が惡いと氣がついたら一生懸命やるものよ、とうさんから手紙が來て、貴方に相談して見て、もう一度先の學校へ通はせて貰へまいかと云うて居るんですが……』

『さあ、ね』

夏子を中心として、私達の間にはいろいろと討議せられた、然し、強いて固執せぬ私の性質が負けて夏子は其の年の秋に、二度目の東京の土を踏んだ。

『濟みません』

淑やかに手をついてお辭儀をした夏子を見た時、私は、それでは本音かなと思つた、で改めてKヶ學校長宛に復校願を書いてもたしてやつた、夏子は喜んで出かけ、其の日はいつもより早や目に歸つて來た。

『あたし、學校へ暫らく行かなかつたのでお友達からどうしたのどうしたのツて訊かれたわ、だから、心臟が惡くて郷里の方へ行つてたと返事をしてたの』

僞りの唇を利く事に於て、彼女は心に何の苛責も持ち合はさないかに見えた、それが私として不愉快であつた。

學校への通學はそれから眞面目に――少くもさう見える樣に――續けられた、私達はその事を喜んだ、で、彼女の爲めに何とか娯樂を見出し度いと私は考へた、そこでF市から携へて來たまゝになつてる提琴は修業してもいゝと云ふ事にした、其の敎師として近所に下宿をして居る或る劇場の音樂部員と稱するSと云ふ男を撰び、其の男の都合のいゝ時を見はからつて宅に來て貰ふ事とした、Sは割に眞面目な男らしかつたが、間もなく、夏子と喧嘩をして來なくなつてしまつた、然しもう樂譜を見れば彈ける丈けになつて居たので其の後は、自分の部屋で稽古をして居た。

或る日、外から歸つて來た私は、門を這入らうとすると引きちがへに門を出て來た紺絣の着物に繩の樣な帶をしめ、麻裏草履をつゝかけた廿四五の男に出つくわした、男はじろりと私の姿に目をそゝぐと、馳けぬける樣に路次から出て行つ

た。

『お歸りなさい』

そこに今迄彼の男と應對して居たらしい妻の姿があつた。

『只今――何だい、あの男は？』

私は靴をぬぎ乍ら言つた。

『ちよいと』

妻はそつと私を階子段の下へ引つ張つて來てから言つた。

『あれは、新派俳優の望月と云ふ男ですつて、今やつて來て夏ちやんが居るか、居るなら出して吳れろ、約束した事があるんだからと、そりやア失敬な事を言ふのよ』

妻の眼には、憤激から、涙があつた。

『さうかい、夏子はどうした』

『ゑゝ、自分の部屋に隱れてますの』

で、其の晩、私達は又たしても善後策を講じなければならなかつた、妻は、二度目に彼女をうちに入れた事をつくづくと後悔してる樣であつた。實際よく考へて見ると、休暇前あの不始末のあつた彼女を、再びうちへ入れたと云ふ事は、彼女の行爲を容認したかに見えぬでも無かつた。

『困つたねえ』

私は只さう云ふより他無かつた。

其の晩、妻からの報告を聞くと、まだ、事件は、望月の一件――それは男の口うらを引くと、夏子は何でも彼れと結婚しようと云ふ約束でもしたらしかつた――丈けでなく、近くに下宿してる支那人の李某と云ふ男とも、夕方の散歩か何かで一緒になり其の下宿に伴はれて御馳走になり、其の男から小遣錢のなにがしかさへ儲けて歸つたらしく、李某と同居する王某との間に、其の事で激しい鞘當てさへ演ぜられて居たと云ふのであつた。私に言へば、一本調子の私が腹を立てると思つて妻は之れを隱蔽して居たのであつた。

夏子を中心として起つた話題は、もつともつと多かつた。

『こんなものも有るのよ、あの子の日記を見ると、そりや面白い事が書いてあつてよ、でもあたしが時々調べると悟つて此の頃どこかへ隱しちまつたのよ』

私達は、あまりに意外な――曾て私達の生活には無かつた――事が多いので、遂には其れに馴れて腹が立つと云ふ事を通り越して、滑稽にすら感ぜられて來た。妻が夏子の居間から拾つて來た紙屑の半紙には、まるで女優が軀をおいた樂屋の内からする通信に類したものすら有つた。

……此の劇場のフツトライトに照らされて、裳を高くかかげて音樂のメロディに合せて踊る時も、いつも妾は北

に在ます貴女の事を思ひ出すのよ、噫、けれど、私は自由を束縛された籠の小鳥、刹那〳〵の感激に體内の血は高鳴るけれど、誰も妾を助けてくれる人は無い……

私は覺えず失笑した。

七

私達が、其の日、夏子を瀧と共に湯にやつたあと、彼女の居間を搜索したところ、其處には意外な獲物があつた、本箱机の抽斗、行李さうしたものゝ中には、一向にそれらしい物も見えなかつたが、妻は女らしい細心の注意から、三疊の間の疊の一方が不平均に膨れて居るのを見出して、私も手傳つてそつと起して見ると、其處に夥しい文殼を發見した、その一々を記すは、あまりに煩しいからこゝには省略しなければならない。私達も、實のところ、彼女の心の拔け道が、もし、一人の愛人を得て、戀愛問題で解決がつけば、進んでそれが爲めに斡旋の勞をとつて、若い夫婦を創造しようと考へたのであつたが、そこに發見された文殼は、決して一人の男から求められた愛の手紙では無かつた。甲、乙、丙、丁、某呉服店の番頭もあれば、工手學校の生徒某もあり、誰とも知れぬ筆蹟から見ても教育の程度が知られる某々があつた。

『一體、どう云ふ氣持なんだらう、之れを見ると、どうも先方から不良少年のやる樣なニギリとか、打つ込みとか云ふ手で交際を求めたので無くて、積極的に先生がやつたものとしか思へないね』

私は、其の手紙を元の如く疊の下に納め乍ら言つた。

『…………』

あまりに怪奇な妹の仕業に、彼女の姉は、あはれ放心したかの如くに見えた。

義父はそれから二日たつて著京した、流石に父の姿を見た夏子はギツクリとしたものゝ如くであつた。

『夏子、來なさい』

憤激にむらむらとした父は、座るとすぐグイと彼女の手を握つた、引き据えて腹の癒ゆる迄叩からと云ふ所存であつたらしい、私は其の切なる心持に同意したので、それとなく瀧に云ひつけ二人の子供を連れて、一時間ばかり近所へ散歩の爲め出してやつた。

夏子は、するりと父の手をぬけて二階にかけ上つた、あとを追うた父の手の屆かぬ欄干をのりこして板びさしの上に上つてそこから吊り下がる樣にした。妻は只ハラハラして居るばかりである。

『馬鹿な奴』

下唇を噛んだ彼女の父は、帶の所へ手を挾んで憐れな彼女を見据えた。

私は、義父を二階から下の八疊へ下ろして此の慘ましい親子の爭闘に決着をつける爲めに二階へ上つて行つた。

『夏ちやん、僕が謝まつて上げる、第一そこに居ちやア見つとも無いし、近所の人に見られるぢやないか、さ、上つてお出で、上つて』

彼女も、私に對しては父に對してほど反抗しなかつた。二階から下りて來た時は、もう平氣な顔をして居た。

で、話の鳧は、無論歸郷と定つたのである。私は上野へ送つて行つて、憐れな父子に對するアデユーを取り交はした。

――もう、俺が此の子の問題にかゝはる事はあるまい！ その時はそんな考へであつたが、二度ある事は誠に三度あるべきであつた。いや、四度あると云つてもいゝであらう。私は單に之れを因果關係として丈け取り扱ひ度くない氣持ちがする。

『あゝ、之れでノウノウしたよ』

湯から上つた私は妻へ言つた。妻にとつては正しく夏子は妹に相違なかつた。彼女の顔には、悲しげな苦笑が浮んだ。

八

讀者諸君、誰しも、此の事件はこれで根切れとなつた事と思はれるであらう、然し、吾々と夏子との交渉は之れきりでは無かつた。其の後義父からの消息によると、夏子はもう學校生活を諦めて――諦めるよりも、もう學校の課業に對するインテレストがすつかり失はれて居たし、這入れる筈も無かつた――此の頃では、F市の大きな織物問屋の女事務員となつて毎日通勤して重寶がられて居ると云ふ事であつた。事實、夏子は眞面目にやれば學課も出來る方で、文章も達者だし、筆蹟が綺麗で算盤も達者、裁縫なども中にも優れて出來る方であつた、隨つて、時間と氣持にも餘裕があり、不逞を企むとすれば其の餘裕は綽々たるものがあるに相違なかつた。

『ほう、之れア宜い鹽梅だ、だがとうさんは嚴格の樣で夏子にはとり分け甘いんだから又たいつもの親馬鹿ちやんりんぢや無いかね』

『豈夫、今度はあれも考へたでせうよ』

妻は、それを喜ぶ樣に言つた。

大正八年の十月三十日の夕方であつた、私の宅は當時小石川の大塚仲町にあつたが、新らしい勤め口であるところのTN社から歸つて來て机に向つてる所へ、老婢の瀧がいつもの癖の身體をすくめる樣にして這入つて來た。

『旦那樣、又た來ましたよ』

『ばあや、誰だ』

『F市の夏子さんが』

私は吾が耳を疑つた。が、思ひかへして、机の所を放れずに怒鳴つた。

『何だつて、夏子が來たつて？ 嘘だらう。まさか來やしまい、來たつて這入れる身體では無い、返しちまへ返しちまへ』

私が政策的に怒鳴つてるのを、玄關を距てた六疊の方にはげしい胃腸病を病んで臥つて居た妻は、むつくりと起きて玄關へ出て、

『まあ、夏ちやん、いつ來たの、さ、お這入りよ、お這入りつたら』

私は、がつかりした、私の威嚇は、病氣で一と際氣が弱くなつた妻の裏切りによつて滅茶々々にされてしまつた。折角平靜な此の生活が、又たしても闖入者によつて掻き亂されるのか！

何だか、瀧と妻とは六疊の方でこそこそ話をして居たが、軈て夏子を伴ふて八疊の書齋へ這入つて來た。

『ねえ、貴郎、夏子が之れ迄の事は惡かつたから、之れから勤め人になつて一生懸命に稼ぐんですつて、Fでも月給を三十五圓も貰つて大分貯金が出來たんですつて、あたしが監督しますから置いてやつて下さいましな』

その尾について夏子も言つた。

『にいさん、どうか』

私は、返事こそしなかつたが、結局、之れを肯定せざるを得なかつた。それは、當時妻の病症が神經衰弱が激しくつてあまり之れと爭ふたりする事は彼女の病症を一層重らせる事であつたからである。で、事情をきくと母親と何か喧嘩をして、小遣錢をもつたまゝ飛び出して來たと云ふのであつた。私は其の夜の內に、Fの義父に宛てゝ報告の手紙を書くと、先方から簡單に『當方では構ひつけぬから、何分賴む』と云つて來た。

それから、私は時事新報の案內廣告を見て京橋の或る株式店で女事務員を募集して居る事を知つたので、そこへ向けてやつたら、筆蹟がうまいのと、算盤が確かな事とで首尾よく及第して月給四十圓と定まつて、他に電車代、晝辨當は先方

持ちと云ふ結構な條件で雇はれる事になつた、すると、三日目から行かないので、どうしたのだと訊くと、先方にいやな男の事務員があつて、歸途を擁して忌味な事を言ふので怖いからと云ふのである。それから又た、次に今一軒の株式店へやつた、そこでも及第したが、やはり一日きりで行かない、丁度其の節私は忙しい眞つ盛りであつたので、夏子の事を構へなかつた、さうして其の内に妻が病氣が昂じて根岸の或る病院に入院をしたので、宅内が無人にはなるしいつも歸つて見ると、洗濯やら料理やらせい出して居る樣なので、之れなら結構なアッシスタントが出來た位に考へて、寧ろ喜んで居たのであつた。

然し、それも矢張り糠喜びの皮相の觀察であつた。

『あゝ、お腹が疼い、苦しい苦しい』

或る夜、私の側に寢て居た長女が輾轉反側して苦しがるので、藥を與へてきいて見ると、晝間、夏子と近所の西洋料理店へ行つてそこで毒になる喰べ物をしたとの事であつた、やつと通じがついて治まつてから訊いて見ると、私が不在になると、一切を灘にまかして近所の何とも知れぬ若者と一緒に手を連ねて緣日歩きをしたり、西洋料理を喰べたり、私が歸る間際にスルりと歸つて何喰はぬ顏をして居るのであつた。

私は、默つてうなづくより他なかつた。

或る日、歸つて見ると、六疊の方で、チャブ臺の上に西洋料理の幾皿かを並べ、廿二三の色の青白い男と夏子の二人が居ぎたなく座つて、頻りにビールを飲んで居るのであつた、私はムッとしたので洋服の上著をぬぎ棄てるとすぐツカツカと六疊の方へ這入つて行つた、もうそこには若い男は居なかつた、少し早や目に私が歸つたのでスッカリ番狂はせになつたらしく、夏子は慌てゝ汚れた杯盤を臺所へ運んで居た。その後から、腹に据え兼ねた私の聲が追つた。

『うちは、料理屋ぢやア無い！』

四五日經つて、妻は病院から歸つて來た、さうして——それこそ非常な決心で——夏子は持つて來た手廻りの物を一と風呂敷もたせられたまゝ追ひ出された。然し、形式的に、之れまでの世話を謝する以外、其の面には何等悔悟の色も浮べられなかつた。

『…………』

『…………』

妻と私は、只、瞳をみあはせた許りであつた、下唇が堅くかみしめられて居た。

×　×　×　×

それ丈けならば、私達はまだしも幸福であつた、だんだん彼女の行爲は惡魔的に進んで行つて、私の家を逐はれてから、春日町に近い或る自分の關係した男の姉と云ふ人のうちへ行つた。さうして其處で下女同樣に使はれ擧句の果ては、何かよくない事まで强ゐられたものゝ如く――實際、彼女は、男性に逢ふと、之れを自己の術中のものとする點に於ても非凡の手腕をもつて居たが、又た一と堪りもなく相手に打ち込んでしまふと云ふ危險性を持ち合はして居た――そこでも、それを拒めない樣な羽目になつて、激しい病氣に罹り電報で父を呼んで、漸くにしてF市へ歸つた事を義父から手紙でしらして來たのであつた。

『もう、懲りたらうよ、僕は、困るといふより情なくなつた』

私は、其の手紙を卷き返し乍ら、此の頃漸く恢復して暇潰しに針仕事位やつて見る氣持になつた妻の方を顧みた。

『本統に、濟みません』

妻の眼には薄く涙がにぢみ出して居た。

私は、こゝまでゝ話を打ち切るつもりであつた。たまたま、島中さんに逢つて、そのあとを書き繼ぐ事を餘儀なくされた。然し、徹底を期する事の上からは、結局、之れを書き續ける事が眞實であるかもしれぬ。私は、なほ眼を瞑つて書きつゞけよう。神よ、貴方は眞實を知り玉ふ！

大正十年の夏少し前であつた。或る日、妻の叔母に當る冬野さんと云ふ婦人が、F市から上京して來て今淺草に居るからと云つて訪ねて來た、私は二度目の對面であつたが、彼女は痩せて眼ばかり爛々と光つて居た。義父からの手紙で彼女が日蓮を信仰して神つきの狀態になり、乞ふものがあれば色々豫言をすると云ふ事を知つて居たのであつた。久しぶりの事ではあるし、風通しのよい二階の八疊へ招じて時分時だから何もなかつたが親子丼をとつて同行の婦人と共に接待して置いた。すると、俄に神つきの狀態に入つて、全身をふるはして種々の事を口走るのであつた。妻は息をつめてそれを聞いて居るのであつた。

やがて、茶をいれかへに二階から下りて來た妻は、不安さうな顔をして私の傍へ來て、

『夏子が出て來ましてね、Fから少し放れたK町の郊外で轢死をしたんですと、そして前非を後悔して居るから、許してくれろと言つて居ました』

と、途切れ途切れに話した。私は一體かうした芝居氣た

つぷりな神おろし見たいな事を信じない性質なので、『何を馬鹿な事を言つてる』と相手にならなかつたが、丁度、冬野女がもつて來た差出人不明の電報の文句が、——それはナツイルカシラセとしてあつた——思ひ合はせると、少々は氣になつたので、早速郵便局へ行つて、「ナツイヌKマチヲサガセ」とF市の義父宛に打電をしておいた。夕方、冬野女は、凉風のたつた頃を歸つて行つた。

電報の返事は一向に來なかつた。

『人を馬鹿にしてるね、すつかり、一杯喰つたぜ』

私は笑つて居たが、妻は、まだ、そこに何か神秘的な或るものが横はつて居る樣に思つて居るものゝ樣であつた。

其の内に、妻は久しぶりにFへ歸つて見たいと云ふので、それもよからうと考へて、八月の第一日曜の夕方、上野發の列車で、F市へ向けて發せてやつた。すると三日ほど經つて、妻から意外な報知を私は受取つたのであつた。

……全く、夏子は言語同斷です、歸つてから土木屋のIと云ふ若い男と關係して姙娠し、此の十月が産み月になつて居ますが、卑怯にもIが自分の子でないとか何とか云つて認知しないので、兩親は困つて居ます、しようの無い人達ですわ、わたし、あまり腹が立つたから俥で先方へ出かけて、産れたら自分の方へ引きとると云ふ書附をとつて來たのよ——私は覺えず微笑した、妻は人のいゝ女であるがなか〱勝氣なところのある女である。やりさうな事だ——それで、とうさんは成るべくFで産ませ度くない、評判になると困ると云ふので、うちで引きとつて産ませる約束をしました、でも今度は期限付だからいゝでせう、生れてから三週間たつて、産婦が自由に立つて歩ける樣になつたら、早速返してやるわ。

先達ての轢死一件は全くの嘘つぱちよ、

冬野おばさんの出鱈目にも呆れるわ、でも精神に異狀を呈して居るんでは、小言も言へないわね、來る十五日夏子をつれて歸京します……

とうとう又た引つ張り込んだ！

私は手紙をぎゆつと握り潰した。手紙の中から、じゆうと水がしみ出して來る樣な氣持がした、見たくないものを見せられる、妻の義俠心を、私の自分に忠實なヱゴイスチツクな心が恨んだ。

八月十五日の夕方、妻は夏子をつれて歸つて來た、三年目に見た彼女は、面やつれの上に幾分の女らしさを加へて居た、首を傾ける樣にして笑みを含んで私に敷居ごしに挨

拶をする彼女を見ると、私は、只『うむ』と返事をして、輕い挨拶を交はさずに置けなかつた。

夏子は、來る匆々、今迄の彼女と見違へる位に働いた、力のいる仕事は絶對にやらせなかつたが、す〻ぎ、洗濯、飯の後の食卓のあと始末、こんな事に精を出して働いた、あの出好きであつた彼女が、外出を嫌つて時折り縁端に立つてうつとりと夕方の空を眺めて居るのを見ると、私にも――もう一切あれの世話には關係しまいと誓つた私にも――幾分、愛憐の心が湧き上つて、

『どうだい、少しは動くかい』

などゝ訊いた。夏子は含羞む樣に後をふりかへつて、

『えゝ』

と、襟のところを直したりした。

何事もなくすぎて、十月の十七日が來た。

朝早く陣痛が來たので、瀧は顏も洗はずに瓦斯の火に釜の湯を沸らせておいて、産婆を迎へに行つた、私まで臺所の一と役を仰せつかつて、近くの酒屋に、酒と味噌を買ひに行つた、酒は、子供が生れたら祝ひのしるしに、産婆に一本つけると云ふ私の考へであつた。入口に近く歸つて來る頃もう威勢のいゝ産聲が響いた。

『生れたな』

私は、にこにこして這入つて行つた。妻は脱脂綿の包を抱へてうろうろして居た。

『お坊つちやんですよ、お芽出度う存じます』

恰も、私の子供ででもあるかの樣に、年増の産婆は私に對して挨拶をした。私は、苦笑せずに居られなかつた。『何がお芽出度うだ!』然し、間もなく思ひかへした。『親はやくざでも、生れた子供には罪は無い』實際、産婆の腕に抱へられた小さい拳を胸のところに縮めて哭いて居る男の子は、丸々とした可愛いゝ赤ん坊であつた。

私は、すぐにF市のIのところへ『コドモウマレタスグコイ』と電報をうつた。すると夕方になつて『ユキタイガユケヌタノム』と言つて來た。それから折り返して『ゼヒキテクレ』と打つた、次の日の夕方、Iが俥でかけつけて來た。

私は、私の書齋である八疊を産婦の爲めに開放して、Iをそこに迎へ入れ、男子が生れたからと云ふので、祝ふ意味で刺身や吸物で酒を出した、Iは二泊して、上野の松坂屋で、自分の子供の着物丈けを買つて預けておいて歸つて

行つた。

其の内に、子供が――多分、親の惡疾の幾分を感染したかもしれぬ――皮膚病に罹つたので、私は近所の外科醫に見せたところ、そこでは手當が出來ぬとの事で、只剝奪する皮膚を保護する爲め全身繃帶を施してくれたので、その足で、京橋の築地にあるM醫學士の醫院につれて行つた、M氏は帝國大學醫學部の講師で、學位こそ無いが、皮膚科にかけては、一流の大家として聞えて居る人である。

『どうでせう、經過は』

私は火鉢の火に敷島をつけ乍ら訊いた。

『さあ』

M醫學士は、氣の毒な表情を示して、

『入院させてもいゝが少し永引くから、何ならF市の病院へ入れたがいゝでせう』

口吻で察すると簡單でない病症である事が悟られた。で歸つて相談をする事にして引き上げて來ると、留守の間に、Fから到着した義母が、先に俥で歸つていつた夏子と何かしきりに窃々と相談をして居る所だつた。私は、挨拶をして、子供の症狀が、持久性の病氣らしいから、F市で療治を加へたらいゝだらうと云ふM氏の意見其のまゝを傳へると、不服らしく、面と向つて私にさうは言はなかつたけれど、私が即座にMのところへ入院させなかつた事が不服であつたらしかつた。

『かあちやん(妻はいつ迄も、母の事をさう呼んで居ました)も、隨分狡いわ、今度のこと、一切、あたし達にぬりつける心算よ、でも、貴方、Mさんへ入院させなさらなくてよかつたわ、入院させようものなら、其の入院料までこちらがお立て替へを仰せつかつちやうわ』

人の居ないところで、妻はかう言つた、彼女は、今となつて、自分の肉身の愛から出發した義俠心の末路が、意外な結果に終りさうなのを不快に思つて居るのであつた。

『夏子つて、隨分ひどいのよ、わたしのこと有ること無いことFの方へ通信をして、今度のお産のかゝりなんかも、みんなあたしが中に立つて曖昧にしてしまつた樣に思つてるのよ、もう、あたし死んだつて、あんなものゝ世話をしてやらない』

私には當然すぎる位に此の結果は最初から豫想されて居た。

私は強ゐて爭ふ事をせずに、丁度産後一週間を經過した十一月の或る日、汽車の切符を買つたあとで、少し小遣錢が不足だと云ふ事なので、五圓の金を渡して、Fへ向け

て義母、夏子、忠彦（Iと夏子との間に生れた兒）の三人をたゝせてやつた。上野驛のプラットフォームを列車が緩くきしり出でた時、私は合掌したい樣な氣持になつた。

『一切空、之れからの凡てが、よく報はれて來る樣に！』

第一回、第二回、第三回、第四回、時間、空間、物質の浪費、それに算盤をとつてこくめいに勘定する程の私共ではなかつたが、私共夫婦は全く夏子一人の爲めにどれ丈けの苦しみを味はつたかも知れない、其の苦しみを知るのは、私共と瀧と、神樣ばかりだ。

　Fの義父から、彼女を預かつたについて送つて來た金は、第一回に二十圓（それは、お産の道具、赤ん坊の産ぶ着そんなものに使つた）、第二回に二十五圓（之れは、産婆の謝禮其の他、産婆は産後一週間目に十圓と、本膳つきのお料理で勞をねぎらひ、お産までに診察に來る都度一圓づゝ拂つてたので、其の禮につひえたのと云つてよろしい）、計四十五圓丈けであつた。

　彼等が歸つたあと、此の事の始末は、當然、Fなる義父と、Iの二人とでなすべきものときめた私は、若干の實費を請求してやつた。すると、意外にも、義父から、『大分、かゝりましたね、いや、大層お世話になりました』と云ふ樣な嫌味たつぷりな手紙を貰つた。Iからは梨の礫である。之れも私には何分か豫期された。然し私は此の手紙を見た時、恰も、私が其の手紙を書いた人であるかの樣に、ポツと顏から耳の方へ熱くなつて來た。

『とうさんも、耄碌したわね、之れが五十幾歳の人の手紙かしら』

　疊に落ち散つてる其の手紙を見ると、妻はもう堪らぬ樣に、ボトボトと熱い雫を、其の手紙の上に落した。

『さうだね、都合が惡いなら惡いと云つて來りやいゝ、その方は何とかすると賴むものだから――まあいゝや引き受けた此方に落度があるのよ』

　私は、又た机に向つてペンを走らせた。

『ほんとにほんとに』

× × × ×

　私共と、Fの夏子、並に其可哀相な父母との交渉はそれつきり打ち絕えてしまつた。私共は、いづれは時が解決し、時が說明してくれると思ふ。義父達が、もう少し世間の事に明るく――それは、全く軍人あがりで世の中の義理人情に乏しい知識の無い人達であるから……なつて來たら、私

共の味はつた心持が痛感されるであらうと、夏子の産んだ其の子が成長し、夏子自身も年を加へていろいろの經驗に身を燃やす事が出來たら、私共の心境を察知する時があるであらう、それ迄私共はしづかに待つばかりである。

忠彦は、I家に渡された。妻が、此の頃働き出した仕事からの製作品を、義父あてに送つてやると――意固地な義父は、私には一本の手紙もよこさぬが、妻には時たまハガキでよこすのを見た――其の返事は、義父からではなくて夏子からであつた。

……姉上樣、わたしは此の頃、忠彦に離れた遣瀨なさを書物に散歩にまぎらして居ます、御送附の化粧品有り難う、すつかり綺麗になつて分家の富子ちやんと二人毎晩の樣にFを散歩して居ます、町の人が二人を、「二人組」などゝ噂してるのよ

妻は、唇を引きつる樣にゆがめると、淋しく笑んでもみ苦茶にして屑籠の中に入れてしまつた。彼女の義侠心も流石に種切れとなつたらしい。

第一の波紋第二の波紋第三の波紋までは、彼女達丈けの交渉であつた、第四の波紋は愚直なる義父母をまで其の味方にとり込んだ形で、私達との交渉を斷絶せしめたのであつた。

彼女が東京へ出て來た時、彼女の過去を、偽りなく私に告げてくれなかつた義父の變な名譽心が、今日の大きなギヤツプを産む樣になつた事を私は悲しむ。と同時に私が、人の親でなくして、充分、彼女を戒飭し、彼女を人間らしく改める事の出來る位置に居なかつた事を、私自身の爲めにも悲しむのである。でも、私は私としてなすべき事をなし、其の結果、行く所まで行つたものと考へて居るのである。『最後の御奉公』……

――かうした少女が、そこらにも澤山居る事であらうが、私の僅かな經驗から、率直に述べて見た。私の言つて居る事には、神かけて、一毫の僞りも無い！

――七月二十日――

身の毛のよだつ話

(一)死の接吻

(現代サロメ物語)

入江新八

(一)

「何だつたね。さう大したことはないのか？」妻が、私達の友人のK君の令嬢が松澤病院へ入院したので、その見舞ひに行つて、夕方歸つて來たので、私は斯う訊ねたのでした。

「まあ、あなた、大變よ、大したことでない處ではありませんよ。」

妻はさう云ひ乍ら汗を拭いた。さう云つてゐる中にも不安な表情がありあり見えて、何から話して好いか、まごついてゐるといふ風である。何しろ非常な暑さで、日が暮れかけてゐるのに、そよ風一つ吹きもせず、グン〳〵と晝の炎熱を蒸し返して地の底までも煎り附かしてゐる中を、新宿の、ずつと向ふの玉川電車の方から歸つて來たので、先づ着換へてからでなければ、話は出來ない容子であるが、併し暑さを厭ふ處ではないといふ風に、

「本當に、美枝子さんはお氣の毒なことになつてしまつたわ。私は、もう一目見ると、泣いてしまひましたよ。」と妻は團扇をハタ〳〵させて云ひました。

「そんなに甚いのかい。一體、何うだといふんだ。本當の精神病なんかね？」

「精神病なんて、そんな生やさしいんぢやありませんよ。……まあ、後で、ゆつくりお話するわ。これではどうにも、仕樣が無いわ。……貴郎お夕飯は？」

そゝくさと物を云つてる處は平常の妻とはまるで違つてゐる。何んでも餘程先方の容態が變であつたらしく私には受取れた。それで、直ぐ追つかけて

大體の要領を得やうかと思つたけれども、後でゆつくり、夕飯を食べながらでも仔細を聞かうと思つて、私は、故更と戸外へ散步に出たのでした。

私の友人K君は、友人といふよりも先輩で、私達と違つて社會的地位も財產も第一階級に屬した人でした。私がつまらなく此の世を過してゐるのに比較すると、凡てが貴族的で、何もかも幸福で圍繞されてゐるといふやうな生活をしてゐましたが、生活程度の私とは違つてゐるにも拘らず私とは可也な親友で、家庭的にも交際してゐました。それで、K君の令嬢の美枝子さんが、突然松澤病院に入院された報に接し、妻が見舞ひに參つた次第であります。大概の方は御存じでありませう、松澤病院といふのは、巣鴨から松澤村へ引つ越して行つたあの瘋癲病院の現名です。斯ういふ處へ入院された美枝子孃の病狀も直ちに推察されることでありますが、たゞどうして、斯ういふことに立ち到つたか？その徑路が私には一向分りかねました。で、散步しながら、美枝子さんの、あの、しほらしい程おとなしい、そして、利潑げな顏を思ひ出して、あの娘がといふ氣がしました。K君も、奧さんも嘸ぞ當惑してお出でだらう、氣の毒なことだと思ひまして、兩人の顏や、美枝子さんの顏を交る〲想像して、私はいやな氣持で公園の外廓を步いてゐました。步いてゐる中に、「少しK君が嚴格過ぎた爲に斯んな結果になつたんぢやないか」といふやうな氣がして、「矢張り小供を育てるには男女共に放任主義が好いんだな」と思ひ、A君の家庭の開放された生々した樣子を想像したりしました。そして、結句、子供の一人も無い我々の夫婦切りの貧乏生活の方が、何方よりも一層安穩で好いなといふやうな非常に消極的な考へに落て、その貧乏生活の夕餐にありつくべく私は我家に歸つたのです。

（二）

松澤病院事件の話は食事の半ば進んだ頃から始まりました。最初妻は入院中の美枝子さんの容態及びその動作に就いて、詳しく物語つて聞かせたのですが、それは此所には省きます。つまり非常にお氣の毒で何んとも申しやうのないやうな悲慘な現狀を、妻は驚きと怖れとの二つに心を亂しながら話したわけであります。で、當然の質問は次のやうに問ひかけました。

「一體何が原因で美枝子さんは急にそんなことになつたんだね。お前はその徑路を聞いて來たか？」

「それを私は今、お話しやうとしてゐるのですわ。でも、とても私には恐ろしくつて話し切れないかも知れません。」

「何う恐ろしいんだい。原因に恐ろしいことがあるのかい？」

「あるのですとも、……ありますのですとも……それは、奥さんからも、お駒さん(美枝子附の女中)からも、それから、暫くしてKさんがお見えでしてね。三人から全聞きました。なほお駒さんは、奥さんが少しお寢になつてゐる間に詳しいことを私に話しました。それで悉皆理由が分つたのですわ。」

「何か戀愛の事件から來てゐるのかね?」

「さう。まあ、さうとも云へますが、それが全く不思議なんですわ。まあ、私、話して見ますから、……其所等を氣を附けて下さいよ。」

さう云つて妻は變な目附きをして四方を見廻しました。

「氣を附けるつて、何うするんだい。臆病だなあ。」

と私が笑つて云つたので、妻は少し氣を變換て落付いたやうな容子になりました。それから次のやうに話し出しました。

（三）

「Kさんのお宅の直ぐ傍の山村さんのお孃さん……あの方と美枝子さんとは學校時代から大變仲善だつたさうよ。それで、學校が終んでからも、山村さんへは庭先からよく遊びにいらしつたんですと……あの方の名は何んとか云ひましたつけね?」

「知らないね。」

「さう、貴郎、そのお孃さん見たこと無い?」

「無い。」

「さう〳〵思ひ出しました。國子さんですよ。可也美人ですわ。」

「そんなことは、何うでも好いぢやないか。國子が何うかしたのかい。」

「或日、美枝子さんが、山村さんへ遊びに行きますと、國子さんが、いろ〳〵戀の話をして聞かせて、男から來たいろ〳〵の戀の手紙を見せたんですつて……あの方は本郷の洋書研究所に通つてゐるんですつてね。ですから、男と平氣で、ヅン〳〵交際して、美術、文學、……そんなことの爲には手紙の遣り取りでも訪問でも些とも遠慮なんかしないし、寫生旅行にも男のやうな風をして一緒に出掛けたりなんかするんですと……ですから、若い、繪の方の男のお友達から澤山手紙が來てる中で一つ國子さんの大事にしてゐる別の手紙を秘密箱から出して、それを美枝子さんに悉皆見せてしまつたんですつて……。すると美枝子さんは、それを見て、身慄ひしていらしつたんですつて。それから、國子さんは餘り美枝子さんが感動して涙を流したりするのが面白くなつて、……面白いばかりでもないでせうが、其後もその男の人から來た手紙は一々美枝子さんに見せることにしたんですつて……若し見せないといふと、美枝子さんが涙組んで、どうか見せてよ。よ。見せてよ。私にも見せ

てつて強請むんですと……強請れるのが面白いもんだから、見せない振をしては見せるやうにしたんですわ。けれど、それはお駒さんが邪推を交ぜて話したのかも知れませんのね。兎に角、そんなことが度重なつてゐる中に、バツタリと美枝子さんが、國子さんのお宅へ行かなくなつたんです。偶に逢つても、手紙を見せてなんて云はなくなつたんですと……」

斯う話してゐる中に、無雑作な食事が終りましたから、私は風を慕つて縁側に出て椅子にかけました。妻も直ぐ後を片づけて傍にかけました。

（四）

「それが貴郎、何ういふ理由だか分つて？　それには實に奇妙なことがあるのですよ。美枝子さんは、國子さんのしてゐる享樂を、御自分一人ですることを發明したのですわ。それは、美枝子さん自身で、若い男から美枝子さんに戀をしてよこした手紙を書いて、それをお駒さんに何處かからポストに入れさせたのですよ。時々は御自分で持つてゐらして近所のポストへ投入たのですよ。さうすると、その手紙は、翌朝出したのなら夕方、夕方出すと、美枝子さんの手元に屆くのです。それを美枝子さんは皆んなに隠れて、これを隠して御自分の書齋に閉ぢこもつて一生懸命に讀んでいらつしやるのですと。さうして、男から云つてよこす甘い愛の言葉を美枝子さんは、丁度國子さんの手紙を讀んだ時と同じやうに身體を震はして感動して、讀んでは涙に咽び、さうして涙ながらの儘に、また思ふ存分なことを、……それは、あなた、或る若い男が美枝子さんを熱愛して、どうしても此の世の中に貴女を見出したことは神樣の攝理としか思はれない。貴女によつて私は唯生きてゐる。朝に夕に、貴女を戀ひ、貴女を慕ひ、夢にも現にも貴女を見ないでは心も狂ふばかりですといふやうなこと、……もつと大膽な性慾にわたる程度のことまでも、誰に遠慮もありません故、思ふ存分に、その男が、美枝子さんを愛し切れる丈けの氣分を、十頁も二十頁も、まるで短篇小説の長さ位にも書いて、さうして、それをまた美しい封筒に入れて、差出し人の男の名と、受取る女の名とをチャンと書いて、投函のですと。それで、貴郎、どういふ男の名前を美枝子さんが選んで附けたか、それは全くあの方の空想ですが、何から思ひ附いたのですか、「坂本徹」といふ男から、「河村美枝子樣」といふのにしたのですつて……さうして、自分で書いて、自分で受取つて、毎日、毎夜、變つた戀の言葉、愛の言葉を繰り返し／＼讀んでは涙にむせび、そしてまた新らしく涙と共に書いて、それを自分で受取り丁度國子さんがしてゐるやうに、大切な秘密の文庫へそれをしまつて、時々

そつと出して、人に隠れてそれを讀んでは我と我が心を唆り憧れて、悲しんだり、喜んだりしてゐました。……さうしてゐる中に、もう、美枝子さんには、「坂本徹」といふ男の名が滲み込んでしまつて、心に燒印を押したやうに深く印しづけられてしまひました。ですから、どんな時にでも、その「坂本徹」といふ男の自分の空想した顏と姿とが現はれて、現にも夢にも影身に添ふやうになつたのですとさ……」

私は默つて妻の話して行く言葉を聞いてゐました。一種の變態性慾と云つなやうな心理狀態に美枝子はなつたのだと思ひ乍ら、併しそれで、本當に美枝子の胸臆に滿足が與へられたかといふことを氣遣ふ心が先に立ちました。

妻は續けました。

「それから夏が來ましたので、美枝子さんは、御兩親と逗子の別莊へいらしつたのですよ。彼方へいらしつても、それを繰り返し、夜になると、月のある晩など、月の光りの射すお部屋で、美枝子さんの好きなお琴を獨りで彈いて、その「坂本徹」といふ人に戀ひ憧れてゐました。いつも決つたやうに「殘月」を彈いたといふことですわ。あの「磯邊の松に葉隠れて、沖の方へと入る月の、光りや夢の世を早ふ、覺めて眞如の明きらけき、月の都に住むやらん――」といふ歌ですわ。あれを二度程繰り返して、さうして御自分でその音と歌とに感動しては涙に咽び、さうして、男のことを戀ひ慕つて一夜を泣き明かすやうなことが度重なつたのださうです。けれども、さういふことは利溌なあの方ですから、嚴格で、輕薄な新しがりを嫌ひなKさん御夫婦へは少しも分らないやうになすつて、唯、お駒に丈けは僅かに心の秘密を打ち明けてゐたのださうです。さうしてゐる中、或日、美枝子さんは、お母樣と御一緒に東京のお宅へ歸り、久し振りで三越へいらしつたさうですわ。(その時ですわ。お兩人で宅へお出でなすつたのは)そして、不圖、食堂にお這入りになつてゐると、美枝子さんは、「坂本徹」といふ人を見附けたんださうですわ。」

妻はさう云つて、私の顏を見詰めました。妻の眼は物を識別することの出來ないやうな朦朧とした、トロンとしたやうな眼つきをしてゐました。私の顏を見詰めてゐる癖に、そんな眼つきをしてゐるのですから、私は氣を附けました。

「おい、馬鹿なことを云つちやいけないぜ、お前の話は餘り非常識だよ。坂本徹つて、それは空想の人ぢやないか。」

斯う云ひますと、妻は氣が附いたやうに眼の型を變へました。

「さうですよ。その空想の人を美枝子さんが見附けたのですよ。美枝子さんが「坂本徹」といふ男を空想してゐたその顏が、食堂の一方にゐたのですつ

て、……それは何んな容貌の男でしたでせう…　アラッと思つて美枝子さんは思はず起つて、その方へ歩みました。すると、もう、その若い人は食事を終つてしまつたのか、直ぐ起つて美枝子さんの側を通つて外に出たんださうです。美枝子さんはその後を追つて外へ出やうとした時、「美枝さん」つてお母親さまに招びとめられたので、またハッと思つたのださうです。さうして、もう、それからは食事も喉へは通らず今の人の姿を一心に思ひつめて、食堂を出てから、もう一度、その人に逢ひ度いと、美枝子さんは非常に苦心なすつたけれど、もう逢ふことは出來ませんでした。」

「實際そんな男がゐたのかい？」

私は訊ねました。

「居たのですとも、その若い男の顏はチヤンと奧さんも記憶してゐらつしやると仰しやつてゞした。美枝が不思議な眼をして一人の若い男を見詰めてゐると思ふと、起つてその方へ行きましたが、その男が心に戀した男の姿に似てゐたのですね……と仰しやつてゞした。それからお宅へ歸つて二三日して家へも御一緒にお出でなすつたのですわ。」

「其時分、別に美枝子さんの容子に變な所は無いやうだつたぢやないか。」

「エ、私達には些つともそんな氣振は見せませんでしたね。でも、その時は、もう美枝子さんは夢中になつてその三越で逢つた若い男……空想の「坂本徹」の所在を探してゐたのですね。いろいろ口實を設けて、逗子へも歸らずに東京にお駒さんと一緒にゐて、晝夜、東京中を探し廻つたんですつて、……何處かでもう一度出逢しはしないかと……夜の銀座などを行つたり來たりしましたつて……その男の人ですか、……一寸美術家……洋畫家か、詩人と云つたやうな風采の、一風變つた風の人でしたつて……エ、美男子では無かつたさうよ。」

「それで、其後何處かで旨くめぐり逢つたのか？」

「否え、然……」

「どうしたんだ。旨く逢つたのかい？」

「エ、いゝえ、」

「おい。何うなんだ？」

「とう／＼美枝子さん病氣になつてしまつたんですわ。」

「さうだらう。病氣にもならうよ。さういふ馬鹿な眞似をしては病氣にもならうよ。」

「まあ、さう仰しやるなよ。馬鹿だか利巧だか、そんなこと問題ぢやありませんわ。お醫者はパラチブスの徴候があるつていふので、逗子へ電話をかけますと、奧さんが歸つていらしつて、丁度お宅からは近いし、院長がKさんの大學時代のお友達といふので、甚くならない中にと云つて雜司ケ谷の大學分院へ入院することになつたのすと。」

「美枝子さんがチブスで入院したつ

て話は些とも聞かなかつたぢやないか？」

私は云ひました。K君からさういふ話が少しも無かつたからであります。

「まあ、貴郎、此れからが私の話さうといふ話の心になるのですから、默つてお聞きなさいな。それで入院すると傳染病ですから、離隔室へ美枝子さんはお這入りなすんたんです。でも、まだ平生と些とも違はないものですから美枝子さんは歩いて病室の前までお出でなすつたんださうよ。すると、貴郎丁度其時、その室のお隣りの病室に、今、氣息を引取つたといふ病人があつて、その病人が死亡室へ擔荷に乘せられて運び出される處だつたんださうです。美枝子さんは何んの氣なしにそれを見ていらしつたが、人の死を目の前に見て強い刺撃をお感じなすつたんでせうね。お駒さんの方を見て、

「駒、誰方かお死なりなすつたのねえ。あれ御覽……私も、あんなになるのか知ら……」さう云つて擔荷に乘せられた一つの死骸が兩人の男に後先に擔がれて戸口を出て、夕方に近い病院の庭の草原の中をよち／＼と歩いて行くのを見てゐらつしやるので、お駒さんは、「お孃樣、あんなものの御覽になるもんぢや御座いません」と云つて美枝子さんの袖を引つぱつて戸口の處から去らうとした時に不圖その死亡した病室の懸け札を美枝子さんが見ますと「坂本徹」としてあつたので、美枝子さんは、アッと云つて卒倒さうになつたさうです。お駒さんは何んのことだか分りませんから、看護婦と一緒に抱くやうにして寢臺へ寢かせたのださうです。すると、貴郎、美枝子さんは「坂本徹」さんがお隣りの病室でお亡くなりなすつたと云つて消え入るやうに泣いてゐらつしやるので、お駒さんがその名札を見に行くと全く「坂本徹」といふ札が懸けてあるので、看護婦に念の爲に聞くと、さういふ名前の人であると答へますので、それにはお駒さんも實に驚きました。ですが、直ぐ、その懸札をはづして貰つて、いろ／＼云ひ聞かせましたが、もう唯絶へ入るやうに泣いてゐらしつたさうです。」

宵の月が青白く縁側に射して來て、風も通ふので大きに涼しくはなりましたが私は氣息をするのも苦しいやうでした。

（五）

もう日は暮れてしまつて、病院の離隔室には薄暗い火が點り、熱に浮されて囈言をいふ聲や、唸り苦しむ聲などが聞えてゐる中に、美枝子さんは泣き疲れてすや／＼眠つてゐました。奥さんがお歸りになつてから、お駒さんと看護婦とが夜を守つて段々と夜が更けますので、うつら／＼してゐました。丁度、その時分死亡室には「坂本徹」といふ人の死骸が、たゝきの床の上の臺の上に仰向にされ、顏に白い布片を

掛けて置いてあり、其一方の四疊半位の部屋には觀音さまの木像が安置てあつて、ちろ〳〵と二本の小さな蠟燭とお線香とが點つて、線香の烟が樒と佛花に絡んでゐる前に、「坂本徹」といふ方の親友ですか、二人の青年がお通夜をしてゐました。夜がふけたので、二人の青年も、つひ、うと〳〵となつて死亡室の死骸の方のことも注意せずに横になつてゐました。……と其時です。……貴郎、もう私は怖くつて〳〵……」と云つて妻は唇を震はして言葉を切りました。

「大丈夫だよ。此所は自宅だよ。」と私が氣をつけますと、妻は少し勇氣附いた容子で、

「……すると、すると、……さうしてゐると、あの、美枝子さんが、そつと寢臺から起き上つて、白いお寢衣の儘素足で病院の庭の草原へ降りて、魂の拔けた人のやうに、よろ〳〵と死亡室の方へ歩いて行きました。そして、死亡室の扉へ手を掛けて、重い扉をそーつと開けて、素足の足音を忍び乍ら何とも云へない異臭のする死亡室の內側へ忍び入つたのですと……さうして死骸の乘かつてゐる臺の側へ吸附くやうに寄つて行くと、薄暗い燭光の中に美枝子さんの細い白い手が上へすうーと揚つて、前の方へまたすうーと延びました。それは、死骸の顏に掛けてある白布を、そをーつと取り除けたのですよ。……すると、何うでせう……血の氣も何もない蒼白な死の顏が、現世を呪ふやうな眼を開けた儘、枕の底に深く落込んでゐました。美枝子さんはそれを暫らく差覗いてゐましたが、兩方の腕を伸ばして、その首を抱き上げ凝と、恐ろしく變り果てた相形を凝視てゐました。……と、突然、全身を震ひ戰かせ、氷のやうに冷たくなつたその死の唇へ、確かりと御自分の熱い唇を押し附けました。……と、……貴郎……」

と云つて妻は四圍に氣を配りながら、震へ聲を低く潛めて、

「……と、……貴郎、不圖、お通夜をしてゐた青年の一人は頭を擡げました。何んだか、死亡室の方で夢幻の中に不思議な物音がしたと思つて、ひよいと其方を見ますと、亂髮を振り亂した白衣の女が、死骸の頭を抱きかゝえて此方を見ながら、ニヤアリと笑つたといふぢやありませんか。……青年はキャアと叫つて腰を拔かしてしまひました。……その只ならぬ叫びに、もう一人の青年は飛び起き、「何んだ、何んだ」と云ひながらまた、ひよいと死亡室を見ると、ワアーツと云つて倒れました。番人は、何事が起つたかと、素ツ裸で飛んで來ましたが、もう其時は美枝子さんは、死骸から離れて、只、げら〳〵、げら〳〵と笑つてゐたさうです。……其所で院內の大騷ぎとなり可哀相な美枝子さんは手足を縛られ、看護婦達の監視の下に、泣き叫んだり

あばれたりしてゐる中、夏の夜は白々と明けましたので、直ぐ、松澤病院の方へ轉院させたのださうです。それからといふものは、先刻私のお話した通り實にお氣の毒で何んとも申しやうもありません……」さう話し終つて妻は目に一杯涙をためてゐました。

私はホーと太息をして暫く何んとも聲の出しやうがありませんでした。

(完)

(二)刑場役人の話

越田春二

(一)

考へてみると、ざつと五十人位は私の手で殺したでせうね。今でこそ八十の阪を超えて、まるで意氣地もなくなりましたけれど、若い時にはこれで元氣なものでした。

刑場役人といつても、床几に控へて居る檢死の役人だと一寸意氣なものですぜ、死刑囚に對して『これ、面を上げい。』と、嚴に、しかも應揚に云つて『臨終の際に、何ぞ申し殘すことはないか某、聞届けて遣はすであらう』等と、扇子を立直す所など、芝居で見てもいゝ役ですが、私のやつたのは、磔柱に縛られた死刑囚に、槍でその胸をプスリと貫くのだからどうもいやな役目でした。

それでも、槍をグイと引いて、穂尖鋭く刺すのはまだいゝ方です、刀で打首にする時にはあんまり好い氣持ちはしません、所が、この首を打つのがひどく面倒なものでしてね呼吸があるんです、芝居なんかでは、太刀を上段に振り上げて『エッ！』と叫んで斬り下ろしたりしますが、ありあ、噓ですあれぢやあ、人間の首は斬れません。

先づ死刑に處する男を蓆の上に坐らせるんです、前には大きな穴が掘つてある、目隠しをして『エッ！』と叫ぶのです、この掛聲の如何によつて、大抵の者だと、もう、精神的に死んだと同じになつて、ダラリと首を下げるものです、その時、再び『エッ！』と叫んで、刀を下手の方から廻してザクリと首を斬る、まあ、大根を切る呼吸ですね、そして、死刑囚の身體をポンと蹴ると首だけ殘つて、血みどろの姿は穴の中に轉げ落ちるといふ寸法になつて居ます。

これも二人や三人殺した腕ぢやあ、中々、調子よくゆかないものです、所が、一度面食つた事があります、今で云へば、強盜殺人犯とでもいふ惡漢を

處刑する時です、ひどく度胸のいゝ野郎だつたと見えて『エッ！』と叫んでも、首をダラリと下げないんです、これにや勝手が違ひました、で、もう一度『エッ！』と掛聲をした途端、どうしたものか、目隱しが取れたんです、男は、ヂロリと私を見上げて睨みつけました、凄い凄い眼、怨めし相な表情！私は思はずブルブルと身を顫はして二度と刀を振上げる元氣がありませんでした、その男の顏だけは、七十年も經つた今日でも忘れる事が出來ません。

凄いといへば火あぶりの刑ですよ、八百屋お七等もこの刑に處せられたといふ事ですが、繪にも書かまほしい美しい女が、情熱的な戀で火あぶりの刑に處せらるゝといへば、一寸妖麗な詩の物語の樣に思はれるでせうが、しかし、本當の所を見て御覽なさい、凄愴なものですぜ、なにしろ生きた人間を燒き殺さうと云ふんですからね。

磔柱に高手小手に縛められて立たせられる、その下には枯木や松葉が山と積まれる、役人の申渡しが終ると、火をつけるんです、それも今の樣に石油でも掛けた木に、マッチでつけるんならいゝけれど、火打石つていふのでカチカチと音立てゝ放けるんですからそのカチカチといふ音は魔の音に聞えますね、それだけでもゾッとしますぜ。

呪ひ火はチョロチョロと燃え出す、メリメリと燃え上る、それが磔にされた者の足先から燒き初めるんです、火と、煙の中に立つた者の叫ぶ悲鳴！ヒイー、ヒイーと名狀する事の出來ない凄い痛ましい聲、火は、身體につけた着物を燃して、肉に焦げつく、ハラハラと亂れた黑髮が燒ける、唇をくひしばつて居る、その陰慘な姿！　身體の燒ける惡臭！　悲鳴！　まあ想像して御覽なさい、幾年刑場の役人を勤めたものでも、身の毛が惣立になるやうに凄く思ひますぜ、とても、その姿は見るに忍びません、いつ迄も、悲鳴は忘れられません。

（二）

芝居では石川五右衛門の釜入りといふ物凄い場面がありますね。五郎市とかいふ子供と共に油を沸かした大釜の中で煮殺されます、五右衛門といふ男さすがに大泥棒だけあつて、其苦悶の中から『石川や濱の眞砂は盡きるとも……』なんどとやつて、百日づらの樣に毛を長く延ばした怖ろしい大きな眼を見張つて役人を睨めつける、度胸のいゝものですね、それでも、子供は可愛いと見えて死ぬ迄兩手で高く差し上げて居る、見物衆も、五右衛門を散々憎んで居ても、悲壯な親子の恩愛を見せられて思はずホロリとするといふ所など作者も考へたものですさあねえ。

しかし、實際に釜入りといふ處刑はありましたぜ、私も、今の福岡市外百間畑といふ所で大泥棒の釜入りに立會

つた事がありました、尤もたつた一度の經驗ですけど。
　野原の中に穴を掘つて急造の竈を築いたのです、それに、釜を掛けて火をどんどん燃した、丁度湯になる頃、處刑囚を、身體中繩でぐるぐる巻にして大勢で抱へて釜の中に投げ込んだんです、なにしろ、白い湯氣がムヤムヤと昇る位に熱くなつて居るから、たまりませんさ、泣き叫び乍ら死物狂で暴れるのですが、胸の所迄も深さのある釜だから、逃げようとしても逃げることは出來ません、しかし、案外にもろいもので、五六度悲痛な叫びを上げて居たが、すつぽりと身體は釜の中に這入つてしまひました、あとで、見ると、身體中眞赤になつて居ましたつけ、まるで、ゆでだこのやうに……。
　それが、明治になる十年許り前のことだから驚くぢやありませんか、最後に人を殺したのは明治十八年のことです、私は、御維新後この北海道に屯田兵になつて來たんです、少し話は枝道に這入ろかも知れませんが、屯田兵といふのは、その頃、北海道に移民を送り開拓しようといふ方針で青年を募集したんですが、それが、兵隊の組織になつて居たもので、全部兵舎の樣な所に寢起きして、畑や森林の開拓に從事し一定の年限を勤めると、相當の地所を下附されたもので、今でも北海道で相當の地位にある人の中には屯田兵上りが澤山に居ます。
　その屯田兵の中で矢張り福岡から來た鈴木といふ男が遊廓にいつて酒を呑んで暴行を働き娼妓を殺したが捕縛されて死刑に處せらるゝ事となつたんです、私は、十人ばかりの兵隊と共にその鈴木を銃殺する役目を仰せつかつたのでした。
　其の日は蒸し暑いやうな、生溫い風の吹く厭やな日でした、見物人も相當に練兵場に集まつて來ました、別段に、昔のやうに幕を張るでなく、竹矢來を結ふでもなく、たゞ一本の白い棒杭が打つてあつて、その近くへは人を寄せぬやうに番兵が警戒した許りでした。
　私達の一隊に護られて青い獄衣の鈴木は刑場に引張り出されたのです、やがて柳の木の横の棒杭へ後手に縛められました、將校が執行狀を讀み上げ、坊さんが來て最後の說敎を聽かせましたが、その時の顏は青くなつたり、赤くなつたりして居ましたつけ。
　その五間前に私達は銃を執つて立つたのです、『用意！』『射て！』といふ號令に、ズドンと音がして一齊に白い煙が立ちました、と、見ると鈴木は咽喉と胸と腹とを打たれて、紫の血に染まつてグツタリとなつて居たのでした。
　そんな事から比較して見れば今の死刑なんど、有難いものです、それに、餘程惡い事をしなけりあ殺されないんですからね。
　御承知の樣に屯田兵をやめて、私は

この札幌で蕎麥屋を開業しましたが、蕎麥を庖丁でザクリザクリと切る時にも、ふと、首を斬つた罪人の事を思ひ出したりして、あんまりいゝ氣持ちはしませんでした、やつぱり、人間つていふものは、何處かに、いゝ所があるんですね。

（三）

あなたはお駒の淨瑠璃を御存じですか。例の品川の先の安房上總の見晴の浪打際で、磔になるといふので、見物が澤山に來た、そして……餘り待つたで寒くなつた、鮫洲のお茶屋で一杯しよ、さあ〳〵ござれと打連れて——などと、大變にいゝ機嫌に浮かれたもので、この分だと、一寸物見遊山の氣分ですが、事實處刑があるといふと、ずゐ分見物が集まりました、可哀さうなのは殺される者ですが、見物にとつては、白いこと芝居所の騒ぎぢやあない本當に生きたのが殺されるんですからね。だから、刑場の附近には駄菓子屋や酒屋なども出來たものでしたよ。

今の若い人達には面白くないかも知れませんが、私が殺した囚人の中で變つたのを二つ三つお話しませう、つまり、死刑囚ローマンスつて云ふ所ですね。

速足の八兵衞といふ大泥棒が處刑される時のお話です、この男は福岡から佐賀、長崎に出沒する泥棒で、役人達を困らせた男でした、なにしろ、今其處に姿を見せたかと思ふ內、何時の間にか隣村を騒がしてゐるといふ有樣で其敏捷いことゝ云つたら小犬に追はれる雀のやうで、中々捕縛どころか却つて役人の方で根氣負けをして終ふ位でした。

この男が久留米の方に逃げたと知つた與力の一人は十手を腰に追跡しました、丁度、水城の附近迄來た時、向ふから笠を胸の處に下げて、風にでも送られてるやうに走つてくる男がありました。

與力は頭を少しくかしげたかと思ふと忽ち姿を隱して終ひました。

『八兵衞御用だッ』凜然たる聲が溶けるやうな日中の平和を破つたかと思ふと、畑中から『ピカリ』十手が光ると共に笠の男の前に與力は躍り出したのです。

走つて居る男は確かに八兵衞でした自分の名をあまりに急に呼ばれたので『ハッ』と思つて後退りしたが、これが運の盡きとでも云ふのでせう、そのはずみにバタリと胸の笠が落ちて、それへ片足を踏入れたため、ツルッと滑つて片膝をつきました、處へ繩がかかつたからたまりません、八兵衞は行動が思ふ儘にならず、あせつてゐるうちに、この騒ぎを聞きつけた近くの農夫達が集つて來て、さんざんに打ちたたかれた上捕縛されたのです。

さあ、福岡、博多の町は大評判です、『八兵衞が捕へられた、速足の大盗人

か搦められたと云ふので、愈々打首に定まりますと、その日は近郷、近在の人が薄暗いうちから、どんどん刑場へつめかけたので、矢來も破れんばかりの人の山を築きました。

軈て人波が一しきりゆれ出したかと思ふと定めの席に彼は引き出されました、役人が最後の望みを聞くと八兵衞は今迄下げてゐた頭を靜かにあげて、この群れる人々を見廻しながら、

『お役人樣、私は誰でも知つてお出になるやうに走ることが人並はづれて早いのです、けれど、私は、まだ、一度だつて命がけで思ふ存分走つたことがありませんでした、今生の思ひ出に、お願ひですから、思ひ切り走らせて下さい。』と、意外な事を願ひ出ました。

役人達も相談した結果『それでは刑場を一廻りするだけ許してやるから』と、言渡して、附近や出入口を嚴重に警護して繩を解いてやりました。

彼は一反の白木綿を取り寄せて、それを殘らず卷きつけたかと思ふと、獨樂のやうに、ぐる、ぐる、ぐるとまはりながら走り出したのです。

白布は、一尺延び、二尺延び、次第に長さを增し、終には二十八尺の白布が地上二尺許りの處を、一寸も地に着ずさながら白蛇が流を逆上るが如くに、蜿々と波打つて刑場内を廻りました。見物人も私達役人も『あれよ、あれよ』と云ふ許りで、八兵衞が走つて居るのか、白布が白蛇と化して彼を追掛けてゐるのか、見さかひが附かなかつた位でした。

やがて、パツタリと倒れたのです、驚いて近寄ると彼は全身を紫色にして死んで居ました、彼は自殺したのです。

（四）

今度は少し色つぽい話をしませう、尤も、處刑される人達の犯罪は昔も今も變りはありません、色と、慾のためで、それ〴〵面白い話もあるのですが覺へては居ません。

裸馬心中――今なら新聞にでかでかと書立てるといふ情話です、『博多柳町柳はないが女郎の姿は柳腰』といふ唄に殘る柳町遊廓の三田屋といふ妓樓の花香といふ女が、深い馴染の大工の三吉といふ男と添ひたいばつかりに登樓した田舍の金持の旦那を締め殺して金を奪つた事が發覺して市内引廻しの上打首と裁判の結果宣告されました。

そりあ美しい女でした、色のしろい瞳の圓らな、博多人形のやうな艶やかさでした、白の着物に白の帶、髮も亂れて、獄内で瘦せた身體を裸馬に乘せられて町々を引張り廻された時には、誰もが、その凄艶さを見て、涙ぐましい程の情を起こさぬものはありませんでした。

秋の陽の冷たく照る夕方花香は刑場附近迄引張つて來られました、馬が歩

く一足、一足に女の生命は消ゆるのです、花香は、馬の上から絶えず群集の中に瞳を注いで居ました、悲しさも、羞かしさも忘れて、せめては死ぬ前に戀しい戀しい人の顔が見たいためでした、女の戀はそれ程眞純でした。

『おう!』かすかに叫んだ花香は嬉しさうにニツコリと笑ひました、達者で暮して下さいね……と眼が物を云ひます、その時でした群集の中からよろよろと轉げるやうに走り來た若者があります、その男こそ、花香が生命をも投げ出した三吉でした。

『花香!』

『あなた!』

見合す顔、ホロリと落つる涙は嬉しい、懷かしい、悲しい涙です。

『えい! 邪魔者!』と、役人が無情にも男を突き飛ばさうとした時、三吉は、隱し持つた刄物でグザと自分の咽喉を突いたのです、溢れ出づる赤い血こそ戀の血です、尊い、尊い血でした。

『おう! あなた!』と、馬上から女は叫びました。

『俺も死ぬ、そして、いつ迄も一緒に居やうなあ。』苦悶の中から叫びます。

『嬉しい!』

女の紅苺のやうな唇からタラタラと流れた血潮が男の身體に落ちます、花香は馬上で舌を噛み切つて居たのでした。

役人は驚いて馬を引張り出したのですがその馬でさへ、二人の尊い戀のための死を痛んでか中々に動かなかつたといひます、それを無理に刑場に引き入れた時、花香は、もう、ピクピクと身體を動かす許りでした、その死顔の凄麗さ、戀人と共に死んだといふ安心と喜びを感じたのでせう、それは美しい死顔でした。

でも、役人は彼女を馬の上で自殺させたといつては困るので、その死體を刑場に据えて首を打つことゝなりました、その役が私なのでした、私は生きた男や女は多數手にかけて來ましたけれど、痛ましいこの女の首をどうして斬り落されませう、私の眼からもポロポロと涙が溢れました、それ程に、花香の死は尊いものでした。

『ゆるしてお呉れ!』と、心の中で叫んで刀を振り下ろした時、戀の女の首は血に染まつて地上に轉がりました。

この人達の死は『裸馬心中』といつて小唄にまで殘つて居ます。

（五）

その當時、ひどく世間を騷がせた女賊のおきんと、その情夫の惣吉が磔にされる日の話も痛ましいものでした。

その日のおきんは水髮を毛卷島田にゆつて薄化粧に鐵漿をつけて、死支度の白の小袖、淺草縮緬の長襦袢、黑襦子の帶をキリツと締めて、襟には水晶の珠數を掛けて居ました、凄いほど色が白く艷やかでした。

對手の惣吉は本田髷の刷毛先も艷々

しく、色の白い、キリッとした顏をした小意氣な男で、白小袖の下には結城紬の小清洒した袷に尼色繻子の巾狹帶を締めて居ました。

痩馬から下されて二人は刑場の眞中に引張り出されました、役人が遺言はないかと聞いた時に男は

『何もございません、おきんと一緒に死ねば本望で御座います』と、愛する女の、靜かに首垂れた雪なす頸を見ました。

『私も、惣吉さんと一緒なら嬉しうございます、本望でございます』と、いふその瞳は男の顏に注がれました、紅い唇から溢るゝ白い齒がキラリと春の陽に光りました、男も女も滿足氣に微笑みました。

二人はやがて刑臺に縛られました。私の持つた呪ひの銹槍は女の乳の脇を今一人の役人の槍は男の胸をヅブリと貫いた時、二人は顏見合せて

『おせい。』

『惣吉さん。』

『さよなら。』

『死んでも。』

悲痛な叫びを發しました、私はその時、戀の情熱の强さを思ひ、戀する二人が同じ場所で、嬉しげに未知の國へ旅立つた幸福を羨みたい樣な感激を覺えました。

けれど、もう一つの話を知つた時、なんだか、その二人の最後も、お芝居めいて居る樣な、氣が致します、人間の本當の叫びでないとも思ひました、と、云ふのはこうなのです。

なんでも夫の眼を忍んで不義を働きその夫を殺したといふ若い女とその情人が處刑された時の話なんです。

この二人が役人の前に引張り出された時に役人は

『三太面を上げい。』と、彼を呼びました。

『へい。』

顏を上げた時に彼の見たのは役人でなく、女の首垂れた雪の樣な頸でした。

『臨終の際に、何か願事はないか、聞屆けて遣はすぞ。』

『旦那、お願がございます。』

『ふむ。』

『どんな事でもお聞きなすつて下さいますか。』

『うむ……何ぢやな、とにかく云つて見るが好い。』

『私の一生のお願ひでございます。』

『うむ。』

『磔に成ります前に、へいゝゝゝゝゝゝ』

『白痴め…』と、役人は一喝しましたが、見物も、役人も、穢多も、非人も一度に聲を揚げて哄と笑つた時、女のもつれた髮が、はらはらと搖れたと思ふと、その顏は火のやうに燃へたといふのです。

其の當時、これがために、特に記錄に殘されたのですが、私は、それが人

間の本當の心でないかと思ひました。理屈云ふのではないんですけどね。

（六）

秋に近い曇つた日若い美しい娘が放火の罪で火焙りの刑に處せられた事がありました。

娘は十九歳でお美知といふ名でした。二世を誓つた男が他から嫁を貰つたといふので、その婚禮の夜放火したのです、火が炎々と燃へ上るのを見て云ふべからざる嬉しさを感じて以來、その味が忘れられずに、毎夜、夢遊病者の樣に家を脱け出で各所に放火し福岡城下だけで三十幾ケ所燒いた事が發覺して捕縛されたのですが、彼女は白洲で取調べを受けた時も微笑さへ帶び乍ら『ほんとうに火をつけるのは、面白うございます、小さな火が燃へて大きな家が見る見るうちに燒ける。そして人が大騷ぎをする。私はそれを見て居ると、胸が晴れるのです。』と、答へたとのことです。

裸馬から降ろされて娘は枯木を山のやうに積み重ねた刑臺の所に引張つてゆかれました。私が目隱しをしようとすると

『お願ひです、この儘にして下さいませ、私は死ぬ迄とろとろと燃へ上る火が見たいのでございます。』と、いつてどうしても承知しませんでした。

柱に高手小手を縛められて立たせられました、非人が火を枯木に點ずると毒蛇の舌のやうに怖ろしい火は燃へ上つてゆきます、その赤い色、紫の煙、それこそ娘が見たいものだつたのでせう。

泣きもせず、叫びもせずに、物凄い微笑さへ帶びて居ました、身體を火が包むのを待つて居るかのやうに……。

一面に火が燃へ上つた時、いふべからざる凄い笑ひ聲が聞えました、娘の身體は、顏はもう火のために見へなくなつて居ました。

話は變りますがひどく柳町の女郎に惚れた男が、女に逢ふ金を作るため強盗を働いて捕縛され打首の處刑に決定しました。

いよいよ最後の日の朝のこと『私の命も今日限りでございます、半三郎の最後のお願お聞届け下さいます樣、お願申上げます。』と、彼は役人に頼んだのでした、それは許されました、彼が最後の唯一つの望みといふのは戀しい女に手紙を送ることなのです。

二十日許りも男が姿を見せぬので、お小夜は病人のやうになつてゐました、それが思ひ掛けなくも手紙が來たので女は躍る胸を靜めて手紙を讀むと、餘りに意外な事が書いてあるので女は氣も轉倒せん許りに驚きました、男が幾人も人を殺した、そして打首にされる、どうしても事實と信ずる事はできませんのです、しかし、戀人が殺されるやうになつたのもみんな自分の爲だ、男許りは死なしはせぬ、一緒に自分も死

なう、いゝや、戀人のみを殺してどうして自分が生きて居られやう……斯う決心して彼女は鏡臺から剃刀を取り出して懐中するや否やこつそりと裏口から抜け出て、仕置場に一散に走りつけたのでした、と見ると、竹がこひの中に手を合せて坐つて居るのは戀人です、半三郎です、女は狂氣のやうに叫びました。

『あなた、わたしも死にます。』

半三郎も吃驚して眼を開けました、私も刀を持ち直して見ると、哀れにもお小夜は咽喉をかき切つて血に染まつてゐるのでした。

『早くお處分下さりませ。』

と、半三郎は云ひました、その聲は落ちついた安らかさがあつたのです。

『えい』と、叫んで私が刀を振り上げた時、首が轉げ落ち、彼の姿は、前に掘られた穴の中に落ちていつたのです。

お小夜も美しく微笑んでばつたりと倒れました。生きた人のやうに唇は綻びて、白い歯が眞珠のやうにきらりと春の陽に光つて居ました。

まだ私の話は盡きません、が、あんまり長くなりますから、今日はこれで止めませう、怪談ですか、そりあ、凄いのや奇怪なのや面白いのもありますぜ、しかし、今の若い人には嘘とより思はれないでせう、折角、今まで本當の事をお話して來たんですから、怪談で今迄のもみんな嘘と思はれては詰りませんから、それはいづれ更めてお話し致しませう。

どうもお退屈でした、私は今夜も靜かに、自分の手で殺した人達の靈にお祈りをせねばなりません、老人になると、めつきり氣が弱くなります。(完)

(三) 蛇舞

三上於菟吉

——前畧——

……M樣、あなたが雜誌に時々御發表になる「怪奇の蒐集」に興味を持つ讀者のひとりでムいます。私は女だてらに子供の頃から妙な嗜好がムいまして、人生と科學とを超越した不思議な「事實」に就いて聽いたり讀んだりすることを好み、女子大學に學んでをりました頃にも日本は素より海外のさまざまな文獻を辿つて「怪奇慾」の滿足を計つてをりましたが、いかなる因縁が最近私の身の上にこれまで私が讀み聽きいたしました範圍では類例のない淺間しい「不思議」にまつはられ

そのためにとうとう最愛の良人をまで失ひまして今更の如く悲しみと驚きとのうちにさまよつてゐるのでムいます。しかしいくばくの月日がたつて私の寡婦としての淋しみにも慣れました今、私は「怪奇蒐集家」のあなたに今度の事件を詳しくお知らせすべき愛讀者としての義務を果さうとする勇氣を得ました。私は久しく手紙の筆を取ることさへ止めてをりましたので定めし讀みにくいものになるとは存じますが、どうぞ私の怖ろしい實驗報告を御一讀下さることをお願ひいたします。

M様、私が結婚いたしたのは只今から五年以前、廿一歳の夏で、良人は美術學校を出たばかりの青年でムいました――このやうなことを突然申し上げたらさぞかし妙なことを話し出す女だと思召しませうが、話の本筋にこのことがいかに緊密な關係を持つてをりますかはこの手紙をお讀みつゞけ下さるに從つて御理解がゆくと存じます――

私達の結婚はまことに似合はしい縁組だと周圍から祝福されました。事實、私は靜岡地方の舊い造酒家の娘に生れ、良人は都下でもかなり名高い呉服商の次男で、才藝も容貌もまづ普通以下ではありませんでした。彼は洋畫を學ぶのが最初の志望でしたさうですが中途で漆器に興味を持ち出しまして、在學中も大分その方に深入をいたしてをり、卒業と同時に府下中野に工房を新築して其處で專心に研究を續けて行かうとしてをりました。私と初對面の日から三月程して、もう幾日かでいよいよ結婚といふころ、彼は訪ねて行つた私にお茶のテーブルで申しました。

「凉さん、僕が歩いて行かうといふ道はさう容易くもなし派手でもないんだよ。僕はどうかして古代の乾漆を新しい方法で蘇へらせたいのだ――これが出來上つたら日本の工藝美術界の價値は二倍になる。」

私はさまで華美な生活を好む性でなかつたので、未來の良人の質素な考を寧ろよろこんで微笑しました。

「どうぞ一生懸命に行つてネー、私だつて出來る限りお力添へをしますわ。」

「ありがたう――だが、いくら君の協力がほしくつても仕事の方は僕ひとりの勞苦として辛抱する外はない。君は勞苦にやつれた僕の良い慰藉者になつてお吳れ。」

「ええ、どんなにでも慰さめますわ。」

こんな會話があつて間もなく、われわれ新時代の男女には格別意義もない遣方で平凡な結婚式は日比谷大神宮に擧げられました。近所の會席で披露――そしてこの夕方われわれ新婚者は新橋驛から相州小田原を差して形ばかりのハネムーンの旅に上りました。何分暑い頃だつたので汗を流しながら遠々と歩くよりも小田原の別莊へ新夫婦で避暑方々行くがよからうといふのが良人の兩親の意見だつたのでムいます。

別莊は海岸近く、涼しい松林の中に

ありました――そしてその別莊での生活がどんなに羞かしい夜にはじまつてどんなに樂しく爽々しい朝につゞいて行つたかそのやうなことはこゝに申上げる必要がありません。兎に角空と海と砂濱と丘陵とは十分に私たちを歡ばせました。そして夢のやうな日が絕つてまゐりました……

ところが、それは蒸し暑いある午後でムいました。涼しい庭陰に籐椅子を持ち出してその頃の彼の愛讀書でしたヷサリの美術書を讀んでゐました良人は、突然ワーツとまるで絞め殺されるやうな悲鳴を上げて、大事にかけてゐた書物を地面に放り出すなり私が小さい編物をしながら坐つてゐた濡椽眼がけて駈け上りました。私は胸が潰れさうにびつくりしました。

「どう遊ばして?! あなた！」

色を更へてブル〳〵と戰慄しながら私の着物の端をつかんで、附伏してしまつた良人の肩に手をかけつゝ私は叫びました。良人は口が利けませんでした。

「どうなすつたの？あなた！あなた！」と私は繰り返して彼の肩をゆさぶりつゞけました。

すると良人はやつとのことで顔を揚げて、「蛇が！蛇が！」と咽喉が窒つたやうな聲で答へて、恐怖に充ちた目で庭の方を振り返りました。

「蛇にお嚙まれなすつたの？」と私は良人の容子がたゞごとならぬのに不安を抱いて尋ねました。

「いや、嚙まれはしない……が、涼さん、まだそこらにゐやしないかい？」

私は良人が坐つてゐた籐椅子のあたりを眺めましたが、それらしいものは影も差してをりません。

「いゝえ蛇なんかをりはしませんわ。」

「いや、今あの叢から顔を出したよ――大きかつた！三尺位……」

「どんなに大きくつたつて蛇なんか何でもないじやありませんか。」

良人はひどく憤つたやうな眼で私を睨みましたが、思ひ返したやうに苦笑しました。

「僕はどういふものかあいつがヒドク嫌ひなんだ。心理學者は僕達人間が兩棲類や爬蟲類を怖れるのは前世紀にあいつ等の巨大な群から迫害された時の恐怖感の遺傳だといふが僕の祖先は人一倍あいつからいぢめられたと見えるよ。」

私が良人が蛇をどれ程怖がるか――殆んど狂的なまでにあの醜いものを憎むかといふ事實を知つたのはこの時が最初でムいました。ですけれどそれから四五日經ての夕方此の土地で第二の經驗をした時には、なほ一さう驚かされたのでムいます。その夕暮れ私たちは町はづれの城趾――御用邸裏の靜かな坂路を歩いてゐたのでしたがやがて小徑は淋しい竹林と若木林との間にはひりました。ひでりつゞきの後で小徑の砂埃は白灰のやうに乾き、人つ

子ひとり歩いた足痕もなく、まるでよく篩ならされたメリケン粉の鉢の中のやうに奇麗でした。私たちはいくらか埃が立つのを氣にしながら過ぎました。あたりはしいんと靜まり返つて、竹林と低い谿谷とを越して彼方につゞく箱根山系の上の空にはもう夕やけが流れはじめてをりました。

「靜かですことね。」

「ああ、靜かだね——！」良人はさう鸚鵡返して一種の情熱を以つて私の手先を握りました。私達は生の悦びを底深く感じつゝ歩みました。徑はますく淋しい山間にはいつてゆきます。私はもう引返した方がよくはないか——遠つ走りをしすぎたらあとで疲れるだらうと思ひましたけれど、その時心に漲つてゐた幸福感はそのやうなことを發言させませんでした。すると、良人はふと足元を見てつぶやくやうに申ました。

「何だらう？この筋は？」

私も足元を眺めました。私の目にはいつたのは只今申たやうな奇麗な小徑を横ぎつて埃の上に痕づけてゐる波狀の線でした。線は右側の林から左側の林へと引かれてゐます。

「何でせう？美しい線ですこと。」

私も良人も引緊め合つた指先の感覺の歡びと心の快樂とに一ぱいだつたので、その線については深く考へるひまがありませんでした。たゞその波狀線にまたしても行き合ふたびに「おや、またありましてよ。」「うん、何だらうね？」なぞと言ひ交しつゝ歩いて行くのでした。と、はじめてその線に氣づいてから二町あまりも來たと思ふころ、良人は俄かに「アッ」と咽喉の奥で叫んで、私の手を振り放し、兩手で頭をかゝへて路の眞中に立ちすくんでしまひました。びつくりして容子を見ると彼は目を逆釣らせ髮の毛を逆立てて前方を凝視したまゝ、何とも言はれず怖ろしい形相を見せてゐるのです。私は彼の視線を追ひました。すると今しも一匹の蛇が右側の林から左側の林に匍ひ移るべく小徑を横切らうとしてゐたところ、そこへ突然私たち夫婦に現れられたものですから蛇の方でもびつくりして半分ばかり匍ひ出したまゝ、くるりと後戻りをして元の藪にはひ込まうとしてゐるので厶いました。悪いものを見せてしまつたと、私は良人の病的な特徴を思ひ出して心に呟やきました。それで何氣なくほゝえんで見せて、

「また出ましたはね——大人しい青大將ですわ。……大分遲くなつたから歸りませう。」と申ました。

しかし良人は返事をすることも出來ないまでに蒼ざめて身ぶるいをしてをりました。そして啞にでもなつたやうに痙攣した指先で今蛇が歩いていたあたりの地上を指し示して見せるのです。その指示する方角を凝視した時、あまり物怯ぢをしない私も思はず「まア！」と叫ばずにはゐられなかつたの

で厶います。その地上には例の波狀線で緩い弧を描いて、右側の林から出で同じ林に沒えてゐました。つまり今出で來てすぐに隱れた蛇の匍ばつた痕がついてゐたのです。それから考へると只今まで私達が平氣で跨いで來たあの美い波狀線はすべて此林間に棲息する蛇の痕――それもあの鮮やかな印し樣から推測するとつい先刻徑を橫切つたものとしか思はれません。私は前後を振返つて見渡しました。目の屆くかぎり後にも前にも殆んど四五間の間隔を取つて無數に印されてゐるのでした。私も髮の根が立つ樣な氣がしました。しかしそれは顏へ出さずに、「さあこんなところは早く退きませう。」と繰返しましたけれど、良人は石のやうに突立つたまゝ身動きもしません。そして突然叫びました。

「アレ、お聽き、林の中でザワザワ、ザワと音がしてゐる。あれはみんなあいつらなんだ。あいつらが無數にうごめいてゐるのだ。もう迚も逃げられない……」

良人の恐怖がどのやうなものであるかは私にもよく解りました。けれどもいつまでもかうしてはゐられません。

「つまらないことを仰有いますなよ。あれは夕風で萱や木の葉がそよぐのです。サア、男の癖にそんな意氣地のないことではしかたがないじやないこと！」

荒つぽい言葉ではげまして見ましたが、良人は相變らず石のやうに佇んだまゝ、私の言葉さへ耳にはいらぬやうです。

「僕には步けない――步けない、」

彼の言葉と態度とは嗤ふにはあまりに悲慘でした。實際若し强ひて一步踏み出さうとしたならそのまゝ前にのめつてしまつたに違ひありません。

「怖ろしいことだ！怖ろしいことだ！」

私は嚙みしめた齒の間から押し出すやうにかう繰り返す彼の言葉を途方に暮れながら聽いてゐました。若しその時彼方から町に野菜を運ぶ百姓の荷車が來なかつたなら、ほんたうにどうして良人をあの林間から連れだし得ましたらう。兎に角良人も一臺の荷車が來たのではげまされて、その後から側目も振らず林をかけ拔け、やつとのことで丘下の町に逃げこむことが出來ました。

夏はまだ長かつたので厶いますが、此の事があつてから私達夫婦はもう小田原がいやになつて、二三日して行李をまとめて府下中野の工房に引取りました。あの夕ぐれ以來半分病氣のやうになつてゐた良人も工房に歸ると元氣が出ました。新古各種の色漆をいぢつては日を暮しはじめました。

良人の工房生活――その靜かさ、その勤勉、その孤獨を愛しむ美術家良心と言つたやうなものは、亡夫の記念として此處に詳しく書きしるして讀んで頂きたいので厶いますが本題以外のこ

とですから略します。兎まれ、その夏以後四年間の彼と申すものは殆んど生活の全部を新乾漆法の研究に費やしました。専門雑誌で幾分緒論のやうなものを公にもし、農商務省の展覧會に小さな作品を出品もいたしました。しかし世間の反響はまるでなかつたと言つてもいゝ位寂しかつたので、さすが靜和な氣性の彼もいくらか焦れて來て、「よし、日本の狹量な工藝美術界なんかもう眼中に置かんぞ、凉さん、僕は二つ三つの研究を佛蘭西の雜誌で發表する積りだ。」なぞと言ひ出すやうになり、事實、最後の彼の仕事は佛文論文の起草に大部分を費やされたのでムいます。

さうかうしてゐるうちに昨年の秋のはじめになりました。盛夏を輕井澤の方で送つて來た私たち夫婦が、新しい元氣で工房に閉ぢこもつて間もなく、ある日良人の友人の杉井と申す美術家がブラリ訪ねていらつしやいました。

杉井さんは洒落た碁盤縞の間着を召し大型のハンチングをかぶり、細身のステツクを持つたまゝ工房にお通りなすつて、椅子にも懸けないうちにお言ひになりました。

「サア櫻田、外出の仕度をするのだ――おくさんも――茶なんか要らんです。それより早くおめかしをして下さい。」

「何處へ行くのだ？」と良人は訊ねました。

「帝劇だ。」

「帝劇？」

良人は眉をひそめました。彼は芝居は一たいに好きませんでしたが、就中あの劇場を嫌つて一年一度も足ぶみをするかしないかだつたのです。

「澁い顏をするなよ――いつものお芝居とは違ふんだ。モスコオ舞踊團の殘黨のマダム・アントノフの踊りを見にゆくのさ。僕は昨夜も行つたのだが、行つて見た結果誰れよりも君達夫婦に見て貰ふ必要があると信じなければならなくなつた。是非お二人で行つてくれなければならないのだ。」

「變なことを言ふね。舞臺裝置に新しい塗料でも用つてあると言ふのかね？

「いや、呆れた男だ。そんなに寢てもさめても漆、漆でなくともよからう。まア、これを見たまへ。」杉井さんはかくしから昨晩帝劇で貰つたプログラムを取り出して良人の手に渡しました。

「まあ、それに載つてゐるマダム・アントノフの寫眞を見給へ。似てゐるだらう？瓜二つだらう？寫眞でその位だ。實物だつたらもつと驚くぜ。」

良人はプログラムに載つてゐる寫眞を眺めて啞然とした顏をしましたが、やがてその目を移して私をじつと瞶めました。それからまた寫眞に見入りました。

「似てゐるだらう？え？」と杉井さんは得々とした口調で申します。

良人は少し微笑してそのプログラム

を私に渡しました。私は寫眞を眺めたとき不思議な羞恥を覺えて頰を眞赤に染めました。

私が紅くなつたのはマダム・アントノフといふ女が、どうしたわけか――！勿論豐かさや水々しさまでそのまゝとは申しませんが、此私と姉妹と言ふよりも寧ろ同一人と言ひ得る程似てゐたからです。

男性には良い意味でのヴアニテイがあります。良人は世界的女優の顏が自分の妻と瓜二つであつたといふことに明らかに歡ばされずにはゐませんでした。

「じやあ行つて見るかな？」

「さア、おくさん、仕度だ、仕度だ。」

ニタニタと笑つて杉井さんは私たちを急き立てました。私たちは杉井さんが待たせて置いた自動車に乘つて、殷賑で美しい秋の午後の巷を過ぎ、まもなく帝劇の人となつたのでムいます。

劇場内は珍しい舞踊女優を見ようとする都人士で一ぱいでムいました。その群集の注視のうちに、華やかな開幕音樂と一緒にあの褪紅色の緞帳がするすると卷き上りました。渡されたプログラムに依りますと、一番目は小歌劇「コーカサス美少女の夢」でこれにはマダム・アントノフは出ませんでした。二幕のオペラが濟むといよ〳〵名女優の「女性」といふ名高い一人舞踊の幕が開きました。マダム・アントノフの――貞潔を表象したやうな純白の衣裳をつけて舞臺の中央に立つた姿を見た時、私は小さな吐息を吐きました。成程あの女の外貌は私の其に似てゐます。しかしあの美の輝やき、あの瞳の氣高さ、胸のふくよかさ！腰の豐かさ！あの脚のしなやかさはどうでせう！私は日本女の感じる肉體劣敗の悲哀を此の晩ほどしみじみと覺えたことはムいませんでした。けれども杉井さんと良人とは囁き合つてをりました。

「似てゐるだらう？」

「うん……」

「女性」の成長と豐熟と衰退と最後に死の當來をシムボルした舞踊は何とも言はれない美しさで舞臺に表現されてゐました。もう自分と彼女との愚かしい比較なぞはすつかり忘れてしまつた私は、妙技のチャームに卷き込まれてうつとりその舞姿に眺め入つてをりましたが、ふと氣が付いて見ると白手套をはめた良人の手は椅子の肱を越して私の指先をかたく握り〆めてゐました……「女性」の次には彼女を水妖に見立てゝ部下の女優がそれを取りかこんで踊る群舞があり、それで賑やかに打出すことになつてゐたのでした。ところが、その幕の了りごろに、帝劇當事者からの口上がはりの掲示が掲示場に掲げられたのでムいます。それに依ると、マダム・アントノフははじめて渡來した日本人が彼女の藝術を申分なく歡迎してくれた事に關して深く感謝してゐる。それでその感激の意を表するため

今晩から番外として彼女の秘藝のひとつ宛を差し加へることにするといふのですそして今晩は「蛇舞」と名ける特技を發表すると書き添へてありました。

群集は狂熱して喝采しました。しかしその下題が「蛇舞」と書されたのを讀んだ時良人の蛇嫌ひの病氣を知り拔いてゐる私は當然彼をうながし立てゝ場外に出なければならなかつたのですが、その良人の病氣を思ひ出すひまもなかつた程私はアントノフ夫人の藝に魅されてゐました。良人は良人で、恐らく揭示された下題に氣がつかなかつたのでせう。彼も別に席を立たうとはしませんでした。

ところがやがて間もあらせずその「蛇舞」の舞踊が演ぜられはじめました。音樂は急になやましく粘り氣のある調子に變り、舞臺は眞夏の光線の海を思はせる電氣で彩られました。そして今やマダム・アントノフは黑と綠と白との色調の奇しく物凄い扮裝で現はれ、不思議な遣方で全身を蛇性を彷彿させるしなやかさで運動させました。おゝ今、蛇は木をよぢようとする！おゝ今蛇は枝を匍はうとする！おゝ、今蛇は餌物を見つけ出した！

氣味悪さを感じながらもあらゆる自然を彼女の小さな肉體で表徵する天才女性の藝に感じて舞臺に見入つてゐた私は、ふと、ウームと怪しげに叫ぶ者が側にあるので驚いて振り返りました。すると、驚いたことには良人が眼を洞のやうに開け、歯をかみしめ、口邊から泡を吹いて隣りの椅子にのけぞつてゐるのです。

私はハツとしました。私は良人と此の舞踊とについて何の用心もしなかつた自分の愚かしさが責められました。杉井さんもさすがにびつくりした容子で、

「やあ、こりやいかん、外へ出しませう。」と私に囁やきました幸あたりの人達も舞臺にばかり氣を取られてゐるので氣が注いたものはほんの二三人だけでした。杉井さんは「この人には腦貧血の持病がありますので――いや御心配には及びません。」とその場をつくろつて、ぐつたりした良人を抱へるやうにして廊下へ引きずり出して下さいました。

すぐ側にカフエが出てゐますので、取りあえず其室のソフアに寢かして顏を煽いでゐるうちに良人は正氣に返りました。杉井さんはポート・ワインをすすめました。

「どうだね？もういゝか？」と親切な友人は訊ねました。

「あゝ、もう大丈夫。」

良人は蒼ざめた唇にそれでもきまりの悪さうな微笑を浮べて答へました。私も杉井さんも良人に悪い聯想を再現させるのを怖れて「蛇舞」のことは口にしませんでした。

十分程休んでから私たちは自働車で家路についたのでした。

これで話がおしまひになれば、私の上にも別に悲しみはなかつたのでムいます。ところが、その晩はそのまゝふせりましたが、次の晩以來不思議なことが私と良人との間に醸し出されたのでムいます。

自體私たち夫婦は時間にかまはない「藝術家生活」に馴れてをりますので、寢につくのは大てい深更二時ごろでムいましたが、劇場で事件があつた翌晩、何氣なく二人でダブル・ベッドに横になりまして夫婦らしく寄り添つた刹那、私は一種激しい憎惡と苦悶の影が蒼白い良人の顏に過つたのを認めました。私は不安になつて訊きました。

「どうなすつて？御氣分が惡い？」

すると良人は急に眼を閉ぢて頭を振りました。

「いや、何でもないんだ。」

そしてくるりと向ふを向いて兩手で頭をかかへました。私はなほのこと不安になつて、

「ほんたうにどうもしない？」

「うん」……良人は呟くやうにさう言つて、「いや、君は寢給へ。僕はもう少し起きて仕事をする。」

良人は刎ね起きて寢室を出て工房の方へ去りました。私は氣にはかけましたものの大方仕事のことを思ひ出したのだらうと思つて――事實一週に一度位の徹夜は平氣な良人でしたから、そのまゝつい眠つてしまつたのでムいます。

私と一緒に一度床については私を突き離して部屋を飛び出すといふやうな夜が三晩までつゞいた時には、流石に私もうぢつとしてをられなくなりました。三度目の時、私もベッドを飛び下りて良人を工房に追つてゆきました。

「あなた、何が氣に入らないの？そんなになさらずに言つて頂戴。」

私は邪推深くさう言つて良人の頸に手を卷からとしたのでムいました。すると寢卷のままで仕事机にうつぷしてゐた良人はブル〱と戰慄して、「ワーツ」と怪しげな悲鳴をあげて飛び退き廊下へ驅け出さうとするのです。私は良人を追ひかけました。そして寢卷の袖をつかみました。

「あなた！どうなすつたの？あなた、何でそんなになさるの？」

良人はどうしても私が放さないので、絶體絶命の容子で振向きさま、怖い目で私を睨んで拳を揚げて叫びました。

「マダム・アントノフ！涼子、貴樣達は蛇だ！僕を卷き殺さうとしやがる！」

さう叫んで私に打ちかゝらうとした瞬間、彼はまるで心臟痲痺でも起したやうに拳を揚げたまゝドタリと前にのめりました。

M樣、その後幾日か經て良人は郊外の癲狂院に送られました。そして私の顏を見るたびに、

「涼子！貴樣は蛇だ！行け、行け！愚

圖愚圖してゐると叩き殺すぞと叫ぶのでしたが、そのうちに病院の看護人も醫者も、カーテンの紐も、すべて、蛇に見えるやうになつて、食物さへも蛇の肉のやうに感じられはじめて、半年ばかりの後とうとう此の世を去つてしまつたのでムいます……

……M樣、私はこの自分自身の上に起つた事實を第三者として書物の上で讀み得たら、私の「怪奇癖」がどのやうに滿足されたらうと皮肉な氣持を覺えつゝ、まはらぬ筆で大よそをあなたのお手許まで書き送りました……

―下略―

(四) 電車の中の美人

立花綾夫

電車が春日町へ向いて、あの傾斜面を下りかけた時分には、入口に近い乘容は、皆一樣に不快な面持をして車掌臺の方を凝視めてゐた。

『切符は前の人が持つてゐましたゞよ、俺の分も――その人が、前から下りたで――。』

一目で田舍者と分る五十格好の男が、日に焼けた顔を眞赤にして、同じことを繰り返し〳〵云つてゐる。しかし車掌は冷然たるものである。

『私は受取りません！　切符がなきや、行くところまで行つてもらはなくちや――』

『だが、私は田舍者だで――。』

『田舍者でも何でも、切符をいたゞかないで下すわけにはゆきませんからね。』『その切符は、前から下りた人が、買ふて持つてゐたゞと云ふのに――』

電車は春日町の十字路へ來た。車掌は相手の言葉には耳も藉さず、乘降の邪魔になると云はんばかりに、片方へ押しやつて、わざとらしい大きな聲で乘換を呼ぶ。降りる人、乘る人のごたごたと混雜ふ車掌臺の片隅に、正直な田舍者は、憤滿と困惑のごつちやになつた表情をして立つてゐる。

事理は極めて明白だ、――恐らく最初からの事情を知つてゐる乘客の總ては、さう思つたにちがひない。――この田舍者は、誰かに伴れられて博覽會の見物にでも出掛けた歸りであらう。そして土地不案内のために、切符を買つてもらつて、そのまゝその伴侶の手に托して置いたのが、うつかりしてゐたゝめに、本鄕三丁目で下車すべきところを、乘越してしまつたのだ。何しろごつた返す夕方の滿員電車なのである。呆然してゐなくとも、伴侶とはぐれることや、乘越す位のことはあり勝

ちではないか。それを田舍者と見縊つての冷淡極る車掌の態度は、甚だもつて怪しからぬ。何故あの人は拂はずに電車を下りて、監督に話しをしないだらう。云はれるまゝに乘つてゐれば、大塚の終點まで乘せられてゆかねばならぬ。――それにしても、誰かあの田舍者のために、口を利いてやる人はないかしら。

しかし、誰もその田舍者のために、辯護の勞をとらうとする勇士はなかつた。十人が十人、不快な面持をして、嫌惡の眼を車掌の方に向けてはゐながら。

電車は再び動き出した。そしてカーヴをしたあの坂を、嫌な音を立てゝ、傳通院の方へのそろ〳〵と上つてゆく。その音に消されたか、それとも捕虜を安全と見て車掌が切符を切りに廻つたのか、田舍者の言葉も、車掌の聲も聞えなくなつた。と同時に、私はその騷ぎで、忘れてゐた傍の若い美しい婦人の方を、思ひ出したやうに振返つた。

その女はやはり吊皮にぶら下つて、透きとほるやうな腕の皮膚を見せながら立つてゐる。衣裳なんどに一向無頓着な私は、相當金目のかゝつたものらしいといふだけで、彼女の身につけたものが何であつたか、說明はできない。しかし左の手に提げた手提や、洋傘なんどから見ても、それが普通の女學生だとは思はれなかつた。年齡は二十歲位であつたらうか。尤もそれは私の目の誤りで、もつと上だつたかもわからない。

それに美しいと云つても、決して目の覺めるやうな美人ではなかつた。近頃賣り出した何とかいふ新聞の挿畫畫家が、好んで描くやうな面長のすつきりした方で、人によつて好嫌ひのする顏であつた。しかし彼女が私の注意を惹いたのは、顏の輪廓や皮膚の色ではなくて、その圓な何とも云へぬ魅惑的な眼であつた。

何といふ宜い眼だらう――事實、上野廣小路で彼女が私の前に立つた時から、私はさうした感嘆の言葉を幾度口の中で繰返したかしれない。夕暮の滿員電車の込み合ふ人中を、遠慮し憚るやうに四邊を見廻す時、俯向き加減になつて時々開け放された窓の外を覗く時、さては電車がひどいカーヴを速力をゆるめもせずに曲つてゆく時、彼女の涼しい瞳は、その圓な眼の中に、今殼を脫け出て、はじめて地上の物象を物珍しげに見る蜻蛉の目玉のやうに生々と動き廻る。

私は彼女の視線を竊み見るやうに追ひながら、誰かに聞いた人買の話を思ひ出した。十一月から十二月一月の荒海時へかけて、南國の漁師町を漁つて、十三四から二十歲前後の漁師の娘を買ふてあるく人買ひが、彼等を個々の物品として取扱ふ時、その撰擇と價値の標準を、彼等の眼に置くと云ふことを。教育らしい教育も受けず、生れ

た時から太陽に照されて育つて來た眞黒い彼等には眼以外に美の標準を定めるべき何ものもないかも知れぬ。しかし人買ひが眼に重きを置く理由は、寧ろ眼そのものゝ魅惑性にあるらしい。

さう云へば、ある獵好きの男から、やはり眼について面白い話を聞いたことがある。それが山の中であれ、沼の岸であれ、獲物に近づく時、多くの素人の獵夫が、折角目附けた獲物を逃してしまうのは、獵の秘訣を知らないからであると云ふ。足音を忍ばすもいい、身體を隱すもいゝ、しかし獵の秘訣はいよ〳〵照準をきめるまでは、決して獲物の目を見ないことである。普通の鳥は人間を見ても、銃を見ても、慌てゝ飛び立つものではない。が、一度、自分を覗ふ敵とその視線がぴつたりと合つた場合、彼等は本能的に恐怖を知る。詰り眼は生物に共通のエスペラントを語るのだ――その男はさう云つて笑つた。

＊　＊　＊

美しい眼を窺み見ながら、そんなことを考へてゐる間に、電車はもう傳通院を通り越して、同心町の通りを全速力で走つてゐた。少時、電車が來なかつたゝめであらう、その線としては最後の大きな乘換場を通過しながら、相變らず一杯の乘客で込み合つてゐた。

その中を縫ふて、車掌が切符を切りに來た。私は意地の惡氣な顏をした車掌を見ると、先刻の田舍者のことが思ひ出されて、もう下してやつたらうか、それとも依然車掌臺に拘禁してゐるだらうかなどゝ考へながら、隣に腰をかけて新聞を讀んでゐた五十五六の老人が、膝に乘せた舊式な黒皮の鞄から小さい蟇口を取出して汚い一枚の紙幣を車掌に渡し、ぼろ〳〵の十錢紙幣や銅貨を受取つて、丁寧に勘定してゐる樣を見るともなしに見て居つた。

やがて老人が入念に算へ終つた剩錢を、蟇口の中に收めて、今度はそれを懷の中に藏ひ込み、再び新聞を讀み始めた時、私は目を上げてまたも窺むやうに彼女の顏を見た。

ところが、如何したといふのだらう？　今の今まで、晴れやかに生々として輝いてゐた彼女の顏に急に惱ましげな曇の翳がさしてゐるではないか。その圓な眼に深く眉根を寄せ、齒をきつと食ひしばつて、じつと苦痛を堪え忍んでゞもゐるかのやうに、面を伏せて俯向き加減になつてゐるのである。

その樣子が、無遠慮な人々に足を踏まれたくらゐの苦痛ではないらしい。きつと發作的の胃痙攣でも起してゐるのであらう。何はあれ、この人込みの車中で氣の毒なこと、腰でも下せばいくらか凌ぎいゝかも知れぬ。

私はさう思つて、つと席を立たうとした。そして半ば腰を浮しかけた時、老人の膝と、その讀み耽る新聞の間から、ちらと私の眼に映じたのは！

われと我が目を疑ふといふことは、餘りに聞き馴れた言葉であるが、私としてはそれ程の驚異を感じたのは、實際初めての經驗であつた。私はその瞬間、それを眼前の事實として自ら信ずることができなかつた程である。そして立ちかけた體を、彈き返されたやうに再び座席に下すと、恐いもの見たさの好奇心から、何か落しものでもした時のやうに、俯向き加減になつて、じつと新聞の下から覗き込んだ。

が、やつぱり事實は事實であつた。私の眼に誤りはなかつたのだ。手提と衣服の袖に巧みに包みかくされてはゐるが、正しく彼女の左手の食指は、老人が膝に載せた鞄の口にしつかりと挾まれてゐるのであつた。

私は彼女の指が、老人の古ぼけた鞄の口に、脫れがたき俘虜となつた經路に思ひ至つた時、慄然として戰いた。そしてその指の持主が、今まで私が憧憬れの目を以て竊み見てゐたあの美しい瞳の持主と眞實に同一人であるかどうかを疑ぐるやうに、今一度彼女の顏を仰ぎ見た。

血の氣も失せたやうに蒼白くなつた彼女の面は、明に苦痛から恐怖に變つてゐた。そして今の先まで又なく美しきものと思はれたその眼には、罠にかゝつた獸が、身をもつて脫れやうとする時のいら〳〵しい焦燥と苦悶の表情が浮んでゐた。

私は下車なすべき停車場を通り越したことも忘れて對岸の火事を見る人のやうに、當初の驚愕は何處へか去つて、得難いものを見出したやうな好奇心に驅られて、それとなく彼女の態度を監視つてゐた。

どうして彼女はその指を安全に救ひ出すであらう?もしそれより前に老人が鞄をとつて起ちかけたら、その恐ろしい犯罪の事實を、彼女はどう云つて辯明するであらう?——私は彼女のさうした行爲を、一時の出來心からであると解釋したかつた。それだけに、彼女の悶え苦しむいら〳〵しい樣子を見ると、憎惡といふよりも、寧ろその人を憐れむやうな心持にさへなつてゐた。

大塚の車庫に近くなつた時、軌道に何か障碍でもあつたであらう。電車が不意に進行を停めて、乘客は雪崩れかゝるやうに前へのめつた。その瞬間であつた。『痛つ!』と叫びながら、よろ〳〵と蹣跚きかゝつたと思ふと、彼女は人込みの中にぱつたりと倒れた。

傍にゐた職人風の男が、運轉手を罵りながら、眞先に彼女の上に俯向きかかつた。同時に周圍の人達も心配さうに覗き込んだ。不意の停車に、新聞から目を離してきよとんとしてゐた老人も、足下に落ちた鞄を拾ひ上げながら彼女の横顏を覗いてゐた。

電車が進行をはじめて二三十間の距離を車庫前に來て停つた時。彼女は人

人に援けられるやうにして、やつと膝をついて起ち上つた。怪我でもしたのか、左の指を半巾でしつかりと握りしめながら……。

乘客の誰彼が同情に滿ちた眼で、電車を下りようとする彼女を勞はつてゐると、田舍者を苛めてゐた例の車掌が氣の毒さうに怪我を聞いた。すると彼女は呟くやうな低い聲で、

『いゝえ、ちよつと挫いたゞけですの。』

と云つて、すた〳〵と横町の方へ歩いていつた。

私はもうそれ以上、彼女の後を尾けてみる氣にはなれなかつた。そして乘り越した二つの停留場を逆に夕暮の街をとぼ〳〵と歩きながら、小供の時分に田舍の田圃路を歩いてゐて目にした古い〳〵記憶を呼び起した。

それは田螺の肉を覘つて、却つてその先端を田螺の蓋に挾まれて、鎌首を立てつゝ田圃の畦をのたうち廻る憐れな田蛇の姿であつた。一方が藻掻けば藻掻くほど、一方は堅く蓋を閉ぢる。そして苦しみと疲勞に、遂に力なく横るまで、足掻き悶えてのたうち廻つたであらうあの慘めな小さな蛇の姿を私は今更のやうに瞭々と思ひ出したのである。

(五) 寄宿舍の猿

關口瞭三

學友が修學旅行から歸つて來るのを待ち兼ねて、美代子がその話をした時誰もそれを眞面目に聞いてくれる者はなかつた。それもその筈である。あの恐怖の瞬間、血の氣もないまでに眞蒼な顔をして、足の重いことも打忘れて小使室に飛び込んだ時ですら、誰もそれを眞實にはしなかつたくらゐだもの。小使の注進に膽をつぶして教員室から驅けつけた舍監の先生などは、美代子の話を頭から馬鹿にして、何處か遠い山の中ならこそ、東京の眞中、しかもこの日中に、そんなことがあるものか何かの錯覺であらうと笑つてゐた。そしてもしその翌日の新聞に、――それも僅に二三の新聞の片隅に無用の閑文字扱ひにされて掲せられた五六行の記事が、先生達の目にとまらなかつたなら、美代子は西洋のお伽物語にあるあの羊飼の少年と同樣、宜い加減な作り話を拵へて、人々を騷がしたと云はれても、仕方がなかつたであらう。

實際、たゞ話を聞いたゞけでは、嘘としか思はれぬやうな話である。さう

云へば、餘りに事實らしからぬ點に於て、はた舞臺に出る役者が似通ふてゐる點に於て、アラン・ボオの書いた「モルグ街の殺人」を聯想させるやうな實話である。事實、ルウ、モルグの殺人を讀んだ人ならば、美代子の出會した薄氣味惡いその事件を、一概に虚構だと云つて打消しはしないであらう。現に私などは、その話を聞いたゞけで、有り得べき事實と信じて、恐怖に怯えた叫びを上げながら、小使室に驅け込んだこの時の美代子の心持ちに、充分の同情を寄せ得る一人である。

三四年の生徒が鎌倉から江の島へ一泊の豫定で修學旅行に出掛けたのは、その前日の午前のこと。脚氣の氣味でこの二三週間程體操も休んでゐた美代子は、喜び勇んで校門を出てゆく學友達を、羨ましげに見送ると、寄宿舍に歸つて備附けの雜誌などを讀みながら退屈な一日をくらした。でも、その日はまだ二三年の生徒がゐたので、放課後の半日は話し相手もあつたのであるが、翌日はその一二年生も千葉の海岸へその日歸りの遠足に出掛けることになつてゐたので、學校も寄宿舍もがらんとして、後に殘るは宿直のY先生と美代子と足の不自由な子といふ二年生が一人、それに小使や飯炊きの婆さん位なものであつた。しかも先生は校庭を隔てた學校の方にゐると、美代子は寄宿舍でも一番端の後に××伯爵家の庭園の垣根を負ふた一室にゐるし、謂はゞY先生と二人で、別々に學校と寄宿舍の留守番を預かるやうなものであつた。

さて、その翌日になつて、校庭に列んだ一二年生が賑かに正門の方へ出てゆくと、美代子は隣りのS子の部屋を覗いてみたが、皆を校門まで見送つて行つたのか姿が見えぬので、自室へ入つて背後の窓際によりかゝり、涼しい朝風に吹かれながら昨夜から讀みさしの雜誌を手に瞬きもせず讀み入つてゐた。

寄宿舍の後は巾二間位の狹い庭を隔てて、一丈餘りの板塀越しに、高臺になつた××伯爵家の庭——といふよりも街中にしては珍しく樹木の繁つた丘と向ひあつてゐた。それ故雨の多い季節や、秋から冬にかけては多少濕つぽくはあつたが、夏の間は日影が多く、涼しい風が入つて、心靜に本を讀むには申分のない位置にあつた。殊に美代子の部屋は脚氣の氣味があるために、學校への往復に便利なやうに、寄宿舍としては一番端ながら、校庭に近い階下の部屋を與へられてゐたので、日當りもよく、涼しいことも一番であつた足の不自由な二年生のS子も同じやうな理由から、美代子の部屋の隣に二人の同級生と一緒にゐた。尤も部屋がどうの斯うと云つても、元來通學生が大部分なので、寄宿舍總てゞ百二三十坪位の建物で、多い時でも三四十人位し

か寄宿生はゐなかつた。

美代子が我を忘れて雜誌を讀んでゐると、背後から來て唐突に目掩しをしたものがあつた。美代子はきつと誰かの惡戲だと思つた。

相手欲しやの徒然な場合である。他に誰も居殘つたものはないのだから、それはきつとS子に違ひない。S子は身體が身體なので、何事につけても控え目勝ちで、平常は戲談などするやうな性質ではないが、やはり留守番に殘された寂しさに、そつと後から廻つて來て、自分に戲れかゝつたものであらう——美代子はさう考へて、ほんの僅かな間ではあつたが、わざと相手のするまゝに委せてゐた。

『S子さんでせう？』

目蔽しをされた子供が、相手の誰であるかを云ひ當てる時によく口にするやうな、ちよつと媚を含んだ言葉で、彼女はS子の名を呼んだ。が、S子は返辭をしなかつた。

『解つてるわ、S子さん！』

美代子はさう云つてまた繰返した。しかし矢張返辭はない。美代子の心にふと疑ひの心が湧いて來た。もし、それがS子なら——戲談口も滅多に利かないほど、溫和しいあのS子なら、さう執念く目蔽しなどをしてゐる筈がない。一言、彼女の名を呼べば、直ぐにも手を放して笑ひかける筈である。すると、これはS子ではなくて、御飯炊きの小母さんかもしれぬ。しかし五十歲を過ぎたあの小母さんが子供見たいな戲談をする筈もないのである。でももしやと思つて、

『小母さんなの？』

と呼びかけてみたが、やつぱり手は放してくれぬ。美代子はそれが誰であるかもう見當もつかなくなつた。S子でもなく、小母さんでもないとすれば……彼女はそこまで考へる餘裕もなくいら〳〵しい氣持になつて、つと右手を上げて目蔽しをした相手の手に觸つてみた。すると軟いむく〳〵とした何かの毛のやうな觸覺を指の先に感じた。でも、美代子はまだそれが氣味惡い獸の手であるとは知らなかつた。

指頭の變な手觸りを不思議に思ひながら、そうと相手の手を摑んだ時、美代子ははじめて、それが人間の手でないことに氣がついた。それは軟かな人間の皮膚ではなくて、粗毛に包まれた獸の手であつたのだ。

その一瞬時、彼女は悲鳴を上げて、窓際から飛び退いた。そして蹌踉くやうに廊下へ飛んで出た時、初めて後を振返つた。と、自分の直ぐ後に、後を追ふて戲れかゝらうとでもするかのやうな態度をして、大きな一匹の猿が立つてゐるではないか。しかも齒をむき出して、薄氣味惡い眼附きで彼女の顏を凝視めながら。

恐怖に怯えた美代子は、無我夢中で長い廊下を走つた。自分の足の重いことも忘れて。そして轉ぶやうに小使室

へ驅け込みはしたが、少時は皷動する心臟を抑へたまゝ。一言も口にすることはできなかつた。
小使や小母さんが、やつと美代子の話を聞きとつて騷ぎ立てた時分には、もう猿の姿は校内の何處にも見えなかつた。そして後からのこ〳〵とやつて來たY先生は、何かの錯覺だらうと云つて大口を開けて笑ふばかりであつた。
ポオの書いた「ルウ、モングの殺人」は、檻を破つて脫け出でた猩々が、飼主が卓に置いた剃刀を摘んで、夜の街を彷徨し、二人の婦人を殺す話である。自分の飼主が始終髯を剃るのを見馴れてゐた猩々は、その眞似をしようとして、逃げ惑ふ母娘の髮を攫んで、遂に慘殺したのであつた。
巴里の郊外、サン・ジエルマンの一室にゐて、この不可思議な謎を解いたあの名探偵デュパンが、もしこの物語を聞いたならば、その翌日を待たずして立ちどころに一切を解決したであらう。が、デュパンならぬY先生は次の日の新聞を讀むまでは××伯爵家の飼猿が檻を破つて逃げだしたことに氣がつかなかつた。

至急特別原稿募集

秋季特別號を飾る内容の一として（一）『愛のない家庭』のいかに寂しく慘ましいものであるかの實例と、（二）『執着の强い愛』に惱まされた（愛した場合と愛せられた場合を含む）實例との二つを募集します。長短は隨意、原稿は九月八日迄の事。東京市本郷區本郷三丁目六中央公論社内婦人公論編輯部宛お送り下さい。掲載した分には相當の原稿料を贈呈します。

婦人公論編輯部



葡　萄　山下新太郎

最近シベリアの土産話

北満洲に泣く娘子軍

撤兵の時期も近づいた。遠く北満洲まで出稼ぎに來た誰れも彼れもが歸國する。然しこゝには、日本人と生れながら懷しい我が郷土に歸るに歸られぬ哀れな女性の同胞がゐる。

それは名に負ふ娘子軍の人達だ。

たゞ『娘子軍』と斯う言へば、誰れの頭にも直ぐ樣、あの荒漠たる北満洲で日清日露の兩戰に男そちのけの活躍振りを發揮した勇ましい女性を定めし想像するのであらう。私も勿論さう信じてゐたが、過日彼地を旅行して幸にも史的名物の一つにかぞへあげられてゐるこの娘達を親しく研究することができた時、最初の期待は遺憾なく裏ぎられ、同情の涙禁ぜざるものがあつた。

森　抱　陽

娘子軍とは何にを云ふ？　言はずと知れた、他國人相手の賣笑婦だ。何故歸れぬ？　抑々問題はこゝなのだ。今私は事實此儘を大膽に書いて見よう。

(一) 野獸の餌

北満洲を旅行する人の眼には、荒んだ此地の街々——即ちボクラニーチナヤ、横道河子、ムーリン、海林、イユーメンポー——を露西亞人支那人の羣に加はつて、甲斐甲斐しく歩き廻つてゐる可憐な彼女達の姿が映るであらう。そうして、邦人と途中で會へば顏をそむけて行くのであるが、此地だけでも殆んど二百四五十餘名の多數にのぼり、各地の人數を合算すれば、斯うした境遇の娘達は、それこそたいしたものだらう。

寒い國、馬賊の巣窟として人も怖がる北滿洲へ、纖弱い身を持ちながら、戀しい故郷を後にみて遙遙と旅稼ぎに出るのも、親の爲め家の助けとは云ふもの〻、並大抵の覺悟ぢやあるまい。尤も、その目的は黃金であらうが、黃金の慘めはこゝへ來て甫めて染々と味はゝれる。彼女達は歸りたいだらう。否やそれが彼女達の全部の希望にちがひない。然し前借はからまつてゐる、それをとりのけなければ歸れない。それで、彼女達はより多くの黃金を得ようと藻掻き始める、さうして、體の無理も辨へず、それが恐ろしい結果を生むとも知らないで、藻掻きぬいた上句自暴自棄になるのである。

北滿洲に在住する我が邦人中、男は女より極少數で、その三割にもあたらない。さうして、一と儲けしたら片時も迅く國へ歸らうと云ふ意思があるので、足繁く彼女達の館を訪れはせぬ。

また、彼女達にしても、邦人相手ぢや無理な要求も言へないし、結局露西亞人支那人を客にとり甘い言葉をならべたてゝうんとボッた方が得策と云ふ事になるのである。然しそれが後に如何なる影響を彼女達の體內にあたへるか。

元來、露西亞人支那人は日本人と比較して、食物は勿論其風俗習慣をも異にしてゐる。それで、食物の相違は體質に影響し風俗習慣の相違は男女關係の種々の方面に影響する。彼等は我々日本人に比してより肉慾的であるのは、言ふまでもない。さうした男を相手とする賣笑婦がいかに悲慘な結果を齎すかは我々の想像以上であらう。

相手はバイタリチーの強い露西亞人支那人で、一方は黃金さへ得られたならばどんな無理な要求にも應ずると云ふ彼女達だけに、その間に如何なる場面が演ぜられるか。嘗て私がポクラニーチナヤへ滯在中親しく見聞したところでは、夫のセミヨノフ軍がグロデゴフに引揚げる時のことであるが、飢へた野獸のやうな軍隊の訪問を受けて、一日平均六十三四人の客をさへ取つたといふ話である。

斯うした生活を送るうちに、彼女達の體には段々故障が生じてくるのは寧ろ當然といふべきであらう。

（二）阿片中毒

娘子軍の中には一種の共通した病がある。それを此處では癪と呼んでゐるが、普通の癪とは全然その趣きを異にして、一般に婦人病の事を言ふのである。然し、北滿洲には醫藥がない。偶々あつてもそれは藪醫と賣藥位で、實際衛生的設備の不完全には文字通り驚かざるを得ない。それで、婦人病を

治すやうな名醫のゐよう筈もなく、と云つて癮の痛みは堪へられず、いろいろ詮議を重ねた結果、一時の苦痛から逃れるため彼等は遂に阿片を用ふるに至るのである。

阿片を吸つたとて何んで痛みが除かれよう。たゞ吸へばその毒のため、寸時スヤスヤと寢入るだけであるが、それでも醒めた折には時偶痛みがとれてゐる事がある。それで、彼女達はこれが何よりの良藥と信じ、癮には勿論總ての病にも直ぐこれを用ひ、いつか知らず知らずに恐ろしい中毒に罹るのである。

私は、旅行中到處の街々に唾液を流して仆れてゐる支那人を屢發見した。さうして最初その死因を知らなかつたが、これぞ、阿片中毒者の末路だと聽かされた時、如何に阿片は有毒なものであるかと云ふ事をよく諒解し得たのである。これは、その中毒に罹つた者が、阿片が無くては生きてゐられなくなり、さらばといつて高價なため買求むるに求められず、欲しさのあまり阿片と心中したのであつて、あのみぐるしい死に態、何にか欲しさうな面付は今なほ私の記憶にのこつてゐる。

阿片を吸へば、顏色は段々土色に變じ、煙草や酒中の毒と違つてやめやうと思つてもやめられない。それを無理にやめようとすれば、一命を捨てゝかゝらねばならないし、なかなかしまつに終へぬものである。尤も、阿片代用としてモルヒネの注射をなすものもあるが、注射したあとには小豆大の青黑いホクロができて一寸薄氣味惡く感ぜられる

彼女達が斯うした夢路を辿る間に、日月の小車はめぐりめぐつて、待ち焦るゝ年期明けを運んで來る。これが普通なれば、父母兄弟戀しさのあまり、いそいそとして歸國し、互に無事を祝しあひ多年の憂目を物語るところであらうが、然しはや阿片の中毒に罹つては、再び懷しい郷土は踏めぬ。かうして、敗殘の餘生を異境の空で、しかも他國人相手に過さねばならない運命とばなるのである。さうして彼女達の落行く先は何處ぞ、そは言はずと知れた支那人街である。

阿片は支那人の家庭に入れば自由に吸へる。北滿洲でもこれを栽培する者は支那人で、生活上なくてはならぬ日用品とせられてゐる。商人は重にこれを賣買して利をあさり、上流の家庭に入れば社交上必ずこれを客にすゝめ、如何に峻嚴なる法を以てこれが使用を嚴禁しても到底實現することはできまい。それで、彼女達が餘命を全うせんとするには勢ひ支那人の家庭に入らねばならない。それも正妻と云ふのではな

く、妾と云ふ名義のもとに。

この地方には阿片に纏る幾多の哀話がのこされてゐて、何れも皆な血と涙の物語りである。これもその一つであるが、或る中國筋の一人娘は、家運の復興を圖るため娘子軍の羣に入つて、花子と云ふ浮名のもとで憂き勤に身を沈めた。長い年月の間には何日しか癪に罹り、藥と思つて一度阿片を吸つたのが身の破滅で、遂に阿片中毒となつた。親達は一人娘の事ではあるし、彼女の歸國を今日か明日かとまちわびてゐたが愈年期明けとなつても娘はいつかな歸らない。其後音信も不通になつて、どこにどうしてゐるものやらそれをさへ知れぬ日となつた。それで親達は娘の事が氣になつて遙遙北滿洲までやつて來たが、可愛い娘の居所が知れた時には、多年の辛苦も水の泡、彼女の體は冷へきつてゐた。

娘は、自由の體となつてから、矢張り支那人の妾となつてゐたのであつた。かうした不甲斐ない今の境遇を親達にみせて歎きの種を加へるより、一層此儘逢はずに死なうと、親の到着すると云ふ前日、哀れ黄泉の客となつたのである。其他、斯る實例はざらにあつて一々あげる遑がない。

（三）いぢらしい日本娘

賣笑婦から支那人の妾へ、これは彼女達の自然の道程で、その生活からみれば斯うならざるを得ない。さうして、同じ妾でも商人の妾となつてゐるものが、殆んど過半數をしめ、外は、軍人流浪人と云つた順序である。尤も年期明けを待たないでひかさるゝもの、戀のコスモポリタンを主張し、支那人は女を大事にする國民だけに總てが自由で氣樂だと言つてなるものもないではないが、矢張りその奥底をたゝいてみれば阿片飲みたさがその重な原因となつてゐる。

また中には不本意ながらも黄金の犠牲となつて、全く阿片とは別問題に妾となるものもある。その場合は、女の引留め策として手を更へ品を變へ阿片をすゝめまんまと彼等の計略に落すのである。

斯うした逆境に振落された彼女達は、それで滿足してゐるのか、否や否や決してさうぢやない。時來らばその汚名を雪がんと常に心を痛めてゐる。それで、今の境遇を國辱と思ひその意氣地ない有樣を我々同胞にみられるのが彼等の何よりもの苦痛とするところなのだ。

彼女達は、着慣れた日本服をぬぎ捨てゝ、日頃支那服を身

に纏ひ、無理に支那婦人を粧つてゐるが、實際餘所のみるめも哀れな感じがする。

然し、彼女達の家庭に於ける生活は、全く自由氣儘で何等干渉せらるゝ事なく、これは又親や姑のため絶へず束縛せられてゐる婦人達の到底想像もつかぬところである。主人は自分より一段下坐に据付けて思ふ通りに操縦し、隣近所の義理もなく、それに多くの使用人は手足の如く働いてくれ、日々の勤めときては阿片を吸ふ位が關の山で、物質は勿論一つとして彼女達の意に反するものはない。

私は、軍人の妾達が外出する時、二人の兵士に護衛せられてゐるのを屡々觀たが、これなどはまさに王侯宰相の待遇に價するだらう。

それで、彼女達は、一旦北滿洲に在住してからはとても日本に歸れない云々とよく言ふのであるが、然しこれは遁辭に過ぎぬ。

懷しい郷土の空で、よし九尺二間の裏長屋でも、愛を基調とした生活をしてこそ、はじめて幸ある日はめぐりきたるのであつて、異境の空でしかも愛のないとらはれた彼女達に、よしどれほど自由氣儘な生活でも、何んで樂しい日が到來しよう。斯うした彼女達は、いやがうへにも、荒んで行く。

同じ境遇の妾達が、時々一堂に會してはチヤンチユーを飲み交し、辿り來つた身のやるせなさを喞ちあふのが、彼女達のせめてもの慰安であつて、日本はまた何日支那と戰端を開くのだらう、その時こそはどうせ捨てた體だもの、御國の爲めに働かう、と過去の友達の活躍を稱讃し、勇を鼓舞して立去るが、寧ろいぢらしい感じがする。

うちつゞく不景氣と撤兵は、支那人邦人の引揚げ者をいや増すばかり、彼女達の運命は再び如何なる惡鬼に左右せられるか。さうして、何處をあてどに漂流の旅路をつゞけねばならないのか。私は、この哀れな女性の同胞を思ふにつけ、同情の涙禁ぜざるものがある。

謎の民族と同居して

革命後のシベリヤは實際淋しい。砲彈の見舞つたあとは、白堊のニコライ敎會堂や多くの兵舍に今尚ほ殘り、各街々の大半は見る影もなく燒かれ、或は打壞され物資は極端に缺乏し、勞働者も官吏も殆んど給料は支拂はれず、商取引は中止される狀態で、子供は飢餓に泣き老人は病に仆れ、赤白バル

チザンの戰は猶やまず、今後如何なる悲劇が展開されるや人心恟々として過渡期の國の慘めさは遺憾なくうかゞはれる。其間に處して主人たり妻たり親たるシベリヤの人達は、抑々如何なる生活をつゞけてゐるか。これは頗る興味ある問題と思ふ。

私が、甫めて寓居したのは、ニコリスク市、ハバロフスキヤ街、白色パルチザン、リホイドフ中尉の家であつた。彼れはもとこの市でも相當數ある地主の一人であつたが、打續く革命のため地所の大半を失ひ、一度召集せられたのを幸ひに其儘軍隊にとゞまつて今日の地位まで漕ぎつけたものである。さうして、彼れの家族は、彼等夫婦の外に、二人の子供と、それに召使の老婦、合せて四人暮しの小人數であつたが、もとがもとだけ訪問する人も多かつた。

たゞ、一言するに、今日のシベリヤに於ける俸給生活者中、最も優遇せられてゐるものは矢張り軍人であつて、卒は毎日パンを支給され、下士はパンの外に五圓から拾圓位の手當を貰ひ、尉官級になれば二十圓から三十五圓見當、佐官級に至つて四十圓から六十圓餘りの俸給を惠與されてゐる。それで、これを標準とすれば、總ての消息がよく諒解されるのである。

(一) 喰ふパンがない

シベリヤの家庭に入つた私は、先づ彼等の無愛想な事に驚いた、これが日本人であつたなら、よし近しい親や兄弟の訪問にも、長い短かいの區別はあるにせよ、客人として待遇し別けても世話になつた人の義弟や子供が訪問した場合には、それこそ何には質においても優遇するのを一種の禮儀と心得てゐるが、彼等は決してさうぢやない。如何に恩人の義弟や子供が訪問しても、嬉しいやら悲しいやら顔に表情をあらはさない。それは全く、虚僞な生活に慣れてゐる我々にとつて寧ろ意地惡く感ぜられるが、その代り、こんどは何日までゐても決して態度に變りはない。ゐたければゐるがよからうし、いやなら歸つてもらはうかと云つた調子で、これは彼等の僞らざる眞の性質であらう。

露西亞人は、誰れが何んと言つても先天的共産主義者であつて、歐露とシベリヤはたゞそれが宗教的と否との違ひである。それで彼等には階級的意識が淡い。

食事の時になれば、客人主人隣人の區別なく、そこにゐる者皆が皆同じ一つのテーブルを取圍み、一つの器に盛つてあ

るパンを思ひ思ひに喰べるのであつて、客人だから良いパンを多く喰べ、召使ひだから遠慮せねばならないと云ふやうな規定はない。總て食物は平等に喰べるのが彼等の先天的習慣で、日本人の家庭と比較すれば餘所のみるめも羨しいほどである。

食事で思ひだしたが、滯在中私は屢々その時間に漏れた事があつた。勿論、こんな場合は、召使の不注意で知らせにこなかつたなと早合點してよく食堂にでゝみたが、食堂には何んの準備もしてなかつた。それで、最初は不思議に感じ、召使を探し當て『食事は未だ？』と訊ねてゐたが、彼女の話によれば、パンの一片すらないと云ふ挨拶であつた。尤も、彼等の今の境遇ではパン代にすらさしつかへる事があるかもしれない。然し、無いからと言つて家族は勿論、客人にまで平氣で斷食させるのは彼等でなくては到底できない藝當だらう。

(二) 今日一日の歡樂

露西亞人は、また極端な程歡樂を欲する國民である。三度の食事は一度に減じても何れかと言へば歡樂を好み、明日の食事にすら困る者でも、ダンスや骨牌は知つてゐる。さうして一寸ふところに餘裕がつけば、レスタランの地下室で、バルシネイトと夜の更けるのも知らないで火酒を飲み交し、愈々無一文にならなければ決して彼等は歸らない。私は、みすぼらしい風をした多くの露西亞人が、ノーメラーに立寄つては一日の收入をさらけだし寸時の歡樂にうつゝをぬかしてゐる樣を屢々觀たが、歡樂の前には國も無ければ家も無い如に思はれた。或はかうする事が彼等の唯一のたのしみだらう。あの革命後の荒んだシベリヤに、劇場や活動寫眞館はなほ存し、しかも、大入り滿員とは驚き入つた次第である。

ことに婦人達はなほさら酷く、歡樂なしには殆んど生活する事ができないかもしれない。こゝのニーナー婦人もその一人で、絕えず遊興費をあさつてゐたが、然し二十圓か三十圓の收入では、さうは行かない。それで、彼女は時偶私に『ヤポンスキー（日本人）金があるか、あるならすこし』とねだつてゐたのであつた。私も、彼女達の境遇を知りぬいてゐたゝめに、パンでも買ふのかしらと三度に一度は應じてゐたが、いざ金を渡せば、パンはおろか、日用品一つ求めないで、火酒や化粧具其他遊興費に總べてを投じてゐたのである。さうして、私が『そんな贅澤品は後廻しにして、もつと

日用品でもうんと買つたなら』とでも忠告しようものなら、彼女はムツとなつて『明日は又た明日です、……神樣は決して見殺しにせないでしよう……それよりも今日の歡樂が欲しいのです』と答へ返すのであつた。

少量の火酒でも得られたなら、彼女達は、それからそれへと友人を呼びよせ、共に歡樂を分つのである。火酒と聽かされて、飢へたるものは集つてくる。さうして、歌ふ、ダンスは始まる。彼女達は全く躍手だ、總てが聲樂家だ。寒國の女達だけにあの激烈な火酒を大きなコツプでグイグイ飲む。勿論明日の事は考へない、家には子供がパンを欲さに待つてゐる。

斯うした場面も、火酒が缺乏すると共にやんでくる。それでゐて、醒めた時には困る困るとこぼすのだらう。

シベリヤを旅行すれば、到る處の街々で、よく賣笑婦の姿を發見するが、强ちこれは生活不如意からのみきてゐるとも思へない。尤も彼女達の中には、生娘は勿論、多くの將校夫人や未亡人なども加はつて、一寸そのように想像されるが、奥深く立ち入つてみれば、なかなかさうぢやないらしい。それで、若し、彼女達が、眞に生活上餘儀なくさせられてゐると假定すれば、差當り先づ物質を要求せねばなるまいに、然し、その實さして要求しないのである。

客がみつかれば、彼女達は、ノーメラー、(室貸しと譯し又女郎屋とも云ふ。然しこゝでは室貸しの意味)へ案内する。さうして、思ふ存分食慾をみたせば無理に物質までも要求しない。たゞ飲み、たゞ喰へばそれで滿足するやうである。

私は、國がどうならうと、肉體は犧牲にしてまでも、一夜の歡樂を切望する彼女達の心理を穿つことができない。然し、屢々接近すれば、これが彼女達の總てゞあつて、あれかこれかと想像するの愚な事が知られるのである。

また、ノーメラー(こゝでは遊女屋を意味するが)同じ女郎屋でも、シベリヤのそれと日本のそれとは全然その制度を異にして、女はたゞ一定の室代さへ支拂へば、肉體時間行動意思等を束縛せられる如な事は絶對にない。専屬の賣笑婦にしても、毎日毎夜の收入——大概一夜八圓から十圓の相場——を貯蓄すれば、それこそ四五人の家族位は、何に不自由なく氣樂に生活する事ができるのであるが、彼女達はそれをしない。一日の收入はその日のうちに費ひ果し、金があると思へば、旅行、或は、劇場、さては活動寫眞館などに行つたりして日を消し、愈々、室代にも困窮するしまつになつて又

はじめて客をひく。國民性の相違と言ひながら、親のため家の助けなど、いふけなげな心があるではなし、全く己が欲求を滿足させるため賣笑婦となつてゐると想像するより他に思案のしやうがない。

私は、今日のシベリヤへ、革命の慘禍を蒙つた貴族や將官の娘達が遙々歐露から避難して、見るも哀れな逆境をさまよつてゐると聽かされてゐたが、來てみれば、噂と事實は正反對に、その實彼女達は斯うした氣樂な生活を、ノーメラーで繰返してゐるのであつた。

(三) 無貞操國

シベリヤの婦人達には貞操の觀念がない。

こゝは、結婚も離婚も、全く極端な程自由に行はれ、誰れに干渉せられる事なく、總ては意思の命ずる儘に動いてゐる。今離婚の一例をあぐれば、

リホイドフ中尉の向隣りに、イワノフと云ふ帝政時代のコザック大佐がゐた。彼れは、歐洲大戰の時、獨逸軍の捕虜となつて、其後、多年獨逸に滯在し、やつと昨年、このニコリスクへ歸つて來たのである。

妻と言つても、もう四十二三歳の女で、夫婦仲も睦じさうにみえてゐたが、邦人の某通譯は時折り彼女のもとを訪づれてゐた。それで、イワノフは、彼れが來る度、そしらぬ顏で外出するのを常としてゐたが、何日も二人の對話時間は長いため、或日餘儀ない事情から、『もすこし早くきりあげては』と妻に注意を促した。

これが、抑々離婚の原因で、自由意思を束縛すると云ふ名義のもとに、彼女の姿は其夜からみへなくなつたのである。其後數日を經過して彼女と通譯とは、程遠からぬハヾロフスキヤ街に所謂新世帶を持つたので、私はイワノフに向ひ、何んともないかと問ねた事があつた。

其時彼れは『ニチオー去る者は追はず來る者は拒まず』と答へ、平然たる態度でゐたが、また彼女に於てもその通り、決して過去を追懷しない。それで、途中先夫とあつても『緣があればまた參りましよう』と云つた調子で、それは、それはすましてゐる。

ニチオー——どうでもいゝ。運命だ——は露西亞人獨特の言葉であつて、その諦めのいゝ事ときては、到底他國人はその足下にもよりつけまい。これは彼等が深き信仰に燃へてゐる結果で、ニチオーと言ふ反面には神が助けると確信してゐるからである。

國は亂れても、飢餓に瀕しても、給料は支拂れなくとも、また、妻は姦通しても、可愛い子供に死別れても、總ての事件は『ニチオー』で、たゞその瞬間は何にか感ずるのであらうが、女にすれば、仰向いて涙をポツリポツリと二つ三つ流すだけで、後は野となれ山となれ、何處に風は吹いてゐるやらといふ風で全く悠々たるものである。

それで彼等は、今の逆境を、我々が同情する程決してさした苦痛とも感じてゐない。さうして我々が、慰める積りでやさしい言葉をかけてやつても、何等の反響が無い如である。

(四) 乞食の權利

露西亞人の乞食は、「あなたがたは儲けてゐる、然し私はまだ食はない」とまるで、債權者が債務者へ義務の履行を請求するやうな態度でやつてくるが、これは、露西亞人の眞の心持を、最も雄辯に語るものである。

彼等は、有る者が無い者に分ち與へるのを、人道上當然の義務と心得、決して感謝の辭を述べない。貰ふ者も與へる者も平氣なもので、我々日本人からみれば一寸物珍らしく感ぜられる。

これには面白い實例がある。何日ぞや、我國は救濟と親善の兩意味で、赤十字班をシベリヤへ派遣した事があつた。勿論、醫藥に困窮してゐる露西亞人なれば、相當赤十字班の世話になつたに違ひない。また普通なら、世話になつたならぬは別問題として、遙々シベリヤまで來てもらつたその行爲に對しても有難いと思はねばならないが、根が感謝と云ふ事を知らない民族だけ、却つて結果は旨く行かなかつたのである。

尤も、何にかの都合上、診察時間や施藥等に、最初宣言したのと相違した點があつたかも知れないが、結局日本人は不正直だといふことになつたらしい。

私は滯在中、誰れが言ひだしたのか、日本の留學生と云ふ事で、祭日――露西亞には必ず月に三四度の祭日がある。さうして祭日の中でも一番賑やかなのは、『アラゼスト』と言つて聖祖降誕祭であるが、その十二月二十五日から向ふ一週間は、仕事を休み、富める者も貧しき者も、それこそ何には賣飛ばしてまでも華やかな裝飾で室を滿し、色々な供物を神前に捧げ、友人は勿論、訪づれる人每にこれをふるまひ、信仰に燃える民族だけなかなかうがつたことをする――に大概、官舍や商家に招ばれてゐたが、最初は遠慮して往々、

豫告時間よりも稍々後れて行つてゐた。さう云ふ折はすつかり會食が濟んでゐたのであつて、折角招ばれてゐながら、空腹を覺えて歸つた事が屢々あつた。

客の姿が、その時間までにみえない時は、ゐる者だけで食つてしまうのが露西亞人の習慣であつて、其後行つても決して出さない。

元來、露西亞人には、遠慮が大禁物である。招ばれた時など、一人が遠慮してゐても、日本人なら『ぢや別のものでも』とよしきらひなものがあつた場合には殊更取寄せて出しもするが、彼等にはそれがないため、それに、外の者には遠慮がないときてゐるから、畢竟損と云ふ事になる。

私の頭には、今尚ほ、あのやさしい顔をした娘達が、誰れ憚からず大食してゐた樣子が刻みつけられてゐる。

露西亞人のゐた後には泥棒に這入れぬと云ふ言葉があるが、事實其通り、彼等は持つてゐるもの總てを身に着け、或は携げて旅行する。

列車が着けば、多量の食料着替小道具は勿論、甚しきに至つては鍋釜夜具等を折疊んで入れてある大きなバスケツトや南京袋の粗末な包みを負ひながら露西亞人は、乘込んでくるのであつて、實際乘客よりも寧ろ携帶品が多いのである。

尤も、ウスリー線の各驛は、我國と異つて、プラットホームに賣子がゐない。それで、旅行する時は必ず日數だけの食料を用意して行かねばならない。然し、驛毎に湯を沸かしてあるから藥罐さへ持つてゐれば自由に汲む事ができるのである。

多量の食料は各自携帶してゐるとしても、彼等かあまり幾個も大きな荷物を所持してゐたゝめ、私は最初引越したとばかり想像してゐたが、彼等に問へば、いぶかしさうな顔付きで、否や一寸旅行してゐるところだと答へたのであつた。

成程、これぢや泥公に這入られる氣遣もあるまい。

さうして、夫婦は勿論親子と雖も、その、荷物は判然と區別されてゐるのであつて、大事さうに一々中を調べてゐるのは、全く、喜劇其儘を觀る樣な感じがした。

以上、これだけでは、未だ、露西亞人の性格を知るに充分だとは言へない。然し、あの正直な、質素な、單純な、平和な、ユーモアーなそして宗教的な温味は、シベリヤ旅行を通じて露西亞人に對する一種の懷し味を覺へしめるのである。



相對性原理に於ける超直觀

理學博士　石原純

相對性原理とはどんなものでせう。

この原理を發見したアインスタインとはどんな人なのでせう。

斯う云ふ言葉が今私たちの周圍に普く話されてゐるのを聽くことが出來ます。私はそれに就いて斯やうな純正の科學理論が多くの人たちに接觸し、たとへ幾分でもその思想の影響が之れらの人たちに及ぼし得ることがあつたなら、どんなに悦ばしいであらうと思はずにはゐられません。只それらが謬つた途を敎へるやうになつてはなりません。ほんたうの科學の意味、その嚴確な理論が私たち人間の仕事としてどんな價値をもつことが出來るかに就いて深い理解を與へ、それが間接にふだんの生活に資するやうになりたいと希つてゐます。

相對性原理とは恐ろしい難かしいものなのではありませんか。

この問は一應は肯定されなくてはなりますまい。けれどこの難かしいと云ふ言葉は決して理解の出來ないと云ふ意味にはなりません。難かしいのはこの原理の基礎になつてゐる數學の論理の複雑さから來るのです。そしてそれが私たちの直觀から隔たつてゐると云ふことにあるのです。人間は妙なもので直觀的に頭に入れ得るものはその儘で判つたやうなつもり

でゐます。併し少しく深く立ち入つて考へて見るとそれは外觀的な淺薄な智識であつてそのなかに含まれてゐるいろいろな關係はそれだけでは何にも判つてゐるのではありません。私たちはもつとその內奧に潛むものを捉まなくてはなりません。そこに始めて人間の思想と自然との間の斷ち難い直接な關係が見出され、そして始めて理解の滿足感が得られるのです。私たちの科學はこの理解の滿足感の基礎として純粹な數學的論理を借りて來るのです。數學的論理は殆ど純粹に私たちの頭のなかに於て建設されたものであつて、實は之れが私たちに正當な意味に於て最も理解し易いものなのです。何故なればそのなかには私たちの知らない一切のものを少しも含んでは居ないからです。そのどんな部分を分析して見ましても、みんな最初に私たちの知つてゐる謂はゆる公理なるものから導かれる事がらであつて、その外には何の介雜物もありません。ですから充分に落ちついて其理論を辿るだけの忍耐をさへもつてゐるなら、これ程明瞭な世界はないのです。之に反して實在的自然のなかには私たちの然う云ふ知識を超越した無數の不可解が包藏されてゐます。それらの外觀が僅かに私たちの感覺を通じて私たちの直觀のなかへ入り込むだけです。しかも之れ等は云はゞ鏡に映つてゐる虛像のやうなものに過ぎないので、その儘で本質的に私たちの頭のなかに消化せられはしません。私たちはこれを分析して私たちの所有してゐる論理と一致する部分のみを取り入れて始めて自分みづからのものとすることが出來るのです。之れが自然に對する本當の理解でなければなりません。只數學的論理はどこまでも遙かに直觀的には得られないものです。順序を趁うてこれが一歩一步を踏まなくてはならないのです。これが通常難かしいと云はれる所以であつて、その意味で勿論肯定しなければならない事でありますけれども、たとへ親しくその步を踏むことを敢てしない人であつても、それがどんな意味をもつて居り、その途がどこに到達するかを知つておくことは、少くとも私たち人間の仕事の價値を解する上に必要なことであらうと私は思ひます。

どこに相對性原理の主點があるか。これを僅かな言葉で說くことは恐らくはそれこそ至難の事がらでありませう。恰も神の存在を直觀的に了得せしめることなしに、之れを論理的に證明することが不可能であるやうに、斯やうな科學理論の內容を論理的手段によらないで却つて直觀的に感ぜしめることは等しく不可能なのです。數言を聞いてこの原理の何

を云ふか幾分でも判つたとせられる人たちは、私から見れば科學理論の本質を解されない人たちなのです。私はここに筆をとつて相對性原理を説かうとすることは無謀のことであるのを感じます。私は之れを判らせやうとするつもりは少しもありません。若し出來るならば、それがどんなに直觀的に判り得ないかを明らかにしたいのです。そしてそれによりて原理の內容の判らない代りに、却つて科學理論の本質のある處を悟ることが出來得られたなら私の願ひは寧ろそれで足りると思ふからです。それが本當に私たちの普ねく知らなければならない核子ではないのでせうか。

私たちは通常或る出來事に就いて時間と空間とを直觀します。それが何時、何處に起つたかと云ふこと。又どれ程の時間だけ繼續したか、どれだけの空間に擴がつてゐるかと云ふことは、出來事の完全た觀察に對して缺くことの出來ない事がらです。運動現象のやうなものでは物體が何時、何處にあるかと云ふことがこの現象を知悉するために唯一の必要な觀察材料です。ところが私たちは之れまでこの何時といふ時間觀念が何等かの意味で、何處にと云ふ空間觀念と關聯してゐることを考へたことはありませんでした。現在と云ふ時刻が宇宙の何れの處かに於て現在ではないと判斷されることがあり得ると、誰が直觀し得たでせうか。私たちは寧ろ絕對時間の存在を信じやうとして居たのでした。たゞに直觀的にのみではなく、亦科學に於てもさうなのでした。それはこのやうな時間、空間概念のうへに自然法則を矛盾なしに立てることが出來ると思つてゐたからでした。ところがそこに思ひがけない困難があらはれて來たのです。光の進行の法則がどうもうまく說明することが出來なかつたのです。たくさんの物理學者は之れがためにどんなに苦しんだことでしたらう。そして光を傳へる媒質として空間に想像せられたエーテルなるものに、いろ／＼な性質を假定してこれで解決しやうと努めました。けれども漸次新らしい事實が知られて來るに從ひ、どうしてもエーテルだけでこの問題を終結させてしまうことが出來なくなりました。とう／＼和蘭の有名な物理學者ローレンツに至りて、運動物體の長さの收縮を假定したり、又運動者の測る時間、謂はゆる局所時なるものを絕對時間とは異つたものとして假定したりして、辛うじて經驗的事實を說明することが出來たのでした。

その當時――それは今世紀の始まる頃でしたが――この運動物體の收縮や局所時なるものは、まことに不思議なもの

と見なされ、その意味を物理學的に解することに多くの困難を感じました。深い迷霧がこの問題を取り圍んで、どうしてそれが拂ひ除けられるかに就いては豫想すらゆるされなかつたのです。けれども經驗的事實と直接に結びついてゐる之等のふしぎな假定のなかに、既にすつかりと相對性原理の本質的内容が含まれてゐたのでした。さうしてそれを探し出したのが、アインスタインに外ならないのでした。

アインスタインは之等の假定が私たちの理解に入り難い所以を、みんな私たちが從來の直觀的な時間、空間觀念に執着してゐて、之れが精確な意味を深く反省しない點に歸してしまひました。それと同時に私たちのまへに稍もすれば迷霧を湧かす本源であると思はれるエーテルを取り除けてしまつて、空間を、寧ろ複雜な物質から解放してしまひました。こゝに相對性の眞の確立が可能になります。アインスタインに依れば、絶對の時間、絶對の空間は少くとも私たちの認識の範圍内には存在しません。時間も空間も、從つて運動もみんなその認識の上に於ては相對的なのです。云ひ換へれば、時間的且つ空間的に異つた立場にある觀測者の判斷はすて相對的にべ意味をなすものであつて、そのうちの誰が絶對的の立場にあると云ふやうな差別は全くないと云ふのです。誰が空間のなかに絶對に靜止して居り、誰が之に對して動いてゐるかを決定することは主義的に不可能なのです。みんなお互同志が相對的に運動してゐると云ふことだけが、私たちの認識に入る事實なのであつて、それ以上のことは誰も云へません。つまりすべての觀測者の立場は相對的に平等でなければなりません。これが相對性原理の根本主張です。時間や空間の判斷はこの原理と相容れるやうになされなければならないので、それを具體的にどうすれば宜いかを、アインスタインは始めて精確に示したのでした。こゝには時間、空間なるものが單に漫然とした直觀的觀念ではなくて、明確に測り得る概念的の量として入る必要があるのです。そして驚くべきことには、或る特殊な場合——それが從來私たちの直觀的にもつてゐた絶對時間及び絶對空間に相當するのですが——を除く外、一般には時間と空間とは密接な關係を有してゐて、同時刻とか、時の前後とか、時間の長さとか、又同時に空間の大さとかは、絶對の意味をもつてゐるのでなくて、各觀測者の立場によりて異つて判斷されなければならないと云ふ事が判りました。多くの人たちは之れ等の事がらに就いてすぐに疑を起さずにはゐられないでせう。それはどこまでも私たちが直觀の狹い範圍を、それの到達しない處

に押し擴げやうとするからです。けれど直觀よりもつと廣い概念的認識の世界は靜かに私たちにこれの正當な理由を示すことが出來るのです。私たちは嚴正な數學的論理にどこまでも從順でなければなりません。之れに反抗する權利は誰にもゆるされてはならないのですから。

時間と空間との相對性の可能が斯くして先づ示されました。けれど相對性原理が單にこの可能性を說くに止まるならば、それは一の物理學的理論として、まだ内容的に空虛なものでなくてはなりません。單なる相對性の主張は既にアインスタインから三十年も以前にマッハなどによりてなされたことでありましたが、その當時には之れを具體的な理論につくり上げるための材料が私たちに知られてゐなかつたのでした。その材料と云ふのは即ちいろ〳〵な現象に於ける法則的關係なのです。すべての觀測者の相對性を具體的に成り立たせるためには、その各異つた時間、空間の判斷を通じて見出した現象の法則が、すべて同一の形式をもつてゐて、只相對的速度のあらはれだけに依りて異つてゐると云ふのでなければなりません。若し然うでなかつたなら、この法則の相異によりて誰が絕對の立場に在り、誰がさうでないかを決定することが出來るやうになるからです。つまり相對性を確立するためには、すべての自然現象に關して不變の法則を立てることが出來なくてはなりません。これを實際に仕遂げることが即ち相對性理論を完成することなのです。こゝに難かしい數學的問題が入つてゐるのです。

アインスタインは幸にしてローレンツの用ゐた諸式をその儘役立たせて、光及び電磁氣の現象に就いて先づ之を實行することが出來ました。ローレンツ收縮や局所時と云ふものは時間及び空間の相對的判斷の異なるために自ら結果する事がらであつて、それ以上の複雜な物質的性質に依るものではないと解されるやうになりました。光の速度はどんな速さで動いてゐる人から見ても不變であつて、又それ以上の速さで傳はるどんな作用も、又光速以上に速く動くどんな物體も存在し得ないことが結論されました。之れ等の結論ばかりを聞く人たちにはそれが如何にも私たちの直觀と結びつき難いことを感ぜられるでありませう。みんな直觀では、得られない數學的論理の正當な歸結なのです。勿論さう云ふものでも、之を幾分かは直觀に近づけて、謂はゆる判り易くすることは、必ずしも出來ないことではありませんけれども、私は今その餘裕をこゝにもつてゐないので止むなくそれをも

省いておきませう。

ともかくも相對性理論はすべての自然法則を、各の觀測者に對して不變につくり、それによつて觀測者の相對性を保證せしめやうとする理論なのです。この影響で從來のどの法則も多少の變化を受けなければなりませんでした。ニウトンの萬有引力の法則もやはりその一つです。アインスタインは之を相對性理論の枠のなかに收めるために、特に異常な苦心を重ねましたが、力の本質に關する大膽な假定と、數學理論の最も高尚なもの〻一に屬する微分幾何學とを用ゐて、最後にこれを解くことが出來ました。あれ程能く天體の運行現象を說明することが出來たニウトンの法則も獨り太陽に最も近い惑星である水星の運動に關して幾分の外れを免れなかつたのでしたが、今アインスタインの新しい理論は之れをも殆ど遺憾なく說明することが出來るやうになつたのでした。それればかりではありません。アインスタインはこの後の理論に於て光速の絕對不變を特殊の場合に制限し、もつと廣い假定から、一般に光が物體の近傍を通過すると、その途を屈曲することを論じましたが、一九一九年（大正八年）英國の日蝕觀測隊によりて遠い星から來て太陽の近傍を通る光線が實際屈曲を受けることが確かめられ、この理論が事實と一致する有力な證明になつたのでした。

之を要言しますと私たちの直觀する時間と空間とは、相對性原理によりて全く概念化せられ、そのなかに起る自然現象の法則と密接な關係を有するやうになりました。ミンコフスキーの言葉を借りれば、その時間と空間との綜合が私たちの概念的の世界なのです。アインスタインは尙ほ進んでこの世界の有限であることをも結論しました。有限であつて、しかも限界の存在しない世界。私たちは實際上ではそれの類推を球面に於て見ることが出來るだけです。地球面の上で私たちはどこまでも東に向つて進むなら、いつかは元の點に西の方から戾つて來るでせう。そこに限界はないけれども、しかも全體の道程は有限の長さなのです。若し私たちが宇宙のなかで一定の方向にどこまでも眞つすぐに進むなら、いつかは再び逆の方向から元の點に戾つてしまふでせう。そしてその直線の全長は有限です。恐らくはこれも私たちの直觀を超越した事がらでありませう。こんな事がらを能く考へてゆきますと、私たちはアインスタインの理論の偉大な內容のまへに今さらに頭を垂れずにはゐられない感がします。

この九月廿一日には濠洲で日蝕皆既が見られるために、諸國の天文學者はそこに集まりて再び光線屈曲の觀測を行はうとして、既に準備を整へてゐます。アインスタイン自らは偶々その當日に獨逸ライプチッヒで開かれる獨逸自然科學者及び醫學者大會でその百年紀念を祝ふ席上で「物理學に於ける相對性理論」なる講演をなさうとしてゐます。そしてこの講演を終つて間もなく我が日本に向つて旅だたうとしてゐます。私たち人間の擧つて尊敬すべき教授アインスタインの豐かな姿を彼れ自らの謂ふ處の「お伽噺のうちに包まれた輝かしい國」に迎へることの出來る日も遠くはないでありませう。私たちは彼の口づからの言葉によりて何を學び、又いかに彼を遇したらよいのでありませうか。今からその用意をしておいても遲くはないと思ひます。そして私たちは現代に生きてこの科學に於ける稀有の功績者に面接し得ることを、深い敬虔なる心から至上のよろこびとしたいと思ひます。

人に對する呼稱の興味

寺田精一

一

吾々は、各自の有して居る姓名の外に、又他人から命名した特殊な意味の綽名の外に、其の人の身分や職業や地位や人格などについて、樣々な呼稱を持つて居る。固よりそれ等の呼稱の何れもが、吾々の觀察の對象とする感興を與へるものではないけれども、中には吾々の社會生活といふ立場から觀て、又吾々の有する一種の心理的要求から察して、頗る興味あるものが少くない。

元來吾々は頗る强い自我意識を有して自己を高め廣めようとすると共に、煩雜な内にあつて、他を自己より區別しつつ取扱はうとする欲望を有して居る。この事實は、自然吾々に階級意識をも鮮明ならしめ、同一の内容を有するものを呼ぶのにも、外形上の區別を立てて、或は發育の上で或は文字の使ひ方で、其の階級意識を注意し又注意せしめようとして居る。そこで吾々の社會生活の上に現はれて來る人々の身分や職業や地位や人格などに對する呼稱が、極めて複雜化せられて、そこに社會人としての滿足を與へる樣な種類や價値や程度が附けられて行くのである。而もかかる事實は、何人の生活にも餘りに密接であり又餘りに一般的であるから、普通に心づかずに呼び慣らされて居る。けれども少しくそれ等の關係を實際上の用例について注意して見ると、豫想外に吾々の興味を惹くものがあるのである。

尤も吾が民族は、世界中の殆んど如何なる民族にも見られないやうに、人に向つて用ひられる言詞に、複雜多樣な種類を有して居る。單に「居る」といふことを、居る・居る・居ます・居まする・居ります・居りまする・居ますです・居りますです・居まするです・居りまするです・居まするでございま

す・居まするでございまする・居りましてございます・といふやうに單に口語體のみですら、極めて多樣である。かかる複雜な使ひ分けをする吾々は、第一人稱のみでも、また極めて多樣な形式を持つて居る。即ち擧げるも畏れ多いが朕といふ語より、麿・自分・自己・僕・我輩・余輩・手前・余・小生・小子・俺・わたし・わたくし・わし・わつち・われ・おいら・おいどん・吾人・拙者・拙生・拙老・老生・野生・やつがれ・愚生・不肖・小官・小職など、殆んど際限のない程に擧げることが出來る。

このやうな煩瑣な語法を持つ吾々である爲めか、人に對する呼稱は、他の國々では見られないやうに興味ある使ひ分けをして居り、それを間違へないことが、禮儀をよく辨へた人であり、又教養の積んだ人である、といはれて居るやうである。以下私は、日常用ひられて居るものゝ中から、少しく實例を拾ひ上げて、其の間に存する樣々な關係を究めて見やうと思ふ。而もそれ等の關係は、吾々の社交生活に於て、暗々裡ながらに、樣々な意義に注意し、其の識別を行つて居るものである。

二

商賣人を實業家といひ料理人を割烹家といふと、各同一のことをする職業でありながら、何となく前者よりも後者の方に格式があり、又社會的地位が上であるやうに思はれる。即ち人といふ字を用ひると、家といふ字を用ひるとで、一は舊式な無力なもののやうに見えるのに、他は新式な有力なもののやうに見える。

これと相類した關係は、貧困者・窮迫者と金滿家・素封家、叛逆者と勤王家、勞働者と資本家、學者と政治家、記者と創作家、模倣者と發明家、附和雷同者と理想家、儒者と儒家、祈禱者と宗教家などにも見られて居る。即ち者のつくものと、家のつくものとを列べると、各後者の方が前者の方よりも社會的に有力であり又尊敬されて居るやうに見える。さうしてこれ等は、何れも者と家とを反對にして貧困家と金滿者などとは呼ばないやうである。名家といつて名者と呼ばないのも興味がある。

尚者をしやと讀まないでものと呼ぶ場合と、家の字のつく場合とを對せしめると、次のやうな語がある。享樂家に對して道樂者、道德家に對して極道者などは、何れも者をものと呼んでしやとはいはない。さうして前に擧げた例よりも、一種不良な嘲罵的な意味が加はつて居るやうである。

この者とか人とかを附けないで家を附けることが、何故

に尊敬的な意味を得て來るのであらう。これは恐らく他人を尊敬していふ場合に、直接に其の人を指さないで、其の人の周邊のものや家屋を捕へ、机下・臺下・閣下・殿下・陛下と呼び、さうして其の人の身邊から遠いもので呼ぶ程、高貴の人に對して用ひられて居るやうなものであらう。

かくて家といふ字が、用ひられて居ると、其の人の才能なり技術なりが、優秀のやうに聞えるのである。彫刻家・建築家・音樂家・教育家の如きそれである。從つてよく吾々はあれで畫家なのかとか、「自ら宗教家といふのにあきれる」とかいつて居る。かかる場合にも、單に畫かきとか僧侶とかいつて置けば、大した不快や不似合な感は起らないのである。

者をしやと呼ぶのとものと呼ぶのとでは、又其の間に自ら相違した語法を生じて居るやうである。殊にものといふ場合には、食ひつめ者・不束者・怠け者・横着者・厄介者・ならず者・成り上り者・すね者・不忠者・不孝者・引かれ者・困り者・圍ひ者・のけ者・別者・やくざ者・蓮葉者・のらくら者・片輪者・臆病者・驅落者などのやうに、不良とか弱者とかの意に用ひられる場合が多いやうである。さうしてこれ等の何れもが、者をしやと呼んでは頗る語調の悪いやうに、吾々は慣らされて居る。尤も時には人氣者・しつかり者・きけ者・悧口者・元氣者などのやうに、者をものと呼びながら、特別に不良とか弱者とかの意味を有して居ない例もある。けれどもよくそれ等の語の用ひられる場合を注意して見ると、尊敬を以て對するといふよりも、寧ろ何等かの警戒とか、或意味の嫉視とか、反語的な諷刺とか、輕い程度の嘲笑などの加味されて居ることが多いやうである。而して、患者のやうに撥音による濁りでなく、それ者とか長者とかいふやうに者と濁して居る時は、其の用法が明かな特殊化を持つて居ないやうである。

人をじんといふのとにんといふとでは、其の間に自ら幾分の特殊化された用法があるやうである。家人・友人・美人・隣人・恩人・義人・仁人・新人・歌人・詩人・武人・良人・夫人・名人・茶人・主人・などは、何れも人を濁らして居るのに、他人・死人・病人・職人・藝人・非人・貧乏人・借家人・浪人・罪人・犯人・役人・遊び人・謀叛人・雇人・などは、何れも人を清まして呼んで居る。さうして前の一群と後の一群とを比較すると、一般に前者が後者よりも親しまれ、又は優秀な社會的地位を有して居るやうに思はれる。

且又、普通に尊敬の意味に用ひられて居る家の字は、上に擧げた劣弱な社會的地位のもの等には用ひられない。即ち優秀な社會的地位にありと思はれて、人を附けるものの中、例へば武人や詩人や名人などには、何れも家をつけて武家・詩家・名家といふことが出來るけれども、職人を職家とも、貧乏人を貧乏家とも、浪人を浪家とも、罪人を罪家ともいはない。尤も病家といふことはあるが、それは病人のある家の意で、病人を指しては居ないのである。

けれども上述の論には、決して例外のないのではない、例へば保證人・仲人・などは、多く厄介な仕事をする人々であつて、好ましいものでもないから、自然人をにんと呼び慣はしたのだとも考へられないではないが、惡人に對する善人の如き場合もある。苦勞人の如きも、惡い意味ではない。又これに反して偏人・畸人・盲人などは、人をじんと呼びながら、特に多くの人々から望ましいと考へられては居ないであらう。囚人の如きに至つては、一層さうである。

或は又、熱血家とか不平家とか慷慨家とか狼狽家とか樂天家とか厭世家とかいふやうに家を用ひて居るものがあるが、これ等は人の字を用ひるやうに慣されて居ない、即ち熱血人とか樂天人などとは呼ばない。けれども前に述べた例のやうに、それで以てこれ等の名の下に呼ばれる人々が、必ずしも皆人々から尊敬され、社會的に優秀な地位を占めて居るとは限つて居ない。

家をかと讀むと、一般に良い優れた意味の人について用ひられるけれども、それをやと讀む時には、頗る異つた感じを與へるやうになつて居る。やかまし家・怒鳴り家・ごまかし家・威張り家・ふん張り家・めかし家・政治家・雜誌家・暢氣家・凝り家・屁理屈家・演說家・やきもち家・愛國家・說明家・有り難家・こぼし家・騷ぎ家などは、大體に於て何れも稱讚や尊敬の對象となる人々ではなくて、寧ろ諷刺や嘲笑や罵詈や惡口の對象となるべき人々である。但しこれ等の中で、家をかと呼び得るもの例へば政治家・愛國家・演說家などは、かと呼ぶことのみで、既に稱讚や尊敬の對象たるべき人となるのである。これは家が商賣屋のやに通じ、商賣屋が一定の種類のものを商ふと同じやうに、一定の癖が常に現はれ勝ちであつて、怒鳴る癖の人が、怒鳴り家と呼ばれ、何事にかけても不必要な程度にまで細心な注意を拂ふ癖の人が、凝り家と呼ばれ、愚にもつかぬことにまで愛國呼ばはりをし、自分一人愛國の至情を獨占したやうな顏をする癖の人が、

愛國家と呼ばれ、何等根據もないことに因果をつけて、嫉妬せずには居られない癖の人が、やきもち家と呼ばれるのである。一手販賣の性質傾向といふ點から、家をつけると、恰も普通の癖に注意するやうな感じを得せしめるのである。從つて家をやと讀ましめる場合には、諷刺や嘲笑や罵詈や惡口の意に解されるのであらう。

ぼうといふ字を附けても、亦家と呼ぶ場合と相類したやうな意味がつけられ、殊にこれは不良な性質を持つた人々を呼ぶ時に用ひられて居る。例へば寢坊・べらぼう、けちん坊・しわん坊・暢氣坊・見え坊・風來坊・立ちん坊・落第坊・泥坊などいふのがそれである。けれどもこれ等は、同じく罵詈惡口の呼び方であると共に、多くは頗る消極的な性格を示して居る。元來、坊といふ語は、兒童を親しみを以て呼ぶ俗語であるから、弱者幼者に對する心持ちが伴つて居る。從つて坊を以て呼ぶのが、進取的發動的努力的な性格を有して居るものには適しないことになる。故に主として退嬰的受動的遊惰的な性格を有して居るものに用ひられ易い。

野郎の語が、往々人を罵詈し嘲笑する場合に用ひられる。例へば野呂間野郎・間抜け野郎・馬鹿野郎・腑拔け野郎・糞野郎・どんちき野郎・腰抜け野郎・毛虫野郎などがそれである。而して野郎といふ語は、男子を賤しんでいふ語であるから、これを附けて呼ぶものは、男子に對して用ひられるのが普通であると共に、少しの同情をも有しない呼稱である。尙興味のあることは、野郎の本義にないところの缺陷や醜穢を形容的に冠らせて居ることである。拔けて居る意をつけたものの多い點は、殊に興味がある。

勿論他人を罵詈惡口する場合に、其の人の缺點を呼ぶのは當然有り勝ちのことであるが、一般的には必ずしもさうではなくて、缺陷と見られる特徴を假令其の人に見られなくても呼ぶことが多い。例へば出來そこない・阿呆・腑抜け・鼻たらし・糞たれなどいふはそれである。時には未熟の意で、靑二歲・赤ン坊など呼ばれることもある。或は又普通に人の口にしてはならない生殖器に關する様々な呼稱で、罵ることが少くない。朝鮮では、近親を姦したとの語を以て嘲罵する、例へば「汝の母を姦した」といふのが、人を罵る上の最惡言となつて居る。其の他下等な動物に關係した語で、惡罵する場合は、いくらもある。例へば畜生・虫けら・馬の骨・犬・狸と呼び、時には獸の名を冠せしめて、犬侍・狸婆・蛇

男などいふこともある。或は又虫の字を附けて惡言することも少くない、例へば弱虫・泣き虫・怒り虫などそれである。但しこの虫の字を附ける時には、有力な優秀なものに對しては用ひないで、最も多く兒童に向つて用ひられて居る。横濱などの港でいふかんかん虫は必ずしも上述の惡罵の例ではなく、哀れな兒童を其の仕事の上から呼ぶのである。卽ち彼等は寄港して修復すべき艦船の內部の大人では這入ることの出來ないやうな狹い個所へ、一挺の鐵挺を與へられて入れられ、鐵板をカンカンと敲いて銹を落すのである。時には麻繩で胴をくくられて、深い船底の機關部へ入れられることがある。カンカンと敲くが故に、さうして小供であるが故に、かんかん虫といふのである。

夫の字を、夫婦といふ意味の夫から考へるならば、男の意の外別にこれに社會的階級の低い意味はないのである。けれども人夫・雜役夫・掃除夫・火夫・水夫・驛夫・撒水夫・妓夫など用ひられる場合には、何れも優越な階級者の呼稱ではない。これは恐らく夫をぶと呼んで、昔雜役に使役される人々を呼んだことに基因して居るのであらう。その爲めに上述のやうな職の場合に名づけられたのであらう。かかる種類の女を特にいふ場合には、婦の字を用ひて雜役婦・掃除婦などと呼んで居る。而してこれ等は、意味の上から者とか人とかいふ文字を用ひても、よささうであるが、事實上必ずしもさうでない。人夫を人者、驛夫を驛人、火夫を火者妓夫を妓人と呼んでは、吾々の習慣上殆んだ其の意味を失つてしまうのである。

士の字を附けて、人の呼稱とされるものは頗る多い。例へば名士・紳士・技士・代議士・鬪士・策士・辯護士・學士・博士・國士・志士等は先づ相當な社會階級者としての感じを與へるが。文士・力士・兵士・壯士・等は必ずしもさうでなく、稍低い社會的階級意識を惹き起さしめるやうである。而してこれ等士の字を附けていふものは、自然に男性を示すのであるけれども、それ等と同種のものが、女性に於ても現はれる場合には、特に女のとか女流とかいふ但書を加へて、女の辯護士・女流代議士などといふやうである。けれども何時もさうではなくて、女の紳士とか女流鬪士などとはいはないのである。

尚これ等の呼稱の士を、人の字に替えて同意義なことと、さうでないことがある。前者の例としては辯護士を辯護人

といふが如きであるが、後者の例としては代議士を代議人といふが如きであつて、代議士といへば衆議院議員を指すけれども、代議人といへば必ずしもさうではない。この兩者の中間に位するやうなものが、文士を文人といふが如き例であつて、其の意味に殆んど相違はないが、文人といへば文士よりも、幾分の餘裕ある階級者を指して居るやうな感を與へるのである。

代言人・證人・鑑定人は、相共に聯想して來るものであるが、何れも人を附けて居る。けれども證人は證者といはれないのに、代言人を代言者、鑑定人を鑑定者といふことは出來る。さうして家を附けて呼ばれ得るのは、鑑定家のみであつて、證家とも代言家ともいはない。これで見ると證人の呼稱が一番固定してゐる。そこで理屈をつけるならば、證人は極めて一般的の人もなし得ることで階級的分化がない、然るに代言人になると相當な特殊的經驗を要する。更に鑑定人になると更に特殊な專門的經驗を要する。そこで鑑定人は其の專門的經驗の程度に應じて、最も階級的分化が出來易い。ここに者の字でも家の字でも附けられ得るのであらう。殊に前に述べた家の字は、者の字よりも比較的に優越者に附ける習慣を持つて居るのであるから、一層興味があるといはねばならない。

又、人夫・傭人・雇員と、三段に使用人を區別することがある。かかる時には、三つの中、人といふ意味の最も多く加はつて居る人夫が、最も下級であつて、其の最も少い雇員が最も上級となつて居る。これなども、前の例と對照せしめて頗る興味がある。

師の字を附けるものには、醫師・教師・說教師・講師・技師・俳諧師・軍師などがあるが、何れも相當な尊敬を拂はれることになつて居る。只ここに面白いことは、人の先きに立つとか人を導くとかいふ意味のない醫師のみが、者をつけて醫者といふことが出來て、其の他のものが、何れも者を附けないことである。尙往々尊敬に價しない意味に解され勝ちな說教師を、說教者と呼ぶことの出來る點にも、興味がある。又近來、卑しめられ易い教師や、師といふ意の無い醫師が、共に員の字をつけて教員・醫員と呼ばれるにも趣がある。仕事師・庭師・陶師・香具師・詐欺師・ぺてん師などに至つては、師の普通の意が全く失はれて居り、特に尊敬の意は加はつて居ない。

員の字は、多くの數を示す場合に用ひられる字であるから、これの附けられた呼稱には又それに應じた意味が加はつて居るやうである。例へば敎員・醫員・部員・會員・店員・委員・議員・兵員・驛員・船員・評議員・代議員・局員・會社員・などのやうに、何れも多數の共存者を意味して居る。從つて中には員の字の附くことで、其の價値の低められる感の生ずる場合がある、敎員や醫員や店員などに、それが認められる。

丁の字は、めしつかひの意があるから、使丁・馬丁・廷丁・輿丁・などと用ひられて居る。けれども若し壯丁を、これと同意義だといつたら怒るものもあらうが、それは丁年者の丁の字と解すれば怒る根據は失せるであらう。

工の字は、たくみの意があるから、大工・陶工・畫工・筆工・女工・鍛冶工といふやうに、主として筋肉勞働に從ふものを呼ぶ場合に用ひられて居る。但し大工のやうに、工の字にたくみの意が無くなつて居る場合には、大工職といつて更に差支はないけれども、其の他の場合には特に職の字を附けない、即ち女工職とか鍛冶工職とは呼ばないのである。

手の字は、吾々が仕事をする場合に、先づ用ひられる主要な身體部位を示してゐるから、技手・交換手・舵手・運轉手といふやうに、直接仕事に從ふ人々を呼ぶ名に用ひられて居る。選手といふ場合は、上の場合と稍其の趣を異にして居るけれども、直接競技を鬪はす上に選ばれたといふ點で手の字の用ひられる意は相通じて居る。

客の字は、まらうどの意であるから、これの用ひられる場合、例へば雲客・論客・仙客・顧客・政客等は何れも尊敬若くは優越の意を認めて呼ばれるのが普通である。但し酒客の如き、今日では大酒家の意味で不健全な遺傳關係でも調べられる時に、其有無が尋ねられる樣になつて居るものの、もとは松籟を聽き淸月に對して杯を傾ける風雅な人の意であり、又は斗酒尙辭せざるを英傑の一つの性質として、畏敬して呼ばれたものである。又食客の如きは時に優遇されて居る者を指すも時には居候の意に解されることもある。

三

それ等に付いて見ると、人に對する呼稱は決して單純には出來上がつて居ない。其の人の身分や、職業や、地位や人格などに關係して、それぞれ興味深く使ひ分けられて居

るのである。其の中に於て、仕事に直接關係を持つて居るやうな言ひ現はし方の呼稱は、大體に於て劣位階級の人々に向つて用ひられて居るやうである。これは技手とか理事とか幹事とかいふものより、技師とか顧問とか相談役とかいふやうに、文字の上で其の事に直接携はらない呼稱ののが、社會的に一般に優位者として認められて居るのでも認めることが出來る。

この事實を一層明瞭ならしめることは、人を呼ぶのに、其の仕事其の儘の性質を以てするのと、其の內容に何等の相違はなくても、その性質に或文字を添加するものとでは、頗る異つた感じを吾々に與へる點である。例へば畫かきといふより畫家、金持ちといふより金滿家、お巡りといふより警察官、金貸といふより金融業者、歌唄ひといふより聲樂家、原稿書きといふより文藝家、おしやべりといふより饒舌家、牛殺しといふより屠殺者、別當といふより馭者、便所掃除といふより清潔屋といふが如きそれであつて、何れも日常生活の內容を示すに相違はなくても、其の仕事を間接に言つたり又は仕事其の儘の性質を言つたりしない點に、何となく優越な又は上品な感を與へて來る。

これ等の點から推察すると、何れの民族にも見られるやうに、仕事に對して直接の關係を持たずに生活することの出來るのを、社會階級の優秀なものと考へられた思想が、背景をなして居ると見られる。從つて仕事の性質を其の儘呼稱とするのは、人を尊敬する意味とはならないのであらう。尤も言辭が婉曲であり間接的である程、人を貴ぶ意に解され、單純素直に「居る」といふよりも「居りまするでござりまする」といふ方が、鄭重に取扱ばれるといふやうな心理にも關係しては居やうけれども、それにも增して、自ら手を下して働くといふ意味の表現が鮮明である程、社會的劣位な下級生活者と解された思想が、主な要素をなして居る。但し時には、やり手とか手腕家とか敏腕家とかいふやうに、仕事に直接關係ある手や腕を以て呼稱しながら、運轉手や交換手の手とは異つた社會的優越の意味を與へて居る場合もあるのである。

四

人に對する呼稱には、上戶・下戶とか、富者・貧者とか、內務大臣・外務大臣とか、大役・小役とか、善男・善女とか、頭・人足とかいふやうに、相對立した意味のもののあることがある。けれども多くの場合について見ると、かかる對立關係の呼

稱は、それ程單純にも行はれて居ないのである。

對立關係を持つて居る語を用ひては居るが、其の内の一方のみしか呼ばれて居ない場合がある。我が邦で内大臣と呼ばれる人はあるが、外大臣と呼ばれる人はない、長袖といはれる舊華族の人々はあるけれども、短袖といはれる人々はない。女流と稱するが、男流とは先づ稱しない。左官といふ職人はあるが、右官といはれる職人はない。下宿人といふのはあるが、上宿人と呼ばれることはない、富士と崇められる人はあつても、低士といつて卑しめられる人はない。大工と呼ばれる職人はあつても小工と呼ばれる職人はない。鈍物とはいつても鋭物とはいはない。美貌の婦人を美形と普通にいふが、醜貌の婦人を醜形とは一般にいはない。素寒貧とはいふけれども素溫貧とも素暖貧ともいはない。母堂といふのは普通であるが、父堂とはいはない。貧生といつても、富生とはいはない。弟子はあつても兄子はない。徒弟はあるも、徒兄はない、内輪者といつても、外輪者とはいはない。小生といつても、大生とはいはない。野生といつても、町生とも山生とも市生とも都生ともいはない。其の道の名流を大家といふも、其の未熟者を普通に小家とはいはない、寢坊といつても、起坊とはいはない。

對立關係を持つて居る形式の語を用ひ、双方共に使はれては居るけれども、兩者の呼稱の意味には決して對立關係を有して居ない場合がある。大使に對する小使は文字の形の上では明かに對立して居るが、一方は親任官の名士であるのに、他方は無名の一雇人たるに過ぎない、さうして大將に對する少將の關係とは、全然其の趣を異にして居る。大官とか大臣とかいへば、顯職の人を指していふのである。が小官とか小臣とかいへば、自分のことを卑下していふのであつて、如何に大官であり大臣である人も、自らは小官小臣といふのである。拙者といふのは、自分を謙遜していふ呼稱であるが、巧者といふのは決して拙者の反對の貴女とか貴君といふ意味ではなくて、事物に對して巧妙であるの意である。新人とは教養あり自覺ある新進の人の意であるが、それと對立する古人は決して教養のない自覺のない舊式の人の意ではない、小人といへば普通君子に對していはれる語であるが、大人とは一般に成熟した人のことをいふやうになつて居る。殿下は貴顯に對する尊稱であるが、それに對立する殿上は全然對立的意味を有して居ない。家内といへば、自分の妻に對する呼稱であるが、それに對する家外を妻以外の婦人とはいはない。夫と婦とを對立する

男と女と見るならば、其の各に同じ人の字を添えても、對立した男女になりさうで、而も夫人と婦人とが共に女性に化するに興味がある。

五

人の呼稱の中には、文字の上からは同意義であり又相類したものであつても、實際上の用例で其の意味や發音に全然相違したものが往々ある。それ又人の呼稱の複雜な點をよく示す方面である。

職工と職人とでは、文字の上で同意義のやうに見えるが、而も職工は工場に働いて居る人々をいひ、職人は大工とか左官とか植木職などのやうに工場に據らないで働いて居る人をいつて區別して居る。役者と役人とも、文字の上では同一のもののやうであるが、而も役者は一般に劇場に於て芝居を演ずる人をいひ、役人は役所に勤めて居る人をいふのである。藝者と藝人も、亦上のやうな關係があるので、決してこの二つが同義に用ひられては居ない。即ち藝者とは普通に藝妓のことを呼び、藝人とは何等か藝の出來る人を男女を問はず呼ぶのである。畫工と畫家とも文字の上では類したもののやうであるが、實際上畫家が優秀な社會的待遇を受けて居るのに、畫工といへば版下書き看板畫きなどの普通の意味に於ける勞働者である。校主と校長とは似たものと思はれるが、一般に校主は學校の所有者であり經營者であるのに、校長は教務に關する事務を管掌する人をいふて居る。小人と小者も、文字の上ではよく似て居るが、意味は全然異つてゐる。大家と大家と大家も一は學術技藝に堪能な人を、二は借家人に對する家主を、三は舊家とか資産家を指して居て、各相違した意味を持つて居る。

六

このやうに人に對する呼稱は、極めて樣々な興味ある關係を有して居る、それ丈けに吾々はこの呼稱について色々な方面に注意を惹かしめる事實を生じて來る。其の主な一つは呼稱の改められることとである。

或内閣が參政官を置いて、程なく他の内閣が同じ内容を持つ勅任の參事官を置くことなどは、政治家の便宜上の問題に過ぎないであらう。けれども女中を家政婦と改め、職工を技工と改め、電話交換手を電話局員と改め、小僧を小店員と改め、代表者を代議員と呼ぶやうにすることなどは、從來社會的に冷遇されがちであつた聯想から遠ざけて、其の

人の人格を幾分か認めるやうにしやうとの用意でもあらう。又海軍機關大監といふのを、海軍機關大佐と呼ぶやうにしたのは本官である普通の海軍大佐と同様に見せしめやうとの注意からであらう。産婆といふのを助産婦とするのは、其の名の不適を改めたといふ點もあらうが、年の若い新智識ある婦人を、婆と呼ぶの不快を除けやうとの用意も加はつて居やう。

兎に角他の人格に對して尊敬の念を拂ふやうにし、自らも他より卑しめられないことを欲するのが、一般の人々の希望であるから、不快な感じのする呼稱の改められることは、好ましいことである。事實上單なる呼稱の改正のみで、人々の心理を緩和し得ることは、いくらも例のあることである。それ程に吾々は、形式の上丈けでも自我の尊重を得やうとして居るのである。

七

けれども時には、其の對する人の身分や職業や地位や人格などに不相應な呼稱を用ひることが、却つて其の人を侮辱する結果となることは少くない。例へば、先生といふ呼稱が無學のもの〻間で用ひられると、輕侮の意となり、大將といふ呼稱が、人足などの間で用ひられると、矢張り尊敬の意とはならない。痴鈍な人をお悧口ものといひ、醜男を好男子といひ、小女を大女といふが如き、皆反語による惡口である、又殿下といふ語が、學生の間などで用ひられる時には、それが敬稱の反語であるはいふまでもない。それ等と同じやうに、貴公とか貴樣とかいふ呼稱は、元來決して卑俗な意味でなかつたに相違ないが、今日不用意にそれを用ひる時には、人の感情を害するは確實である。坊主といふ語はもと一寺の主といふ意で敬稱であつたけれども、今日では普通に賤しんだ意に用ひられ勝ちである。甚だしきは、窃盜の這入つたことを「お客樣が來た」といふやうに言ひ現はすことすらある。即ちこれ等は、主に反對聯想を働かしめて、呼稱の興味が動いてゐるのである。

八

私は、以上、人に對する呼稱を、實例の上から、社會心理的に觀察した。國語學の上からは、尚頗る興味ある點もあらうけれども、それは私の專門以外のことであるから、述べられない。要するに吾々は、人の身分や職業や地位や人格を、特殊な名稱の下に呼ぶ場合に、多くは極めて不鮮明

でありながら、自我意識や階級意識や名譽心や羞恥心などの根強く働いて居ることを爭ふことは出來ない。それが如何に根強く働いてゐるかは假りに誤つて呼び又は呼ばれた場合を注意して觀れば、明かに知ることが出來よう。そこで單なる形式に過ぎないにしても、呼稱の分化や複雜化が、頗る容易に生じて來るのである。さうしてそこに吾々の煩瑣な社會生活の一面が、現はれて來るのである。のみならず社會の分化や複雜化と、各人の教養や境遇の多樣化とは、一層人に對する呼稱を煩はしいものとする傾向がある。且又生存競爭の劇甚に伴ふ自我意識の屈服は、果敢ないことでありながら、內容は兎に角、形式に於てでも認められ又認めしめようとする努力を生じ、個人個人の差別意識が明瞭になつて來るのである。そこに煩瑣な呼稱の意味も生じ、又それ等各々の存立すべき社會心理的要求が見られるのである。こゝに私が、人に對する呼稱に興味を感ずる大きな根據があるのである。

　而してかゝる事實は、特徵を持つて居る民族性の一つの考察資料としても、社會生活者としての吾々自らの心理の考察資料としても、亦頗る興味あるものといはねばならない。

海游錄

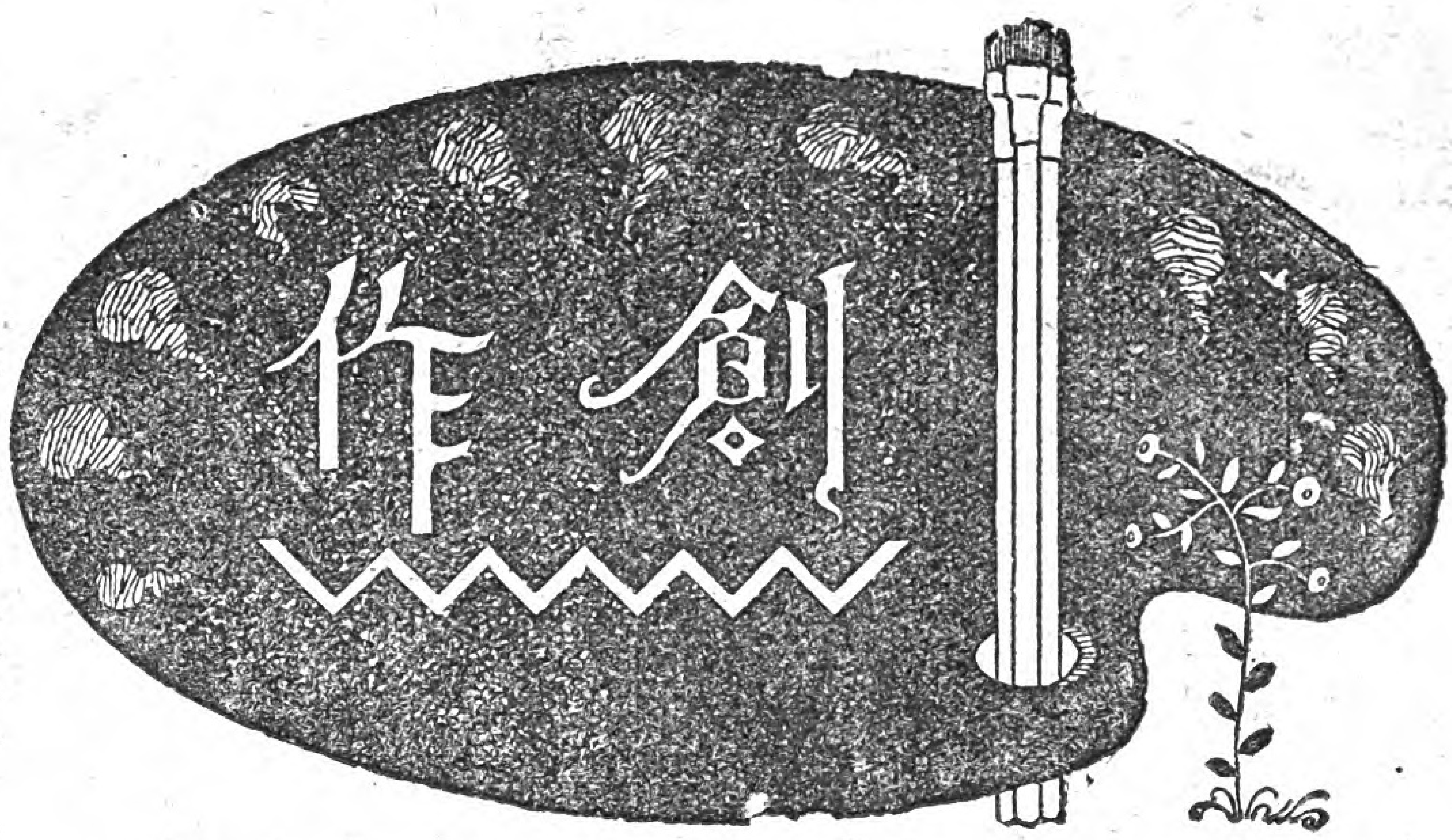
細井肇抄譯

「海游錄」昔は日本に往來した朝鮮の文人の紀行文である。本書はその上篇のみを譯出されたものであるが、これによつて朝鮮の民族性が明らさまに讀まれる。一の好資料として推奨する。（定價貳圓　東京府下中澁谷道玄坂二九一　自由討詩社發行）

西洋文化の悲哀

關伊右衛門著

本書は生命保險研究のため歐米を漫遊せる著者の歸朝土産である。歐米歸朝者の印象記は、幾ら出ても觀る人の眼が違ふから面白い。西洋文化の悲哀を語つて國民の自省を促すところに著者の目的があるのではなからうか。（定價貳圓四十錢　東京牛込區神樂町二ノ十二　周文社發行）



- 銅の竈　近松秋江
- 途上　與謝野晶子
- 人間に就て　武者小路實篤
- お常の極樂　相馬泰三
- 女怪　宇野浩二

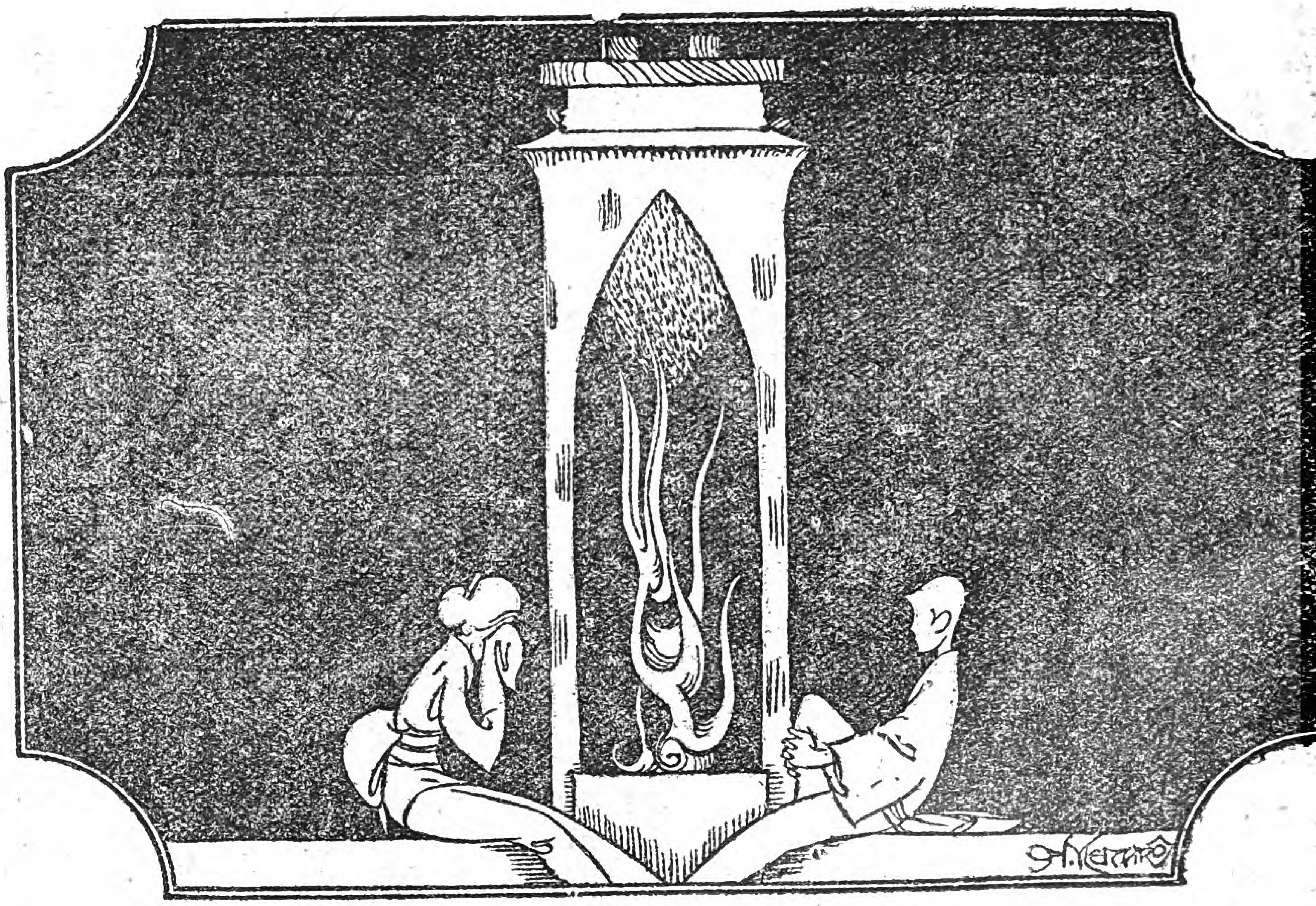
小説(前號まで)の梗概

都會の憂鬱　日蔭の家に、若い夫婦が二人きりで住つてゐた。そこの妻君は場末町のA劇場の女優であつた。彼は、終日閉ぢこもつて憂鬱な考へに疲れてゐた。彼には、藝術に對する夢と、自信と、青春とが消滅したかのやうな氣がした。到底世に出られさうにもない、そして自然主義文學といつしよに滅びて行くやうな友人江森渚山のことが、彼自身の身の上に思ひ比べられるやうな悲しい日のみが續いた。彼はある日、妻の父からの招きで妻の實家を訪ねた。彼女の母は、その娘の家庭のために時々用立てた金高とそれの用途との心覺えを記してある紙を彼に示してくど／＼と説明した。それに丁度いゝ部屋があるら、今月限りで家を疊んでお前一人なり、或は妻と二人なりで下宿をするのがよくはないか、と言つた。彼はその歸途、此頃の妻の上に起つた疑はしい事實などを思ひあはせて、彼の妻が母親と相談の上に蜿曲な別れ話を彼に持ち出したのだとも感づかれて來たが、然し妻とても他人であればそれも何うにも仕様のないものだと思ふよりしかなかつた。ところが彼が妻の實家を訪ねたその夜、妻はたうとう歸つて來ずに、その翌る朝になつて歸つて來た。彼はさういふ妻を責める心にもなれずに、ぶらりと散歩に出かけて行つた。そこで彼は三年越し逢はなかつた親友久野に偶然會つて、二人してあるカフエーへ入つて行つた。

女怪　父親のない女ばかりの家に育つた末娘の銀子は、姉達がそれ／＼男と驅落したり捨てられたりしてゐる中に、彼女もまたいろ／＼な男の友達を拵えたが、この頃は上京して現代劇協會に入つて、そこで川田信一といふ役者と一緒に寢泊りするやうにまでなつてゐた。それだのに彼女の週圍には、まだ木村とか相田とか有原とかいふ青年が彼女の意を迎へようとして附き纒つてゐた。

銀子がまだ大阪にゐた當時知つた男で、彼女の一切の經濟を援助してくれる江阪といふものがあつた。銀子はこの親ほども年の違ふ江阪に對して、戀に近いなつかしみを感じたこともあつたが、川田が出來たこの頃では、金を貰ふとき位しか用のない人になつてゐた。銀子はその江阪から上京した知らせを受けて彼と逢つたとき、江阪は彼女の姉でいまは家出して行衞さへ知れずになつてゐるお島の消息を一寸話した。この事はひどく銀子を驚かした。彼女はそればかりでなく銀座通りを江阪と姉のお瀧とが自働車に乘つて駛つてゐるのをも見たのであつた。銀子には、彼女の姉をしかも二人まで知つてゐる江阪といふ男が怖ろしいほど氣味惡く感じられて來たのであつた。

それからといふもの銀子は、江阪や、姉や、田舍に獨り寂しく暮してゐる母のことなどを暗い心で思ひ出すやうになつて來た。その日も彼は、ある園遊會でする芝居の稽古を下宿の彼女の部屋で川田と一緒にしてゐると、母のことなどばかり思ひ浮んで來てどうしても稽古に身が入らなかつた。そこへ母危篤の電報が來た。彼女はそれを見ると緣側に俯伏して子供のやうに聲をたてゝ泣き出した。



銅の竈（短篇小説）

近松秋江

一

お時は、學校の歸りに立寄つてしる粉を食べていつた二人の馴染の學生達を對手にして暫く戯談口をきゝ合つてゐたが、それが出て往つた後は、汚れた食器はそのまゝにして又火鉢の傍の裁板の前に坐つて、仕立てなほしの男羽織の襟を絎けにかゝつた。その無地の高貴ももう自分の手でこれが確か三度めで仕立てなほすのであつたと思ふと何時になつたら少しは新しい物を買つて來て裁つやうな時が來るのであらうと、何年經てもいつもいつも同じ事ばかり繰返してゐなければならぬのがつくぐ〵厭で堪らなかつた。此の羽織もゝう遠うから、肩のところが燒けたり角々が擦り切れてゐたりするので早く仕立てなほさなければならぬと思ひな

から、幾ら飯事のやうなことでもこんな食べ物屋を商ひにしてゐれば、自分一人きりでそんな仕事などに落々坐つてゐる暇もなかつた。それに新しい物を仕立てるのと違つて繼をあてる處があつたり方々切りはいだりしなければならぬので餘計に手數が掛るので、もう去年の秋口からやい〳〵いはれてゐたのを、つい掛り臆劫でそのまゝにして置いたのであつた。

此の頃夫が時々蠣殼町へ足を向けるやうになつてから、

「俺をいつも羅紗の筒袖ばかり着て外に出さすのが貴樣の効生か。」

といつて、頭から叱り付けるので、彼女も初のうちはそれを小馬鹿にしたやうに笑つてゐた。今年になつてからも正月早々國元の方に心配な病人が出來て暫くそつちへ行つてゐたりして何をしてゐる暇もなかつたが、二月になつてから例年のとほり店も幾らか手がすいたので此の頃やつとそれに取り掛ることが出來たのであつた。

食べ物屋といつても其處は疊がたつた二疊敷かるだけのかし店で、隣の家へ瘤のやうに喰付けた片廂の下に、あとは板の土間と煮物などをするに勝手の好いやうに臺所が狹い家の割りに小廣く取つてあるばかりであつた。それでも裏町ではあるが水道町や改代町の方から神樂阪の盛り場へ出ようとする通筋の出會ひになつてゐる阪の途中にあるので、思つたより立寄つてゆく客はあつた。

日暮近くなつて外は二月の空つ風が立つて來たと思はれて、北の透いた阪下の方の町から吹き上げて來る風が時々入口の閉め切つた硝子戸にざら〳〵と乾いた道から小砂利を打ちつけていつた。夏場になると、和洋酒、しる粉、壽しなどと誌したそこの硝子戸をすつかり取りはづしてしまつて、土間のテーブルの上には大きな硝子の水鉢の中に金魚を放したり、涼しさうなガラスの簾を下げたりして氷水を賣るのでなか〳〵忙しくもあるし、すぐ傍には湯屋があつたり床屋があつたりして陽氣でもあつたが、霜枯れの今時分になると毎時眞正面に北を向いて朝日はほんの一寸の間さし込むきりで少しも日といふものが當らないので雜普請の隙間を洩れてくる風が身に滲みて寒かつた。

お時は、陰氣に閉め切つた硝子戸の中で獨りぽつんとして針の手を動かしてゐると、今の自分の慘めな境遇や、來し方行く末のことなどがそれからそれへと取り留めもなく考へ浮んできて、果てはどうしていゝか自分で自分のことが分らな

くなるまで氣が纏れて爲方がないのであつた。

この高貴織の羽織は夫がまだ全盛の時分にこしらへたといふのであるから、それを買つた時分にはまだ自分とは知りもしない頃であつたらう。中國の方の、ある縣廳のある市に生まれて、そこの一寸した旅館の息子に思はれて嫁いたのは彼女がまだ十七の時であつた。それから十年の間連添ふてゐたその夫が肺病で亡くなつたのは彼女にとつて不幸であつたに相違ないが、その頃は彼女もまだ女盛りの時分で、それに子供もなかつたからどちらを向いても相當な縁談の口はいくらもあつたのに、どうといふ深い思慮があつた譯でもなく、たゞ自分のふとした輕はづみな氣まぐれから朝鮮の方に渡つて往つたのが縁の端で今の夫と同棲するやうになつたのであつた。夫は、自分とは屢く人から親子と見ちがへられるくらゐ二十七も年が上なので彼女は不斷人に對つて夫の話をする時には内のお爺さんといつてゐた。そして、その時まで一緒にゐた先の女房を離縁してお時を家に入れたのであつた。無論夫婦の縁を結んだ以上はその夫が落目になつたからといつて、尻を端折つて出るの退くのといふ譯にいくものでもないけれど、もと／＼不つり合の年恰好であるのに、一緒になつてからもう丁度十年になるのに、今にいまにとあつぷ／＼思つてゐる間に月日は流れるやうに過ぎてしまつて何時まで立つても少しも好い目の出る當てのないのに彼女は愛相が盡きてゐた。

しかし夫も元からさう困つてばかりゐた人間でもなかつた。郷里は四國の方の、ある南を受けた海ぞひの一寸した町で、縣廳のある市には遠くも離れてゐなかつたから可なり殷賑な土地であつた。お時はたゞ話に聞いたゞけであるけれど、實家は舊くからその町の造り酒屋で、ほかに米穀を商つたり、太物屋も營んでゐた。一人息子であつたから早くから家業に携はつてゐて、呉服物の仕入れなどの商用を帶びて彼は一年の中大方は京阪にゐて暮すことが多かつた。その頃は年もまだ若かつたし金錢が自由になるにまかせて道樂の方に身が入つてしまひ、しまひにはどうにもならなくなつて、到頭親から禁治產のやうな扱ひを受けることゝなつた。その頃家にはもう男の子一人に女の子が二人あつたが、家内と其等の子を置き去りにしたまゝ彼はそれつきり故郷へ足踏しなかつた。それはまだ三十をやつと出たか出ぬくらゐの時分であつた。そして、その頃深く馴染んでゐた京都の藝子を落かして、九州の博多には長い間の取引先きで知邊があつたから、

それを頼つて遂に九州の方に落ちていつた。何處へ往つたところで金が無ければどうすることも出來ないので、散々困つた揚句後には三池の炭坑で巡査になつて働いてゐた。丁度その時分は日清戰爭の結果日本が臺灣を屬領した頃で臺灣に行けば巡査の俸給も內地よりはずつと割が好いので、臺灣に渡つていつた。京都の藝子には女の子が一人出來て紅白粉で彩つたありし昔の姿はどこへやら、眞黑になつて感心に男を守つてゐたが、さすがの彼も心からそれが可哀さうになつて、仕舞にたうどう因果を含めて別ればなしにしてその女は子供を附けてもとの京都へ歸してしまひ、彼は單身臺灣に渡つて往つたのであつた。その藝者の產んだ娘が今まで無事に生きてゐたらもう好い年增盛りになつてゐる筈だといつて、お爺さんはその頃のことを振顧つて話すたびにお時に向つてその娘のことをいつていた。そして渡臺してからも新しい女房はすぐに出來た。臺灣では巡査をしてゐる間に手蔓があつて實業の方に手を出し、その頃まだ阿里山の處女林が採伐されない時分であつたから、日にひに開けてゆく住宅の建築用材などは遠く日本の內地から輸送してゐた。その頃丁度又臺灣にひどい暴風雨があつて新に出來て間もない市街地は何處も殆ど全滅してしまつた。材木が俄に暴騰するのを見越した企業家が金主になつて紀州から許多の材木を買込まうとしたが、誰れもそんな遠くへ進んで乘出さうとする物がなかつた。勿論その頃はまだ內地との交通なども極めて不完全であつた。その時彼は自分から進んで木材買入れの宰領を引受けたのであつた。そして紀州材をうんと買込んで戾つて來ると途中で又暴風に出遭つたりして生命がけの思ひをしたが、その代り買つて來た材木は何十割といふ高い相場でもまだ引足りないくらゐであつた。それを取り付きに一時は何萬といふ金も出來て、此度は又藝者を落かして臺北に宿屋を營業さしてゐたこともあつたが、五六年もするうちに鑛山に手を出して、すつかり元も子もなくしてしまつた。さうしてゐるところへ恰も日露戰爭が始まつたので、其處でも又女房や妾に別れてしまつて、元のとほりの獨りになり今度は朝鮮に押渡つて行つた。朝鮮では運送船の下請負をして元山から釜山、大連といふ近海航路を乘り廻はつてゐた。日本海の危險を恐れて誰れでもが進んでやらなかつた元山の方を往復するのは隨分冒險であつたが、その代り一遍往つて來ると始末におへないほど錢が儲かつた。そして戰爭が濟む時分には又小十萬の金を殘して、釜山に料理屋を開いてゐた。それでもう慾を出さなければよかつたのに、調子に乘つて此度は荒蕪地の排水事業に關

係したりしてゐたが、金は幾ら注込んでも水田はちつとやそつとのことで涸る見込みはなかつた。

お時が同棲するやうになつた時分には、もう十萬からの金も大方無くしてゐた頃であつた。彼女は、その金を目あてにして何も嫁いだわけではなかつたが、ちやうど又運惡く彼女と一緒になる時分から段々手を出してゐた事が何も斯も可けなくなつてしまつた。そして到頭しまひには朝鮮をも體のいゝ夜逃げのやうにして內地へ戻つて來たのであつた。

それは一緒になつてからまだ二年經つかたゝない時分であつたが、お時は其時のことを考へて、どうして自分はあの時思ひ切つてさつぱり別れてしまはなかつたらうかと、今になつてそれが殘念で〱爲樣がなかつた。何かに附けてお時が、

「いつまでも斯樣なことを每日々々繰返してゐるのは私つまらない。」と、愚痴をいひ出すと、お爺さんの方でも、

「うむ、俺の方でもさうだ。俺も今まで何度女房を持ちかえたか知れんが、貧乏神はお前ひとりだ。お前と一緒になつてから好いことゝいつたら何一つあつたゝめしがない。」と、負けてゐなかつた。

しかし口にはそんなことをいつても、お爺さんはお時を手離す氣はすこしもしなかつた。彼女はお爺さんさへうんといつてくれゝばその日にでもすぐ別れてしまふのは何でもなかつた。

植民地であふれ者の寄り集つてゐる彼地では、よく朝鮮の緣は釜山の棧橋で切れるといふが、彼等は內地へ戻つて、お時の鄉里へ立寄つた時にも、お時の叔母にあたる養母は、お時は此のまゝ置いてゐてもらひたいといつたのを、お爺さんは、たとひ別れるにしても、せめて、當座困らぬくらゐの小使を彼女に與へて置いて別れたいといふ希望であつたので、もとより慾の深い養母は、それを是非にもといひかねたし、お時も亦た此處でそのまゝ別れて、老夫を獨りで東京に遣るのは何だか人の落ち目を見棄てるやうで、忍びなかつたのであつた。朝鮮から引揚げる時には、東京にさへ行けば、彼地で一緒に鑛山に關係してゐた西洋人から五六百の金は入るから、それを受取つたらお時に呉れるとお爺さんはいつてゐたが、東京に來て早速その西洋人のゐる筈の麻布の奧の屋敷に訪ねて往つてみると、そこには日本人の雇人が一人留守番をしてゐるきりで、主人の西洋人はアメリカへ歸つて居なかつた。それで當てにしてゐたことは向うからはづれてしまつた。それから、二人でいつまでも宿屋に泊つてゐては、僅かばかりの路用の金を食ひ減らすばかりなので、何にか取付く

まで、ほんの一時の腰掛けのつもりでし始めたのが今の飲食店であつた。爺さんは壯な時分臺灣や朝鮮でうまく當つたことを思つて、まだその内にそのうちにと好運を夢みてゐたのであつたが、そんな植民地でまぐれ當りにあたつたやうなことは、とても東京では望まれないことであつた。

お時も朝鮮へ渡つて行く前の時分の事を思ふと、かうして四十にもう間のない好い年をして、自分で稻荷ずしを握つたりしる粉をこしらへて、しがない活計を立てねばならぬやうな態にまで零落れやうとは夢にも思はなかつた。そして、「こんなことになるのであつたら、どうして自分はあの時思切つて別れてしまはなかつたのであらう。」と、上京の途中郷里に立寄つた時のことなどを繰返して思つてみるのであつた。

二

そこへ「今日は。」とぶう／＼風の吹き付けてゐる硝子戸を開けて入つて來たのは、富澤といふ懇意な老人であつた。お時は、

「ひどくお寒うございますのに、よくお出掛けになりました。」といつて、針を持つ手を休めて大きな角火鉢にどつさり埋けてある火を搔きさがした。

「へえおほけに。」といひつゝ、老人は火鉢の向側に凭つて腰を掛けて、腰から煙草入れを拔き取つて、煙管に火を吸付けた。

「片倉さんは何方へ。」

「蠣殼町の方へ往くといつて午ちよつと前から出掛けたきりまだ歸つて來ません。」

「あゝ左樣か。どんな鹽梅ですかな。ちつとは好い方ですか。」

お時は笑ひながら、

「さあどんなですか。私共にはすこしも解りませんが、何だかさう惡くもないやうなことを云つて出て往きました。」

富澤老人は煙草をつゞけさまに二三服しながら、

「おほきに、さうでつしやろ、一寸此の處下を向いてゐますからな。」

そんなことをいつてゐたが、その言葉訛にも知れるとほり富老澤人も出生地は京阪であつた。やつぱり以前が良かつたので若い時から隨分道樂の限りを仕盡して後に堂島の米相場に手を出したのが原因で親代々の身代をすつかり無くしてしまつた。何でも最初に來てゐた女房の實家は今でも世間によく名の通つてゐる灘の酒造家の分家であつたが、富澤の一家一族でも又その妻君の實方でも先祖から投機事業に手を出すのは家憲として大禁物であつたうへに、富澤老人がさうして愈愈相場で身上を潰すまでにはもう親類中でもほと〱愛相を盡してしまふくらゐ方々へ迷惑を掛けてゐた揚句なので、今度こそはたとひ妻子を連れて野倒れ死をしようとも何處でも振向いて見てくれる者はなかつた。尤も富澤老人もその頃はまだ血氣壯な時分であつたから三人の子供と妻を伴れて東京へ出て來た。それは今からもう三十五六年も昔のことであつた。東京へ來てからは故鄕の大阪にゐる時分にも倍して殆ど不幸と慘憺のかぎりを嘗め盡したのであつた。酒の仲買ひをやつてみて失敗し、古道具をやつてみて失敗し、蠣殼町へ出入りしてそこの客引をしたこともあつたが一つとして思ふ目は出なかつた。その間に散々苦勞をさした妻君は長い間肺病を患つて死んでしまつた。富澤老人は今でもその女房のことはいひ出して氣の毒に思ふのであつた。まだ實家にゐる時分はお乳母日傘で育てられたお孃樣であつたのが富澤に嫁いでから苦勞のしつゞけで死んでしまつた。三人の子供もいろんな病氣で次ぎ〱に亡くしてしまつた。そして先の妻君が病氣で亡くなる前から長い間看病に雇はれて來てゐた婦人を後になつて妻に直したのが今のお內儀さんであつた。それは先の妻君ほど身柄などは良くなかつたが、長い間そんな人の忌がる病人をよく面倒を見てくれたので、病人が息を引取る時自分になり代つて後に殘つた夫の世話をしてくれるやうに遺言をして置いたくらゐであつた。すると、富澤老人はもう四十を過ぎてからであつたがそのお內儀さんに女を頭に四人も子供が生まれた。一番うへの女の子は赤阪から藝者に出すほど老人もその頃はまだ困つてゐたが、運は年を取つてからも向いてくるもので、その次の長男が今年でやつとまだ二十にしかならぬのに、それを小學校を卒業するかせぬうちに兜町へ小僧にやつて置くと、一つは運も好いのであらうが賢い息子

なので、段々その道の骨が明るくなつてくると、少しづつ辛抱して貯蓄した金を持つて好い所を狙つては相場を張つて、いつも幾らかづゝ儲けてゐた。それで今では小さいながらこれまで住んでゐた家をほかに一軒貸家の附屬したまゝ買取つたり、赤阪から藝者に出てゐた姉の借金を拂つて自前にしてやつたりしてゐた。その伜のお蔭でもう七十に間もない富澤老人はやつとこの二三年左團扇で氣樂に老後が過されるのであつた。お時の夫とは近處の將棊場で口を利き合つたのがもとで數年來懇意になつて、樂隱居の所在なきままさうして始終話しに出て來るのであつた。そして來る度ごとに息子の話などしてゆくのがお時には羨ましくてならなかつた。そんなに親達の住む家を買つてやつたりしても息子はやつぱり小僧の時分と同じやうに始終店に寢泊まりしてゐて親の處へは日曜日に訪ねて來て、くるたびに幾許かづゝ當座の小使ひなどを不自由のないやうに置いて往くのであつた。

お時は又人を小馬鹿にしたやうな笑ひ顏になつて「內のお爺さん、今度うまくいつたら私と、あなたの處の姉さんとに金鎖の羽織の紐を買つてやるといつてゐましたから樂んで待つてゐます。」

「あゝさうですか。私のとこの伜も昨日私と娘を伴れて三越と白木とに行つて姉の着物と私と家內の不斷着を買つてくれました。」

お時はそれを聞くと腹の中ではもう嫉ましいやうに羨ましくなつて、

「あゝさうでございますか。あんたのとこの兄さんは本當に感心ですねえ。姉さんのはさぞ好い物でございませう。」

「さあ……これはちよつと上等の品でした。お召柄の八端で、値段が三十七圓とかいふてゐましたよつて。私達の物は、なに貳拾圓ばかりの高貴まがひの物でした。」

「まあさうでございますか。本當に出來の好い息子さんをお持ちになつてそんなお仕合せなことはございませんわ。」

「えゝ、私もやつと伜のおかげで少しは氣樂になりました。」さういふ富澤老人の顏には腹から滿足の色が見えてゐた。

お時はそんな話をすればするほど心の中で一層焦燥しながら、

「少しどころぢやございませんわ。どんなに御安心だか知りやしません。……あんたの處と違つて、うちのお爺さんのは

取らぬ狸の皮算用で、うまく金鎖の羽織の紐になるかどうだか危いもんです。」と皮肉にいつて笑つてゐた。

富澤老人は相場の話に興味を持つやうに、

「たしか賣りの方でしたな。……そやつたら大方がよろしい方でせう。相場も少しづゝは樂しみなものです。私も片倉さんのお連れになつて出掛けたいと思ひますけど、倅が、私がそんなことをするのをひどく嫌ひますもんで。」

お時は針の手を動かしながら富澤老人の顔を見て、

「そりやあ兄さんがいはれるとほりです。もうあなたはそんなことをなさらん方がようございます。うちのお爺さんなぞはそんな譯にいきませんから。」

すると富澤老人は、ぢつとお時の方を見て、いくらか戯弄ふやうに、

「片倉さんかて今時分お國にぢつとしておいででしたら樂隱居の身ぢやごはりませんか。……やつぱり男は幾つになつても好きな女子のために勝手に苦勞をしますもんやて金ぐさりの羽織の紐を買はうと思ふて。」と笑ひながら云ふ。

さういへばお時も笑つて、

「ほんとにさうです。内では勝手に東京にゐて苦勞をしてゐるんですわ。私、何もそんな思ひをして欲しい物を買つてもらひたいとは思はないから、お爺さんも今のうちにあんまり慘めな眼を見ないやうに、いゝ加減にして四國の方へ歸つてくれゝばいゝと思つてゐるのです。」

富澤老人もそれには默つて答へなかつた。そして海苔卷きを一皿食べて尚ほ暫く話して歸つていつた。

お時は富澤老人が歸つていつた後はやゝ暫く機械的に針の手を運ばせながら、心の中で、

「あのお爺さんいつも來る度に三越に行つた白木屋にいつた、いや歌舞伎にいつた帝劇にいつたといふやうな話ばかりする。」と、思はず舌打ちをしてゐた。人のそんな幸運な話を聞くにつけ、自分達は足掛け九年にもなるのにいつまでもかうして來る日もくる日も同じことばかり繰返へしてゐなければならぬのであらうと思ふと、お時はまるで、さうしてゐるのが深い泥濘の中へ足を突込んでゐるやうであつた。

やがて仕事もやつと出來上つたので、お時は火熨斗をかけて疊んで隅の方に押しやつて置いて其處らを形付けたり、先刻から客の食べ荒していつたまゝにしてあつた皿や椀を流しに持つていつて洗つたりしてゐるところへお爺さんは硝子戸をあけて、のつそり戻つて來た。

「おかへんなさい。」と、彼女はいつたが、いつも畏い顏をしてゐる老夫にさうして外から戻つて來られるのが慄然とするほど厭でいやで堪らなかつた。鼻の高い立派な顏であつたがいつも血走つたやうにきつい眼付をしてゐるのがまるで今にも噛みつかれさうであつた。お時はいつもその顏色を見て大抵お爺さんの機嫌の好いのと悪いのとを察するのであつたが、それでも今日はいつにない威勢の好い調子で歸つて來たと思ひながら知らん顏をして向うを向いたまゝせつせと洗ひ物をしてゐた。

爺さんは火鉢の傍にどつかと坐ると、懷から紙に包んだ物を取出しながら、

「お前の注文の品を買つて來た。これどうだね。」といつて、そこへ小さい桐の箱を二つ出して並べた。

お時は、ぢや今日は少し好かつたのだと心の中で思ひながら、

「さうですか。」といつて、一寸後を振向くと、お爺さんは桐の箱から細い金鎖の羽織の紐を摘み上げて見せながら、

「これをお前と富澤のお源さんとに買ふて來た。」といひゝ機嫌でいつてゐる。

お時もそれを見るとほく／＼なつて、

「まあ、どれ。」といひながら、濡れた手を手拭で拭き／＼其處に來て坐つた。そして嬉しさうに金鎖の紐を手に取り上げて見ながら、

「好いんですねえ。」といつた。お時はもう此處に來て八九年といふもの、暇がないのと兩方で、そんな羽織などを着飾つて外に出歩くやうなことは三年に一度もなかつたが、それでもやつぱりそんな物を買つてもらふのが嬉しかつた。

「余程高かつたでせう。」

老夫はお時の悦ぶ顏を見て滿足してゐるやうに、

「うむこちらが拾貳圓だ。その方が五十錢安くつて十一圓五十錢。細工もあんまり异つて居らん。どちらでもお前の好きな方を取つて一つをお源さんに遣らう。」

お爺さんも金びらを切つてそんな物を買つて來るやうなことは朝鮮に居つた時分から無いことであつた。二人がまだ一緒にならない時分お時が同じ郷里から出て往つて商買をしてゐる料理屋へ親類分として手傳ひに住込んでゐる頃お爺さんはよくお時を說き靡かすためにいろんな物を買つて持つて來た。金さへあればお爺さんはそんな事をするのは好きであつたが、今ではとても望めないことであつた。

お時は金鎖を交る〲摘み上げて見てゐたが、

「私こちらをもらつて置きますわ。」といつてやつぱり五十錢値の高い方を取つて藏つた。

お爺さんの思惑はうまく當つて天井知らずに伸びてゆく相場が一寸小戻したところを賣つてゐたゝめに二百ばかり儲けたのであつた。

お爺さんはそれでやつと臺灣や朝鮮時分に捉み取りに儲けた時のやうな使ひ心地の好い金の有難さを久し振りに味はつたのであつた。

三

今日でこそ石五十圓といつても世間はもう餘り驚かなくなつたが、あの恐ろしい燒打ち騷ぎのあつた大正七年にはまだ雪の深い冬の頃から上を向いた米相場は天井知らずにどん〲上騰する一方で、增貫だの岡半だのといふ腰の强い相場師が買占めて吊り上げてゐるといふことで濫に其等の奸商征伐の聲が聞え、政務に熱心なる時の農商務大臣は頻りに高騰する諸物價の調節について種々の對策を試みたが少しもその効なく、冬が明けて段々端境期が近づくにつれて相場はもう上向くばかりであつた。

些かな食べ物屋を營んでゐるだけに、片倉老人は米の値が高くなるのが人よりも一倍直接に痛痒を感じた。元が高いか

らといつて、店で賣る品物をさう高くすることも出來なかつた。問屋から米を持つて來るたびに無暗に上つてゆく相場には思はず眼を見張らされた。けれどもその頃は高いといつたところでまだ二十圓か二十二三圓どころの相場でこれを他の諸物價に比べればまだ米は割が安いのであつたが、片倉老人の考には、それが世間の噂や何かと思ひ合はせて、一途に奸商共の不自然なつり上げ策のせいだとばかり考へられたのであつた。そしてこんな時一か八か相場でもして少しは好いことに取付かねば今までの通りではとても爲方がないと思つた。此の頃では何かに付けてお時が不貞たやうて、

「私もうこんなことをするのは厭になつた。」

といふのがお爺さんに取つては何よりも強く胸に響くのであつた。それでもまだ二三年前までは何か二人で言ひ爭ひでもすると何時でも仕舞には爺さんが手を振り上げてお時を張り飛ばすのが定りであつたが、近頃では自分でも氣が折れたのか、隨分お時からつけ〳〵いはれることがあつても今までのやうに怒つてばかりもゐなかつた。

「私もう何時までもこんな事をしてゐるのは詰らない。どうぞ私に暇をやつて國へ歸して下さい。そしてあなたも國へさへ歸れば少しも不自由はないんですから。この店を賣つてしまつてさうしたら可いぢやありませんか。私こんな事をいつても、あなたに對してちつとも薄情とは思はない。あなたは國へ歸れば立派な子供達があつて孫もゐるしするけれど、私は名前だけ養母の叔母があるだけで、廣い世界にたつた一人きりなんですから、今のうちに何とか一生の身の方針を定めて置かねばもう此の上歳をとつたらどうすることも出來ない、後になつてまごつかなければならぬ。」

お時は何時であつたか、お爺さんに頭を張り飛ばされる覺悟で、しんみりと理詰の話をすると、これまでに似ず爺さんはじいつと頸を下げてお時のいふことを聽いてゐたが、毆られると思つたのがその反對に、

「お前にさういはれると俺も何ともいひやうがない。」といつたまゝしばらく悄然としてゐた。

お時はまた爺さんの方からそんな調子に出られると、自分は少し言ひ過ぎたらうかと思つて妙に氣の毒な氣もするのであつた。まだ朝鮮にゐる時分はお爺さんもなか〳〵元氣がよかつた。東京に來てからも、つい二三年前まではどうかすると一寸したことにもすぐ手を振り上げたものであつた。平常老夫に向つてよくだゝを捏ねてゐるお時もそれが怖さにいひた

いことも堪へて默り云はずにゐたのであるが、さうして久振りにそんなことをいつてみて、はじめて、二三年此の方爺さんの氣がひどく折れてゐるのが分つた。それでお時も度胸が極つた。これなら少しくらゐ強いことをいつたつて大丈夫だと思つた。

お爺さんはやゝあつて、

「お前がさういふものを、俺も無理に引着けて置くといふことも出來ないのだが、此のまゝお前も國へ歸つたのぢや爲方がない。何とかして當座困らぬだけのことはして遣りたいと思ふもんだから……」

「それはもう、どうもしてもらはなくつてもようございますよ。九年も十年もさう思つてゐてもさうならないのですから。此の先尙ほそんな當てのないことを思つてゐられない。私は何も欲しいとは思ひませんから、いよ／＼可けなくなつたら、あの銅のお鑵を一つもらへばいゝんです。いよ／＼といふ時あれを賣れば國へ歸るだけの旅費くらゐはあります。」

その銅のお鑵は、今の飲食店をはじめる時まだ其處に瓦斯が取り付けてなかつたので薪木を用ゐるつもりで大きな銅のおへつつひを買つたのであつた。それには湯沸かしの銅壺も付いてゐて便利に出來てゐた。買つた時分には十七圓を多く出てないくらゐであつたが、金物の騰貴した今では五十圓なら道具屋を呼んで來て棄て賣りにしてもすぐ買つていつた。

無論お爺さんも今の小商ひを何時までも噛り付いてやつてゐる氣は少しもなかつた。それに宮澤老人の伜の成功談を聞かされるたびにお時までが、何でもなく誰れにでも金は儲けられるものゝやうな氣がしてならなかつた。

「あんなまだ子供みたやうな息子でさへうまく行つてゐるんですもの、あんただつて少しくらゐ何とかならないことはありませんよ。思ひ切つてやつてみたらいゝでせう。」

お時はもう爺さんより自分の方ですつかりその氣になつてゐた。それといふのも、今の店を居抜きのまゝ賣つてその金で相場を張つてうまくゆけばいゝし、失敗して方法が立たなくなれば爺さんとの話が早く形が付いて自分は單身で鄕里の方へ歸れるといふ腹があるからであつた。

「あなたがやらなければ私でもやつて儲けて見せるわ。」
すると爺さんは眞面目な顔をして、
「なか〳〵男でさへ六ケしいのにお前などに出來るものではない。」
「出來るかできないか遣つてみなけりや分りやしない。こんなにどん〳〵値が上るんですもの、じつと辛抱さへしてゐりやあ、いつかは下ることがあるにちがひない。」
お時は看す〳〵儲かるものをわざと儲けないでゐるやうな氣がした。
しかし店を賣ることにお爺さんも異存はないにしても、さう慌てゝ賣ると、どうしても安賣りをしなければならぬので折角今までに賣込んだ店を棄てうりにするのは流石にお時にも惜しかつた。店はお時の愛嬌と世辭とで大半持つてゐた。彼等は、自分達がこゝを退いた後は今までのとほりにさう繁昌はするものでないと思つてゐたけれど、それでもやつぱり賣るにそんなことは口に出す必要はないので相應な値で賣りたいと思つてゐた。まだ今のやうな決心をせぬ前からよく入つて來て訊いてゆく者もあつた。けれども先の思つてゐるのと、此方の考とは半分から話がちがつてゐた。
爺さんはお時にやい〳〵云つて燻されるたびに、仕舞にはむつとして、
「さうお前がいふやうにこの店を賣つてしまつたら、うまく相場が當ればそれでいゝが、もし失敗したら、忽ち食ふ道が立たなくなるぢやないか。何ぼこんな處でもこの店があるから二人の者がかうして御飯が食べられてゐるといふことを知らぬか。」
お時もそれはよく分つてゐた。それで成るべく何處かで少々纏つた金の融通が付けば、それで一つのるかそるかをやつてみようといふことになつた。お爺さんが媒介をして女房の世話をした男で高歩で小金を貸し付けて歩るいてゐる人間が始終寄つていつた。店が繁昌してゐるのを眼の前に見てゐるので、五拾や百ぐらゐの小金ならばその男が融通してくれた。
爺さんはその男から借りた金で蠣殼町通ひをはじめたのであつた。富澤老人の話でその伜からも少の金は融通してもら

つた。
お爺さんは富澤老人の娘のお源さんにやる金ぐさりの羽織の紐を持つて、その翌日蠣殻町へ出てゆく足ついでに富澤老人の處へ立寄ると、この寒さに老人は少し風邪氣のやうだといつてまだ寢てゐたが爺さんが行くと、
「ご免下さい」といつて、咳をしながら炬燵を入れた寢床の上に腹這ひになつて煙草を吸つてゐた。
片倉爺さんはほく／＼顔で、
「昨日はちよつと好い具合でしてのう。」
と、爺さんが話に氣をとられてゐる時にいつでも出る土佐訛でいひながら、懐中から小さい桐の函を取出して、
「ほん粗末の品ですが、お源さんにこれを一つ進呈します。」といつて長火鉢の横に坐はつてゐるお源の膝の前に置いた。
お源は母親と口を揃へて、
「まあおぢさん何を頂いたんです？」
とお禮をいひながら、端なく直ぐには手を出さなかつた。富澤老人は一枚押した襖の彼方から、
「毎度頂いてばかりゐて……」といひかけたが煙草に噎せて咽喉からつゞけさまに咳が出るので手の甲で口を押へながらそのまゝ消え入るやうに呟いてゐた。
母親は長火鉢の傍を立つて老人の寢床の脇に來て、
「大變な咳だ、あんまり煙草を吸はない方が好いんですよ。」
といつて、肩から滑り落ちさうになつた夜着を頸までおつ被せるやうに直してゐた。
片倉の爺さんは、お源の顔を見て、
「何があるか一つ開けてみて下さい。」
温直しいお源はにこ／＼して、
「さあ何を頂いたのでせう。」といつて、箱の蓋を手に取つて開いて見て、

「おやまあ、大變な物ですねえ。」

「内の婆さんにもそれと同じのを買つてやりました。好いのぢやありません。あんた方は幾つも持つておいでゝせうけれど。」

「ほんとうに結構なのですわ。……お母さんおぢさんがこんな好い羽織の紐を下すつた。」

お源は、そこへ又出て來た母親にそれを渡して見せた。

片倉の爺さんは、それから富澤老人の枕頭にいつて坐はつて、暫く蠣殻町の景氣を話してゐた。

「昨日貳拾圓八拾錢と寄付いて、午前の中少し小戻りしましたが、後場で五拾錢下げて圓三拾錢の處で一切りしまひました。」片倉の爺さんは貳百圓ばかり儲かつたので暖々の懐をしながら、もう一と角の相場師氣取りで成功談をしてゐると富澤老人も好きな道の話に少し熱のある身體をも忘れて、

「さうでしたか。そりや宜しうごした。……まあ〳〵あんまり大きな事をせんと少しづゝ好え所を狙つておやりになるのが安全でよろしい。」

「此の先どんなものでせうな。あんたのお考へは？……ついでに此のまゝ下を向きますか。」

富澤老人は

「どうぞご免を。」といつて、今度は仰向きに寢返りながら、「さ、そこが。……何うやよう知れませんで。今の勢ひではもつと伸びませんかな。」

「伸るでせうか？」

「ま、暫時景氣を見ておいでになつた方がよろしうごせう。」

片倉の爺さんは相場に餘程興味が湧いて來たやうな調子で、

「私もこゝの處暫く蠣殻町の方をやつてみて、それから千兩も出來たら、今度はお宅の兄さんに手びきをしてもろて兜町の方へいてみるつもりです。」

すると富澤老人も仰向けに寝ながら、大きくうなづく格向をして、

「それがよろしい。こつちやは何、倅が好え處でさういふて聞かしてくれますよつて。」

二人の老人は暫くそんな話をしてゐたが、片倉のお爺さんは「どうぞお風邪を大事になさい。」といつて、元氣よく挨拶をして出ていつた。

四

長い間夢みてゐた好運にやつと見舞はれた片倉の爺さんはさうなると、もう、以前臺灣や朝鮮でとん〳〵拍子に當つた覺えがあるので今の勢ひで大摑みに遣らうといふ氣になつた。店は賣つてしまつても此の調子なら何とかして二人が食ふに困るやうな氣づかひもなささうに思へた。

そのうちにも店の買ひ手は二三あつたが、いつまで高いことを望んでゐてもさう此方で考へるとほりにもゆかぬので、到頭二百圓足らずで商賣道具一式附屬のまゝ店を讓る談は纏まつた。そして其處は二月一ぱいに立退くといふ契約にしたので爺さんは差當り富澤の家へも遠くない白銀町のある家の二階を借りることにした。

丁度そこへ富澤の爺さんは風邪で五六日寢てゐたがそれから段々餘病を發して醫藥の効を盡したにも係はらず病み付いてから十日ぶりに家族の者の歎きの中に六十九歳を一期としてぽつくり死んでしまつた。

片倉の爺さんもお時も大變に氣の毒に思つて丁度店の方も賣る契約をしてからは暇にしてゐたので夫婦とも二三日も手傳ひにいつたりしてゐた。富澤の方ではたよりにするやうな親類縁者も東京にはなく、殊に年寄りの相談對手もないところから、片倉の爺さんを死んだ父親の代りのやうに思つて息子をはじめお源でも母親でもおぢさん〳〵と賴りにするのであつた。世話好きの爺さんは葬儀萬端何くれとなく世話を燒いた。

そして一七日も經つてから爺さんは又折々蠣殼町へ足を向けはじめた。富澤の息子は――今までもさうであつたがこれから先は一層一家を背負つてゆかなければならぬ責任があるので母親よりも姉のお源よりも一入片倉の爺さんを懷しがつ

た。そして株や米などのことを何斯と話して聞かしたり爺さんに元氣を付けてくれたりした。

「おぢさん確りおやんなさい。相場だつて內側に入つてゐて見ればそんなに六ケしいものでもありませんよ。なに金の事など少しも心配入りませんよ。株の方も私が又好い時期を見て敎へますよ。」

そんなに氣安くいつてくれるのであつたがさういつてくれるからといつて、そんならもつと餘計に金を貸してくれとも、そればかりは遠慮して控へてゐた。

そのうち二月の末は直にやつて來たので二人は白銀町の方へ引移ることになつた。お時は長い間の望みが叶つて、もう今までのやうな人に食べさす物など拵へなくつてもよくなつたのだと思ふと、十年近い長い間の肩の重荷をやつとおろすことが出來て急に身體が輕くなつたやうな氣がしたが、それでもいよ〳〵そこを立退くとなると、長年居馴染んだ土地には何かしら名殘りが惜まれるやうで、毎日顏を合はしてゐた角の床屋だの、二軒置いた筋向うの荒物屋の三四軒そこ等の懇意にしてゐた家へ入口だけ顏出しをして別れに廻はつてゐると、さすがは女氣に彼女はひとりでに鼻が打ちかまれた。

そんなに長い間そこに居付いてゐたけれど、やつと食つてとほるのみで格別手に通す物など殆ど拵へなかつたので、朝鮮時代から持ち古してゐるものゝほかはこれぞといふほどの荷物もなかつた。お時の柳行李が二つ、爺さんのが二つ、それに大きな支那鞄と、夜具やその他一臺の荷車に積み切れた。そしてお時がほかは何にも入らぬこればかりはまさかの時の旅費の用意に殘して置いてもらひたいといふ大きな銅のお竈は何よりも大事に荷車に載せた。

越して來た處は白銀町の電車通りを一寸入つた阪の上の狹い陰氣な露地の中の二階長屋であつたが借家普請がもういゝ加減住み荒してあるので荷物を運び込んだまゝの處ではお時は、あんなに厭だ〳〵といひ暮してゐた先の疊二疊しか敷けない家の方がまだどんなに好かつたか知れないとさへ思つた。それでも階下の家の臺所を借りて湯を湧かしたりして爺さんと一緒に六疊の疊から床の間や押入れの中まで一とゝほり拭き掃除をしてそれ〳〵置く處へ物を置いてしまふと、いくらか氣分も落着いた。火鉢は一つ表通りの道具屋から爺さんが長火鉢を新しく買つて來た。そして差向ひに坐蒲團を置いてみるとお時はやつぱりあんな食べ物ごしらへなどせずにかうしてゐるのも惡くないと思つた。銅のお竈はほかに何にも

飾る物のない床の板の間に何より大事さうに据えて置いた。お時はそれが何より心丈夫であつた。

「いざといふ時に之を賣りさへすれば今日にでも東京を立つて國へ歸れます。」と、爺さんばかりでなく訪ねて來る懇意な者に笑つていつてゐた。お時も國にはもう長い間親戚へ預けてある簞笥や鏡臺などのやうな自分の調度類があつた。けれども、爺さんはまだお時にそんな物を賣つて歸國さしたり、夫婦別れをしなければならぬほど切迫してもゐなかつた。無論自分ではお時を手離す氣など少しもなかつた。店を賣つた金に、此間利喰ひの金だの他から融通した金などで相應纏まつた金を持つてゐた。

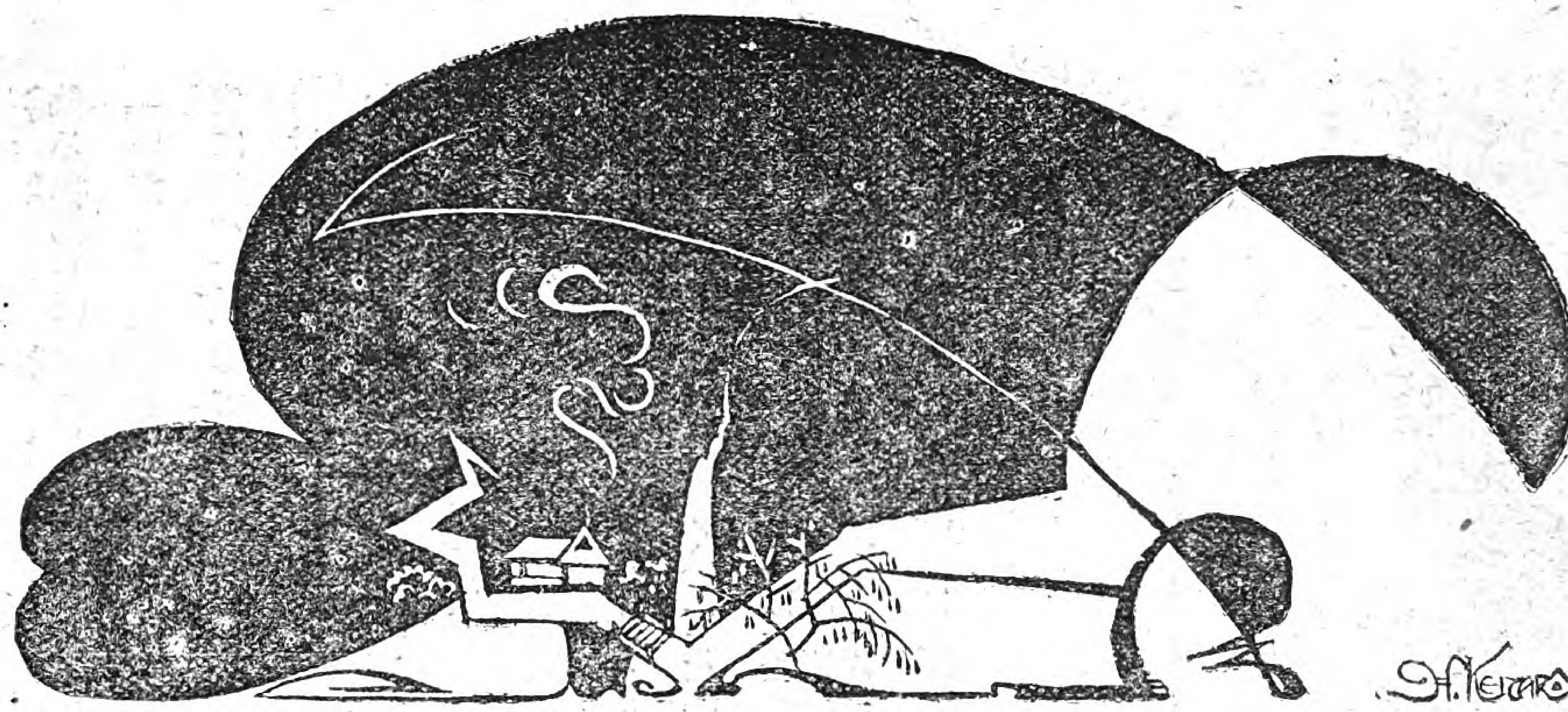
それからお爺さんはそれを資本にして今度はこゝぞと思ふところを大分賣つたのであつた。そして爺さんが賣ると相場は絲の切れた紙鳶のやうに上を向いて伸る一方であつた。お時は

「可けなければいけなくつてその方が早く片が付いていゝ。」と、人に向つていつてゐた。

賣つてから五日もたゝぬにお爺さんが生命の綱の五百圓の金は奇麗に飛んでしまつた。

お時はたうとう銅のお竈の役に立つ時が來たと早速道具屋を呼んで來てそれを賣り拂ひ、夜逃げ同樣に間借りをしてゐた家を引拂つて爺さん同伴で歸國した。さうなつてもやつぱりお爺さんを振り切つてしまふことも出來なかつた。

（おはり）



途上

與謝野晶子

唯だ一つ夏より秋へ人はこぶ車あゆめり吾妻平を

桑園の盡きて碓氷の裏山の見ゆるを一人悲みぬわれ

今われは十二が岳のふもと行く淋しかりけり上野の國

日向葵のあまたの中に唯だひとつ山影を見て歎く日向葵



かみつけの吾妻郡の山あひの驛に掬ぶ初秋の水

中の條この山あひのうまやなる秋の水こそ冷たかりけれ

車より上に吾妻の溪合の茅草靡き秋かぜぞ吹く

來し方を霧ぞ消し行く山をいできたたどるべき道の消え行く

切崖とつりがね草と初秋の日とあはれなる旅の心と

四萬川の吾妻の水に流れ入るあたりは見えず雜木繁れば



人間について

武者小路實篤

その五

自分は人間に自然が與へてくれたいろ〱のものを見たいと思ふ。今の社會では多くの人間が多くのものを與へられてゐるのを生かすのに不適當にしろ、人間に多くのものが與へられてゐると云ふ事實を知るのは人間にとつてよろこびと思ふ。どんな社會が來ても人間そのものが元來つまらなければ、之は大變なこと〻思ふ。人間に與へられてゐないものでは人間は救はれない。人間が與へられてゐるもの〻內で我等は救ひを見出さなければならない。

自分達は人間に與へられた味覺聽覺視覺が、たゞ人間が生きるだけには必要のない程豐富に美妙につくられてゐることを知つてゐる。之等を人間に與へたものは誰か知らない。しかし確かに與へられてゐることは事實だ。音樂は生活の爲には必要ではない。畫彫刻がなくとも、我等は生きられる。又自然がこんなに美しくつくられてゐることを我等は感じないでも生きてゆける、草花の美しさは我等の生存や、種屬保存の本能だけでは說明が出來ない。

我等は先づ生きなければならない、それは事實だ。腹がへつたり、歯が痛んだりしてゐる時、耶蘇が十字架にかけられたと云つても、別に何とも、思へないかも知れない。我々はパンのみでは生きられないと云つた處が、それでパンの價値を無視するわけにはゆかない。本當に腹がへつて餓鬼道におちたことがある人は、どの位パンの價値が貴いかと云ふこと

を知るだらう。そしてそれは人間を生かし、種屬をたやさないための本能にちがひない。この本能を誰か否定するか。勿論道の爲め主張の爲め、男の意地の爲に餓死した人もある。しかしだから自分が餓死するのに平氣なやうな勇氣をもたなければいけないとは云へない。

　しかし我等はともかく生きなければならないやうにつくられてゐる。しかしそれ以上何も與へられてゐなかつたらどうだ。人間が死なゝいものだつたら或はそれもいゝだらう。しかしその時、人間の極樂は監獄になるだらう、ともかく食へればいゝ、何を食つても腹さへはればいゝ、そして侮辱だとか、自由だとか云ふことは無意味になる。人は死なゝければいゝ。面白味だとか、よこびだとかは無意味になる。實際今のある人々、自分は手近に田舍の農民の女の子達を見る。彼等は働くために生れてゐるので、面白いことは贅澤すぎることのやうな、自分とは緣のないものゝやうに思つてゐるやうに見へる。勿論、彼等は幸福ではない。實につまらなさうに、生々せずに生きてゐる。當人に聞いても死にたがつてゐる。少くも生きるよろこびを感ぜずにゐる。しかし人間がもつと進歩するに從つてよろこびを求め、よろこんで生きたく思ふやうになるであらう。彼等はたゞ生きてゐる、死が恐ろしいから生きてゐる。或は其處まで考へずに生きてゐる。見てゐると感心したくなる。實によく働いてゐる。起きるから眠るまで、しかし當人はそれで滿足してゐるのではない。

　我等は勞働は神聖だと云ふ。しかし好んで勞働する人は少ないだらう。自分は勞働を讃美する多くの人は勞働を自らすることを欲しない人と思ふ。しかし苦しいから、他人に苦しい思ひをさせるのはいやだからなるべく自分も働かうと思ふ人か、愛するものゝ爲によろこんで働くものはまだいゝ、多くの人は食へないから働く。やむを得ず働く。働く內に樂が少しはないことはない、退屈するより働く方がましの時はある、しかしそれはごく僅かの時間の間だけだ。勿論、自分の好きな仕事を見出し、その方に働く人は特別だ。その人は幸福な人だが、多くの人は止むを得ず働く。勿論、一日怠けてゐるのも決して幸福ではない。何か仕事をしない一日は空虛なおちつきのわるい一日である、我等が幸福になるためには一定の仕事が必要だ。だがそれをこすと苦痛になる。

　ともかく我等が生きてゆくのには生存と種屬保存の慾望を滿たすだけでは滿足が出來ないのだ。廻り廻つて、實は人類

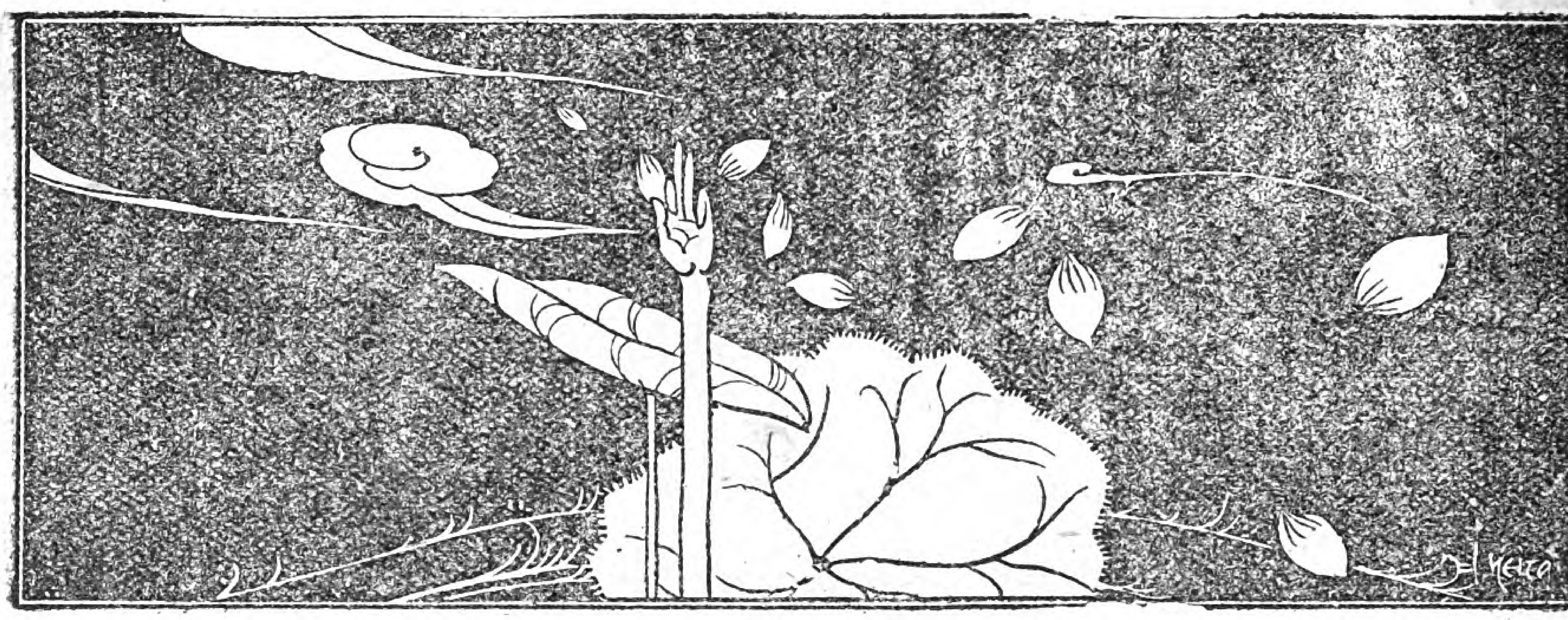
の爲に役に立つことに我等はよろこびを感じることになることが多いが、それは人類の遠大な望みを知ることによつてやつと解釋が出來るのだ。或はそれだけではまだ解釋の出來ないこともある。

文明や、人類の進んで來たのも、見やうによれば、各自が樂に生活したい、自分があまり苦しまずに働きたいと云ふ處から來てゐる。それと同時にいろ〳〵の人類によつて不名譽な歷史は、自己を不當に樂させ、その爲に必要な苦しみを同胞にさせるやう骨折つた點にある。文明の利器を發明するのは大變である。それより下男下女、或は奴隷をつくる方が簡單で、又よく間にあふ。しかし人類は永い歷史でやつと人間以外のものを利用することで人類全部が生々出來るだけの資格が出來て來た。之が今の人類が全部的に、社會的に目ざめやうとしてゐる第一の元因である。

話がわき道に入りすぎたが、我等は勞働することだけで救はれない。額に汗して働くと云ふことは神の愛のあらはれでなく、神の罰のあらはれと取つたのは無理のないことで、樂園は働かないでもいゝ處になつてゐる。しかし適當な勞働は理想的な制度の出來上つた社會においては反つて人生をよろこばしても、苦しめはしないですむと思ふ。勿論まだ今の人間の進み方では苦しい勞働もあるであらう。それは理想的な社會では、義勇軍か、それで足りなければ、徵兵制度に似た方法で萬人平等の義務勞働の內に算せられるであらう、自分は今勞働について云はうとは思はなかつたが、ついでに云ふと、理想的な社會は、革命が起ればすぐ出現出來るものではない。新しい設備が完全に出來て、始めて理想的な社會がくるので、古い設備を利用しつゝ新しい設備を片端から實現してゆくことが出來る時、その革命はものになるのである。尤もそれは物質の方の設備と同時に、心の方の用意もちやんと出來上らす必要がある。

ともかく我等は、生きるのによろこびと感謝を感じやうとするには、死にうちかつものをつかまへなければならないのだ。つまり個人の生存の慾望以外のものが我々に與へられてゐる、それを我々は生かすことによつて、死んでも生きる道を見出したく思ふのである。

その方の問題については、自分は自分の人生觀と云ふ本の中にかいたが、その問題について自分は人間に與へられた。いろ〳〵のよろこびからときたく思つてゐる。中々說きにくい問題だから又今度にする。（七、二九）



お常の極樂（新童話）

相馬泰三
早川桂太郎畫

一

どこをどう歩いて來たものか、ふと氣がついてみると、子守のお常は自分がいつか町はづれの淋しいとほりに、ひとりぽつちで、しよんぼり立つてゐたので吃驚しました。

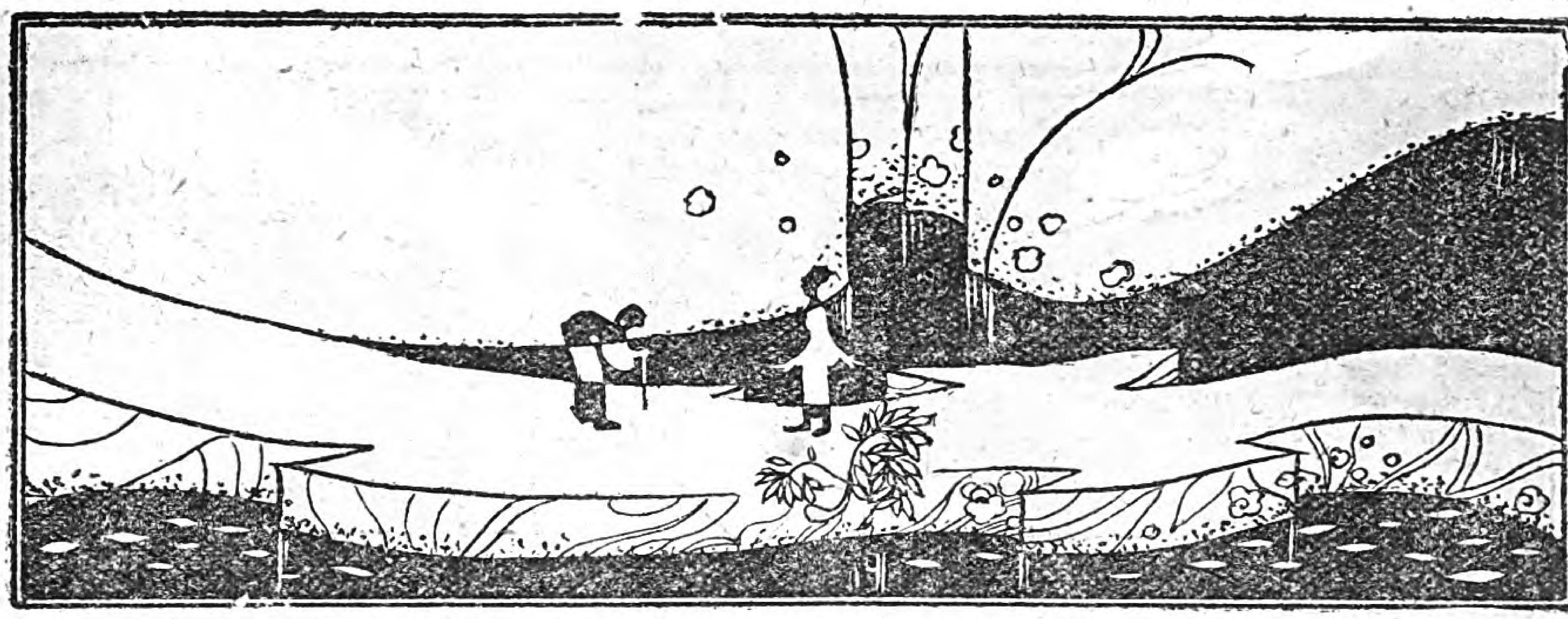
「へんだな？」

こう思つてあたりを見まはすと、それはまるで見おぼえのないところであります。どつちへ行つていいかわかりません。まごついて、うろうろしてゐると、ちやうどそこへ、一人の人のよさ相なお婆さんが通りかかりました。お常は早速そのそばへ走り寄り、すがりつくやうにして訪ねました。

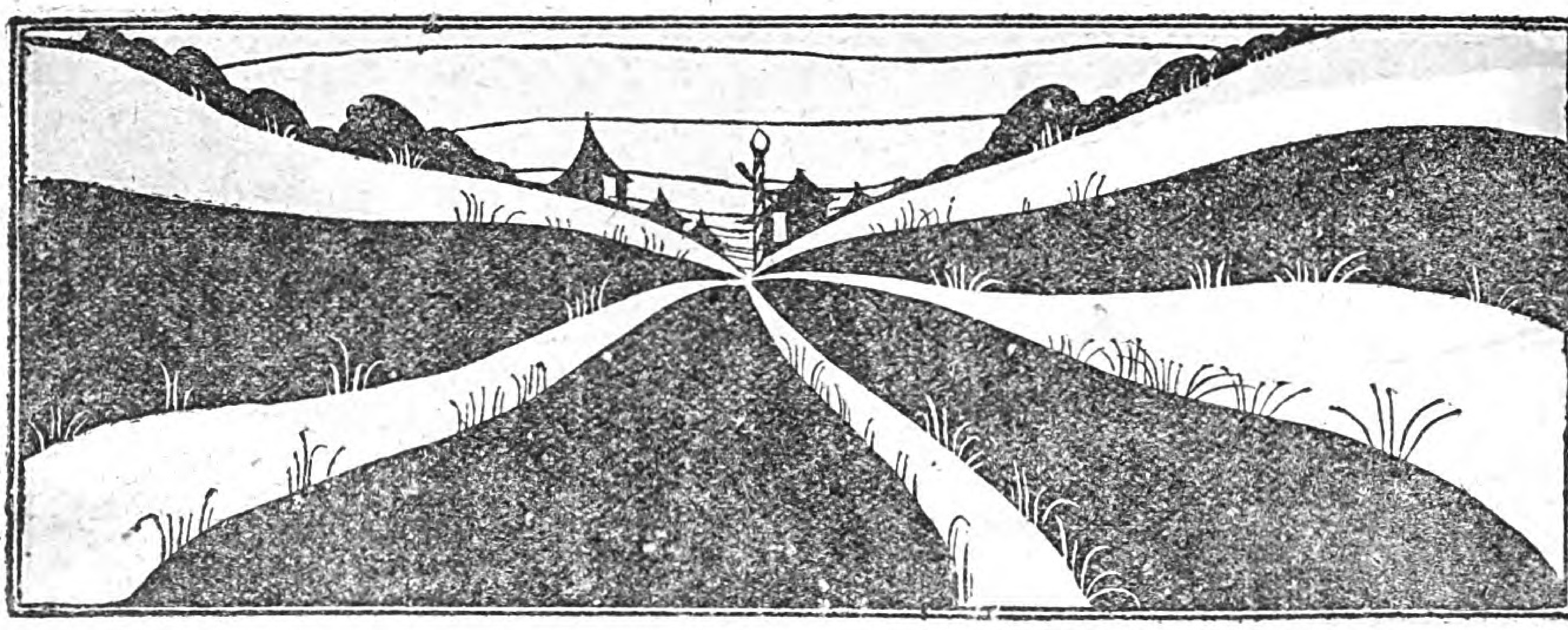
「ね、おばあさん。ここは一體どこなの？」

すると、あべこべにお婆さんの方でも吃驚したらしく、

「おや、お前さんご存じないのかい。」



こう云つて、凝つとお常の顔をのぞきこむやうにしました。が、やがて、につこりしてつけ加へました。
「ここは極樂ですよ。」
「え？　極樂ですつて？」
「さうですよ。」
しかし、お常にはどうしても本當に思へませんでした。なぜなら、極樂なんてものは假りにもこんなに淋しい、みすぼらしいところである筈がないと考へたからであります。と云つて、あんな人の好ささうなお婆さんが嘘なんか云ふわけがないとも思ひました。
お常は、自分の背中にいつも自分を困らせる泣き蟲の赤ん坊がくくりつけられてゐないのに氣がつくと、もう一度、
「おやおやおや！」と思ひました。
そして自分のからだが大變に樂で、のんびりしてゐることがわかると、
「うまいぞ！　こりや、ことによつたら、さつきのお婆さんの云つたとほり、ここは本當の極樂なのかもしれない。」と思ひました。
と、今度は、向ふから、これも人の好ささうなお爺さんがやつて來たので、お常は、もう一度同じやうに、
「ね、おぢいさん、ここは一體何といふところなの？」とたづねてみました。
するとこのお爺さんもまた前のお婆さんと同じやうに、あべこべに吃驚したらしく、



「おや、お前さんご存じないのかい。」

こう云つて、凝つとお常の顔をのぞきこむやうにしました。が、やがてまた、にっこりしてつけ加へました。

「ここは極樂ですよ。」

二

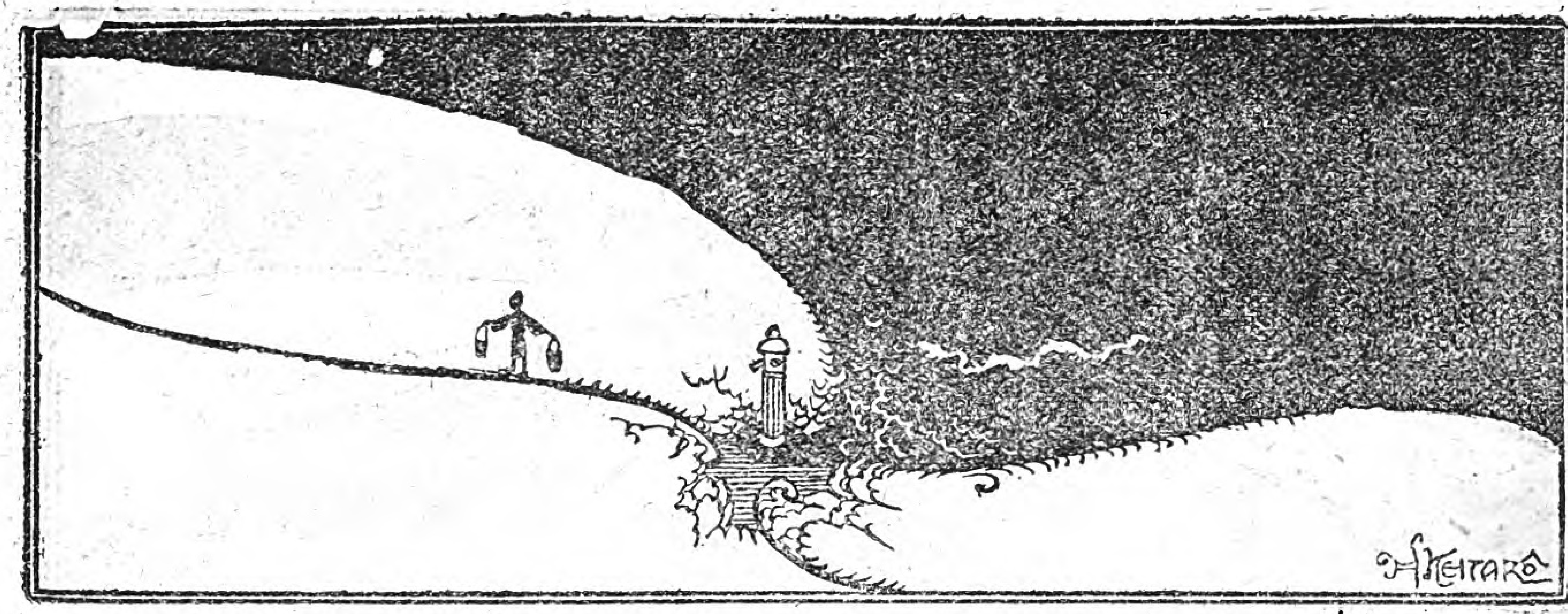
お常は、不思議に思ひながら、あてもないがぶらぶら歩いてゐると、ひよつこり四つ辻へ出ました。何氣なくひよいと向ふを見ると、そこからあまり遠くないところに、思ひがけなく自分の奉公してゐる床屋の店があつたので、ますます、何が何だか譯がわからなくなつてしまひました。そして、

「なあんのこつた！　うちの横町ぢやないか。あの店があるからには、とても、ここが極樂でなどある筈はない。それどころか、ひよつとしたら、あべこべに地獄かもしれない。」

こう思つて、お常はがつかりしたやうに深い溜息をもらしました。

お常は親もない、きやうだいもない、大變に氣の毒な子であります。おまけに、奉公してゐる家の人たちがみんな揃ひもそろつて思ひやりのない、わからずやさんばかりなのでなほのこと可哀相であります。

お常の奉公してゐる床屋では、主人のほかに病身で何も出來ないおかみさんと、生れてからやつと半年にしかならない泣き蟲の赤ん坊と、それから、生意氣盛りの二人の若い弟子がゐます。そして、それが皆して各自に勝手なことを云つてはお常

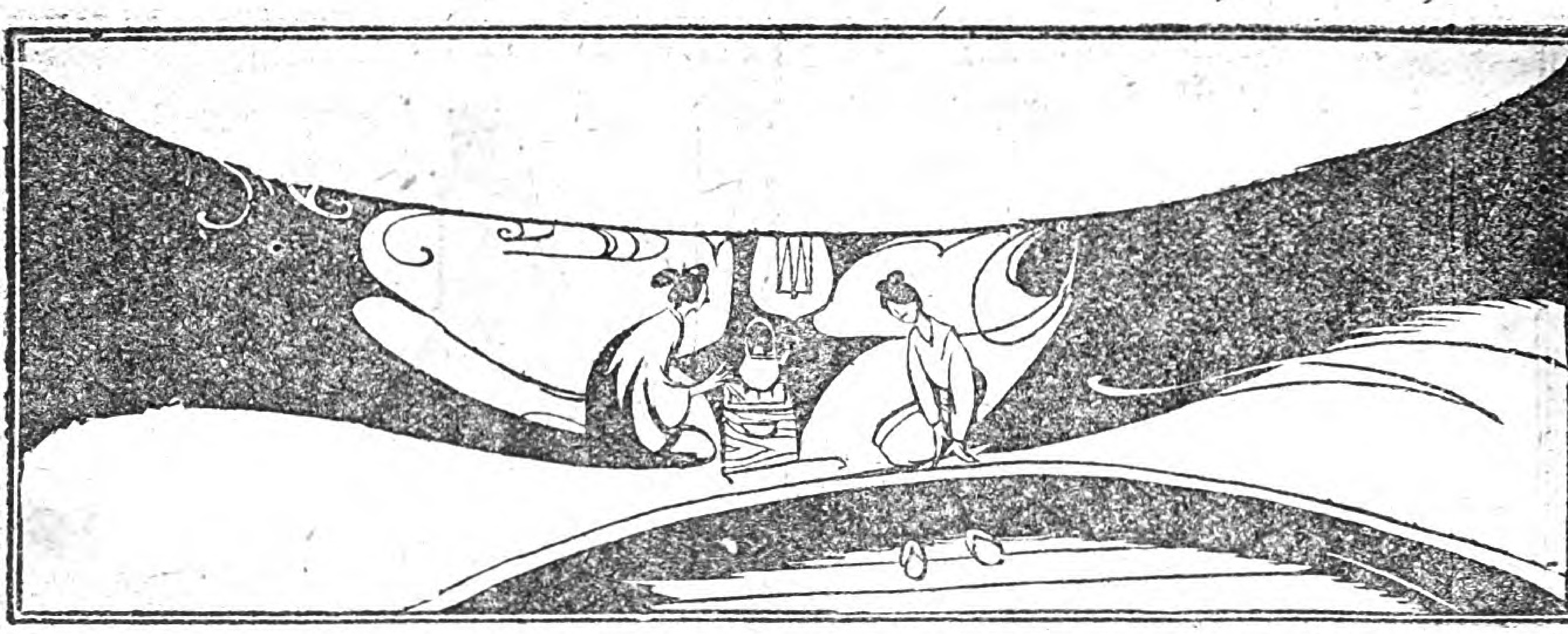


をこき使ふんです。おまけに、猫と犬を一疋づつ飼つてゐるが、その面倒を見てやるのも矢張りお常のほかにはないんだから、つまり、お常は一ぺんに七人のご主人を持つたやうなものであります。

　お常は十二歳になつたばかりの、まだほんの子供なのに、朝は家中の誰よりも早く――まだ夜が明けきらないうちに――起きなければなりません。そして、まづ第一番に、三十間もさきにある共同の水道栓から大きな水甕に水を一ぱいくみこみます。それから、お米をといで朝ごはんの仕度にとりかかります。それから、みんなを起こして置いて、今度は赤ん坊のよごれ物を洗つたり、方々掃除をしたりします。こんな具合で、お常の仕事はつぎからつぎからと涯がありません。そしてそんな間にも、みんなからがみがみ怒鳴られたり、どうかすると、いやといふほど打ちのめされたりするのであります。……誰だつて、こんなにされたら堪つたものでありません。それだから、お常は、これまでに何べんこの家をにげ出さうとしたかしれません。でも、そんな場合、どこといつて訪ねてゆくやうなところが一軒もないので、いつも泣きながらも矢つ張り凝つとそのまま我慢してゐなければなりませんでした。

　考へれば考へるほど、お常は自分の身の上がます〱悲しくなるばかりでありました。そして、家へ歸つてゆくのが厭で厭でたまりませんでした。と、急に、また、さつきのお婆さんとお爺さんの云つたことが思ひ出されました。

「まつたくさ、もし、死んで極樂へ行かれるものならなあ。一そのこと死んでしまつた方がどれほどましだか知れやしないら。」



三

　ところで、をかしなことがあればあつたものぢやありませんか！　今、こんなことを考へながらお常が勝手口から家の中へ入つてゆくと、いつも何といふことなしに取散らかつてゐる臺所が、今日に限つて珍しくきちんと片づいてゐました。それから、いつもあんなにもそこらぢゆうをぞろ〳〵歩きまはつてゐるあの氣味の惡い油蟲の姿が一つも見あたりません。

　お茶の間へゆくと、そこもいつもに似ずきちんと片づいてゐて、長火鉢のところに、病身のおかみさんが今日は氣分がいいかして、いつもにない色艶のいい顏をしてちんと坐つてゐました。

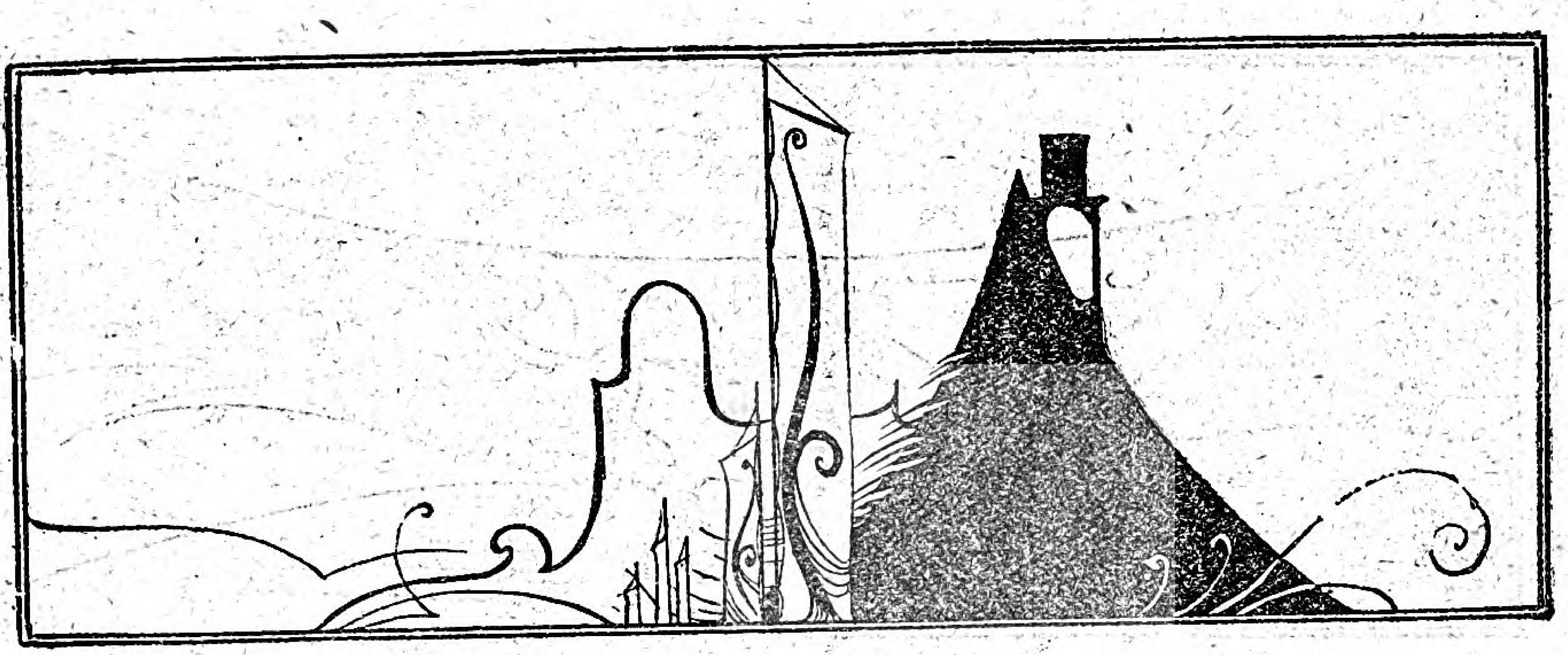
　そして、お常の姿を見ると、直ぐに用を云ひつけるかはりに、

「まあ、そこへお坐りよ。」と云つて、茶だんすの中からお菓子をとり出し、それをお常の前へおしやりました。

「さあ、おあがり！」

　お常は心の中で「あれにしやうか、これにしやうか。」といろ〳〵迷つたあげく、栗饅頭を一つ摘まんだが、こんなにおいしいものまだ食べてみたことがありませんでした。

　長火鉢の中も、誰が掃除をしたのか、中には卷煙草の吸殼一ツ散つてゐません。そして、それにかかつてゐる鐵瓶は景氣よくちんちん沸つてゐます。おかみさんは、いつもとちがつて通りのいい煙管で煙草を吸ひつけながら、



「わたしね、お前の歸つて來るのを先刻から待つてゐたんだよ。實は、お前に少し談してみたいと思つたことがあるんで。」と、やさしい調子で云ひはじめました。「談しつてほかでもないが、お前兩親もきやうだいも何もなくて淋しくはないのかい？　わたしはね、それがお氣の毒でしやうがないんだよ。それでね、もう先からさう思つてゐたんだが、お前さへよかつたら、わたしと旦那とでお前の父親になり母親になりしてあげてもいいつて。どうだい？　さうすれば、赤ちやんにも姉さんが出來て、どんなに仕合せだか知れやしないんだがね。え？　それとも、お前、おいやかい？」

　あまりに思ひがけないことを云はれるので、お常は思はず相手の顔をのぞきこむと、おかみさんは、自分の本當の母親ででもあるやうに、いかにも慈愛のこもつた、思ひやりのある眼でぢつと自分を見つめてゐるのでありました。お常はあまりの嬉しさに胸が一ぱいになり、何も云ふことが出來なくなりました。そして、眞赤な顔をして、膝の上にきちんと重ねた自分の手を凝つと見つめたまま默つてゐました。

「え？　おいやなのかい？」

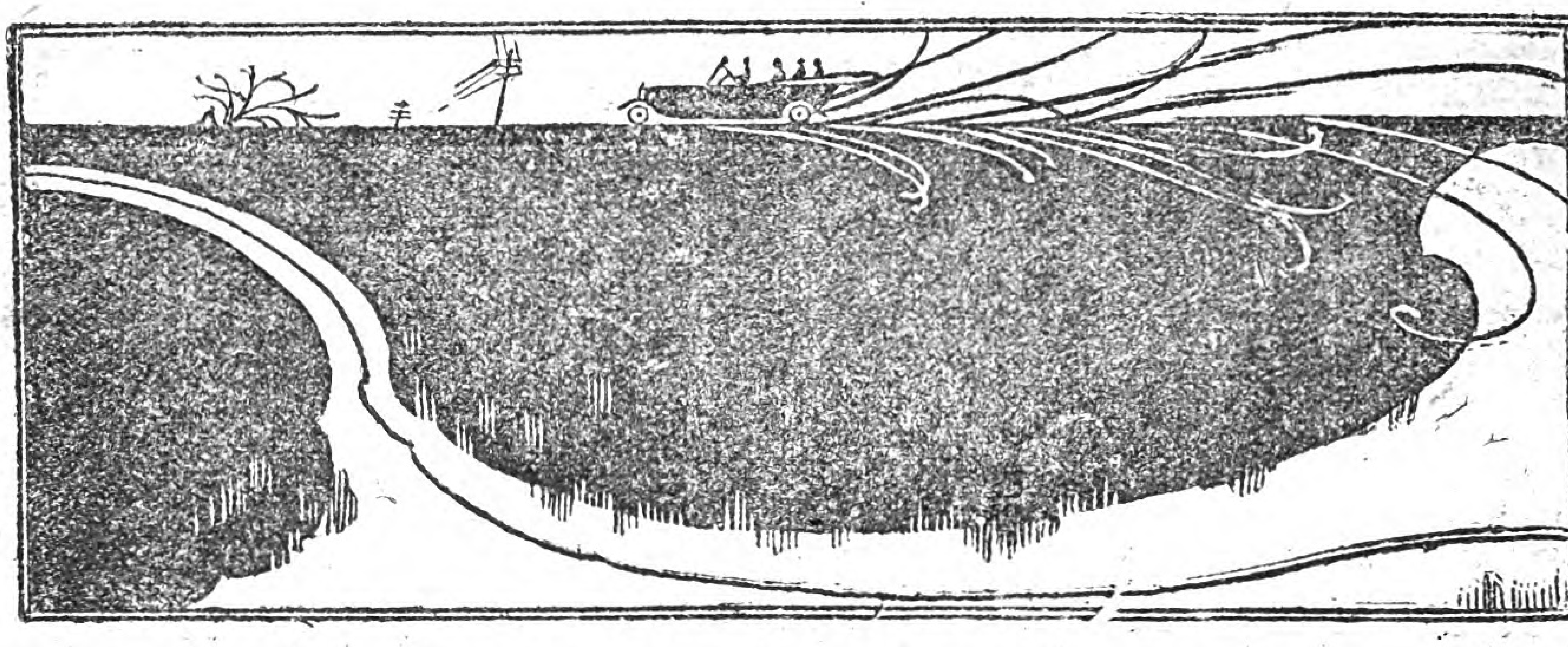
　おかみさんは重ねて訊ねました。

　お常の顔が横に振られました。

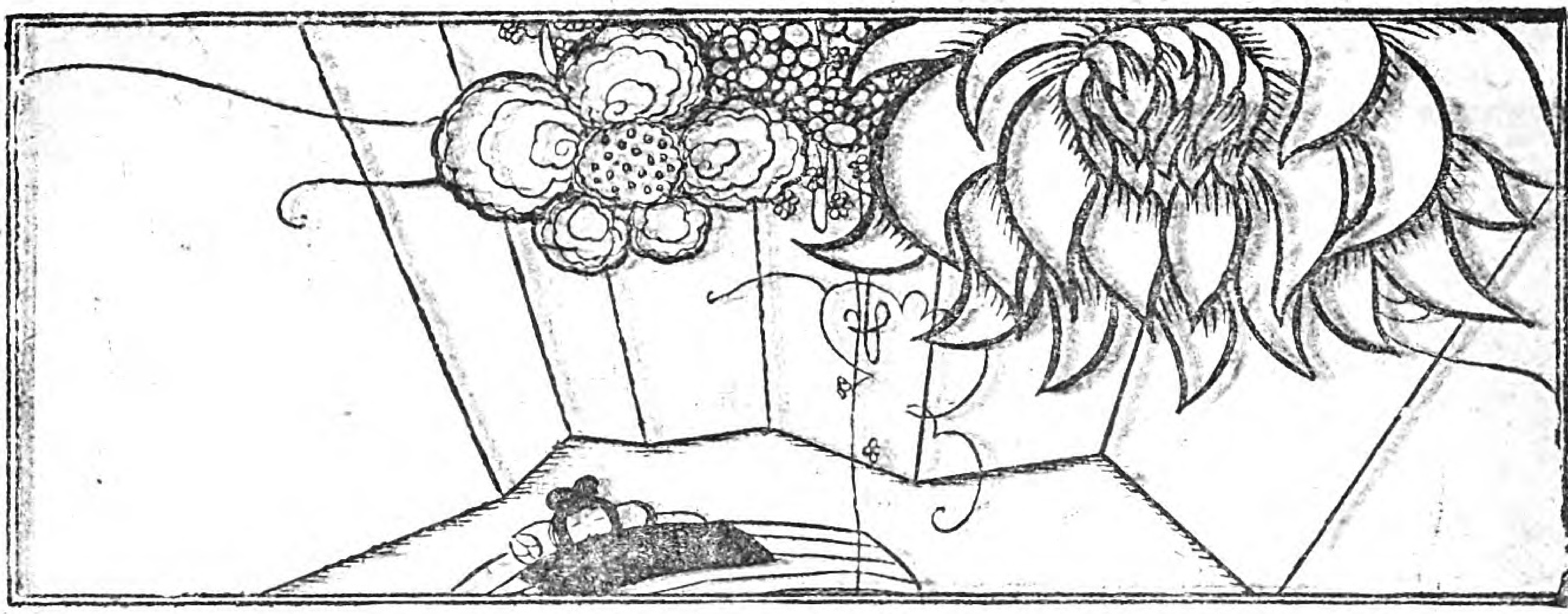
「ぢや、お前、わたしたちの子になつてもいいつて云ふんだね。」

　すると、今度はお常の頸が元氣よく縦に動き、その顔には包みきれない嬉し笑ひがにつこと現はれました。

四



そこへ、お店から主人が入つて來ました。これもいつもになく上機嫌で、そして、さも何か大變に喜ばしい事でもあるやうに浮き浮きした調子で、
「今日はこれでお休みにしてね、これから、みんなで一つお芝居へでも出かけるとしやうぢやないか。どうだね。」こんなことを云ひました。
それで、おかみさんとお常は急に忙しくなりました。お常はお湯屋で、生れて初めて、おかみさんから背中をながして貰ひました。それから、髪も結つてもらひました。おしろいもつけてもらひました。それから、家へ歸つてくると、今度は、いつ拵えたのか上下そろつた仕立ておろしのきれいな着物をきせられました。それから、下駄も、日傘も、肩かけも、オペラ・バッグも、何もかもみんな生れて初めてはいたり、持つたり、かけたり、さげたりする上等な立派なものばかりでありました。
みんなで家を出て、横町の角を曲ると、主人は帯の間から時計を出してみて、
「時間が少しおそくなつたやうだから、自働車で飛ばさう！」さう云つてタクシイを呼びました。
お常は、心もちよく走る自働車に搖られながら、
「今日は、また、何だつてこう生れて初めてのことが多いんだらう！」と思ひました。そして、すつかり忘れてゐた先刻のお婆さんお爺さんの言葉を、ふと思ひ出し、
「なるほど、これは確かに極樂に相違ない！」
と、ひとり心の中でうなづきました。
芝居小屋の中でも、何だか知らないが、嬉しい事や、氣持ちのいい事ばかりでありました。舞臺ではいつも善い人が榮え、悪いものが亡びるやうなことが續いてゐまし



た。それから、一じよに觀てゐる人たちが誰もかれも親切で、丁寧でお互ひに膳をゆづり合つたり、食べものを分け合つたりしました。それから、幕あひ幕あひには、主人とおかみさんとが、交るがはるにお常に玩具を買つてくれたり、おいしいものを食べさせてくれたりしました。

お常は、もう一度、心の底から、

「これは、たしかに極樂に相違ない！」と思ひました。

五

芝居がはねて家へかへつてみると、お常の寢床が主人とおかみさんの間にちやんと敷かれてありました。そして、いつもとはあべこべに、

「お疲れだらうからね。」と皆から云はれて、誰れよりも一番先きに寢かされました。と、おかみさんが夜具の上から隅々をぱた／＼叩いてくれました。そして、その枕もとへ、奇麗な繪をたくさん貼りつけた可愛らしい小屏風を立てまはしてくれました。

お常は、三度、

「たしかに、これは極樂に相違ない！」と思ひました。

そして、眺めて、主人とおかみさんに向ひ、本當にお父さんやお母さんに云ふやうに、甘つたれた調子で、

「お父さん、お母さん、おやすみなさい。」

こう云つて、靜かに眼をつぶりました。

さて、皆さん！

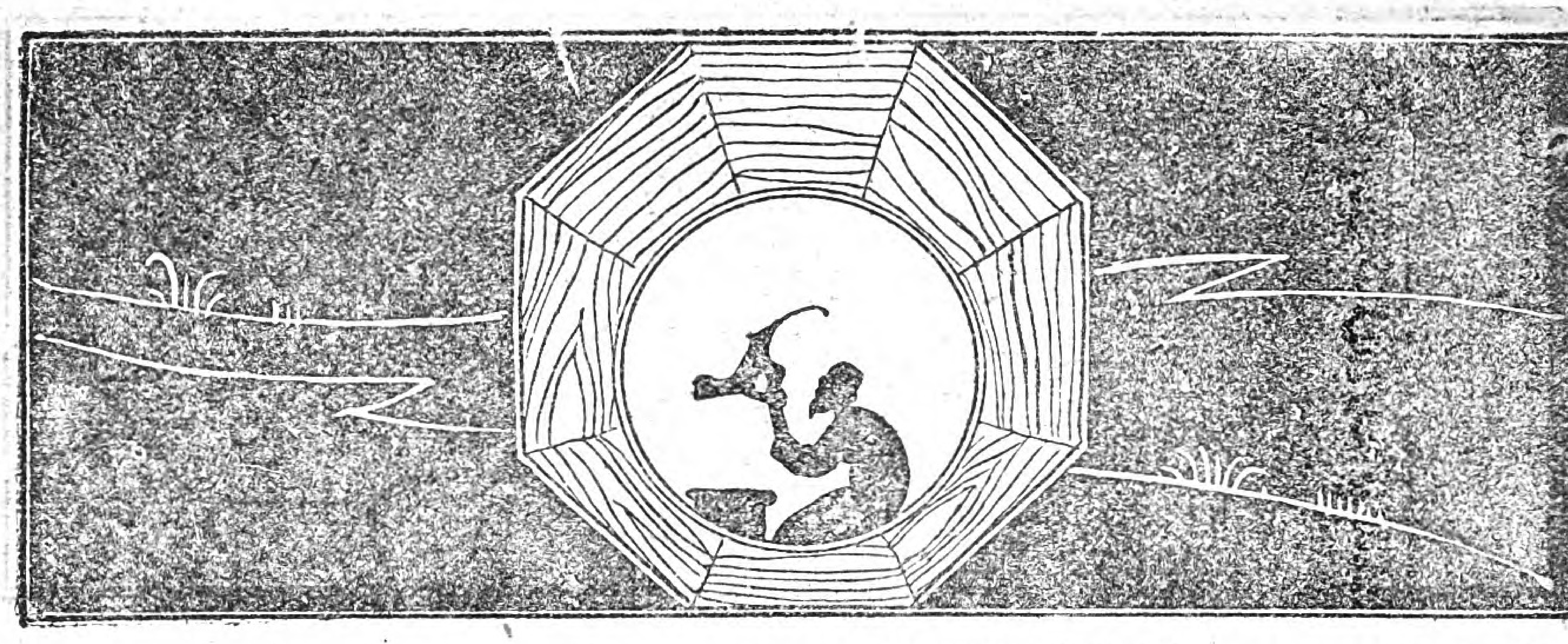


お常は死んでゐるのでせうか？
それとも夢を見てゐるのでせうか？
いや、それとも、死んだのでも夢を見てゐるのでもなく、正直正銘こんな仕合せな身の上になつたのでしやうか？　ああ、もし、さうだつたら、お常の身にとつてこんなうれしい事はないでせう！　さうぢやありませんか。ね、あなた方もさうはお思ひになりませんか？

見果てぬ夢

三郎さんの編み上げの靴は、どんな場合でも、ほかのもののやうに車に乗せられたり、オバア・シユウスで包まれたりすることがなかつたので、いつも埃つぽくなつてゐるか、さうでなければ、じく／＼濡れてゐました。それだものだから、どこへ行つても、仲間から「もつと離れてゐてくれ給へ。」とか、「汚いぢやないか。」とか、「おお臭い！」こんなことを云はれて爪彈きをされました。初めのうちはその度に口惜しがつて悲しがつて、いつもべそをかいたものです。しかし、この頃では、もう馴れつこになつてしまつて、ただ默つて除者にされるままになつてゐます。それは、いろ／＼嘆いたり、考へこんだりした揚句、やつぱりさうするよりほかないと悟つたからなのでせう。

その編み上げの靴は、きまつて、二ケ月に一度ぐらゐづつの割に、きつと横町の靴



屋へ持つて行かれます。それは、どこかが破損んで、繕つて貰はなければならなくなるからです。その時だけはゆつくり休息が出來ます。それに靴屋の爺さんといふのが大變親切ないい人なので、そのそばで二晩も三晩も泊つてゐられるのが、何よりの樂しみでありました。

靴屋の爺さんはいい腕を持つた立派な職人なんだけれども、運が惡くて、とう〳〵出世をすることが出來ないでしまつたのです。配偶者に早く死に分れ、今は去年から小學校へ通ひはじめたばかりの孫息子とたつた二人きりで暮してゐるのであります。晝間は新しい靴をつくり、夜なべに、方々から賴まれる繕ひものをしました。すると、孫息子の春坊はいつも爺さんのそばへやつて來て、學校のおさらひをしたり、お伽噺のほんに讀み耽つたりするのであります。爺さんは何のためだか時々仕事をやめて兩手をカサ〳〵擦り合はせたり、老眼鏡をはづして手拭で顏を拭いたりしました。そして、また默つて仕事に取りかかります。夜が更けるにつれて、あたりが段々と靜かになり、柱にかかつた八角時計ばかりがカツタ・コツトと際立つて響渡ります。

春坊はくぎりのところまで讀むと、顏をあげて爺さんにむかひ、

「ごらん、お祖父さん、僕はもうこんなに讀んだよ。」

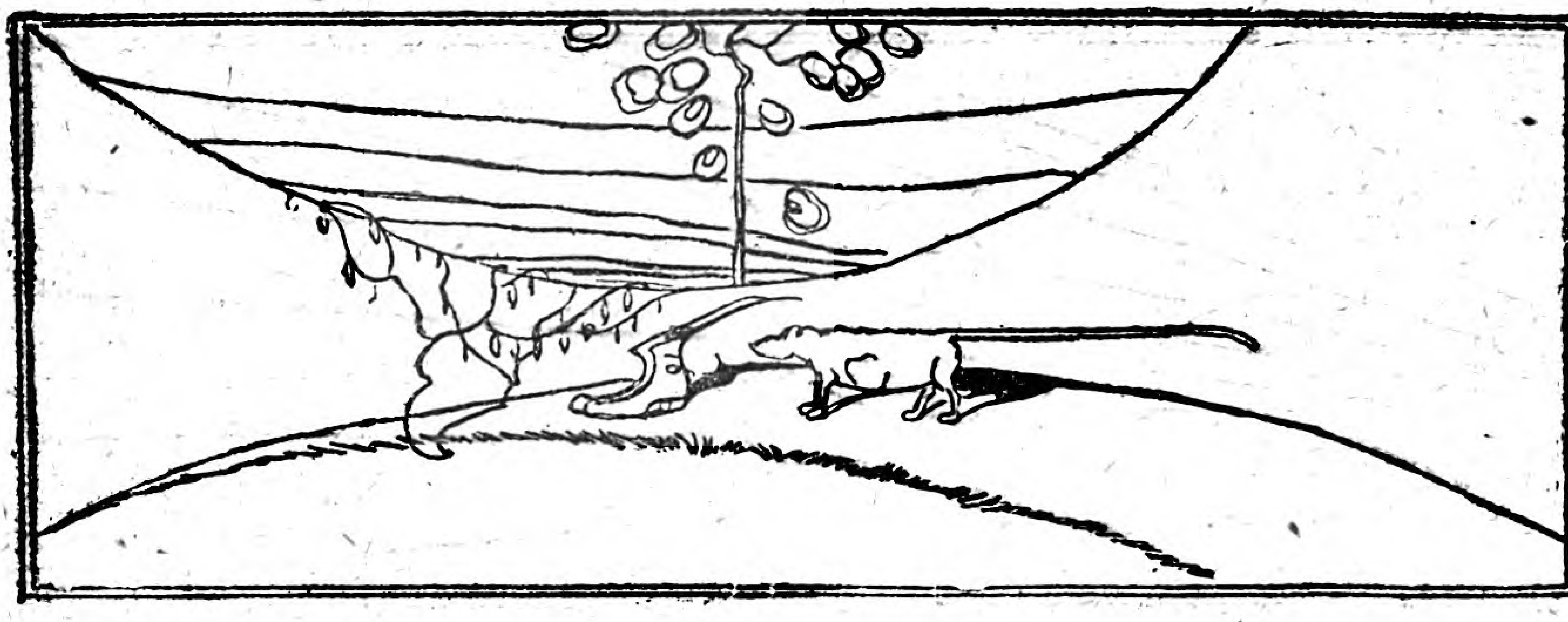
こう言つて、讀んだだけのページを指の間に挾んで見せます。

すると、爺さんはいつも一寸そつちを見て、それから讃めるやうに。

「おお、そんなにも讀んだか。お讀みとも、お讀みとも、坊や。」

こう云つて、また、精々と仕事を續けるのであります。

こんなあんばいにして、三郎さんの編み上げの靴は、いつも擦り切れた底が取換ら



れたり、破れたところが繼ぎ合はされたりするのでありました。そして、出來上るといつも靴墨をつけて磨きあげ、

「どうだ、また、まるで新しいものになつてしまつたぢやないか！」

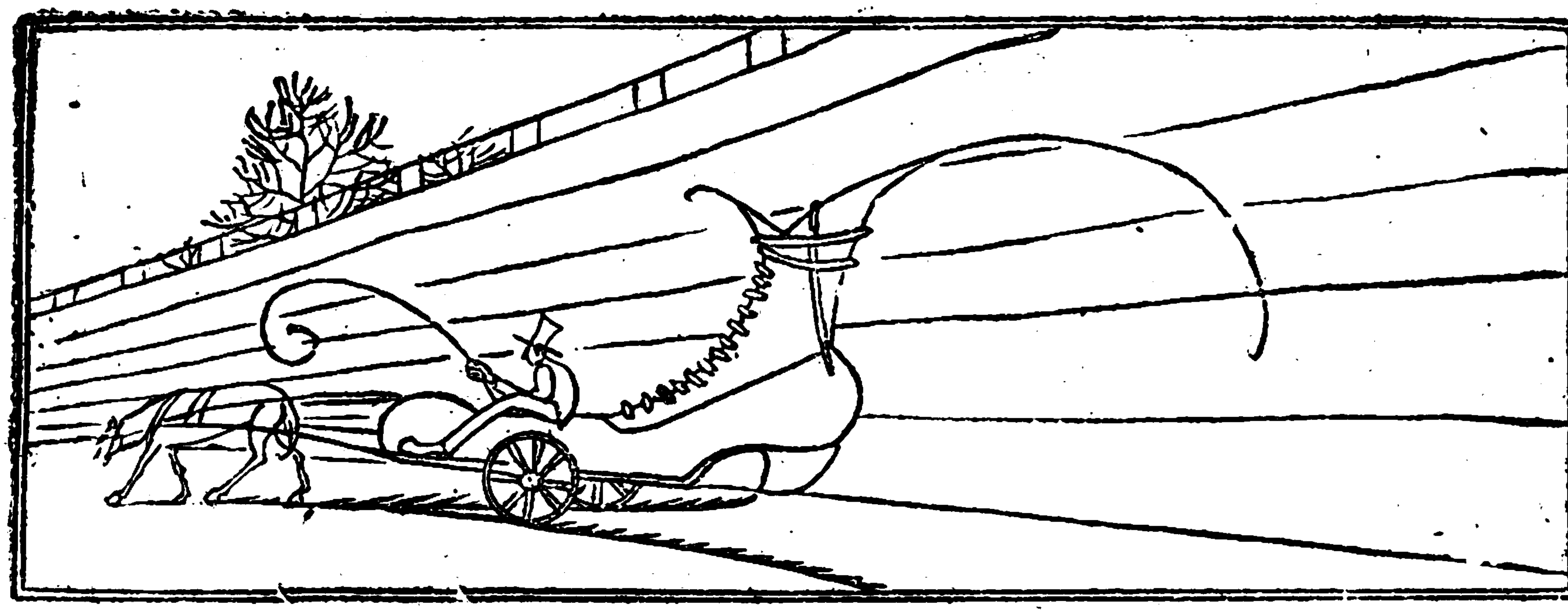
こう元氣づけてくれるのでありました。

三郎さんの編み上げの靴は、今日もよその家の玄關で、ぽつねんと主人の歸りを待つ間の所在なさに、

「今ごろは、あの靴屋では、お爺さんと春坊とどうしてゐることやら？　あすこの家ぢや、たしか、どこか雨漏りのするところがあつた筈だが、……」こんなことを思ひ出してゐました。――ちやうど、その時、そとで雨がざあ〱降つてゐたからだつたでせう。と、續いて、いつもの癖になつてゐるあてもない空想をはじめるのでありました。

「ああ、ままになるものならなあ！　あのお爺さんをもつとお金持ちにして、もつと仕合せにしてあげたいものだ。第一に、あの雨漏りをなほさなくつちや。それから、あの仕事場はあれぢや暗くてしやうがないから、もつと明るくしなくつちや、な。それから、看板を塗かへること、店先をもつと小ざつぱりとすること、――何と云つても商ばいは店が身上だからな。それから、もう、夜なべなんか止めるやうにしなくつちや。それから、お爺さんの目藥ともつと上等な眼鏡を買はなくつちや！　……さうさう、春坊のことをすつかり忘れてゐたが、無論、あれにも、いろんなものを買つてやらなくつちやならない。さあ、何から先にしたものかなあ？……」

しかし、靴の空想はとう〱その先が續かないでしまひました。なぜなら、いつか、



そのまま、うつら〳〵と假寢を初めてゐたのですから。

……三郎さんの編み上げの靴が自分の家の勝手口に近い垣根のところで日向ぼつこしてゐると、(夢を見てゐるんです。)そこへ、飼猫のアカがやつて來て、だしぬけに、

「編み上げさん、お目出たうございます。」と云ひました。

何のことやら合點がゆかないので、返事もしないで默つてゐると、今度は、餌をあさりに來た雀が、また、

「ご出世をお祝ひします。」と云ひました。

そして、その次に、隣りの飼犬のクロがやつて來て、威勢よく、

「編み上げ閣下、萬歳！」と叫び出しました。

靴はいよ〳〵面くらつて、眼をぱちくりさせながら、

「ね、君、僕が一體、どうなつたつて譯なんだね？」と訊ねました。

しかし、クロはそれには答へず、もう一度、

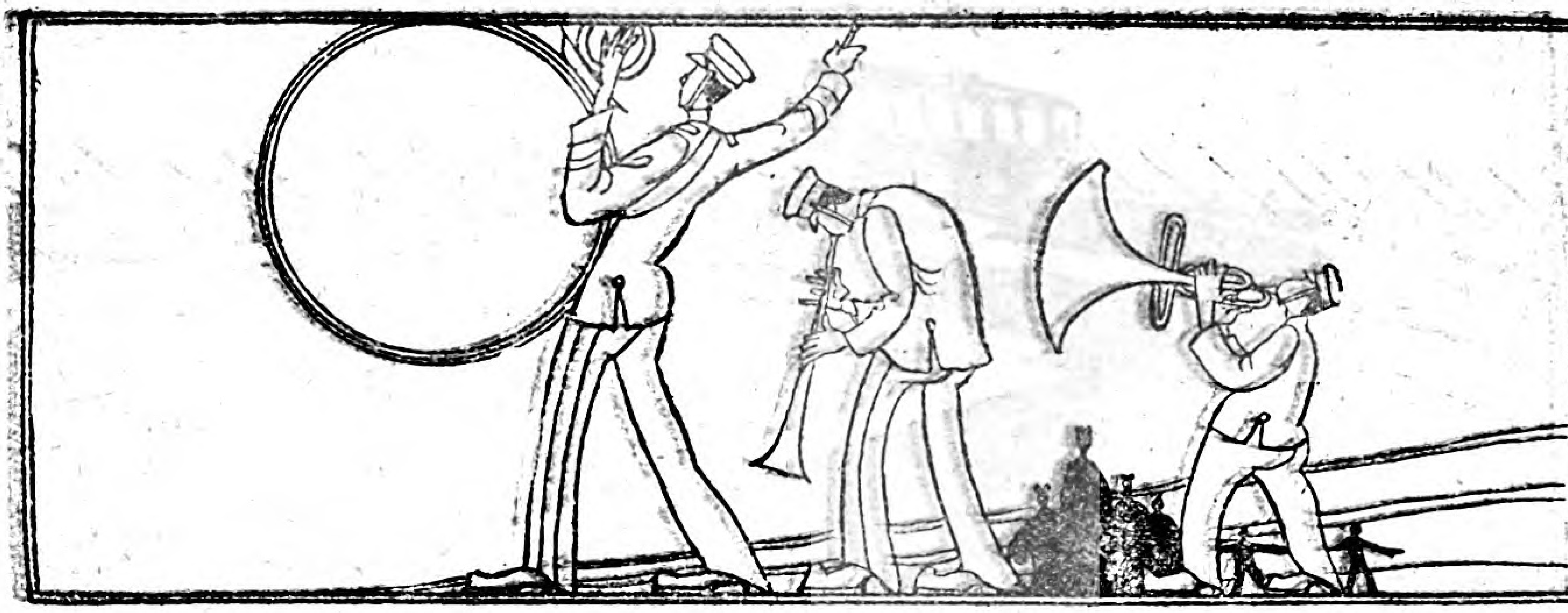
「萬歳！　萬歳！　萬歳！」と繰返し、それから、何か珍らしいものでも通りかかつたか、ワン〳〵吠えながら、そそくさと往來の方へ驅け出して行きました。すると、ちやうどそれと入れかはりに、女中のお仲さんがやつて來て、

「編み上げの公爵樣、お迎へが參りましてございます。さあ〳〵、早くお出かけにならなければなりませんよ。」

こんなことを云つて、どん〳〵玄關の方へ運んで行きました。

見ると、そこには立派に飾り立てた馬車が一臺横づけにされてありました。

馬車は、横町の靴屋の爺さんの店の前でとまりました。



「おや、おや、おや！」

靴は何よりも先に、あたりの様子が見ちがへるやうに立派になつてゐるのに吃驚してしまひました。店の内も外も紅白の幔幕に飾られ、そこでは、ちやうど改築祝ひの宴會が初められやうとしてゐるところでありました。

靴はぴか〳〵光る着物を着けた御者の手から、仕立ておろしの紋附袴をつけた春坊の手へ、それから、フロツク・コートなどを着こんですつかり見ちがへるほど立派な老紳士になりすましてゐる爺さんの手へと、順々に渡されてゆきました。

爺さんはいかにも滿足さうににこ〳〵しながら、大勢のお客様の前へそれを差出し、

「どうです、素敵ぢやありませんか。ぴかぴか光つて、まるで、まぶしいやうだ。」かう云ひました。

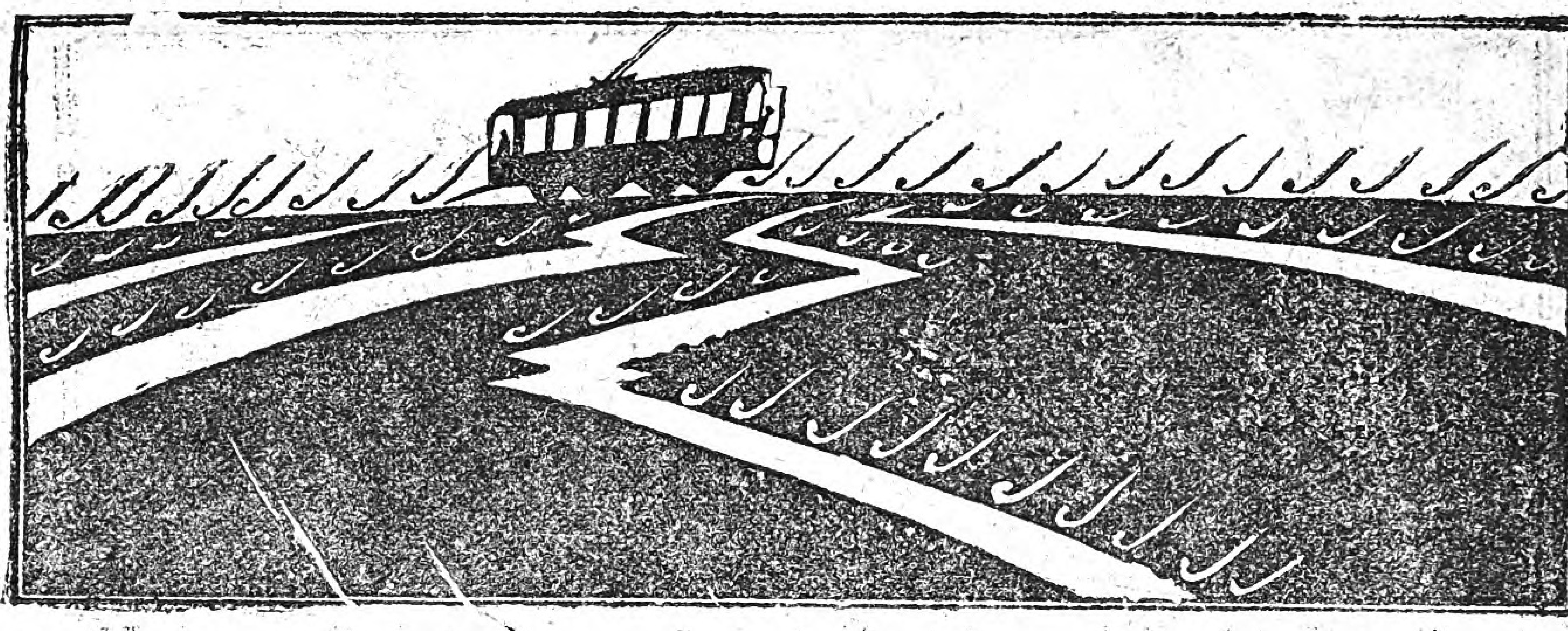
氣がついて、靴がわれと我が姿をふりかへつてみると、身はいつか黄金の靴と變つてゐるではありませんか！

靴は、やがて、一番よく人の目につくやうにと、店の入口の上へ飾りつけられました。

「ははあ、看板にさせられたのか。なるほど、これは素晴しい出世だわい。」

靴は、さつき猫や雀や犬やが自分にお祝ひを云つてくれた意味が、今やつとはつきりと解りました。すると、今度は、すつかり得意になつて、

「かうなつてしまへば、もう、誰からも『もつと離れてゐてくれ給へ。』なんて爪彈きをされないでもすむといふものだ！　それから、我輩にむかつて、『汚いぢやないか。』



だの『おお臭い！』だのつて失敬なことを云つたのはどんな奴等だつたのだ？　みんなやつて來て、我輩のこの姿を拜むがいい！」

こんなことを云つて、「えへん、えへん。」と咳拂ひをしてみたりしました。

どこかで、急に賑かな樂隊がなり出しました。と、それと一しよに、大勢の聲で、景氣よく、

「萬歳！　萬歳！　萬歳！」と叫び出されました。

その騷ぎがあまりに大きかつたので、家ぢゆうがぐら〳〵と搖すぶれ、そのはずみに、入口の上に飾りつけられたばかりの黄金の靴はもう少しで落つこちさうになりました。そして、はつと驚いたその拍子に夢はさめました。……

三郎さんの編み上げの靴は、いつか先刻の玄關を出て、自分の家へかへる途中、主人と一しよに電車に乘つてゐたのでありました。

電車はいつもの通りお客樣を一ぱい乘せて、苦しさうに唸りながら、今にもこはれてしまひ相な搖れかたをして一心不亂に走つてゐました。

もう日がとつぷり暮れて、そとには雨が先刻よりも一層はげしく降りつのつてゐました。



女怪（長篇小説）

宇野浩二

第七篇

その三　病母の周圍

銀子はその翌朝の九時發の特急に都合よく乘ることが出來た。彼女は前の晩、川田に慰められながら、然し一晩中殆ど泣き明かしたと言つてもいゝ程で、明け方に二時間程とろ〳〵と眠つたゞけだつた。厭な、重苦しい夢ばかり見つゞけて、目を醒ました時は、川田は置手紙をして、そこにゐなかつた、親思ひの彼は、昨夜無斷で泊つたことを一寸斷りに行つて、直に歸つて來る、目が醒めたら、女中に頼んで、先に切符を買はしておく方がいゝ、無論、時間までには自分も歸るが、と書いてあつた。彼女はそれを見ると、更に悲しさと、何とも言へぬ一種の憤りとを感じた。彼女も親を思ふ心は決して川田に劣らぬつもりである、唯彼のやう

に露骨にそれが表現出來ないだけなのである。そしてそれが彼のやうに、人の思惑も何も無視して、例へば、人前でも始終『母さんが母さんが、』と言ふやうな心持が、不斷からもさう思つてゐたのだが、此際殊に憎らしく感じられた。それと共に、やつぱりこの年までの、自分自身の不孝だつた行ひが、いろ〳〵と反省されて、今、到頭母に何一つの喜びも與へないで、墓に旅立たれてしまつたことが、どんなに身悶へしても追付かないといふ悲しみに搖すられねばならなかつた。

實際、彼女は愈よ汽車に乘り込んで、西に向つて走り出してからも、母はもう死んでしまつたのだ、と思ひ込んでゐた。今、母に死んでしまはれたら、自分の行先はどうなるだらう？と彼女は思つた。だが、よく考へて見ると、彼女に死なれても、直接彼女の生活には、何の差支へも生じないことに違ひなかつた、もつとはつきり言ふと、これから先彼女の身も心もずつと輕くされ、解放される譯であつた。若しこれが母ではなくて、江阪が死んだのだつたら、と彼女は考へて見ると、今更ながらに江阪といふ人間の存在が、彼女になくてならぬものであることが思はれたが、それと共に、聖書にも書いてある、所謂人はパンのみにて生くるものにあらずで、彼女はこれ迄生きて來た道に於いて、パンの江阪と共に、パンでもなく、寧ろ重荷でさへあつた母といふものが、どんなに見えない力で働いてゐたかゞ、つく〴〵と思はれた。彼女はあんなに一生懸命に稽古し、千秋の思ひで樂みにしてゐたところの、野外劇にたつた一日の違ひで出られなかつたことが、或ひはこれから何日の間川田と別れて暮さねばならぬかといふことが、つまりその爲に最近の彼女が生き甲斐があるやうに思つてゐたことが、それは時々身内がむづ〳〵する程殘念に思はれないでもなかつたが、然し、今は何と言つても母の死に就いての悲みで一ぱいになつてゐた。

彼女が芦屋の家に着いたのは、夜の十時前であつた、夏のことであつたから、未だ人通りの絶えない半別莊町を、電車の停留場から俥を走らせた彼女は、大阪に着いて、そこから市外電車に乘る時分まで殆んど念頭になかつたのであるが、ふと、今家に死んだ母と、姉のお崎と、その外にどんな人がゐるだらうと、それからの途々、いろ〳〵と想像した。彼女は東京の尾張町で見かけた姉のお瀧と江阪のこと、或ひは江阪が突然話に出した二番目の姉のお島のことなどを漫然と思ひ浮かべた。だが、そのお瀧にしても、お島にしても、何處にどうしてゐるか、恐らく母の死も知らないで、うか〳〵日

を送つてゐるに違ひないから、とても彼女等が母の枕邊に附いてゐようとは思へなかつた。して見ると、せい〴〵看護婦が一人位と、お崎とに、見護られながら、母は永遠の國に旅立つたのに違ひない、銀子はその生からその死に至る迄、(「お母さんはもう幾歳だつたつけ?」と銀子は考へて、「確か六十五だつた、」)六十五年の間、眞に孤獨そのものと終始した母の一生を考へると、俥の上で、自ら兩側の家々の灯がちら〳〵と濡れて來るのを感じた。

さて、銀子の家のある邊は、別莊の並んでゐる邊と違つて、割合に屋並の建て込んだ、それは大阪神戸あたりに通つてゐる小勤人の家々だつたので、夏の宵の賑かさの中にも、何處かひつそりしてゐて、小暗かつたが、それ等の家々の中で彼女の家だけが目に立つて、家の中の燈火が、戸が明け放つてある爲か、明るくて、往來までを照らしてゐる代りに、外の家々が見たところ寂しさうな割合に、注意すると、家の中には何處となく笑ひ聲などが聞えるやうに思へる反對に、變に靜まり返つてゐた。が、何よりも彼女の目についたのは、その前に、醫者のらしい、俥が止まつてゐることであつた、その時、彼女は初めて、さうだ、電報には危篤とあつたので、その通り、母は未だ生きてゐるのだらうと思つた、すると忽ち胸の皷動が高くなつて來て、涙が目の中ににじみ出して來た。

初め、銀子が歸つて來たのを、家内の者は誰も知らなかつた位であつた。彼女が俥を歸して、荷物を玄關の間に置いたまゝで、そこと、次の間と、奧の間との三間になつてゐる、一番奧の八疊の母の病室に、つか〳〵と進んで行つた時、初めて氣が附いたのは、瀕死の病人の母のお亮だつたかも知れなかつた。彼女は醫者に脈を取られながら、その時まで、最早や唯呼吸してゐるだけのやうな狀態でゐたのに、突然目を開いて、頭を持ち上げたいやうな表情をした。それで、

「あら、銀ちやん！歸つて來たの?」

斯う振り向いて、彼女を認めて聲をかけたのは、病人の寢床の下手の方に坐つてゐたお島であつた。が、銀子はそこにお島が坐つてゐることに不審を抱いてゐる暇を持たなかつた。彼女はお島に一寸會釋して、彼女と醫者との中間に坐つて

「母さん、唯今……」と半分口の中で言つた。今迄堪へてゐた涙が一時に出て來た。

と、病人は、文字通り瀕死の狀態にあつたにも拘らず、聲は聞き取れないほどの、枯れた、力のないそれではあつたが

「あゝ、歸つて來たか。私の生きてゐるうちに、よく歸つて來てくれたね、」と言つた。

銀子の方から見て、醫者の向う側の、病人の枕元の近くに、まん丸い顔の色の白い看護婦が坐つてゐた。彼女は醫者に挨拶をして、看護婦に會釋をして、母の枕元に進んで行つた。すると、病人が微かに頭を動かして、

「お前、あんまり傍へ來ないようにおし、傳染るといけないから、」と言つた。

「そんなに氣をおつかひにならない方がよござんすよ、」と醫者が言ひながら、病人の胸を形ばかりに調べてゐた。

その時、銀子は壁一重隣あたりになつてゐる、裏庭の方で、ばさ〳〵と行水を使つてゐるらしい音を聞いたので、

「崎ちやん?……あの行水してるの?」とお島の方を振返つて聞いた。

「あゝ、」とお島は點頭いた。

醫者を玄關に送り出して、元の病室に歸つて來ようとした時、丁度行水を終つて、半分裸のまゝで、庭傳ひに中の間に上つて來たお崎が、

「銀ちやん、いつ歸つて來たの?」と病人のある家でないやうな、相變らずがら〳〵した調子の聲で言つた。「電報、昨夜何時頃に着いて?」

「昨夜の十一時過ぎ、」と銀子は答へて、奥の間に這入つて行つた。彼女は、そこで、醫者に出した茶とか、手洗水とかの片附けをお島に任して、今まで醫者の坐つてゐたところに坐つた。

「お前、今日は汽車で疲れてるだらうから、早くお寢み、」と病人が途切れ途切れの聲で言つた。「まだ今夜あたりは大丈夫だらうから。昨日はもういけないかと思つたんだけど……しかし。私ももうせい〴〵二三日だよ。」

銀子は默つて、頭をうなづかした。

「銀ちやん、お寢み、大變疲れてるやうだから。目が眞赤だよ、」とその時部屋に這入つて來たお島も言つた。「それに着物もお着更へよ。」

そこで、銀子が立上つて、玄關の間に行くと、お島もつゞいて來て、彼女に手傳つて荷物を持つて、

「もう二階も涼しいから、二階へ行きませう。」と言つた。

二階の取附きの四疊半では、お崎が行水から上つた後の化粧をしてゐた。で、お島は銀子の荷物を六疊の座敷の方に持つて行つた。

「島ちやん、お先へ。私、今下へ行くから、行水してね。」とお崎が言つた。

お島が下りて行くと、

「銀ちやん、吃驚したらう。」とお崎は着物を着更へてゐる銀子に話しかけた。そこで、少し聲を低くして、「昨日はもう辿もいけないかと思つたわよ。惡いのはもう大分前から惡かつたらしいの。だけど、あんな氣の確かりした人だもんだから初めは分らなかつた位なのよ。だけど、段々食べ物が進まなくなるし、咳が出るし、それでも私がお醫者様を呼ばうと言つても聞かないしね、然し、よく〳〵惡くなつたと見えて、到頭一昨日から寢附いてしまつたの。それでも、どうせもうこれで命を終る病氣なんだから、生中お醫者になど掛つて、藥で三日や十日生き延びたつて仕様がないと言つてね、お醫者様を呼ばさないの、ところが、昨日急に容體が變つて來たもんだから、それや、私、一人でまご〳〵しちやつたわ。お醫者様を頼むやら、お醫者様から看護婦を頼むやら、それから銀ちやんや、お瀧姉さんに電報を打つやらね。それ迄にも私、幾度みんなに手紙でゞも知らして、歸つて貰はうと思つたか知れないんだけど、母さんはどうしてもいけない、そんな騷をしなくてもいゝと言ふんだもの……」

銀子はその時、お瀧姉さんに電報を打つたといふ言葉を聞き咎めて、「どうしてお瀧姉さんの所が分つたの？」と聞いた。

「……」とお崎は何故か一寸狼狽した樣子だつたが、「それがね、變なの、此間、四五日前だつたか、突然暑中見舞を寄遣したの、暑中見舞もないもんだわね、默つて何處かへ行つてしまつて……。だけど、やつぱり蟲が知らしたのかも知れないわ、所が分つてよかつたからね。」

「……」銀子は何だか腑に落ちない氣がしたが、默つてゐた。

「ちやあ、お島さんはいつ來たの？」

「お島さんは今朝來たのよ。」

「今朝？」と銀子は呆れた聲で言つた。「どうして？」

「どうしてだか、突然なの。」とお崎は化粧を終つて、涼しさうな浴衣に着更へて立上りながら言つた。「私、未だ何にも聞かないんだけど、それやこんな場合でせう、だから何にも聞かないんだけど、をかしいと言へばをかしいし、うまいと言へばうまい具合なのね。」

　そして、お崎は下に下りて行つた。

後に、銀子は母の病氣のこともすつかり忘れてしまつた程、着物を脱いで、半分裸になつたまゝで、團扇をばた／＼させながら、ぼんやりしてゐた。彼女はこの半月ほど前から、急に探偵小說の事件の中に這入つたやうな氣味惡さを感じてゐた折柄、今お崎から聞いた、お瀧の住所のことと言ひ、今朝突然お島が歸つて來たといふ話と言ひ、不思議は段々增して來ると共に、それは何だか自分を除いて外の者、――例へばあのおつちよこちよいのお崎でさへも、――がみんな知つてゐることで、自分にだけ隱されてゐるやうな、不快さに襲はれねばならなかつた。

　家に歸つて、安心した爲か、翌朝は銀子は晝近くまで寢てしまつた。目が醒めると、暑さと、睡眠過度とから來る、身體の節々が悉く緩んでしまつたやうな氣倦さと、頭痛とを覺えた。彼女は暫くの間、自分が何處で寢てゐるのか迷つた程、ぼんやりしてゐたが、次の瞬間、それは母の病氣で芦屋の家に歸つてゐるのだ、と氣が付くと、忽ち昨夜からの事が雲のやうにもく／＼と頭の中に湧き起つて來た。すると、お瀧のこと、お島のこと、いろ／＼の彼女に不思議なことが思出されて、惡い夢を見てゐるやうな氣がされた。蚊帳越しに見える床の間の、昔馴染の唐金の置物も、山水の掛軸も、自分は何にも知らなかつたが、みんなそこに何か仕掛があるやうな氣がして、うつかりすると、その掛軸の向うに人の出入りする穴でもあつて、その奧に姉のお瀧が住んでゐるかも知れないとか、次の間の四疊半に見える簞笥にだつて、開けて見ると何が這入つてゐるか知れたものでないとか、言ふやうな疑念さへ起つて來た。が、一瞬間後には又、母さんの病氣はどうか知ら、と氣になつたので、彼女は慌てゝ起きて、寢間着を着更へ始めた。

階段を下りて行くと、突然下の方でワン〳〵ワン〳〵と、何年振りかで聞く、例のお島の寵愛物であるところの、狆が彼女に吠えかゝつたので驚かされた。確か「ちい」は昨夜歸つた時にはゐなかつた筈だのに、と思つたので、彼女は裏のタタキの庭で顔を洗つてゐた時、傍に病人の氷嚢の氷を取換へに來たお島に聞くと、

「今朝早く、迎へに行つて來たの。」とお島は何でもなささうに答へた。

「何處へ？」と思はず銀子が聞くと、

「大阪へ……」とお島は何でもないやうに答へた。「私が前にゐた所へ。昨日慌てゝ來たものだから、預けて來たの。」

銀子は顔を洗ひ終つて、母の病床に見舞に行つて見ると、容體は別に昨日と變つたところはなかつた。病人は彼女の顔を見ると、嬉しさうに、だが寂しい笑顔で、

「よく寢たね、もう疲れはなほつた？」と聞いた。「あんまり傍へ寄らないやうにおし。」

銀子は母が自分の留守の間に死んでしまつたと思つて、一昨日からあんなに悲しんだのであるが、斯うして生きて、やつぱり昔のまゝに子を思ふ心で一ぱいになつて、殊に自分には一層細心な愛情の言葉を掛けてくれるのを見ると、反對に母の心を思ふよりも寧ろ負擔を感じ出した。彼女にはこの母が未だどうして死ぬものか、と思へた。すると、もう一日位ゆつくりして、野外劇に出たかつたといふ後悔の念が湧いて來た。川田が今頃、外の女に心を移してはしないかといふ心配さへ起つて來た。一昨晩、電報を受取つてから、昨日家に着くまでの、あんな殊勝な、孝行娘だつた彼女は、直ぐ又元の不孝な娘に後戻りをしてしまつた。

彼女は病室を出て、簡單な晝飯を食ふと、直に二階に上つて行つて、手紙を書き始めた。初めに川田に書いた、それには母が未だ危篤の狀態でつゞいてゐる、家の中がごた〳〵してる上に、海岸とは言ひながら、東京より風のない、暑いところで、早く歸りたくて仕樣がない、出來るだけ早く歸るつもりです、と書いた。その手紙の中途で、江州から電報爲替で金を送つて貰ふ筈になつてゐたのを思ひ出して、川田への手紙を傍に置いて、葉書にもし電報爲替が着いたら、代理で受取つて、それから私の今月分の勘定を差引してもう一度組直して此方へ送り返して欲しい、と認めた。それから、彼女は

書きかけた川田への手紙を終ると、幾度も書いては破り、書いては破りして、やつとの事で江阪への手紙を認めた。母が危篤で、昨日急に歸つて來たことと、いつかお願ひしたお金をもう東京の方へ送つてくれたかと思ふが、どうなつたか、若し送つてくれた後だつたら、どういふ風にしたらいゝか、といふやうなことを書いた。さう書きながら、彼女はひよつとすると、東京へ送つたのはそのまゝにして、又別に此方へも送つてくれるかも知れないと言ふやうな慾心が出たので東京の私の留守の下宿に着いたとすると、今月の勘定を引かしてやらなければならぬが、向うで自分の判がなくてもとられるやうにするには、どうしたらいゝだらうかと附加へた。

銀子がそれ等の手紙を書き終つて、それを自分で入れに行かうと下へ下りて行くと、玄關に來客の聲がして、つゞいて「ちい」が頻りに吠え立てるのが聞えた。そして、銀子がそこへ行く前に、玄關にお崎が出て、

「まあ、村木さんですか。どうぞお上り、」と持前の快活な聲の、嬉しさうな調子で應待してゐる處へ、丁度銀子も行合して、

「暫く、」と挨拶した。

「いつお歸りになつたの?」と村木は暫く會はない前と、少しも變らない、甘たれたやうな聲で聞いた。手に何か見舞品らしい大きな包を持つてゐた。

「昨夜。……私、これから一寸郵便局まで行つて來ますから、どうぞ御ゆつくり、」と銀子は言ひ捨てゝ、急いで外に出た。お崎とあの男とは未だ交際してゐるのだらうか、と思つて、彼女は自分のことを棚に上げて、いろ〳〵の事が益々不愉快に思ひなされた。彼女は、だから、郵便局から歸つてからも、わざと母の枕元に附き切りで、お崎と村木とが坐つてゐる二階の部屋には顏を出さなかつた。

其の四　葬式の前後

その晩、お亮の容體は急に革まつた。八時頃と十二時頃とに、二度醫者が迎へられたが、病人はもう死の直手前にあつて、言葉さへ殆どきけない狀態にありながら、その種の病人の常として、意識が凄い程はつきりしてゐた。それに、この二

三年來、最早や不孝な娘たちの心配にも、その他彼女が長年心を苦しめられ、痛められ、苛々し、煩悶し來つた一切のものに悉く一種のあきらめを持つて、庭の朝顔や、窓からの景色やを見たり、畫いたりして樂むといふ、謂はゞ或悟道に這入つてゐたこの老人は、言ふことに、最早や醫者にでも誰にでも、反對させることの出來ない權威を持つてゐた。彼女は、生命を唯一刻延ばすに過ぎないところの、注射をすることなどを斷然拒んだ。彼女は枕元に坐つてゐる三人の娘たちに對しても、最早や何の遺言らしいことも、教訓らしいことも言はなかつた。そして愈よ最後が來た時、それは午前二時頃であつた、彼女は、天井に向つて閉つてゐたその目をぱち〳〵と二三度瞬きして、醫者の方を一寸感謝するやうな目付で見て、むにや〳〵と口元を動かした、「いろ〳〵有難う……」と言つたのである。そこで、左右から泣いて取縋つた娘たちの方を目を開いて一人一人順々に見て、「さよなら、」と微かな聲で言つた、そしてそれだけであつた、彼女は地上を去つた。

　殘された三人の娘たちは唯泣くだけで、なすところを知らなかつた。でも、流石にお島が先に立つて、線香や、水やの用意をした。お崎の話に、一週間ほど前に、死んだ母親が竈の中に一束の手紙のやうなものを投げ入れたので、どうしたの？ と聞いたが、初めのうちは、唯笑ふだけで、どうしても答へなかつたが、執固く尋ねると、「なアに、遺言なんだよ、お前や銀子や、みんなに書いておいたんだが、つまらないから止すことにしたの、」と言つて、「これが銀子のなんだよ、」と一番終ひに火に燻べたのは、こんなに量があつたわ、と彼女は手でその大きさを誇張して示して見せた。だが、念の爲にといふので、佛が日頃手廻りの物を入れてゐた小箪笥の中を、銀子も手傳つて、みんなして調べて見た。が、その中は綺麗に水彩畫の繪具だとか、小娘のやうに赤や青やの小布切の綺麗な積み重ねだとか、小遣帳のやうなものだとか、そんなものが、きちんと片附けて入れられてあるだけだつた。ところが、蒲團の枕の下から、偶然遺言書らしいものが一通出て來たので、三人で顏を集めて、それを銀子が讀んで見ると、死んでから葬式までのことが、箪笥の何處に經帷衣が這入つてゐるとか、何處のお寺に賴むとか、誰と誰とに知らすこととか、（そしてその通知狀も悉く自分で葉書に認めてあつた。）葬儀屋は何處の何といふ家とか、それ等の費用のこととかゞ、誰が何處の使に行つて、何處は俥屋の使でいゝといふやうなことまで、委細を極めて書いてあつた。そして更に驚くべきことには、彼女はもう一二ケ月前からその死期を感じ

てゐたのか、葬儀屋とか、お寺とかには、前以て自分自身で、それとなく頼んであつたことである。だから、後で自殺ではなかつたか、と人が怪んだ位であつた。だが、彼女は間違ひなく、自然の死で死んだのである。

　夜が明けると間もなく、お島が何處かへ出かけて行つたが、二時間餘りして、お瀧の前の夫であつた新關淳介を伴つて歸つて來た。彼が來てからは、流石に男のことで、葬式の用意はどん〱運んで行つた。元よりさういふ女世帶の家であつたから、死去の通知をする人の數も極く僅であつた。だから、死んだ父の妾で、現に、父が死ぬ前ずつと同棲してゐた伊丹にゐる婦人とか、或ひはお崎が近いうちに嫁づいで行く筈の、仙臺の羽山とか、或ひは村木愼一とか、それ等は大抵銀子も知つてゐる人たちばかりであつたが、唯驚かれるのは、それ等の人々の中にはお亮が生前殆ど物を言つたこともないやうな人とか、或ひは名前だけしか知らないと思へるやうな人とかでも、兎に角、一應通知はしなければならないと見える人は一人も洩らさず、その住所まで調べて書き殘されてあることだつた。銀子は自分でその外に、川田とか、現代劇協會の主事とか、仁羽とか、それから江阪などに通知狀を書いた。「お島さんも、崎ちやんも、外に別に出すとこはない?」と彼女は無筆に近い姉たちに、代筆をしてやるつもりで聞いて見たが、二人とも「ないわ、」と答へた。お島さんの亭主なんかはどうしたんだらう、とその時ふと考へた。

「お瀧姉さんは一體どうしたの?」と銀子は部屋の中にお崎と二人切りになつた時、咎めるやうな調子で尋ねた。

「お瀧姉さんは來ないんだつて……」とお崎は別に不思議でも何でもないやうに答へた。

「知らしたの、母さんが亡くなつたことを?」と聞くと、

「今朝、島ちやんが新關さんとこへ行つた時、新關さんから電報を打つてもらつたさうだけど、」とお崎は言つた。

「新關さんに?」と銀子が驚いて尋ねた、「ぢやあ、お瀧姉さんは又新關さんと一緒になつてゐるの?」

「いゝえ、もうそんな關係はない筈だわ、現に、二人ともいつか別れた切りで會はない筈なんだもの。」

「それに、どうして手傳ひになど來てもらつたの?」

「何だか知らないけど、あの人死んだ母さんが好きだとか言つて、母さんの生きてゐるうちに始終遊びに來てたさうだし

お瀧さんとはもうお互ひに會ひたくないけど、小口さんの家の爲なら、自分に出來ることなら、何でもさしてくれ、と母さんや、崎ちやんにまで始終さう言つてたさうなの。知らないうちはもつと惡い人かと思つてたけど、いゝ人なのね。私も以前一二度、まだお瀧さんと一緒にゐる時分に會つたことがあるわ、未だ母さんが寢付かない時分から、あの人は母さんの病氣を大變氣にしてたつて言ふ話だわ。」

銀子はさういふ話を聞いてゐるうちに、いつの間にか肝腎の新關のことを傍に置いて、お島がどうして歸つて來たのか一體お島やお瀧や、さては江阪やが、どんな關係にあるのか、それが氣になつて、話半ば幾度か聞き正さうとして、幾度か躊躇らひながら、お島の話が一通り濟んでからも、その爲にいろ／＼と心にもない無駄話をした後で、やつと思ひ切つて、

「お島さん、あんた江阪さんといふ人知つてる？……どうして知つてるの？」極めて平靜を裝ひながら聞いて見た。

「私、ずつと前から知つてるわ。」とお島は卽座に斯う答へたが、流石にこの善良で、何の底意も持つてゐないやうに見える姉も、何故かはツとした樣子で、「ぢやあ、あの、銀ちやん、母さんから何にも聞いてゐなかつたの？」

「何にも聞いてゐないわ。それがどうしたの？」と銀子は自分が今迄內所にしてゐたところの、江阪から每月少なからぬ金を貰つてゐたことなども、もう家中ですつかり知れ渡つてゐたのかと思ふ恥かしさやら、或ひはどうして、どういふ折に家の者と江阪とが知合になつたのかと疑つて見る不安さやらで、咽喉の詰まるやうな驚きと、同時にそれを今まで隱されてゐたことに對する憤りとで、かツとなつた。

「へえ！」とお島の方でもひどく驚いたらしかつた。そして稍々暫くの間、何か考へ事でもするやうに、無言でゐたが、やがて半分獨言で「ぢやあ、あの母さんが書いておいて、それを燃してしまつたといふ中に、話をする代りに屹度書いてあつたんだわ。」

「何、どうしたの、何？」と銀子はその太い眉と、切れ長の目とを、男のやうに逆立てゝ、お島に詰め寄つて聞いた。「何の事なの、今になつて、母さんが死んでからそんな事を言つたつて、仕樣がないぢやないの？　お島さんがそれを知つて

るなら話してくれたつていゝぢやないの？　母さんだつてひどいね、あんまりひどいわ……」と言つてゐる言葉の中頃から、彼女はわッと泣き出して、ヒステリイ的に身を捩ぢらしながら、疊の目を爪で引搔いた。お島はおど〳〵して

「銀ちやん、何も、何も泣くことはないぢやないの？　私、私、言つてもいゝけど、私だつてよくは知らないんだもの。……ね、ね、泣かなくつたつていゝぢやないの？　私、私、……あのね、ぢやあ日下さん――江阪さんから話してもらふことにしませうよ、ね、ね。」

銀子は先から止めずに、疊の上に俯伏して泣きつゞけて、殆どお島の言ふことを耳に止めずにゐたが、中でお島が日下さんと言つて、江阪さんと急いで改めた言葉を聞き洩らさなかつた。彼女はちくりと針で刺されたやうに、その言葉に拘らねばならなかつた。それは彼女が初にヴイオリンの師匠の家で彼と名乘り合つた時、師匠の家の弟子の連名の中には「日下」とあつたにも拘らず、彼は彼女に江阪と名乘つて、日下といふのは母親の里の家の名で、あゝいふ若い者の集まるヴイオリンの師匠の家の連名などに、本名を曝すのは厭だからと辯解したことを思ひ出した、次に或晩そつと彼の家の前へ行つて見ると、標札にはやつぱり日下とあつて、裏の勝手口の方に、日下勝手口といふ標札と並んで、江阪藤一郎といふ小さな札が張り付けてあつたことを思ひ出した、未だある、それはいつの時だつたらう？　と暫く考へても思ひ出せなかつたが、さうだ、奈良の江阪の乳母の家に、彼女が畫の修業に行つた初めての晩、その乳母が「日下のぼんち」と言つたことである。彼女は今まで殆どそんな事を氣に止めて見たこともなかつたが、今こそ考へて見ると、江阪某といふ方が却つて彼の自分に對する假名ではなかつたかと思ひ出した。

「江阪さんか日下さんか知らないけど、」と彼女は泣きながら、ヒステリイ的の夢中になつて、「お島さんは確に知つてるんでせう。ずつと前に、私、江阪さんに會つた時、お島さんのことを賴まれて、吃驚したことがあるんだもの。お島さん、あんたは私が歸つた日の朝歸つて來たといふ話だけど、それまで何處にゐたの、え、何處にゐたの？」

「私……日下さんのとこにゐたのよ。」

「私、もつと不思議なことを見たのよ、」と銀子はそれ等の元がお島でゞもあるやうに、「私、半月ほど前だつたか、東京で

江阪さんとお瀧姉さんとが自動車で走つてゐるところをちらと見たことがあるわ！」と咎めるやうに言つたかと思ふと、銀子は突然又發作でも起つて來たやうに、「私、悔やしい、みんなして私にいろんな事を隱して……」と言ひながら、お島の膝の直前の疊の上に俯伏して泣き入つてしまつた。

銀子はさうして又長い間泣いてゐた。人の好いお島は言ふ言葉が見出せないので、當惑した顏をして、やつぱり默つてゐた。と、暫くして、銀子は又顏を上げて、

「ぢやあ、お瀧姉さんはどうして母さんが病氣になつたのも、亡くなつたのも知つてゐながら歸つて來ないの？」とお島に向つて食つて掛るやうに言つた「あの人が姉さんぢやないの、小口の家の後取りぢやないの？」

「そんなこと私に言つたつて知らないわ。」

「でも、お島さんとこへは、お瀧姉さんから、母さんの病氣の惡くなつたといふ知らせが行つたといふぢやないの？」

「それやさうだけど……」とお島は迷惑さうに言つた、「それは此方からお瀧姉さんに知らしたので、お瀧姉さんから日下―江阪さんのとこへ直電報で知らして來たんだわ。」

「何の譯があつて江阪さんに知らすの？」

「それや私がゐるからでせう、」とお島は言つた。「何でもね、お瀧姉さんは母さんに散々苦勞を掛け通して、その上あんな風にして家を出てしまつて、今更何としたつて母さんに合はせる顏がない。この上は親の死に目に會はないで、あの人はお父さんの死に目にも會はなかつたんだから、それで地獄へ行つてから出來るだけ重いお仕置を受けて、そして親にお詫をしたい、その代り、私に、――私にしたつて隨分跨ぎにくい敷居だらうが、自分と二人分の看病をするつもりで、是非行つてくれとさう言つて來たのよ。」

「島ちやん、銀ちやん、何してるの？」とその時、下からお崎の叫ぶ聲が聞えた。「私一人で困つちまふぢやないの？」

「あゝ、今行くわよ、」とお島は下に向つて叫んでおいて、「ぢやあね、銀ちやん、兎に角、今日はお葬式なんだから、このごた〳〵が濟むまで待つてね。そしたら、私の知つてゐるだけのことはみんな話するわ、……もつとも、その前に私一ペ

ん日下さんに會つて來るつもりだわ。ね、だから、今日はこのまゝにして置いて、あんたも下に下りて色々手傳つてよ。お母さんの葬式の時に、外のことで泣くなんてよくないわよ。」

葬式に就いてはお亮の遺言もあつたし、それにさういふ女ばかりの、それも不斷は散り散りになつて住んでゐた一家のことだから、吊ひ客にしても、會葬者にしても極く少數だつたので、總て簡單に濟んだとは言ふものゝ、それでも、二日三日の間といふものは、何彼と取りまぎれてゐた。その間、不思議な男の新關は、最早や逃げられたやうな形で別れてしまつた妻の家にゐて、その妻の母親の死後の用事を殆ど一人で、骨を惜しまずに働いてゐた。彼は葬式の日と共に三日の間、夜遲く終電車で大阪の家へ歸つて行つて、朝は殆ど一番の電車で芦屋にやつて來た。女ばかりの家のことであるから彼女たちは新關の心を汲み兼ねて、初めに此方から賴んで來て貰つたことも忘れて、金の勘定のことなどになると、互ひに誡めて警戒するやうな口をきいたり、果はもう後の用事は自分たちでも出來るから、早く歸つてくれがしの扱ひさへするのを、新關は無論感じない譯ではなかつたらうが、兎に角、三日の間は惡い顏を少しも見せずにさうして手傳ひに來てゐた。そして、せめて初七日まで來たいが、色々自分の家の方にも用事が溜つたから、これからは供養の日だけ伺ひます。といふやうな挨拶を殘して歸つて行つた。

いつか、お瀧の出奔の事件があつた時、彼が彼女の尻押しをしてゐるやうに思つて、どんな惡い男だらうと想像しながら會つた時、銀子が案外にも彼が普通以上の好人物であるのを知つたことがあつた。が、今では又、あの人の深切は有難いけど、何だか氣味が惡いわね、と姉妹たちで言ひ合つたりした。お崎が言ふには、「あの人はお瀧姉さんに首ツたけ惚れ込んでゐたらしいのね。なる程、あゝ言ふ人には却つてお瀧姉さんのやうな氣の強いお上さんが、丁度適當してゐるのかも知れないわね。」

「さうかも知れないわ、」とお島が言つた。「しかし、お瀧さんにすると、又、あんな人が丁度御亭主にしておくのに、邪魔にならなくていゝんだらうよ。」

そこで姉妹は聲を合はして笑つた。

「さうさう、あの人、あの時分には、あんなにお瀧姉さんに踏みつけた目に合はされながら、いつ何時でも、姉さんが歸つて來たら、元の通りになりたいと言つてたのよ、」とお崎が笑ひながら、持前の陽氣な聲でつゞけた。「そして、言ひ草がいゝぢやないの、私、いつ迄でもあの人が歸つて來るまで一人で待つてますだつて……。」そんな事を言ふかと思ふと、ホ、ゝ、ゝ、ホ、ゝ、ゝ……」とお崎はそこで止め度なく笑ひ出した、そしてやつとしてから笑ひを抑えて、「死んだ母さんにね、姉さんの妹さんのうちで、誰方でもいゝから欲しいと言つてね……ホ、ゝ、ゝ、ホ、ゝ、ゝ、それもね、あんな人のことだから中々はつきり言はないで、初めのうちは何を言つてるのだか、一寸も分らないんだつて、あんまり遠廻しな言ひ方なものだから……そんな事を言つたことがあるのよ。ホ、ゝ、ゝ。」

「ぢやあ、今度だつて、そんなつもりだつたのか知ら。いけ好かない！」とお島が言つた。

そんな風で、葬式が濟んで、新關も歸つてしまつて、一家が三人の姉妹だけになつてしまふと、これ迄はそれよりも少ない家族の家だつたのに、變なもので、人の死んだ後の何となく陰氣な、寂しい氣分が家の中に充ち渡つた。だから、その當分の間は、妙に仲の悪いこの姉妹たちが、生れてから一度もあつたことがないと思へる程、親密な氣分で溶け合つたやうに見えた。だが、それは唯ほんの一時のことで、一日一日と彼女等は又元の我儘に返つて行くに違ひなかつた、それは、殊に彼女等のやうに、將來の生活の方針が定つてゐるやうで、どうかすると定つてゐないやうな不安な狀態にあるものには、尙のこと無理のない話かも知れなかつた。

さて、例の葬式の日に約束した、銀子の不審に就いて、お島が話したのは、多分新關が歸つた翌々日のことであつた。

（つゞく）

お斷り

都會の憂鬱

作者病氣につき
本號に限り休載

編者

婦人公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區春木町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大誠社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

⦿定價　金五拾錢郵稅　金壹錢五厘（海外郵稅貳拾錢）
但支那を除く

冊數＼區別	內國	外國
六冊	金參圓	金參圓九拾六錢
十二冊	金六圓	金七圓九拾貳錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號は各特別號に付一冊金八拾錢の割合にて代金申請くべし、即ち一ヶ年分通計內國は金六圓九拾錢外國は金九圓〇六錢の割となれども頁數の都合等にて臨時變更することあるべし

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
帝國通信社　弘告社　三成社
金蘭社　一星社

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便御希望の方は掛込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領後にあらざれば雜誌發送せず
一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金手數料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢
一婦人公論及中央公論代金取り纏め御掛込みの場合には各誌別に宛て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年八月二十日印刷納本
大正十一年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　島中雄作
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區本郷三丁目六番地
中央公論社
電話 小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

大正四年十二月十五日第三種郵便物認可
大正十一年八月二十日印刷納本
大正十一年九月一日發行（毎月一回發行）

婦人公論

九月號
（第七年第十號）

定價五拾錢

